

isen chou omonawa

鹿児島県大島郡伊仙町面繩

Omo

nawa

site

面繩貝塚

総括報告書

－平成19～27年度町内遺跡発掘調査等事業に係る発掘調査報告－



2016年3月

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会



九学会連合による面撲第2貝塚の発掘調査の様子(伊口義麿氏撮影写真、佐々木利和氏、中山清美氏提供)

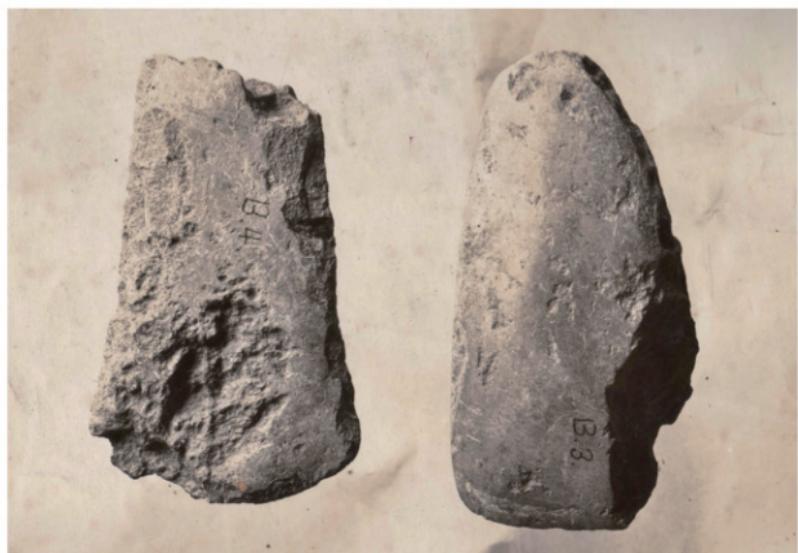
巻頭図版 2



九学会連合による面縄第2貝塚の発掘調査の様子(野口義磨氏撮影写真、佐々木利和氏、中山清美氏提供)



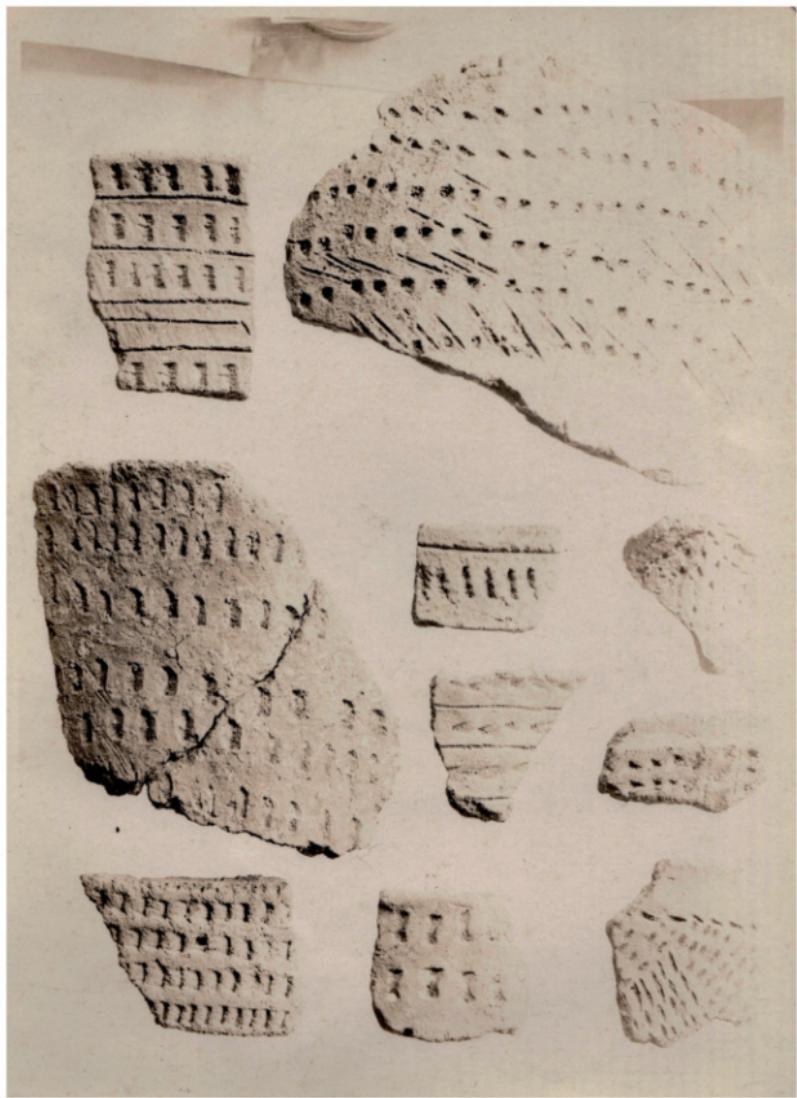
九学会連合による面縄第4貝塚の発掘調査の様子(野口義磨氏撮影写真、佐々木利和氏、中山清美氏提供)



面縄第2貝塚昭和5年調査出土石斧(大山柏・小原一夫1933掲載Fig. 1、明治大学阿部芳郎氏所蔵)



面縄第2貝塚昭和5年調査出土貝製品(大山柏・小原一夫1933掲載Fig. 2、明治大学阿部芳郎氏所蔵)



面縄第2貝塚昭和5年調査出土土器 1 (大山柏・小原一夫1933掲載Fig. 3、明治大学阿部芳郎氏所蔵)



面縄第2貝塚昭和5年調査出土土器2(大山柏・小原一夫1933掲載Fig. 4、明治大学阿部芳郎氏所蔵)



面縄第2貝塚昭和5年調査出土土器3(大山柏・小原一夫1933掲載Fig. 5、明治大学阿部芳郎氏所蔵)



面繩第2貝塚昭和5年調査出土土器4(大山柏・小原一夫1933掲載Fig. 6、明治大学阿部芳郎氏所蔵)

巻頭図版 8



九学会連合調査面縄貝塚出土遺物集合写真(鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵河口貞徳コレクション)

isen chou omonawa

鹿児島県大島郡伊仙町面繩

omo

nawa

site

面繩貝塚

総括報告書

－平成19～27年度町内遺跡発掘調査等事業に係る発掘調査報告－

2016年3月

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会

表紙写真

表表紙：面繩第1貝塚出土貝製品

裏表紙：面繩第2貝塚出土貝製品

序 文

面縄貝塚は、先史時代における琉球列島の生活や文化を理解する上で欠かすことのできない著名な遺跡です。この貴重な遺跡の範囲と内容を把握するため、伊仙町教育委員会は、平成19年度より面縄貝塚の確認調査を実施して参りました。

このたび、これまでの調査を総括し、その成果を広く普及するための調査報告書を刊行することとなりました。これまでの調査によって、貝塚時代前期からグスク時代に至る各種遺構や重要な遺物が数多く得られ、面縄小学校周辺に貴重な遺跡が良好な状態で保存されていることは、本報告に記されている通りです。

面縄貝塚を取り扱った報文や論文は数多くありますが、本事業における調査の過程で大学や専門調査機関、また各地で活躍された研究者の方々が貴重な資料を大切に保管されておられたことが明らかになりました。今回はそれら資料の掲載許可をいただき、本報告に反映することができました。ご協力賜りました関係者の皆様に感謝申し上げます。

最後に、発掘調査と報告書作成のご協力を賜りました方々と発掘作業に従事された皆さんに感謝の意を記し、序文と代えさせていただきます。

平成28年3月
伊仙町教育委員会
教育長 直 章一郎

例　　言

- 1 本書は、伊仙町教育委員会が、平成19年度から平成27年度にかけて行なった、町内遺跡発掘調査等事業による面縛貝塚の総括報告書である。
- 2 遺跡は、鹿児島県大島郡伊仙町大字面縛字西兼久に所在する。
- 3 発掘調査は、文化庁、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導のもと、伊仙町教育委員会が主体となって行なった。
- 4 発掘調査および発掘調査報告書作成の経費は文化庁、鹿児島県、伊仙町が負担した。
- 5 発掘調査に際し、鹿児島大学法文学部、熊本大学文学部、沖縄国際大学総合文化学部の多大な支援を得た。記して感謝申し上げる。
- 6 本書で用いたレベル高は海拔を表し、方位は真北を示す。
- 7 本書で用いる時代名称と時期区分は、高宮広土・新里貴之(編)2014『琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』六一書房に従っている。
- 8 卷頭図版1、2掲載写真は九学会連合調査時の野口義麿氏撮影によるもので、佐々木利和氏(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)、中山清美氏(奄美群島文化財保護対策連絡協議会会長)の両氏より資料を提供していただいた。卷頭図版3から7掲載写真は、大山史前学研究所元所員竹下次作氏が所蔵されていたもので、竹下氏より一括譲渡を受けられた阿部芳郎氏(明治大学文学部)に資料提供をいただいた。また、図7の掲載に当たっては筑波大学人文・文化学群の常木見氏、滝沢誠氏、三宅裕氏、卷頭図版8および図8の掲載に当たっては鹿児島県立埋蔵文化財センターのご協力を得た。ご芳名と機関名を記して感謝申し上げる。
- 9 調査指導者の所属は当時のものである。
- 10 本書の執筆は、次の通りである。

第I章	安田未来(伊仙町教育委員会)
第II、III章	新里亮人(伊仙町教育委員会)
第IV章	黒住耐二(千葉県立中央博物館)、樋泉岳二(早稲田大学)、高宮広土(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)、竹中正巳(鹿児島女子短期大学)、株式会社古環境研究所、パリノ・サーヴェイ株式会社
第V章	新里亮人(伊仙町教育委員会)
付　編	新里貴之(鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)、新里亮人(伊仙町教育委員会)、大村達郎(財)宮本記念財團研究員・日本民俗学会会員)
- 11 出土遺構の実測図は1/10、1/20、1/40、1/50の縮尺で示した。
- 12 出土遺物は大きさに応じて、1/1、1/2、1/3、1/4の縮尺で示した。
- 13 参考、引用文献は第V章末に記した。ただし、第IV章、付編に関してはこの限りではない。
- 14 出土遺物の写真撮影は、新里亮人の指示のもと、萩原洋一が行なった。
- 15 本書の編集は新里亮人が行なった。
- 16 発掘調査における各種記録資料および出土遺物は、伊仙町歴史民俗資料館にて保管し、公開、活用を図る。

目 次

第Ⅰ章 遺跡周辺の自然的環境と歴史的環境（安田未来）	1
第1節 自然的環境	3
1. 徳之島の位置	3
2. 琉球列島の成り立ち	3
3. 気候	3
4. 地形	3
5. 地質	4
6. 動植物	4
7. 面繩貝塚周辺の自然環境	4
第2節 歴史的環境	5
1. 旧石器時代	5
2. 貝塚時代	5
3. グスク時代	5
4. 琉球王国時代	5
5. 薩摩藩時代	6
6. 近代	6
第Ⅱ章 面繩貝塚のこれまでの調査（新里亮人）	9
第1節 面繩貝塚の調査研究史	11
1. 面繩貝塚とは	11
2. 戦前の調査研究	11
3. 戦後の調査研究	14
4. 兼久式土器、面繩東洞式土器、面繩西洞式土器、面繩前庭式土器の設定と編年	19
第2節 面繩貝塚の概要	23
1. 面繩第1貝塚	23
2. 面繩第2貝塚	25
3. 面繩第3貝塚	26
4. 面繩第4貝塚	27
第Ⅲ章 面繩貝塚の範囲内容確認調査の成果（新里亮人）	29
第1節 調査の経緯と経過	31
1. 調査に至る経緯	31
2. 調査の組織	31
3. 確認調査の経過	37
4. 整理等作業の経過	48
第2節 面繩第1貝塚の確認調査	49
1. 調査の概要	49
2. 洞穴内の調査	49
3. 崖上部の調査	56
4. 崖下部の調査	57
5. 小結	62
第3節 面繩第2貝塚の確認調査	64
1. 調査の概要	64
2. 平成14年度面繩第2貝塚緊急調査の概要と包含層出土遺物	64
3. 平成20年度面繩小学校東側隣接敷地の調査	67
4. 平成23年度面繩小学校校庭内東側の調査	78
5. 平成22年度面繩小学校校庭内西側の確認調査	81
6. 小結	84
第4節 面繩第3貝塚の確認調査	85
1. 平成19年度調査	85
2. 平成22年度調査	89
3. 平成27年度畠地帯総合整備事業に伴う面繩第3貝塚の確認調査	89
4. 小結	89
第5節 面繩第4貝塚の確認調査	90
1. 平成19年度調査	90
2. 小結	94

第Ⅳ章	自然科学的分析	101
第1節	面縄貝塚の貝類遺体（黒住耐二）	103
1.	検討資料	103
2.	結果および考察	104
第2節	面縄貝塚から出土した脊椎動物遺体群の特徴と重要性（樋泉岳二）	118
1.	分析資料と分析方法	118
2.	分析結果	118
3.	考察	134
第3節	面縄第1貝塚、面縄第4貝塚出土の植物遺体（高宮広土）	140
1.	調査の概要	140
2.	面縄第1貝塚：土壤サンプリングおよび回収された植物遺体	140
3.	面縄第4貝塚：回収された植物遺体	141
4.	まとめ	141
第4節	徳之島面縄第1貝塚から出土した人骨（竹中正巳）	142
1.	石榴墓から出土した人骨の性別と年齢について	142
2.	石榴墓から出土した人骨の顎頸面領域の古病理学的観察結果	143
3.	Aトレンチから出土した人骨について	146
4.	Cトレンチ東側IV層から出土した頭蓋について	146
5.	Dトレンチから出土した人骨について	146
第5節	面縄第1貝塚における放射性炭素年代測定（株式会社古環境研究所）	150
1.	試料と方法	150
2.	測定結果	150
3.	所見	151
第6節	面縄第1貝塚検出炭化物の年代測定（パリノ・サーヴェイ株式会社）	153
1.	試料	153
2.	分析方法	153
3.	結果	153
第7節	面縄第1貝塚出土人骨の放射性炭素年代測定（パリノ・サーヴェイ株式会社）	155
1.	試料	155
2.	分析方法	155
3.	結果および考察	156
第V章	総括（新里亮人）	157
第1節	調査の成果	159
1.	面縄貝塚とは	159
2.	確認調査の成果	159
3.	自然科学的分析の成果	161
第2節	検出遺構の特徴	163
1.	豊穴遺構と集石遺構	163
2.	埋葬跡	164
第3節	出土遺物の特徴	164
1.	出土土器の特徴	164
2.	出土貝製品の特徴	165
第4節	遺跡立地の変遷と砂丘形成過程との関係	166
第5節	面縄貝塚の歴史的位置	170
1.	徳之島における面縄貝塚の歴史的位置	170
2.	琉球列島における面縄貝塚の歴史的位置	170
3.	日本列島の縄文文化における面縄貝塚の歴史的位置	170
第6節	面縄貝塚の保存と活用	170
付 編		175
付編1	京都大学総合博物館所蔵の南島遺物（新里貴之）	177
付編2	面縄第1貝塚発見者・大村行信の足跡（大村達郎）	184
付編3	面縄第1貝塚の調査者・廣瀬祐良について（新里亮人）	187
付編4	面縄第2貝塚の発見者・小原一夫について（新里亮人）	190
付編5	三宅宗悅について（新里貴之）	191

挿図目次

図 1 伊仙町における遺跡の分布	7	図 46 面縄第2貝塚調査区配置図	65
図 2 面縄貝塚の位置	11	図 47 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査区遺構配置図	65
図 3 山崎五十嵐(1930)報告の面縄貝塚出土器	12	図 48 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査区土層断面図	66
図 4 三宅宗悦・藤岡謙二郎(1940)による面縄		図 49 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査I層出土遺物	67
第二回現調会関係資料	13	図 50 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査II層出土遺物	68
図 5 三友国五郎・国分直一(1959)による面縄貝塚		図 51 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査III層出土遺物	68
調査関係資料	15	図 52 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査IV層出土遺物	69
図 6 九学会連合作成の面縄貝塚位置図	16	図 53 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査V層出土遺物	70
図 7 九学会連合調査出土遺物1	17	図 54 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査VI層出土遺物	70
図 8 九学会連合調査出土遺物2	18	図 55 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査Ⅶ層出土遺物	70
図 9 河口直徳設定の兼久式土器、面縄束口式土器、		図 56 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査乱層	
面縄西洞式土器、面縄前底式土器	20	出土土器1	71
図 10 面縄第1貝塚調査区配置図	23	図 57 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査搅乱層	
図 11 面縄第1貝塚出土遺物	24	出土土器2	72
図 12 面縄第2貝塚調査区配置図および検出遺構	25	図 58 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査搅乱層出土具製品73	
図 13 面縄第3貝塚調査区配置図および出土遺物	26	図 59 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査搅乱層出土骨製品73	
図 14 面縄第4貝塚調査区配置図	27	図 60 平成20年度面縄第2貝塚確認調査区平面図、	
図 15 面縄第4貝塚出土遺物	28	土層断面図	75
図 16 面縄貝塚確認調査における調査区配置図	36	図 61 平成20年度面縄第2貝塚確認調査表土および	
図 17 平成19年度面縄第4貝塚確認調査の様子	37	搅乱層出土遺物	75
図 18 平成20年度面縄第2貝塚確認調査現地説明会の様子	39	図 62 平成20年度面縄第2貝塚確認調査1号集石平面図、	
図 19 平成21年度面縄第1貝塚確認調査の様子	40	断面図	76
図 20 平成22年度面縄小学校体育館前試掘調査の様子	43	図 63 平成20年度面縄第2貝塚確認調査2号集石平面図、	
図 21 平成22年度面縄第1貝塚上部試掘調査の様子	43	断面図	76
図 22 平成22年度面縄第3貝塚側面地の試掘調査の様子	44	図 64 平成20年度面縄第2貝塚確認調査2号集石覆土	
図 23 平成23年度調査指導委員会の様子	45	出土遺物	76
図 24 平成23年度面縄第2貝塚確認調査の様子	45	図 65 平成20年度面縄第2貝塚確認調査III層出土土器	77
図 25 平成24年度面縄第1貝塚確認調査の様子	46	図 66 平成20年度面縄第2貝塚確認調査III層出土貝製品、	
図 26 平成25年度面縄第1貝塚確認調査の様子	47	骨製品、石器	78
図 27 平成26年度面縄第1貝塚確認調査の様子	48	図 67 平成20年度面縄第2貝塚確認調査IV層出土土器	79
図 28 平成21、22、24、25、26年度面縄第1貝塚確認調査		図 68 平成23年度面縄第2貝塚確認調査トレンチ配置図	80
トレンチ配置図	50	図 69 平成23年度面縄第2貝塚確認調査1トレンチ検出	
図 29 洞穴部トレンチ配置図	51	遺構平面図、断面図	80
図 30 1トレンチ平面図、土層断面図	52	図 70 1トレンチ1号堅穴遺構出土遺物	81
図 31 1トレンチ南側拡張区出土遺物	52	図 71 平成23年度面縄第2貝塚確認調査2トレンチ検出	
図 32 1トレンチ検出埋葬人骨検出状況	53	遺構平面図、断面図、出土遺物	82
図 33 石棺墓室断面図および骨片出土状況	54	図 72 平成23年度面縄第2貝塚確認調査3トレンチ検出	
図 34 2トレンチ平面図、断面図	54	遺構平面図、断面図、出土遺物	82
図 35 2トレンチ出土遺物	54	図 73 平成23年度面縄第2貝塚確認調査表土、包含層	
図 36 3トレンチ平面図、断面図	55	出土遺物	83
図 37 3トレンチ検出埋葬人骨検出状況	55	図 74 面縄第3貝塚確認調査トレンチ配置図	86
図 38 洞穴内採集遺物および3トレンチ出土遺物	55	図 75 平成19年度面縄第3貝塚確認調査1トレンチ	
図 39 屋上部出土土器と採集遺物	56	平面図、断面図	87
図 40 テラス面貝層出土貝製品	57	図 76 平成19年度面縄第3貝塚確認調査1トレンチ	
図 41 平成24年度、25年度、26年度調査区平面図、		出土遺物	87
断面図	58	図 77 平成19年度面縄第3貝塚確認調査2トレンチ	
図 42 Aトレンチ埋葬人骨検出状況	59	平面図、断面図	88
図 43 CトレンチⅣ層人骨頭部出土状況	59	図 78 平成19年度面縄第3貝塚確認調査2トレンチ	
図 44 Aトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチ出土遺物	61	出土遺物	88
図 45 Dトレンチ平面図、断面図および埋葬人骨検出状況	62	図 79 平成19年度面縄第4貝塚確認調査トレンチ配置図	90

図 80 平成 19 年度面縄第 4 貝塚確認調査 1 トレンチ 平面図、断面図 ······	91	図 97 面縄第 4 貝塚平成 19 年度調査地点の水洗選別資料 から検出された魚類遺体の組成 (NISP 比) ······	137
図 81 平成 19 年度面縄第 4 貝塚確認調査 1 トレンチ剖層 出土遺物 ······	91	図 98 面縄貝塚における脊椎動物遺体 (ピックアップ資料) の組成比較 (NISP 比) ······	138
図 82 平成 19 年度面縄第 4 貝塚確認調査 2 トレンチ 平面図、断面図 ······	92	図 99 面縄貝塚における魚類遺体 (水洗選別資料) の組成比較 (NISP 比) ······	138
図 83 平成 19 年度面縄第 4 貝塚確認調査 2 トレンチ剖層 出土遺物 ······	92	図 100 面縄第 1 貝塚出土の植物遺体 ······	141
図 84 平成 19 年度面縄第 4 貝塚確認調査 3 トレンチ 平面図、断面図 ······	93	図 101 面縄第 4 貝塚出土の植物遺体 ······	141
図 85 3 トレンチ検出集石造構平面図 ······	93	図 102 面縄第 1 貝塚出土老年女性人骨頭蓋正面観 ······	147
図 86 3 トレンチ検出集石造構覆土出土陶器 ······	93	図 103 面縄第 1 貝塚出土老年女性人骨上下顎歯正面観 ······	147
図 87 平成 19 年度面縄第 4 貝塚確認調査 3 トレンチ 表土および周辺採集遺物 ······	93	図 104 面縄第 1 貝塚出土老年女性人骨下顎歯 ······	147
図 88 面縄貝塚の各貝塚の生息場所類型組成の変化 ······	109	図 105 面縄第 1 貝塚出土老年女性人骨の下顎右第 1 小臼歯 に認められた根尖性セメント腫 ······	147
図 89 貝塚時代後 2 期の用見崎遺跡における貝類の 打ち削り状況 ······	111	図 106 面縄第 1 貝塚出土老年女性人骨の下頬右第 2 小臼歯 に認められたセメント腫 ······	147
図 90 面縄第 1 貝塚の土壤サンプルから得られた 貝製品 (下) と食用遺体 (上中) の泥付着状況 ······	114	図 108 面縄第 1 貝塚 C トレンチ東側剖層から出土した 頭蓋 ······	149
図 91 面縄第 1 貝塚平成 25 年度調査「テラス面 No.4」 地点貝層サンプルから検出された魚類遺体の組成 ······	121	図 109 分析試料 ······	151
図 92 面縄第 2 貝塚平成 14 年度調査地点から出土した 脊椎動物遺体 (ピックアップ資料) の組成 ······	129	図 110 試料 No.1 の測定結果 ······	152
図 93 面縄第 2 貝塚平成 14 年度調査地点から出土した 魚類遺体 (ピックアップ資料) の組成 ······	129	図 111 試料 No.2 の測定結果 ······	152
図 94 面縄第 2 貝塚平成 14 年度調査地点から出土した 魚類遺体 (ピックアップ資料) の層準・遺構別組成 (NISP 比) ······	129	図 112 試料 No.3 の測定結果 ······	152
図 95 面縄第 2 貝塚平成 14 年度調査の水洗選別資料から 検出された魚類遺体の組成 (NISP 比) ······	131	図 113 試料 No.4 の測定結果 ······	152
図 96 面縄第 3 貝塚平成 27 年度調査において現地フリイ によって採集された脊椎動物遺体の組成 (NISP 比) ······	133	図 114 面縄貝塚の主な遺構と遺物 ······	160
		図 115 面縄貝塚における遺跡立地の変遷 ······	167
		図 116 面縄第 1 貝塚における遺構、包含層の検出状況 概念図 ······	168
		図 117 面縄第 2、第 4 貝塚における遺構面、包含層の 堆積状況概念図 ······	169
		図 118 面縄第 3 貝塚における包含層の堆積状況概念図 ······	169

目次

表 1 本書で用いる時代区分名称 ······	6	動物遺体の種名一覧 ······	119
表 2 伊仙町の遺跡一覧 ······	8	表 15 面縄第 1 貝塚平成 25 年度調査「テラス面 No.4」 地点の貝層サンプルから検出された脊椎動物遺体 の同定結果 ······	120
表 3 河口貞徳による土器編年 ······	21	表 16 面縄第 1 貝塚平成 25 年度調査「テラス面 No.4」 地点の貝層サンプルから検出された脊椎動物遺体 の組成 (NISP) ······	121
表 4 面縄貝塚の調査履歴一覧 ······	22	表 17 面縄第 2 貝塚平成 14 年度調査地点から出土した 脊椎動物遺体 (ピックアップ資料) の同定結果 ······	123
表 5 土出土器観察表 ······	96	表 18 面縄第 2 貝塚平成 14 年度調査地点から出土した イノシシ頭骨・道歯の詳細 ······	127
表 6 出土貝製品観察表 ······	99	表 19 面縄第 2 貝塚平成 14 年度調査地点から出土した イヌ遺体の詳細 ······	127
表 7 出土骨製品観察表 ······	100	表 20 面縄第 2 貝塚平成 14 年度調査地点から出土した 脊椎動物遺体 (ピックアップ資料) の組成 ······	128
表 8 出土石製品観察表 ······	100	表 21 面縄第 2 貝塚平成 14 年度調査地点の水洗選別資料 から検出された脊椎動物遺体の同定結果 ······	130
表 9 面縄貝塚出土貝類遺体の詳細組成 (NISP) ······	105		
表 10 面縄貝塚の各貝塚の貝占積 ······	110		
表 11 面縄第 1 貝塚沈殿部分 (LF) の 2 mm 未満から 抽出されたもの ······	114		
表 12 後 2 期の面縄第 1 貝塚の浮遊部分 (LF) から抽出 された貝類遺体 (暫定) ······	115		
表 13 面縄貝塚平成 14 年度以降の調査で採集された脊椎 動物遺体資料のリスト ······	118		
表 14 面縄貝塚平成 11914 年度以降の調査で採集された脊椎			

表22	面縄第2貝塚平成14年度調査地点の水洗選別資料 から検出された脊椎動物遺体の組成 (NISP) ······ 131
表23	面縄第3貝塚平成19年度調査地点から出土した 脊椎動物遺体 (ピックアップ資料) の同定結果 ······ 132
表24	面縄第3貝塚平成19年度調査地点の水洗選別資料 から検出された脊椎動物遺体の同定結果 ······ 132
表25	面縄第3貝塚平成27年度調査において現地乾フルイ によって採集された脊椎動物遺体の同定結果 ······ 133
表26	面縄第4貝塚平成19年度調査地点から出土した 脊椎動物遺体 (ピックアップ資料) の同定結果 ······ 134
表27	面縄第4貝塚平成19年度調査地点の水洗選別資料 から検出された脊椎動物遺体の同定結果 ······ 135
表28	面縄第4貝塚平成19年度調査地点の水洗選別資料

卷頭図版目次

1	九学会連合による面縄第2貝塚の発掘調査の様子
2	上段：九学会連合による面縄第2貝塚の発掘調査の様子 下段：九学会連合による面縄第4貝塚の発掘調査の様子
3	上段：面縄第2貝塚昭和5年調査出土石斧 下段：面縄第2貝塚昭和5年調査出土工具

図版目次

図版1	面縄貝塚の現況 1. 面縄第1貝塚近景 2. 面縄第2貝塚遠景 3. 面縄第3貝塚、第4貝塚近景
図版2	面縄第1貝塚洞穴部の確認調査1 1. 1トレンチ西壁断面 2. 1トレンチ南壁断面 3. 1トレンチ石棺墓構出状況
図版3	面縄第1貝塚洞穴部の確認調査2 1. 1トレンチ北側張区集石検出状況 2. 1トレンチ南側張区遺物出土状況 3. 1トレンチ南側張区人骨散布状況 4. 3トレンチ砂跡検出状況
図版4	面縄第1貝塚屋下部の確認調査1 1. Aトレンチ埋葬人骨検出状況 2. Aトレンチ埋葬人骨検出状況 3. Cトレンチ人骨出土状況
図版5	面縄第1貝塚屋下部の確認調査2 1. Cトレンチ南壁断面 2. Bトレンチ埋出土状況 3. Dトレンチ埋葬人骨検出状況
図版6	面縄第2貝塚平成20年度確認調査1 1. E区Ⅲ層遺物出土状況 2. E区Ⅲ層土器底部出土状況 3. B区Ⅲ層遺物出土状況 4. A区北壁、東壁断面
図版7	面縄第2貝塚平成20年度確認調査2 1. B区1号集石検出状況 2. D区2号集石上面検出状況 3. D区2号集石検出状況
図版8	面縄第2貝塚平成23年度確認調査 1. 1トレンチ1号堅穴遺構検出状況 2. 2トレンチ堅穴遺構半裁状況 3. 3トレンチ堅穴遺構検出状況 4. 3トレンチ堅穴遺構半裁状況
図版9	面縄第3貝塚平成19年度確認調査 1. 1トレンチ包含層検出状況 2. 2トレンチ包含層検出状況
図版10	面縄第4貝塚平成19年度確認調査 1. 1トレンチ包含層検出状況 2. 2トレンチ遺物出土状況 3. 3トレンチ集石検出状況
図版11	面縄第1貝塚出土遺物1
図版12	面縄第1貝塚出土遺物2
図版13	面縄第2貝塚平成14年度緊急調査出土遺物1
図版14	面縄第2貝塚平成14年度緊急調査出土遺物2
図版15	面縄第2貝塚平成14年度緊急調査出土遺物3
図版16	面縄第2貝塚平成14年度緊急調査出土遺物4
図版17	面縄第2貝塚平成14年度緊急調査出土遺物5
図版18	面縄第2貝塚平成14年度緊急調査出土遺物6
図版19	面縄第2貝塚平成14年度緊急調査出土遺物7
図版20	面縄第2貝塚平成14年度緊急調査出土遺物8
図版21	面縄第2貝塚出土遺物1
図版22	面縄第2貝塚出土遺物2
図版23	面縄第2貝塚出土遺物3
図版24	面縄第2貝塚出土遺物4
図版25	面縄第3貝塚、第4貝塚出土遺物1
図版26	面縄第3貝塚、第4貝塚出土遺物2

第Ⅰ章 遺跡周辺の自然的環境と歴史的環境

第Ⅰ章. 遺跡周辺の自然的環境と歴史的環境

第1節. 自然的環境

1. 徳之島の位置

九州から台湾にかけて連なる島々は、琉球列島と呼ばれる。琉球列島は南北約1200kmにわたり、大小約200の島々をもつ島嶼群であり、地理的なまとまりから大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島の5つの地域に分けられる。トカラ海峡と慶良間ギャップという2つの深い海が島嶼間を大きく隔てており、西側には沖縄トラフ（約2000m）、東側には琉球海溝（約6000m）が存在する。

奄美諸島に属する徳之島は、地図上では奄美諸島のほぼ中央に当たる。北に加計呂麻島、南に沖永良部島を望み、好天であれば西側の硫黄島を遠望することができる。行政区は3つに区分され、北東部に徳之島町、北西部に天城町、南部に伊仙町が位置している。

2. 琉球列島の成り立ち

徳之島を含む琉球列島は、ユーラシアプレートとフィリピン海プレートの境界域に位置する。この一帯は、中新世前期（約2300万年～1600万年前）には大陸と陸続きであったが、鮮新世末から更新世初期（約250万年～130万年前）に繰り返された隆起と沈降により、大陸とは分断された。更新世前期（約130万年～70万年）には、奄美諸島以南の浅海にサンゴ礁が形成されはじめ、琉球石灰岩が堆積した。

更新世中期（約20数万年前）までは、地殻変動や気候変動により大陸と分離や結合を繰り返したが、この時期を境に大陸と完全に分かれ、現在の地理的環境が成立した。以後、海面が140mほど低下した最終氷期（約2万年前）を最後に、一帯の大規模な変化は見られないまま、現在に至っている。

3. 気候

徳之島は亜熱帯気候に属し、年の平均気温が21.6°Cという温暖な島である。年間を通して降水量は多いものの、7月から10月までは干天日が続くことがあり、季節による降雨量の偏りが大きい。また台風の通過路となっており、強風や高波が生じやすいことが知られている。

4. 地形

徳之島は島周約84km、面積約248km²で、日本では14番目に大きな島である。地殻変動によつて成立した島で、地形上は山地や河川が多い「高島」に分類される。外形は北から南に広がるフラスコ状を呈し、島を縱断するように標高500m前後の山地が屹立する。これらは北部山塊（天城岳・三方通岳）、中部山塊（井ノ川岳・丹発山・美名田山）、南部山塊（大田布岳）の3つに区分され、標高644.8mの井之川岳が島内で最も高い標高を示す。

徳之島の山地は砂岩、泥岩、花崗岩、粘板岩などで構成され、隆起石灰岩や砂礫層で構成される段丘がそれらを取り囲んでいる。沿岸部には砂丘、岩礁、断崖が認められる。島の南部に位置する伊仙町は、段丘が発達する地域である。町の東側は、山地から海側にかけてなだらか

な段丘が続き、海岸部は砂丘が展開している。それに対して西側は、標高 200 m 前後の台地が広がり、海沿いには急峻な断崖が形成される。全体として平坦地が多く、徳之島 3 町では最も広い耕地面積を有する。

徳之島には河川も多く、主なものでは東方に大瀬川、亀徳川、本川、南方に鹿浦川、阿権川、面繩川、西方に真瀬名川、秋利神川が流れている。西方の秋利神川は、島内唯一の長さと流域面積を誇る。伊仙町では比高差 10 m から 20 m ほどの狭長な谷が無数に形成されており、北側山間部の馬根・中山方面を中心として、深い谷が放射状に延びて台地を分断する。なかでも鹿浦川は比高差が大きく、50 m から 80 m ほどの深い浸食谷を有する。また、石灰岩段丘が発達している伊仙町では、石灰岩洞穴（鍾乳洞）と陥没ドリーネ地形が多く認められる。

5. 地質

中生代白亜紀の付加体である尾母層、秋利神川層、手々層、与名間層の堆積岩類と、古代三紀晩新世に貫入した花崗岩類が島の基盤を形成している。地殻変動によって隆起し浅海となつた更新世には、島の周辺に珊瑚礁が広がり、琉球層群の徳之島層、目手久層、海岸段丘堆積物などの石灰岩が堆積した。その後、九州南部の姶良カルデラの噴火によって噴出した姶良丹沢火山灰や、火山島である硫黄島の火山灰が広範囲に堆積し、最上部には現生の石灰岩、砂、砾、粘土などが認められる。

古い地層である尾母層群は犬田布岳周辺の山地に見られ、比較的新しい花崗岩帯や琉球層群がそれを取り囲んで段丘を形成していることから、地形と地質が相関していることがわかる。

6. 動植物

徳之島の自然植生は、生育する地質によって大きく二つに分別される。山地部では酸性土壤に適したリュウキュウアオキースダジイ群団に属する群落が生い茂るのに対し、低地部の石灰岩地帯では弱塩基性土壤に適合するリュウキュウガキーナガミボチョウジ群団に属する群落が繁茂している。人間の活動などによって生じた代償植生のリュウキュウマツ群が、山地から低地にかけて広い範囲に分布しており、沿岸部、海岸地帯、砂丘地、隆起珊瑚礁上や裾礁の岩上には、それらの地質に適した植生が成立している。また、ハツシマカンアオイ（県指定希少野生動植物）などの希少植物や、アマミアラカシ、オキナワウラジロガシなども数多く存在する。動物は主にリュウキュウイノシシや多種のネズミ類、コウモリ類の生息が確認される。

数多の固有種・準固有種が認められ、アマミノクロウサギ（国指定特別天然記念物）、アカヒゲ、アマミヤマシギ、カラスバト・アマミハナサキガエル・トクノシマトゲネズミ・ケナガネズミ・オカヤドカリ（国指定天然記念物）などの天然記念物、オビトカゲモドキ・イボイモリなど絶滅が危惧される種も生息している。

7. 面繩貝塚周辺の自然環境

面繩貝塚は伊仙町東部の面繩集落に所在する。面繩集落は、緩やかに続く石灰岩段丘から砂丘地に立地しており、眼前には礁池（イノー）が広がる。湾状の地形を有する砂丘地帯は古くから港として利用され、面繩川河口に当たる珊瑚礁の割れ口を通じて船の出入りが頻繁に行われたという。浜辺では土器片、陶器片などを採集することができ、砂丘地一帯において人間の活動痕跡が確認される。

第2節 歴史的環境

1. 旧石器時代

伊仙町におけるこの時代に対応する遺跡に、木之香の天城遺跡や小島のガラ竿遺跡がある。天城遺跡では石器組成の面から旧石器時代のものと考えられるチャート製の剥片が出土しており(堂込・栗林編 1994)、ガラ竿遺跡では始良丹沢火山灰層(26000年～29000年前)の下層から磨石が発見された(四本・伊藤 2002)。これらのことから、徳之島では約30000年前に人間が生活していた可能性が指摘されている。

2. 貝塚時代(縄文時代～古代並行期)

面縄貝塚をはじめ当該期の遺跡は数多く確認されている。遺跡は、砂丘、台地上、洞穴内、岩陰など多様な場所に立地し、住居跡、集石、墓など各種遺構が検出されている。

代表的な遺跡に喜念原始墓(三宅 1943)、喜念貝塚(三宅 1940)、佐弁トマチン遺跡(新里編 2013)、面縄貝塚(牛ノ浜・堂込編 1985)、ヨツキ洞穴(牛ノ浜・井ノ上編 1986)、犬田布貝塚(吉永・宮田編 1984)などがあり、これらは琉球列島の土器編年の指標となる面縄前庭式(貝塚時代前3期)、面縄東洞式(貝塚時代前4期)、面縄西洞式(貝塚時代前5期)、喜念式(貝塚時代前5期)、犬田布式(貝塚時代前5期)、兼久式(貝塚時代後2期)の標識遺跡となっている。

3. グスク時代(中世並行期)

グスク時代には、生活跡のほか、窯跡や水田跡など生産にかかわる遺構の検出例が増加する。目手久の川嶺辻遺跡(新里編 2010 a)では谷地を利用した当該期の水田跡が検出されているが、上面縄の前当り遺跡では、水田跡に隣接して建物跡や墓を伴う集落跡がセットで検出された。こうした遺跡からは、在地産の土器や陶器の他、中国産、朝鮮半島産の陶磁器、長崎産の滑石製石鍋が出土し、当時の活発な交易の様子が窺える。

なかでも特筆されるのが、史跡徳之島カムイヤキ陶器窯跡である(新東・青崎編 1985 a、b、青崎・伊藤編 2001、新里編 2005、新里編 2015)。本遺跡は11世紀後半から14世紀前半の陶器窯跡で、琉球列島最古の窯業生産跡として広く知られている。窯跡の発見以前は「類須恵器」と呼ばれていたが、窯跡の発見地名である「亀焼」にちなんでカムイヤキと名付けられた。阿三、伊仙、検福の国有林内、標高200m程度の山中にこれまで7つの支群が確認されているが、推計すると約200基の窯跡が包蔵されていることが見込まれる。器種は壺を主体に鉢、碗、甕、水注などがあり、九州南部から与那国島に至る範囲で出土例が報告されていたが、近年では滑石製石鍋の一大産地である長崎県においてその出土が確認されており、滑石製石鍋の流通とカムイヤキの拡散がどのように関係していたかが今後注目される。

また、城館と伝えられる遺跡も少なからずあり、中国産の青磁や白磁が出土する上面縄の恩納城跡(通称:ウガンウスジ)では、平場や石灰岩の石積み、建物遺構、溝状遺構などが確認されており、大規模な築城が行われていた様子を今に伝えている。

4. 琉球王国時代

徳之島は、琉球における三山鼎立時に北山王に、三山統一後は中山王に服属したとされる。年代については諸説あるが、琉球国より徳之島大親が派遣され、徳之島第一の島主となったこ

表1 本書で用いる時代区分名称

日本列島	琉球列島		土器の特徴	代表的な土器名称	
縄文時代	早期	前1期	爪形文系	ヤブチ式、東原式	
			条痕文系	柔痕文土器、曾加式 室川下層式、神野A式	
		前2期		神野B式 具志川A、B式 具志川C式、神野C式	
			挂带文系	面繩前庭式 古我知原I式	
				古我知原II、III式 仲泊式、面繩東洞式	
	後期	前4期	沈線文系・縦目文系・点刻線文系	嘉德IA、IB、II式、神野D式 伊波式、荻堂式	
				面繩西洞式、大山式 犬田布式、室川式 宇宿上層式、育念I式、宇座浜式	
	晩期	前5期	肥厚口縁系	仲原式	
				阿波連浦下層式 沈線文脚台系・浜屋原式 スセン當式、大当原式	
弥生時代	早期	後1期	無文尖底系・沈線文脚台系	兼久式、アカジャンガ一式 兼久式、フェンサ下層式	
	中期	後2期	くびれ平底系		
古墳時代					
奈良～平安時代					
鎌倉時代	グスク時代		グスク土器	フェンサ上層式	

とが伝えられている。しかしながら、この時代に対応する遺跡は現在のところ未発見であり、今後の調査の課題となる。

5. 薩摩藩時代

1609年に、奄美諸島は薩摩藩の統治下に置かれる。この時代の遺跡で最も多く確認されているのは、岩陰や洞穴に遺骨を納骨する「トゥール墓」と呼ばれる墓所である。天然の岩陰や洞穴を利用する場合や人工的な横穴に蔵骨器が納められる例もあり、また入口に石灰岩の石積みをもつものもしばしば見受けられる。伊仙町目手久の中筋川トゥール墓跡では、多くの人骨と壺や甕などの蔵骨器（主に薩摩焼、琉球産陶器、肥前産陶器）、石厨子が発見された。また飾り金具や鉄釘、木片の存在から木製厨子が安置されていた可能性もある（新里編 2010b）。

6. 近代

近代遺跡としては、大戦時の防空壕や塹壕が各地で確認されている。岩陰や洞穴が防空壕として利用されていたと言われ、徳之島カムイヤキ陶器窯跡が所在する国有林内には、塹壕跡や松根油の材料として松ヤニを採取した痕跡が残っている。鹿浦小学校旧奉安殿には第二次世界大戦中の弾痕が生々しく残されている。

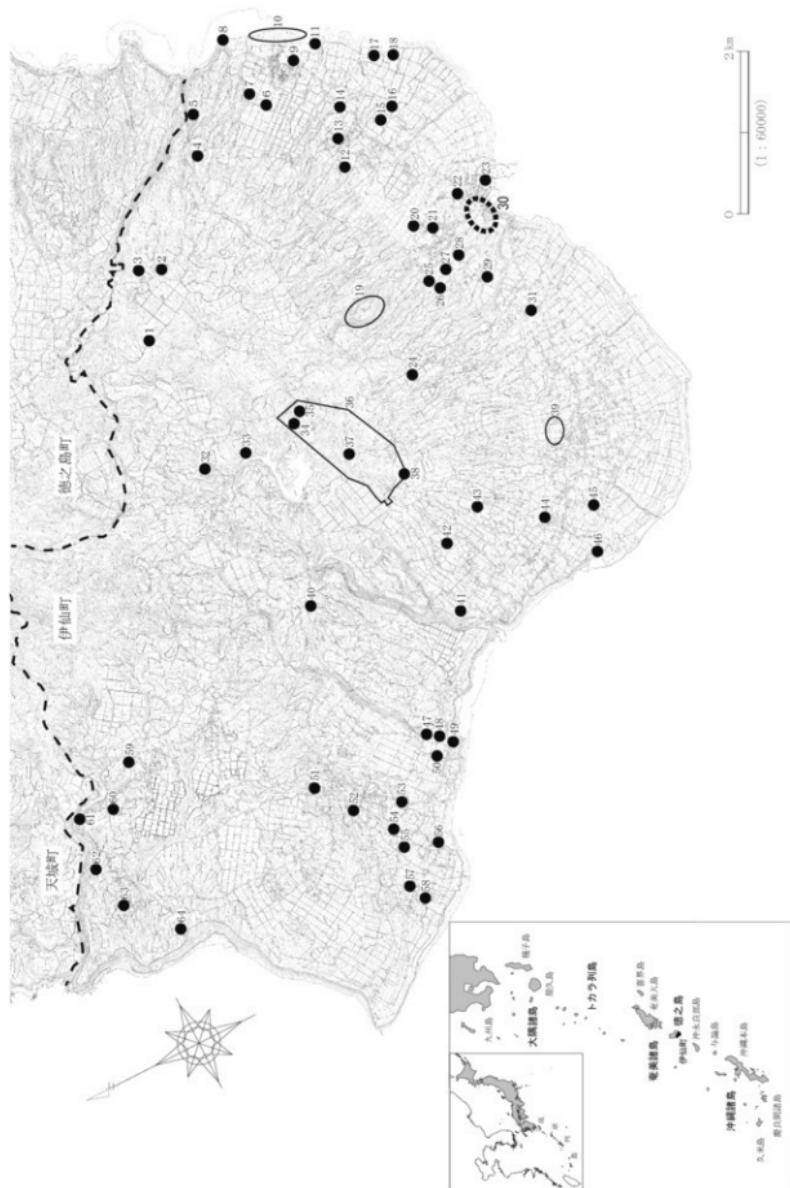


図1 伊仙町における遺跡の分布

表2 伊仙町の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代
1	喜念複列画	喜念	グスク時代
2	喜念坂羽屋敷跡	喜念上泉袋	貝塚時代後期
3	喜念上原	喜念上泉袋	グスク時代
4	ワネガン	喜念スープテ	貝塚時代後期
5	本川	喜念	貝塚時代後期
6	ウニケタリ	喜念ウキンダリ	貝塚時代～グスク時代
7	ウシロマタ	喜念ワカバトウ	貝塚時代～グスク時代
8	喜念始墓	喜念ムヂナウ	貝塚時代後期
9	喜念貝塚	喜念新久	貝塚時代前～後期
10	喜念浜砂丘	喜念	貝塚時代前～後期
11	佐奈貝塚	佐奈東ミヤド	貝塚時代後期
12	中筋川トール墓跡	目手久中筋川	萬葉藩時代～近代
13	川嶺社	目手久川嶺社、川嶺下	貝塚時代後～琉球王国時代
14	サクダ	佐弁サクダ	貝塚時代後～グスク時代
15	大久保	目手久字大久保	
16	上水韻	目手久水上タマリ	
17	佐界（第二）	佐弁ミヤド	
18	佐界トマチン	佐弁トマチン	貝塚時代前～後期
19	恩納城跡	面磯ウガン	グスク時代
20	ミヅタ	面磯	貝塚時代後～グスク時代
21	前当ノ遺跡	上面磯	貝塚時代後～グスク時代
22	カナヲ遺跡	面磯	貝塚時代前期～グスク時代
23	東面貝塚	東面磯	貝塚時代後期
24	トライスク	棱塙古里	グスク時代
25	面網波司塗	上面磯	グスク時代
26	廣力	面網廣力	グスク時代
27	大セノ瀬	面網大セノ瀬	グスク時代
28	中ノ当	面網中ノ当	グスク時代
29	ワクラチ	面網ワクラチ	貝塚時代～グスク時代
30	面網貝塚	面網兼久バル他	貝塚時代～グスク時代
31	赤久	棱塙赤久	貝塚時代前
32	中山神社	中山	グスク時代
33	墓地（ねーま連留）	中山	萬葉藩時代～近代
34	ウケラ城跡	馬根	グスク時代
35	馬根複列画	馬根	
36	徳之島カムイヤキ陶器窯跡	棱塙(矢田、打田)、阿三(亀田、亀施、柳田)、伊仙(萊柳田、平ソコ)	グスク時代
37	平スク	伊仙平スク	貝塚時代前期
38	ヨツキ洞穴	阿三ヨツキ	貝塚時代前期～グスク時代
39	ミンツキ集落跡	伊仙ミンツキ	グスク時代
40	フードグスク	阿權大當原	グスク時代
41	勘花	西阿三字勘花	グスク時代
42	あさま接司城跡	阿三字谷保	グスク時代
43	カン田	阿三カン田	貝塚時代前期～グスク時代
44	前田	阿三前田	貝塚時代前期～グスク時代
45	下板剣	伊仙下板剣	貝塚時代後期
46	瀬田海	伊仙	貝塚時代後期
47	木之香	木之香	貝塚時代前～後期
48	天城	木之香	旧石器～貝塚時代後期
49	アマングスク	木之香鳥権	グスク時代
50	下鳥権	木之香鳥権	貝塚時代前～グスク時代
51	妙裂波司城跡	大田布明眼	グスク時代
52	アジフーB	大田布	グスク時代
53	カメコ	大田布カメコ	貝塚時代前期
54	アジフー	大田布	貝塚時代後期～グスク時代
55	大田布貝塚	大田布連木竿1152番地	貝塚時代前期～後期
56	前泊西貝塚	西大田布	貝塚時代後期
57	大田布記念碑	大田布	貝塚時代後期
58	宮戸原	大田布宮戸原	グスク時代
59	河地	糸木名字河地	貝塚時代前～グスク時代
60	ガラ竿	小島ガラ竿	旧石器～グスク時代
61	上成川	糸木名上成川	貝塚時代前期
62	大成川	小島大成川	
63	後竿	小島後竿	グスク時代
64	宮里原	上諸宮里原	貝塚時代前～グスク時代

第Ⅱ章
面縄貝塚のこれまでの調査

第Ⅱ章. 面縄貝塚のこれまでの調査

第1節. 面縄貝塚の調査研究史

1. 面縄貝塚とは

面縄貝塚は、鹿児島県大島郡伊仙町面縄に所在する貝塚時代前1期(縄文時代早期～前期並行期)からグスク時代(中世並行期)にかけての遺跡である(図2)。海岸に面した砂丘地、石灰岩丘陵崖下、洞穴内において各種遺構や遺物が検出されており、遺跡の前面には琉球列島特有のサンゴ礁環境が展開している。

本遺跡は、これまでの調査によって貝層、竪穴遺構、集石遺構、埋葬跡など各種遺構を包蔵していることが明らかにされており、面縄前庭式土器、面縄東洞式土器、面縄西洞式土器、兼久式土器など特徴的な土器群の標識となる琉球列島の代表的な遺跡としてよく知られている(河口1974)。

2. 戰前の調査研究

(1) 面縄貝塚の調査に至る学問的背景

奄美諸島において最初の考古学的知見が得られたのは、奄美大島西北の赤木名村で石斧が発見されたことに始まる(若林1892)。ほどなくして沖縄諸島や先島諸島で石器の出土例が報告

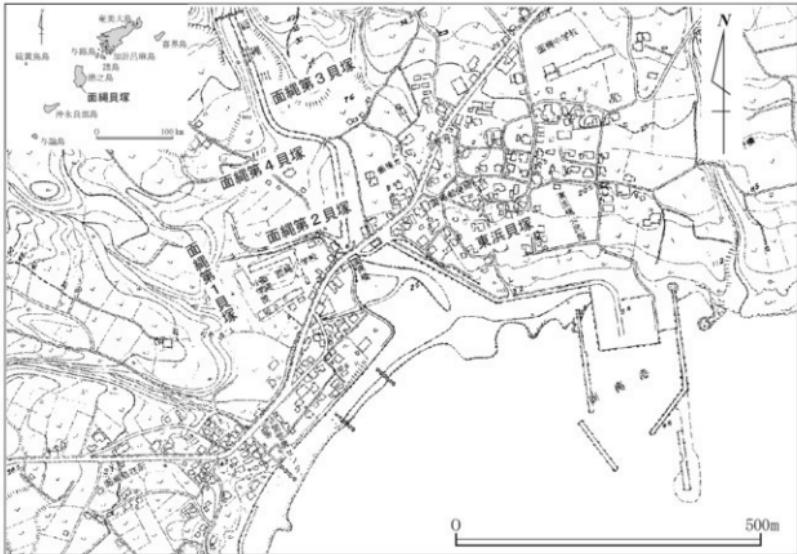


図2 面縄貝塚の位置

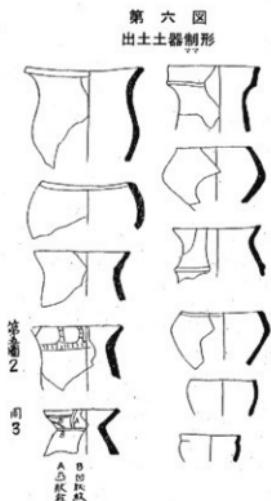


図3 山崎五十磨 (1930) 報告の面縄貝塚出土土器

(松村 1920 a)、器形や文様の精緻な観察に基づく土器研究が展開されるようになった(大山 1921)。

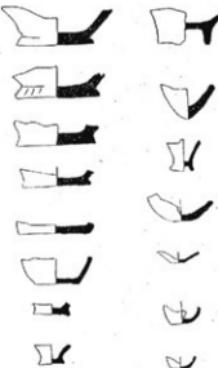
明治から大正時代にかけては、土器の違いは人種あるいは民族の違いを反映すると考えられており、石器時代土器の分布状況から日本列島先住民の拡散過程を追求することが研究の趨勢であった。昭和に入てもこうした状況は継続するが(鳥居 1926 a, b)、九州での発掘調査が進展すると、南九州と沖縄本島における出土土器の類似性が指摘され(山崎 1924)、九州と沖縄本島の間に位置する奄美諸島における土器様相が関心を集めることになった。奄美諸島のほぼ中央に位置する徳之島において面縄貝塚が発見されたのは、こうした学問的情勢の最中の出来事であった。

(2) 面縄貝塚の発見と最初の調査

昭和3年7月、面縄小学校の西側隣接地において貝層が発見された。発見者は面縄尋常高等小学校訓導であった大村行信で、生徒を動員した試掘調査の結果、石器時代の貝塚であることが明らかにされた。昭和5年3月、伊仙町在住の研究者であった廣瀬祐良は、當時鹿児島縣史蹟調査委員の山崎五十磨に面縄に石器時代遺跡が存在することを伝え、山崎の指示により発掘調査を行なった。山崎は本遺跡を面縄貝塚と名付け、廣瀬より送付された調査資料をもとに調査の概要を学会紙上に公表した(山崎 1930)。

山崎による報告は、貝塚の位置、貝塚の構造、貝層の状態、人工遺物、自然遺物におよぶが、中でも土器の報告に紙面が割かれ、紋様、器形、器種の検討から出土土器は「鹿児島県各地出土の弥生式に属する系統」で、面縄貝塚は「本邦弥生式土器系統の貝塚の最南」になると結論

されると(鳥居 1894、八木 1895)、当時呼ぶところの「石器時代」遺跡が琉球列島全域に存在し、沖縄諸島の土器は日本内地の土器に類似する一方で(鳥居 1905 a)、先島諸島では沖縄本島以東とは異なるものが出土することが指摘された(鳥居 1905 b)。その後、沖縄本島における荻堂貝塚(松村 1920 b)、伊波貝塚(大山 1922)の本格的な調査によって多くの資料が得られると、日本列島における石器時代土器通有の縄紋をもたないという地域的個性に指摘が及び

第七図
出土土器底部聚成図

12

付けた(図3)。さらに、当時問題となつてゐた民族南下説と民族北上説に対して、本遺跡の調査成果は弥生式民族の南下説を証明するものと評価している。

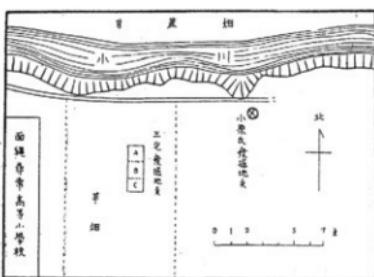
(3) 新たな遺跡の発見と調査

山崎の報文に接した早稲田大学学生の小原一夫は、昭和5年10月と翌年7月徳之島を訪れ、面縄尋常高等小学校の裏手畠地に新たに貝塚を発見し、廣瀬によって調査された貝塚を「面縄第一貝塚」、新発見の貝塚を「面縄第二貝塚」と命名して両遺跡の発掘調査を行なった。

小原はまず実地踏査の概要を記し(小原1932)、その翌年、大山柏の協力を仰いで遺物の研究報告を発表している(大山・小原1933、巻頭図版3~7)。なお、この報文によつて琉球列島の考古学においてはじめて縄紋式土器という用語が使用されることとなるが、両氏は、面縄第二貝塚出土遺物を、「貝器の発達」と南九州の出水貝塚、市来貝塚の土器と類似した「伊波式土器」の存在に特徴付けられる「縄紋系統の一南端文化」と評価して、沖縄島と九州とを繋ぐ奄美諸島の重要性に触れている。これによつて、沖縄本島の土器文化が九州と連結していたことが定説化し、以後、琉球列島においても縄文土器という用語が使用されるようになったと推測される(駒井・江上・後藤1934)。

(4) 面縄貝塚発見の意義

面縄第一、第二貝塚の発見と一連の調査は、形質人類学者の高い関心を招くこととなつた。日本石器時代人=日本先住民(当時のアイヌ人)と捉えられていた当時の考古学的学説を否定し、日本石器時代人=日本原住民と考える形質人類学者が琉球列島における考古学的状況に注目したためである。京都帝国大学の三宅宗悦は、新たに発見さ



面縄貝塚及び第二貝塚所在地見取図



面縄第二貝塚出土土器口縁部

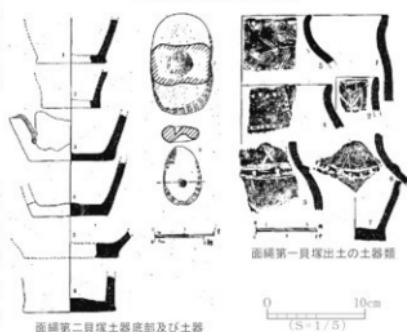


図4 三宅宗悦・藤岡謙二郎(1940)による面縄第二貝塚調査関係資料

れた本川貝塚、喜念原始墓、喜念貝塚、佐弁貝塚の資料を紹介しながら、琉球列島各地の出土土器に「南島式土器」の名を与える(三宅 1935)、さらに自ら面縄第一、第二貝塚を調査して、藤岡謙二郎とともに徳之島出土の土器を総括的に報告した(三宅・藤岡 1940、図4)。

こうした調査から三宅が得た結論は、「南島における先史時代土器が、先に述べた如く、縄文土器文化の範疇に入るものである以上、先史時代住民も亦、他地方の縄文文化人と関連をもつてゐることが考えられ」、「現在の南島住民の身性の一部にアイノ人の身性に近いものがあるとして、南島住民はアイノ人の子孫の如く説かれた事がある」が、「清野謙次博士の下で、我々が数百の日本石器時代人骨を材料として得た日本石器時代人種説を敷衍すれば、南島の先史時代住民も亦、日本石器時代人」で、「日本人が日本石器時代人を根幹として生まれた如く、アイノ人も亦、日本石器時代人から出た」ということであった(三宅 1940)。つまり、形質人類学者の立場から日本石器時代人は日本人の祖先であり、人種の交代によってアイヌ人が北と南に追いやられたのではないことを指摘したのである。このことは、琉球列島の調査成果が当時の人類論争に一石を投じ、日本考古学の将来的な研究の方向性を展望したことを意味し、面縄貝塚の発見は学問研究の進展に一定の役割を果たした点で意義深い出来事であったと言える。

三宅による調査以後、面縄第二貝塚出土土器は当時学会を牽引した研究者によって言及されることとなるが(角田 1937、三森 1939)、こうしたことからも三宅による調査研究が与えた学問的影響の大きさを窺うことができる。

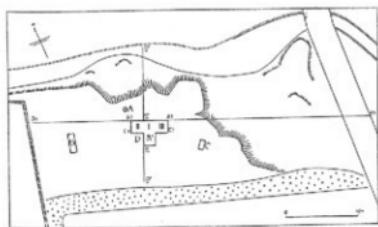
3. 戦後の調査研究

(1) 奄美群島本土復帰前後の調査

大戦によって琉球列島の遺跡調査はしばらく中断するものの、戦前に獲得された資料の再評価や文化内容の考察は継続されていた(八幡 1950、桜井 1953)。奄美群島の本土復帰直前、いよいよ考古学的調査が再開されることとなるが、復帰以前は奄美群島と同じく米統治下にあつた沖縄の研究者によって、復帰後は本土の研究者を中心に遺跡調査が進められたことは、当時の社会情勢をからすると当然のことであった。

復帰前年となる昭和 27 年 12 月、琉球林業試験場に勤務していた多和田眞淳は、調査旅行のため奄美諸島を訪れ、各地で遺跡分布調査を行なっている(安里 2007)。多和田は、面縄第一貝塚、面縄第二貝塚で得られた土器を面縄第一式、面縄第二式と呼んで、前者を編年の後期下半、後者を中期に位置付けた(多和田 1956)。これによって奄美、沖縄諸島における土器の相対的な序列が方向付けられ、遺跡立地や文化内容を踏まえた文化編年の基礎が琉球列島側から提示されることとなった(多和田 1956)。

復帰後の昭和 29 年 5 月から 6 月にかけて奄美諸島の遺跡調査を行なった河口貞徳は、面縄第一貝塚、面縄第二貝塚を調査し、その際、面縄小学校校庭遺跡と面縄第二貝塚東方 200 m の雜木林内に兼久貝塚を発見した(河口 1956、1959)。同年 8 月、三友国五郎と国分直一は面縄第二貝塚の試掘によって貝層を検出し(国分 1960、三友・国分 1959、三友・国分 1960、図5)、それに際して面縄第二貝塚の北方に位置する岩陰に 2 つの小貝塚を発見している。これらの遺跡がそれぞれ隣接し、兼久浦に面した一連の地形に立地していることから、河口による兼久貝塚は面縄第三貝塚、国分発見の両貝塚は面縄第四貝塚、第五貝塚と命名されることになった(三友・国分 1959)。



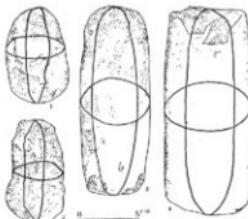
面縄第二貝塚実測図（Aは小原一夫氏、Bは三宅宗
悦氏、Cは河口貞徳氏、Dは三友、国分の武振氏。
I、II、III、IVは発掘断面を示す）



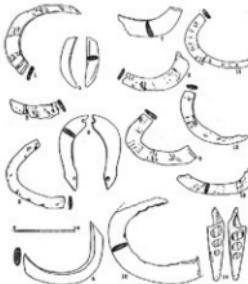
面縄第二貝塚出土土器破片の拓影



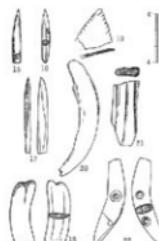
面縄第二貝塚出土土器底部実測図



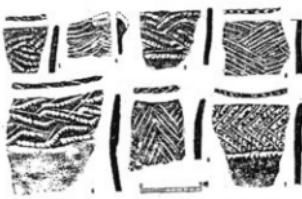
面縄貝塚出土石器実測図



面縄第二貝塚出土の貝製品



面縄第二貝塚出土の貝製品(その二)



面縄第四貝塚(1~3)および第五貝塚(4~7)
出土の土器破片拓影

0
(S=1/5)
10cm

図5 三友国五郎・国分直一(1959)による面縄貝塚調査関係資料

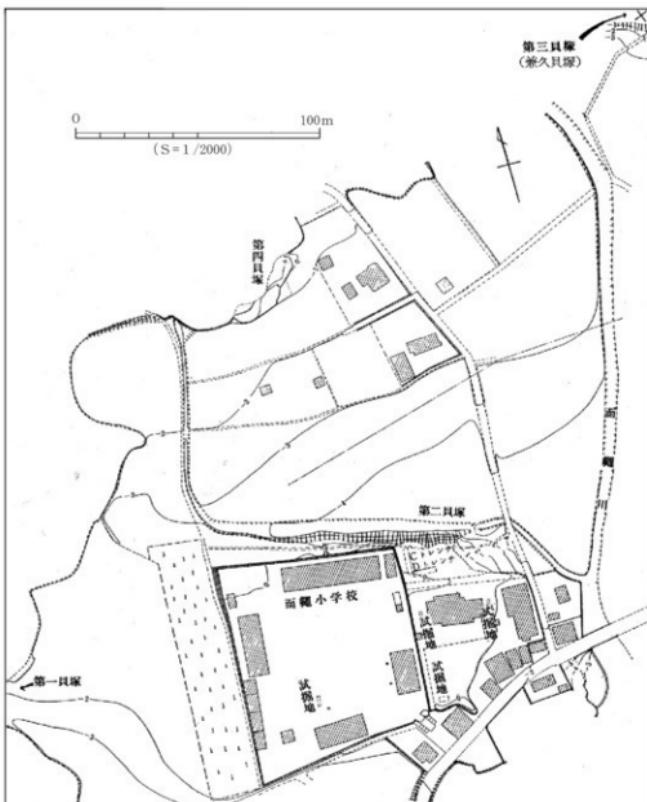


図6 九学会連合作成の面繩貝塚位置図

(2) 九学会連合による調査

学術組織「九学会連合」によって、昭和30年から3ヶ年にわたる奄美諸島の学際的な総合調査が計画されると、国分直一を中心とする考古学班は、琉球列島の先史時代遺跡の編年と弥生時代遺跡の発見を目的に、奄美大島、徳之島、沖永良部島を調査対象地に選定した(国分他1959、図6~8)。面繩第二貝塚、面繩第四貝塚の追加調査が企図されたのは、前年の奄美大島宇宿貝塚の調査で確認された宇宿上層式と宇宿下層式の前後関係を徳之島において追証し、奄美大島で発見された弥生式土器類似資料の南への広がりを確認するためであった。なお、この時点で面繩第四貝塚と面繩第五貝塚は面繩第四貝塚にまとめられたが、その経緯は明記されていない。

面繩第二貝塚(C、Dトレンチ)、面繩第四貝塚(前庭部、東洞部、西洞部)では層位的な発掘調査によって土器の集計表が作成され、これを基に土器の時間的推移、各遺跡の前後関係、

出土貝類の組成差が示された。さらに前年に調査された宇宿貝塚の宇宿下層式を南九州の縄文時代後期に比定し、これらがさらに細分される必要性も説かれている。また、これらの調査と並行して、面縄第三貝塚(報告では兼久貝塚と記載)の発掘調査も行われ、出土土器は「兼久式」と仮称されたが、編年上の位置は保留された。

九学会連合による面縄貝塚の調査で出土した土器群は、後日、調査メンバーの一人であった河口貞徳の研究によって「面縄前庭式」、「面縄東洞式」、「面縄西洞式」、「兼久式」と設定され(河口 1974)、琉球列島の土器編年上不可欠な資料的価値をもつこととなった。

(3) 伊仙町教育委員会による発掘調査の開始

九学会連合の調査は徳之島の南部に良好な遺跡が存在することを明らかにしてきたが、その後は鹿児島短期大学付属南日本文化研究所によって、徳之島総合学術調査団(顧問: 泉靖一、団長: 長沢和俊)が組織され、新たに徳之島の学術的総合調査が開始された。研究者の関心が本土復帰意を控えた沖縄に集中し、奄美諸島が等閑視されるのを懸念したことであった(鹿児島短期大学南日本文化研究所編 1970)。

考古学的調査では、遺跡分布調査によって島内全域に遺跡が存在することが明らかにされ(白木原 1970)、その後、調査ではグスク時代の遺跡が追加されるなど(白木原 1976)、多くの成果が得られることとなった。こうした調査資料を基に伊仙町誌が刊行され(伊仙町誌編さん委員会編 1978)、考古学的情報が鹿児島県と地元に蓄積されたことが契機となって、伊仙町教育委員会を主体とする調査が開始され、昭和 57 年より面縄貝塚の概要把握を目的とした再調査が行われることとなった(牛ノ浜・堂込 1985、この時点で貝塚名にアラビア数字が用いられていることから、伊仙町教育委員会調査による遺跡名称はこの表記に従う)。

面縄貝塚は幾度にわたる調査で壊滅したと考えられていたが(国分他 1959)、伊仙町教育委員会による確認調査によって遺跡の範囲が拡大し、なおかつ包

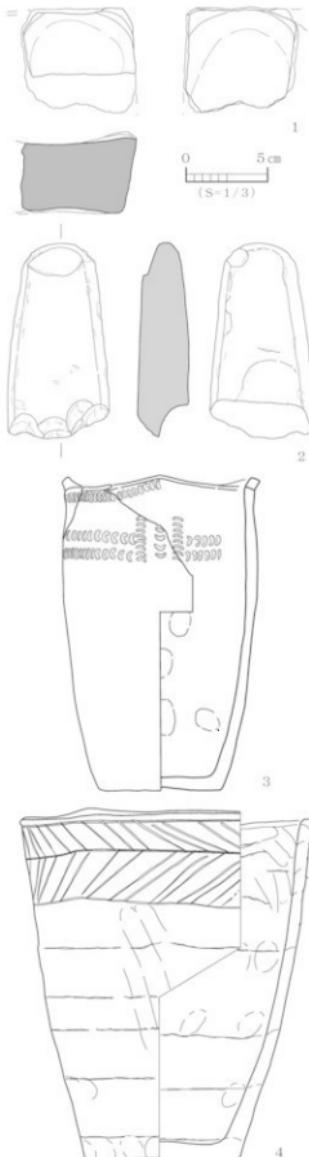


図 7 九学会連合調査出土遺物 1
(筑波大学所蔵資料)

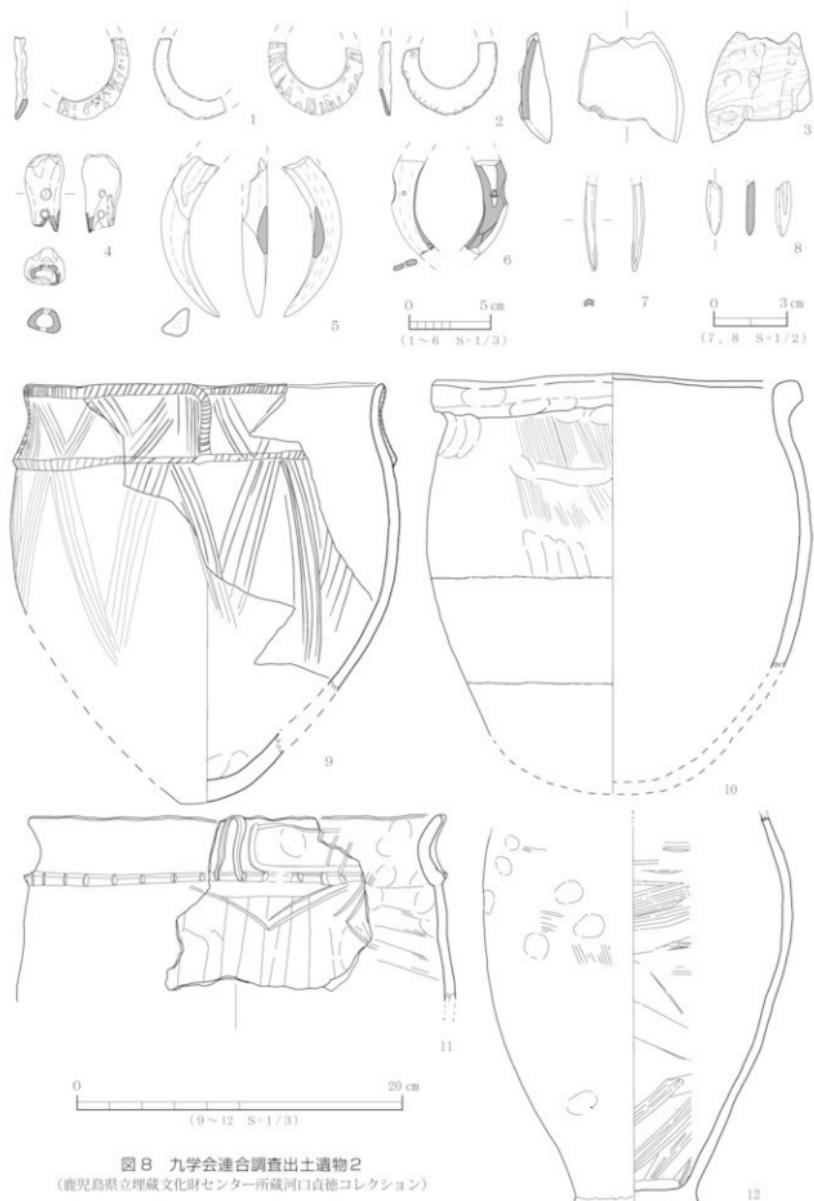


図8 九学会連合調査出土遺物2
(鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵河口貞徳コレクション)

蔵状態が良好であることが明らかとされた。さらに平成12年には、面縄小学校改築に伴う面縄第2貝塚の緊急調査が実施され、本遺跡が竪穴遺構跡や集石遺構を伴う複数の遺構面を包蔵する大規模な遺跡であることが明らかになった(新里編 2014)。

4. 兼久式土器、面縄東洞式土器、面縄西洞式土器、面縄前庭式土器の設定と編年

(1) 編年の概要

九学会連合は、奄美大島宇宿貝塚における土器の出土状況から宇宿上層式(無文の肥厚口縁土器)と宇宿下層式を設定し、面縄第二貝塚、面縄第四貝塚出土の宇宿下層式を爪形文、爪形沈線文、沈線文、凸帶沈線文に細分することによって、宇宿下層式(爪形文→爪形沈線文→沈線文→凸帶沈線)から宇宿上層式への変遷を示したが(国分他 1959)、この結果を受けて奄美諸島の土器編年を明確に示したのは河口貞徳であった(河口 1974)。奄美諸島独自の分類と編年を企図した河口は、自らが調査した嘉徳遺跡における土器の出土状況に検討を加え、九学会連合による編年案を追証しながら新たな土器編年を提唱した。これがいわゆる河口編年で、これら土器の設定名称は現在まで引き継がれて使用されている。

河口による検討をまとめると次のようになる。

- ①宇宿貝塚、面縄第二貝塚、面縄第四貝塚から出土した宇宿下層式には爪形文、爪形沈線文、凸帶沈線があるが、嘉徳遺跡において爪形沈線文土器は下層に含まれ、無遺物層を隔てた上層からは沈線文土器が出土する。前者を嘉徳I式、後者を嘉徳II式とすると、包含層の堆積状況によって嘉徳I式から嘉徳II式への前後関係が認められる。
- ②面縄第四貝塚東洞穴5層では爪形文土器(面縄東洞式)が単独で出土する一方、嘉徳I式は同4層、嘉徳II式は同2、3層に多く含まれるので、嘉徳I式、嘉徳II式は面縄東洞式よりも新しい。
- ③面縄第四貝塚西洞穴や前庭部からは平底の凸帶沈線文土器I(面縄西洞式)、面縄第四貝塚前庭部の丸底の凸帶沈線文土器II(面縄前庭式)が出土したが、後者は宇宿上層式の丸底土器と関係すると見られることから面縄西洞式、面縄前庭式、宇宿上層式の順に変化したと考えるのが妥当で、これらは嘉徳II式の以降の時期に位置付けられる。

検討の結果、面縄東洞式、嘉徳I式、嘉徳II式、面縄西洞式、面縄前庭式、喜念I式、宇宿上層式a、宇宿上層式bの序列が示され、これらは南九州の市来式(縄文時代後期)から山ノ口式(弥生時代中期)に並行する時代に位置付けられることとなった(表3)。

なお、面縄第三貝塚を標識とする兼久式土器は単独で出土することが多く、層位に基づく前後関係の把握が難しいことを理由に編年からは除外されたが、後の検討では弥生時代後期以降に位置付けられた(河口 1996 j)。

後に発表された河口の設定概念含めて、面縄貝塚を標識とする土器の特徴を記すと以下のようにになる(図9)。

(2) 兼久式土器(河口 1974、1996 i)

面縄第三貝塚を標識とする土器で、皆津崎貝塚、明神崎遺跡、本川貝塚などに類例が知られ

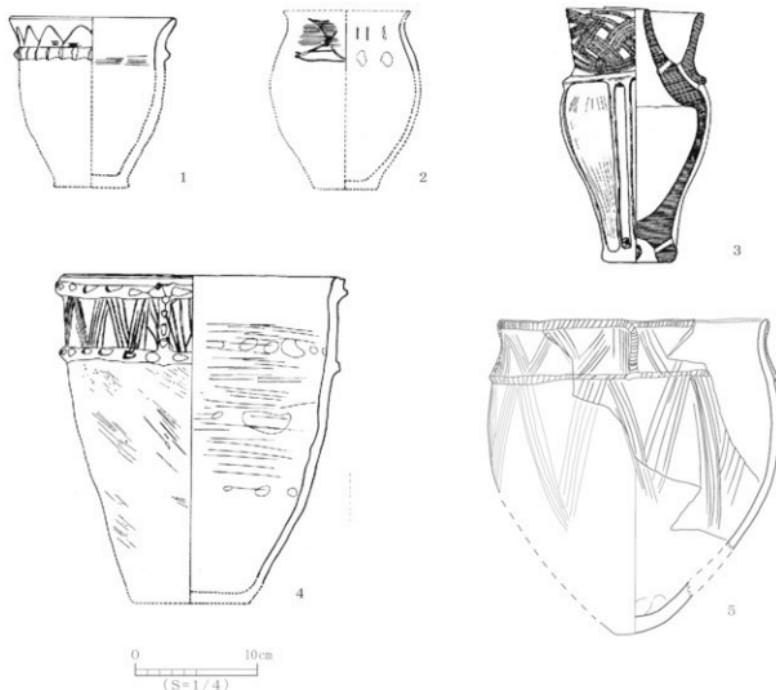


図9 河口貞徳設定の兼久式土器、面縄東洞式土器、面縄西洞式土器、面縄前庭式土器

る。器種は壺形と甕形がある。

壺は球形に張った胴部とすぼまつた肩部から立ち上がる頸部をもち、口縁部に刻目突帯が施されるものもある。底部は丸底または丸平底である。甕は、葉痕を留める平底の底部を有し、口縁下には断面三角形状の刻目突帯が巡らされ、その上下には沈線によって鋸歯文や曲線文が施される。

弥生時代後期の土器や土師器との共伴事例から長期間に渡って使用された土器で、今後さらなる分類が必要とされる。

(3) 面縄東洞式土器 (河口 1974, 1996 b)

面縄第四貝塚東洞部調査区第5層で単独で出土した爪形文土器を指し、面縄東洞式の名称が与えられた。嘉德遺跡や字宿貝塚に出土例があるが、南九州の市来式土器との共伴関係や施文方法の類似が確認され、琉球列島と九州における土器文化の接点となる資料として評価されている。

器種は深鉢形、皿形、壺形がある。深鉢は平底、壺は上げ底の形状を呈するが、両者ともに

表3 河口貞徳による土器編年

番号	名称	出土遺跡名	器形	宇宿式	南九州との関係
1	面縄東洞式	宇宿、面縄第2、第4	深鉢平底	下層式	市来式(調文後期)
2	高徳I式	宇宿、面縄第2、第4、高徳	深鉢平底	下層式	
3	高徳B式	宇宿、面縄第2、第4、高徳	深鉢平底	下層式	
4	面縄西洞式	宇宿、面縄第4、大田布	深鉢平底	下層式	
5	面縄前庭式	宇宿、面縄第4、大田布、宇宿高又	甕形、丸底	下層式	
6	寄念I式	宇宿、寄念	甕形、壺形、丸底	下層式	牛ノ口式(弥生中期)
7	宇宿上層式a	宇宿、寄念	甕形、壺形、丸底	上層式	
8	宇宿上層式b	宇宿、寄念	甕形、壺形、丸底	上層式	

外反する肥厚口縁によって文様帯が構成され、文様帯の中に籠目をモチーフとした複数状の押し引き文やそれが簡略化した沈線文が描かれる。分布の中心は奄美諸島にあるが、沖縄諸島の遺跡でも出土例が知られる。

(4) 面縄西洞式土器(河口 1974、1996 h)

面縄第四貝塚の西側洞穴調査区の下層から出土した凸帶沈線文土器のうち、平底のものが面縄西洞式土器と命名された。宇宿貝塚やサウチ遺跡での出土例が知られており、サウチ遺跡の最下層から単独で出土したことから、独立した名称として認知されるに至った。

器種は深鉢形で、胴部の張りが弱く、口縁は直口するもの、わずかに内傾するもの、外反するものがある。口縁部の上端と下端に蒲鉾状の突帯が廻らされ、それら突帯間には鋸歯状や綾衫状の沈線文、突帯内には凹点が連続して施文される。奄美大島と徳之島においてその分布が確認されている。

(5) 面縄前庭式土器(河口 1974、1996 a)

面縄第四貝塚の前庭部調査区から単独的に出土した土器で、宇宿貝塚、宇宿高又遺跡に類例があるとされる。面縄第四貝塚検出された2種類の突帯沈線文土器のうち丸底のものが面縄前庭式土器と名付けられた。

頭部は縮まり、肩から胴部にかけて張り出した器形で、底部は乳房上尖底または丸底に仕上げられる。口縁部、頭部あるいは両者に刻み目を有する細い凸帯が廻り、頭部と胴部には複線による鋸歯文が施される。同系統の土器は沖縄県の具志川島遺跡群でも出土しており、奄美諸島、沖縄諸島での分布が確認されている。

(6) 河口編年のその後

河口による編年は、沖縄諸島、奄美諸島における発掘調査や土器研究の進展によって若干の修正が加えられることとなる。面縄前庭式は沖永良部島神野貝塚の発掘調査によって面縄東洞式に先行することが確認され(牛ノ浜・堂込編 1985、河口 1996 a)、兼久式土器は古墳時代以降に位置付けられることが明らかにされた(高梨 2004、中山 2008、鼎 2014など)。

しかし、分類概念そのものは現在でも十分通用するものであり、これら土器群の資料的価値は今後も失われることはないであろう。こうした点からすると、面縄貝塚は、琉球列島における土器編年の構築に向けて多大な貢献を果たした重要な遺跡であると評価することができる。

表4 面縄貝塚の調査履歴一覧

調査者	調査年度	第1貝塚	第2貝塚	第3貝塚	第4貝塚	特記事項	文献
廣瀬祐良	昭和5年	○				貝層の確認	山崎1930
小原一夫	昭和5年	○				開元通宝出土	小原1932、大山・小原1933
			○			包含層検出	
三宅寅次 藤岡謙二郎	昭和10年	○				貝層の試掘	三宅・藤岡1940
			○			包含層検出	
河口貞徳	昭和29年			○		兼久貝塚の発見と調査	河口1958
三友国五郎 国分直一	昭和29年		○			包含層検出	三友・国分1959、国分1960
					○	包含層検出	
河口貞徳 国分直一 野口義賛 原口正三	昭和31年		○			貝層、包含層の確認	河口他1958、国分他1959
					○	包含層の確認	
伊仙町 教育委員会	昭和57年	○				石棺墓検出	牛ノ浜・堂込(編)1985 新里(編)2014 本書
			○			集石遺構検出	
	昭和59年			○		包含層検出	
					○	包含層検出	
	平成12年		○			各種遺構検出	
	平成19年			○		包含層検出	
					○	包含層検出	
	平成20年		○			集石遺構検出	
	平成21年	○				炉跡検出	
	平成22年	○				包含層検出	
	平成23年		○			建物跡検出	
	平成24年	○				人骨検出	
	平成25年	○				人骨検出	
	平成26年	○				人骨検出	

第2節 面縄貝塚の概要

1. 面縄第1貝塚

(1) 遺跡の立地と周辺環境

面縄第1貝塚は、面縄小学校西側の切り立った琉球石灰岩丘陵に開まれた空間内にあり、遺跡周辺には崖上に覆い茂る樹木によって日中なお薄暗い独特の景観が展開している。谷底の岩陰にはトゥール墓と呼ばれる墓地が残されており、現在でも薩摩焼や壺屋焼に収められた人骨を目にすることができる。

(2) 戦前の調査成果

廣瀬祐良による最初の発掘調査では、石灰岩丘陵中のテラス面に堆積する貝層の発掘調査によって、多数の遺物が得られ(山崎 1930)、その後、土器と開元通宝が発見されたことが報告されている(小原 1932、三宅・藤岡 1940)。

(3) 伊仙町教育委員会による調査成果

- ・テラス面(A-0区貝層)

純貝層が堆積しており、IからIII層から兼久式土器、貝製品、開元通宝が出土している。また、最下層の上部より面縄前庭式土器が検出されている。

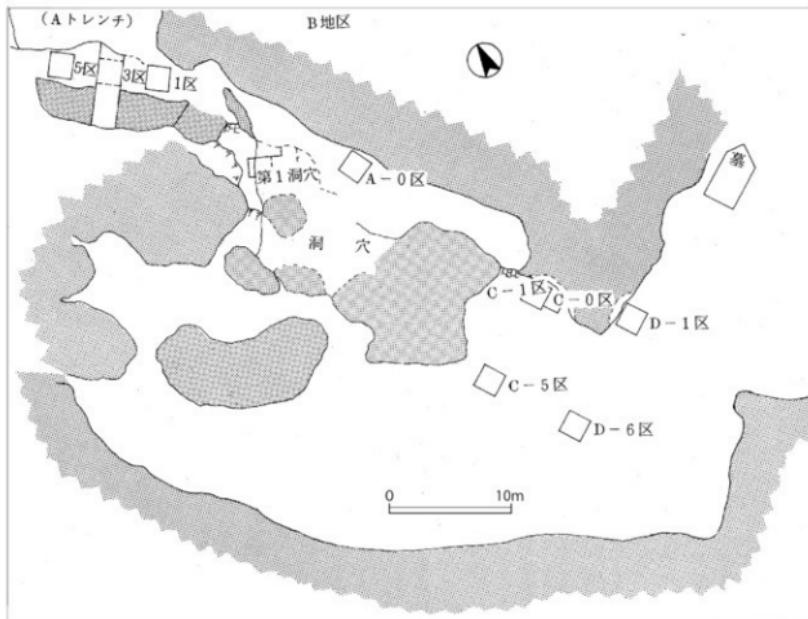


図 10 面縄第1貝塚調査区配置図(昭和 57 年度調査)

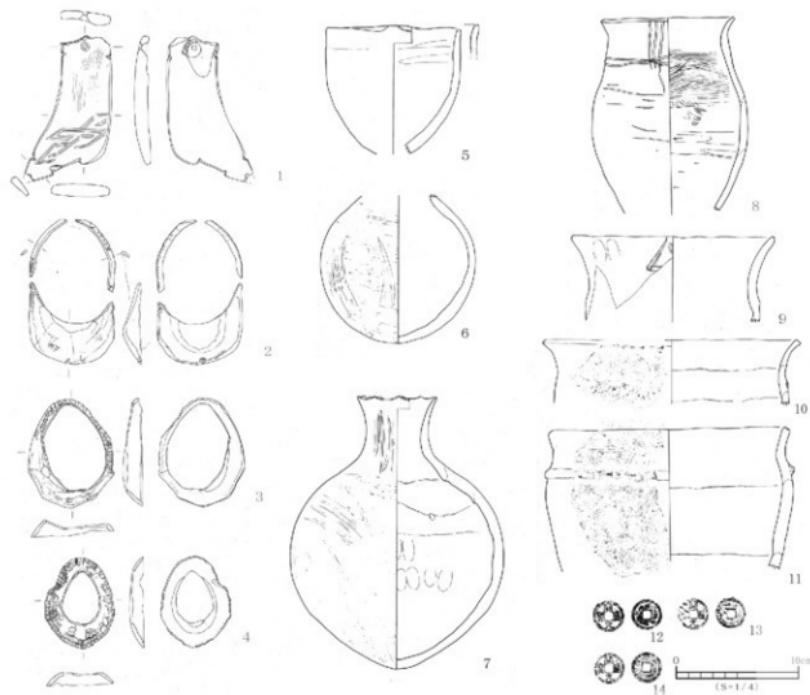


図 11 面縄第1貝塚出土遺物(昭和57年度調査)

・テラス面(Aトレンチ)

陶器や青磁を含む上層(I～III層)直下に、純貝層であるIV層が堆積しており、兼久式土器や貝製品が出土している。

・洞穴内

貝塚時代前5期の土器が供献された箱式石棺墓が検出されている。石棺は複数の石灰岩塊を配して箱状の棺を作り、両小口には扁平な石灰岩が使用された仕様のもので、棺に納められた女性の埋葬姿勢は仰臥伸展葬であった。

・谷地部分(C、D区)

C-0、1区では、近世の風葬骨の下位に兼久式期の貝層が堆積し、最下層となるIII層から貝製品と人骨が検出された。

C-5区の上層は無遺物層であるが、V層より市来式土器とオオツタノハ製貝輪が出土している。最下層のVI層には人骨が散乱している状況が確認され、爪形文土器が検出された。

D-1区IV層から山ノ口式土器、D-6区IV層より型式不明の土器が数点出土している。

2. 面縄第2貝塚

(1) 遺跡の立地と周辺環境

面縄第2貝塚は面縄港に面した標高8mの砂丘上に立地する。この砂丘は、遺跡の北側、東側を流れる面縄川によって切り離されており、周辺に展開する石灰岩丘陵の崖下低地とは異なる地形様相を示す。遺跡発見時は甘藷畑であったが、現在では面縄小学校敷地および宅地に改変されている。

(2) 調査の概要

小原一夫によって発見され(小原1932)、その出土土器に関する所見が公表されている(大山・小原1933)。戦前、面縄小学校南側の校舎の基礎工事中に宇宿上層式の完形品が出土し(河口1956)、本土復帰後の九学会連合による調査では2か所(Cトレンチ、Dトレンチ)の調査区のうち、Dトレンチから貝類が多く含む包含層が検出されている。九学会調査の後、伊仙町教育委員会による遺跡の範囲内容確認調査と面縄小学校改築に伴う緊急発掘調査が行なわれ、貝塚時代前4期(縄文時代後期並行期)の集落跡が発見されている。

(3) 造構と出土遺物

昭和57年の確認調査では学校敷地東側の空き地の発掘調査によって、石灰岩礫の集石が検出されたことが報告されている(牛ノ浜・堂込編1985)。平成14年における面縄小学校改築に伴う緊急調査では、炉跡とみられる集石、住居跡、ピット列が発見された。遺物は河口による嘉徳I式、嘉徳II式土器を主体とし、それに伴って多量の貝製品、骨製品、自然遺物が出土した(新里編2014)。

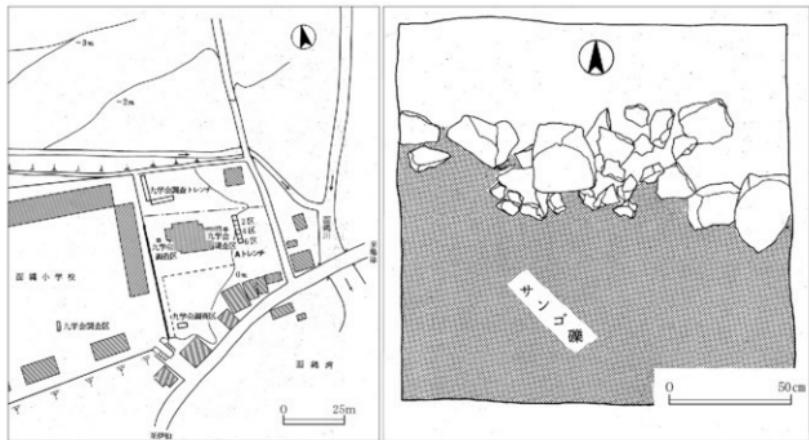


図12 面縄第2貝塚調査区配置図および検出遺構(昭和57年度調査)

3. 面縄第3貝塚

(1) 調査の立地と周辺環境

面縄第3貝塚は面縄第2貝塚北東300m、面縄第4貝塚の東200m、面縄川を隔てた隆起珊瑚礁の斜面に立地する。この石灰岩台地の縁辺には数段のテラス面が形成されているが、テラス面には3つの岩陰が開口しており、それら岩陰および隣接地から貝層や遺物包含層が発見されている。

(2) 調査の概要

河口真徳によって発見された当初、所在地の地名をとって兼久貝塚と呼ばれていたが、後に面縄第3貝塚に改められ、兼久式土器の標識遺跡となった。その後伊仙町教育委員会による確認調査が行なわれ、各調査区より包含層が検出されている。

(3) 遺構と出土遺物

・昭和59年度岩陰内の確認調査

それぞれの洞穴に兼久式土器の小片が散布しているが、第3洞穴において兼久式土器期の土層下位より人骨が検出されている（牛ノ浜・堂込編 1985）。

・昭和59年度Aトレンチの確認調査

兼久式期の混土貝層（IV層）と面縄前庭式を包含する土層（VI層）が確認された。その他、石器や貝製品が出土している（牛ノ浜・堂込編 1985）。

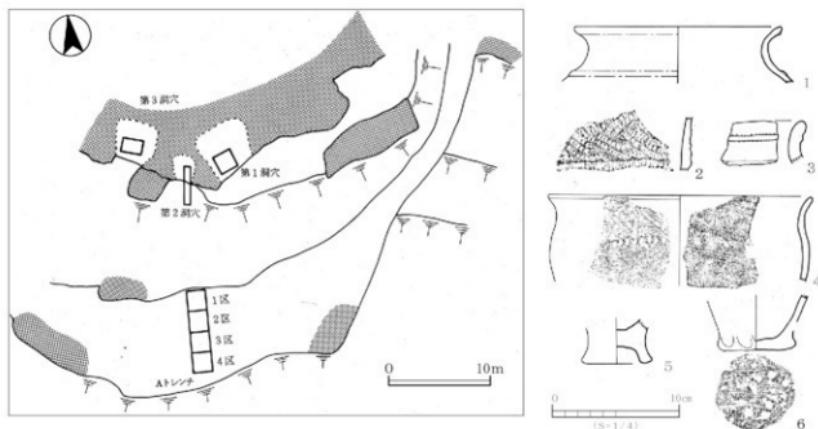


図13 面縄第3貝塚調査区配置図および出土遺物（昭和59年度調査）

4. 面縄第4貝塚

(1) 遺跡の立地と周辺環境

面縄小学校の北側の畑地内に位置する。九学会連合による調査の際、2箇所の岩陰(西洞穴、東洞穴)およびその前面の畑地(前庭部)において包含層が確認され、石灰岩台地の崖下に遺跡が立地することが明らかとされた。

(2) 調査の概要

昭和29年面縄第2貝塚の調査で来島した三友国五郎、国分直一によって発見され、試掘調査が行なわれた(三友・国分 1959)。昭和31年における九学会連合による調査で包含層が確認され、面縄東洞式土器、面縄西洞式土器、面縄前庭式土器の標識遺跡となった。1983年における伊仙町教育委員会の確認調査においても包含層が確認され、遺跡範囲が拡大することが明らかとなつた。

(3) 遺構と出土遺物

・昭和59年度東洞穴の調査

包含層(Ⅲ～Ⅵ層)から土器(条痕文土器、室川下層式、春日式、面縄前庭式、仲泊式、面縄東洞式)、石器(石斧、凹み石、石皿)、貝製品(貝錘、スイジガイ製利器、螺蓋製貝斧)、骨製品(骨針)が出土した(牛ノ浜・堂込編 1985)。

・昭和59年度西洞穴の調査

包含層(Ⅲ～Ⅵ層)において土器(室川下層式、面縄前庭式、面縄東洞式、嘉徳式、松山式系統、宇宿上層式、兼久式)、石器(石斧、磨石、凹石、敲石、石皿)、貝製品(貝匙、螺蓋製貝斧)が発見されている(牛ノ浜・堂込編 1985)。

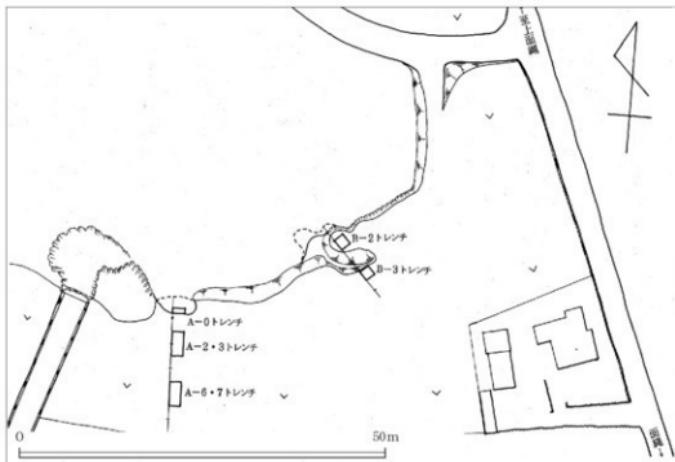


図 14 面縄第4貝塚調査区配置図(昭和59年度調査)

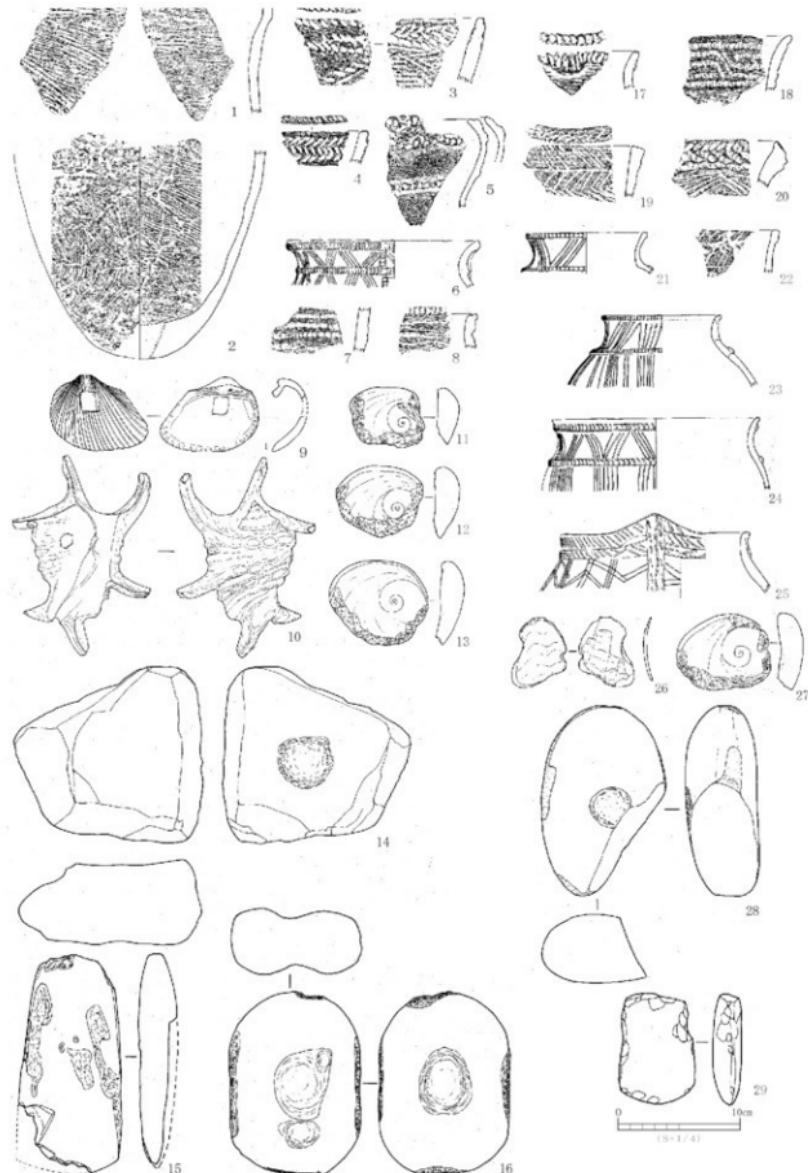


図 15 面縄第4貝塚出土遺物（昭和59年度調査）
(1~16: 東洞部出土、17~29: 西洞部出土)

第Ⅲ章 面縄貝塚の範囲内容確認調査の成果

第Ⅲ章. 面縄貝塚の範囲内容確認調査の成果

第1節. 調査の経緯と経過

1. 調査に至る経緯

これまでの調査により、面縄小学校周辺に点在する4つの遺跡（面縄第1～第4貝塚）から、時代の異なる遺構や包含層が確認され、それぞれが良好に保存されていることが明らかにされた（第Ⅱ章参照）。その後、平成14年度における面縄小学校改築に伴う面縄第2貝塚の緊急調査によって、貝塚時代前4期に対応する集落跡が確認され、遺跡の範囲が従来よりも拡大することが判明した（新里編2014）。そのため再度面縄貝塚の確認調査を行ない、遺跡の明確な範囲を確定し、各時代における遺跡の立地を検討することが課題として立ち上がった。

こうした中、平成18年度、面縄第3、第4貝塚を含む地域に畠地帯総合整備事業が計画され、事業主体である徳之島事務所農村整備課（以下農村整備課）より遺跡周辺における埋蔵文化財包蔵地の有無に関する照会がなされた。調査が進むたびに面縄貝塚の範囲が拡大することを重視した伊仙町教育委員会（以下町教育委員会）は、本遺跡の適切な保存を前提とした取り扱いについて農村整備課と協議を行なった。本遺跡が学史的に重要で、包蔵状態も極めて良好であることを踏まえ、事業計画区域内における遺跡の包蔵状況を確認し、過去の調査成果に基づいた面縄貝塚の正確な範囲と内容を把握するための確認調査を再度実施することとなった。

遺跡の調査費用については、町教育委員会と鹿児島県教育庁文化財課（以下県文化財課）が協議を行ない、国宝重要文化財等保存整備費補助金により確認調査と遺物整理を実施することとなり、文化庁、鹿児島県の補助のもと、平成19年度から平成27年度の9か年にかけて事業を行なった。

2. 調査の組織

（1）平成19年度事業

事業主体 伊仙町

調査主体 伊仙町教育委員会

調査責任 伊仙町教育委員会教育長

中野 幸次（平成19年11月まで）

時任 武男（平成19年11月から）

調査事務 伊仙町教育委員会社会教育課長 窪田 良治

調査担当 伊仙町教育委員会社会教育課主幹 伊藤 勝徳

伊仙町教育委員会社会教育課学芸員 新里 亮人

調査指導 文化庁記念物課 水ノ江和同

鹿児島県教育庁文化財課 前迫 亮一

鹿児島県教育庁文化財課 堂込 秀人

発掘作業員：永治 千羽子、津畑 奈美子、富 キミ子、琉 涼子、常村 成建、松田 千晴、美延 優志、岩山 さやか、津畑 優人、浜田 大地、富岡 一如、嶺元 元治、川畑 豊造、津畑 憲秀、富 いずみ、作田 恵、順 徳恵、浜田 末治、森山 登雄、池田 浩二
遺物整理作業員：松田 千晴、富 いずみ、作田 恵、琉 涼子、岩山 小百合

(2) 平成 20 年度事業

事業主体 伊仙町

調査主体 伊仙町教育委員会

調査責任 伊仙町教育委員会教育長

時任 武男

調査事務 伊仙町教育委員会社会教育課長

幸多 健策

調査担当 伊仙町教育委員会社会教育課主幹

伊藤 勝徳

伊仙町教育委員会社会教育課学芸員

新里 亮人

調査指導 文化庁記念物課

水ノ江和同

鹿児島県教育庁文化財課

前追 亮一

鹿児島県立埋蔵文化財センター

池畠 耕一

金武町教育委員会

安座間 充

測量委託業務

株式会社アーチ

発掘作業員：作田 めぐみ、富 いづみ、松田 千晴、津畠 泰造、浜田 末治、嶺元 元治、
富岡 一如、池田 浩次、川畠 豊造

遺物整理作業員：松田 千晴、富 いづみ、作田 恵

(3) 平成 21 年度事業

事業主体 伊仙町

調査主体 伊仙町教育委員会

調査責任 伊仙町教育委員会教育長

時任 武男(平成 22 年 2 月まで)

♪

調査事務 伊仙町教育委員会社会教育課長

亀山喜一郎(平成 22 年 2 月より)

社会教育課長補佐

幸多 健策

社会教育課主幹兼係長

西 吉広

調査担当 社会教育課文化財主査

伊藤 勝徳

調査指導 文化庁記念物課

新里 亮人

鹿児島県教育庁文化財課

清野 孝之

鹿児島県立埋蔵文化財センター

中村 和美

鹿児島女子短期大学

森 幸一郎

琉球大学医学部

竹中 正巳

沖縄県立埋蔵文化財センター

土肥 直美

沖縄県立博物館・美術館

片桐千亜紀

天城町教育委員会学芸員

藤田 祐樹

測量業務委託

具志堅 亮

株式会社アーチ

発掘作業員：作田 恵、富 いづみ、平山 美樹、浜田 末治、泉 文子、盛 セイ子、
富山 華、琉 涼子、永田 喜美代

遺物整理作業員：幸多 ひかり、作田 恵、富 いづみ、松田 千晴、勝 紗美

(4) 平成 22 年度事業

事業主体	伊仙町	
調査主体	伊仙町教育委員会	
調査責任	伊仙町教育委員会教育長	亀山喜一郎
調査事務	社会教育課長	當 吉郎
	社会教育課長補佐	西 吉広
	社会教育課主幹兼係長	伊藤 勝徳
調査担当	社会教育課文化財主査	新里 亮人
調査指導	天城町教育委員会学芸員	具志堅 亮
	沖縄県立博物館・美術館	山崎 真治
	文化庁記念物課	福宜田佳男
	鹿児島県教育庁文化財課	中村 和美
	タ	川口 雅之
	鹿児島大学埋蔵文化財調査室	新里 貴之

発掘作業員：津畠 順一、元田 茂樹、牧本 安城、窪田 忠好、津畠 文久山本 清次、美島 郁彦、松本 重人、高橋 高夫、稻田 貞信、西 弘明、清水 須摩子、西 静子、稻富 悟久、作 敏徳、喜 英一、永岡 智博、稻富 昭宜
遺物整理作業員：作田 恵、富 いずみ、日高 良美、常 秀範

(5) 平成 23 年度事業

事業主体	伊仙町	
調査主体	伊仙町教育委員会	
調査責任	伊仙町教育委員会教育長	亀山喜一郎（23 年 10 月まで） 茂岡 獨（23 年 10 月から）
	タ	
調査事務	社会教育課長	當 吉郎
	社会教育課長補佐	西 吉広
	社会教育課主幹兼係長	伊藤 勝徳
調査担当	社会教育課文化財主査	新里 亮人
調査指導	鹿児島県立埋蔵文化財センター	堂込 秀人
	千葉県立中央博物館	黒住 耐二
	國學院大學研究開発推進機構	伊藤 慎二
	鹿児島大学埋蔵文化財調査室	新里 貴之
	鹿児島女子短期大学	竹中 正巳
	札幌大学文化学部	高宮 広土
	早稲田大学	樋泉 岳二
	文化庁記念物課	水ノ江和同
	鹿児島県教育庁文化財課	中村 和美
	熊本大学文学部	木下 尚子

発掘作業員：高橋 高夫、稲田 貞信、郷 駿斗、伊藤 まさえ、田中 愛、郷 英理
 遺整理作業員：作田 恵、富 いずみ、安田 未来、伊藤 まさえ、田中 愛、深川 五月

(6) 平成 21 年度事業

事業主体	伊仙町	
調査主体	伊仙町教育委員会	
調査責任	伊仙町教育委員会教育長	茂岡 勲
調査事務	社会教育課長	當 吉郎
	社会教育課長補佐	喜 昭也
	伊仙町歴史民俗資料館	四本 延宏
調査担当	社会教育課文化財主査	新里 亮人
調査指導	鹿児島女子短期大学	竹中 正巳
	鹿児島大学埋蔵文化財調査室	新里 貴之
	國學院大學研究開発推進機構	伊藤 慎二
	千葉県立中央博物館	黒住 耐二
	早稲田大学	樋泉 岳二
	株式会社イーエーシー	牛ノ浜 修

発掘作業員：千田 寛之、銘苅 耕作、仲嶺 真太、仲本 祥太、與嶺 友紀也、安田 未来、郷 駿斗、高橋 高夫

遺物整理作業員：伊藤 まさえ、田中 愛、深川 五月、永岡 明奈、内山 五穂、宮前 延代、郷 英理

(7) 平成 25 年度事業

事業主体	伊仙町	
調査主体	伊仙町教育委員会	
調査責任	伊仙町教育委員会教育長	茂岡 勲
調査事務	社会教育課長	當 吉郎
	伊仙町歴史民俗資料館	四本 延宏
調査担当	社会教育課文化財主査	新里 亮人
調査指導	千葉県立博物館	黒住 耐二
	早稲田大学	樋泉 岳二

発掘作業員：中島 和美、堀脇 幸生、与 イツ子、徳田 勝、米田 博人、桃山 百合子、清水 よし、與嶺 友紀也、片山 弘喜、宮崎 大和、田畠 春菜、入江 由真、津田 由美、原 梓、仲本 祥太、久高 友孝、上門 生知、大城 正泉

遺物整理作業員：永岡 明奈、田中 愛、深川 五月

(8) 平成 26 年度事業

事業主体 伊仙町

調査主体	伊仙町教育委員会	
調査責任	伊仙町教育委員会教育長	茂岡 熊(平成 26 年 10 月まで)
	タ	直 章一郎(平成 26 年 11 月から)
調査事務	社会教育課長	西 吉広
	社会教育課長補佐	稻田 良和
	伊仙町歴史民俗資料館	四本 延宏
調査担当	社会教育課文化財係長	新里 亮人
	社会教育課文化財主事補	芝 美里
	タ	安田 未来
調査指導	文化庁文化財部記念物課	水ノ江和同
	鹿児島県教育庁文化財課	黒川 忠広
	タ	馬籠 亮道
	鹿児島県立埋蔵文化財センター調査課	前迫 亮一
	鹿児島女子短期大学	竹中 正巳
	名護市教育委員会	千田 寛之

発掘作業員：中村 俊廣、中島 和美、与 イソ子、清水 よし、桜山 百合子、久保 蕉樹、赤崎 松市、米田 博人、幸野 喬四郎、堀脇 幸生、森元 信介、柿山 輝久、春久 信一郎、徳田 勝、平山 哲久、勇 美江子、松浦 正朋、田畑 春菜、上門 生知、大城 正泉、我喜屋 優真、大城 弘也、伊野波 快、知念 沙希、吉本 美咲
遺物整理作業員：永岡 明奈、田中 愛、盛本 孝洋、郷 英理

(9) 平成 27 年度事業(報告書作成)

事業主体	伊仙町	
調査主体	伊仙町教育委員会	
調査責任	伊仙町教育委員会教育長	直 章一郎
調査事務	社会教育課長	明 勝良
	社会教育課長補佐	稲田 良和
調査担当	社会教育課文化財係長	新里 亮人
	社会教育課文化財主事補	安田 未来
調査指導	早稲田大学	樋泉 岳二
	千葉県立中央博物館	黒住 耐二
	鹿児島大学島嶼研究教育センター	高宮 広土
	熊本大学文学部	木下 尚子
	鹿児島女子短期大学	竹中 正巳
	鹿児島大学	渡辺 芳郎

遺物整理作業員：元田 明菜、田中 愛、盛本孝洋、郷 英理、伊藤まさえ、藤井啓介、萩原洋一、與嶺友紀也、大城 正泉、上門 生知

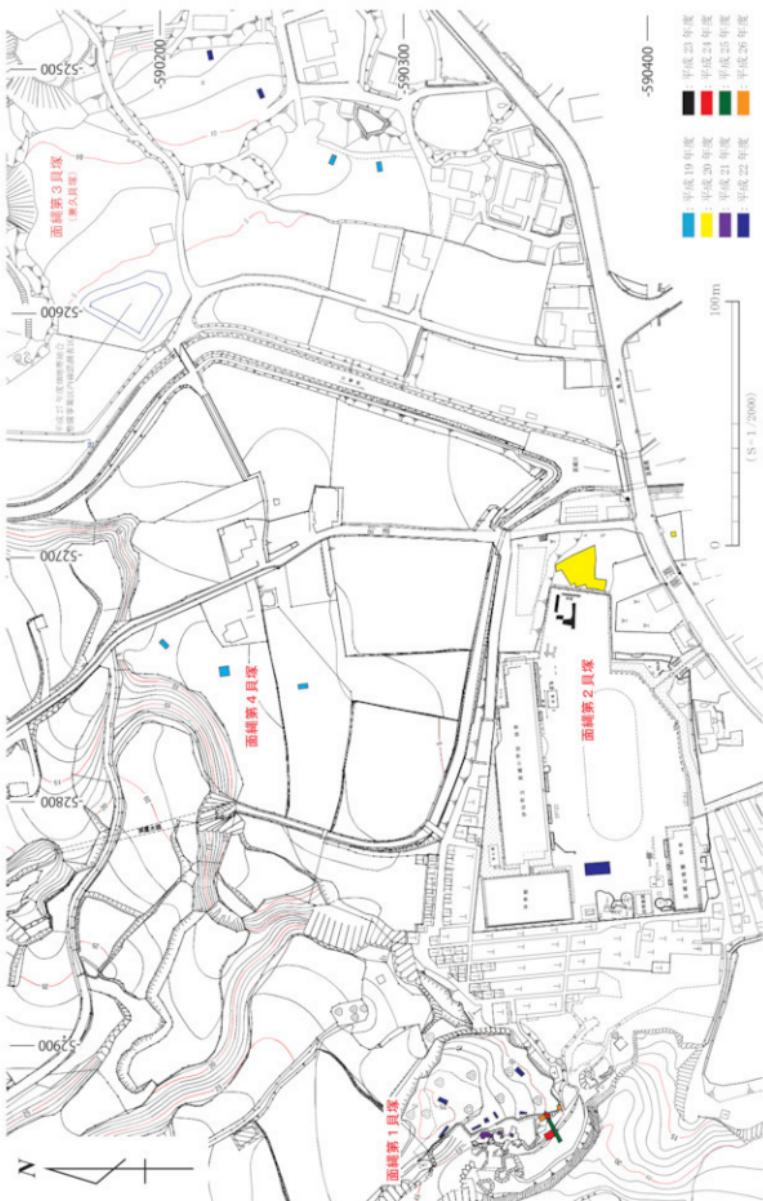


図 16 面縄貝塚確認調査における調査区配置図

3. 確認調査の経過

(1) 平成 19 年度(2007 年度)

・調査の経過

平成 19 年度は畑地帯総合整備事業計画区域（面縄第 3、第 4 貝塚の南側に隣接する畑地）における確認調査を実施した。

面縄小学校北側に位置する面縄第 4 貝塚付近に設定した 3 調査区の発掘によって（面縄第 4 貝塚平成 19 年度 1～3 レンチ）、すべての調査区において遺物包含層が確認された。このことから面縄第 4 貝塚の範囲が拡大すると判断されたが、出土遺物は細片が多く、確実な時期を比定できるものは少なかったものの、貝塚時代前 3、4 期に位置付けられている面縄前庭式土器、仲泊式土器が少量得られた。

また、面縄小学校敷地内より北東側 250m に位置する面縄カトリック教会裏手の畑地に 2 箇所の調査区（2 m × 4 m）を設置し、確認調査を行なった。本地点は第 3 貝塚の南東側 160m 付近に位置するが、両レンチより遺物包含層が確認されたことから、面縄第 3 貝塚の一部として取り扱うこととした（面縄第 3 貝塚平成 19 年度 1、2 レンチ）。1 レンチは貝塚時代後 2 期のスセン當式土器、2 レンチからは貝塚時代前 5 期の肥厚口縁土器が出土している。

・調査日誌

7 月 31 日～8 月 3 日

調査機材、プレハブの搬入後、3 つの調査区を設定する。設定した調査区周辺の踏査によって遺物の散布が確認され、採集遺物の洗浄作業を行なう。

8 月 6 日～8 月 10 日

1 レンチ（4 m × 4 m）の表土剥ぎを行なう。調査区東壁側に 50cm のサブレンチを設け優先的に掘り下げを進める。調査区北東側の擾乱土を除去し、全面に遺物包含層を検出する。

遺物包含層検出状況の写真撮影を行なう。明黄褐色土（II a 層）の出土遺物は土器、チャート片があるものの磨滅が著しい。調査区内に 1 m メッシュの小区画を設定し、遺物の取り上げを進める。明黄褐色土層の下位より黒褐色混砂土層（IV 層）を検出する。本層より貝、土器が安定的に出土する。

8 月 16 日～17 日

8 月 13、14、15 日はお盆のため調査を中断。8 月 16 日、県文化財課前追亮一氏が調査指導により来島する。文化庁調査官調査指導までの作業内容確認と過去の調査履歴について一覧表を作成するよう指導を得る。農村整備事業の計画区域内となっている第 3 貝塚周辺の踏査を行ない、新たな調査区域について検討する。調査区前面に IV 層を検出し、写真撮影を行なう。2、3 レンチ（いずれも 2 m × 4 m）の掘り下げを開始する。

8 月 20 日～24 日

2 レンチは表土剥ぎを継続し、3 レンチは黒褐色土層（III 層）を検出する。3 レンチ



図 17 平成 19 年度面縄第 4 貝塚確認調査の様子

西壁側に近世の集石遺構を検出し、写真撮影を行なう。1トレンチの西壁は幅1mのサブトレーニングを設けて掘り下げを進め、茶褐色混土砂層（VI層）の土壤サンプリングを行なう。2トレンチは明黄褐色土層（II層）が検出され、1トレンチと層位の対応が認められる。2トレンチⅢ層検出状況の写真撮影を行ない、面縄小学校内の三角点より各調査杭にレベルを移動する。

8月27日～31日

文化庁記念物課水ノ江和同調査官、県文化財課前迫亮一氏調査指導のため来島する。面縄第4貝塚の範囲が拡大することは明らかであるが、農村整備事業区内の面縄カトリック教会付近も確認調査の対象として遺跡の保存について耕地開発と調整を図り、次年度以降は遺構が密集する生活面の検出を目指すよう指導を受ける。各調査区の平面図、土層断面図を作成する。

9月3日～7日

面縄カトリック教会周辺の調査を開始するため、機材を搬入する。除草後、2つの調査区を設定し（2m×4m）、表土剥ぎを行なう。南側の1トレンチは表土下20cmで遺物包含層である砂層が検出され、北側の2トレンチでは地表下75cmに黒褐色土層である遺物包含層が検出された。面縄第3貝塚における2つの調査区では堆積状況がそれぞれ異なる可能性がある。第4貝塚2トレンチ周辺の伐採作業を行なう。

9月10日～14日

教育委員会各種行事のため作業休止。

9月17日～21日

面縄第3貝塚1トレンチ、2トレンチ包含層検出状況の写真撮影を行なう。1トレンチは器形が窺える土器や大型の貝類（シャコガイ、ヤコウガイ）が主体を占める一方、2トレンチの出土遺物は土器の細片と小型の貝類（マガキガイ）が多い。第4貝塚2トレンチの砂層検出状況の写真撮影を行なう。

9月24日～28日

第3貝塚両トレンチの掘り下げと遺物出土状況写真撮影を行なう。1トレンチはIV層完掘、2トレンチはIV層上面を検出し、南側サブトレーニングでは深堀区でV層を完掘する。土層断面図と調査区配置図の作成後、すべての調査区を埋戻して調査を終了する。

（2）平成20年度（2008年度）

・調査の経過

昭和57年度調査で部分的に確認された集石遺構の全面検出を目指し、面縄小学校東側に隣接する空き地に調査区を設け確認調査を実施した。目的とする集石遺構は確認できなかつたが、調査区のほぼ全面に遺物包含層となる砂層を確認し、新たに集石遺構2基を検出した。また、遺物を多く含む黒色砂層が白砂層を挟んで複数枚堆積している状況が確認されたことから、時期の異なる生活面が連続して残存している可能性が考慮された。

出土遺物は、土器、貝製品、石器、自然遺物が比較的多く得られた。山形口縁、平口縁を特徴とする土器には刺突文、沈線文が施されていることから、貝塚時代前4期の嘉徳I式、嘉徳II式に該当し、昭和57年度調査における出土遺物と大差ないと判断された。

・調査日誌

8月5日～8月8日

調査区の除草作業後、発掘機材を搬入する。重機による表土剥ぎ後、A区(2m×5m)の掘り下げを開始する。Ⅱ層(褐色砂層)を除去し、遺物包含層であるⅢ層(黒褐色砂層)を検出する。Ⅲ層上面遺物出土状況の写真撮影を行なう。

8月11日～15日

A区Ⅲ層の掘り下げを開始する。調査区内に1mの小区画を設け、出土位置を記録しながら遺物を取り上げる。面縄小学校内の三角点より調査区内にレベルを移動する。8月13、14、15日はお盆の為作業休止。

8月18日～8月22日

A区Ⅲ層の掘り下げを進め、遺物出土地点を記録後、取り上げを行なう。Ⅲ層を完掘し、Ⅳ層となる白砂層の掘り下げを開始する。

8月25日～8月29日

B区、C区(それぞれ2m×5m)の調査を開始する。B区はⅢ層が残存するが、C区は搅乱により削平を受けており、搅乱層を除去するとⅣ層が検出された。C区Ⅳ層の掘り下げを進める。B区Ⅲ層遺物出土状況の写真撮影を行なう。B区Ⅳa層の下位に集石を確認する(集石遺構1とする)。

9月1日～9月5日

調査員出張のため作業休止。

9月8日～9月12日

昭和57年度検出集石の再検出のため、調査区を西側に拡張し、重機による表土剥ぎを行なう。Ⅱ層中に方形状の搅乱層が認められたため写真撮影の後、掘り下げを進める。しかし目的の遺構は確認できなかったため、昭和57年度検出の集石は調査区外に包蔵されていると判断し、D区(2m×5m)の掘り下げを開始する。

9月15日～9月19日

B区、D区の掘り下げを進め、Ⅲ層における遺物出土状況の写真撮影を行ない、出土地点の記録後、取り上げを行なう。

9月22日～9月26日

D区東壁側Ⅳ層除去後に集石を確認したため(集石遺構2とする)、南側に調査区を拡張し(4m×5m)、集石遺構の検出作業を行なう。掃除機を利用して覆土の除去を進める。集石遺構2検出状況の写真撮影を行なう。

9月29日～10月3日

B区北壁の土層断面の写真撮影を行なう。調査区を北側に拡張し、E区の掘り下げを開始する。Ⅲ層を検出し、遺物出土状況の写真撮影を行なう。E区Ⅲ層出土遺物はすぐには取り上げず、検出状況を現地説明会で公表することとする。集石遺構の平面図を作成する。

10月1日～10月12日

教育委員会行事のため、作業休止。



図18 平成20年度面縄第2貝塚確認調査現地説明会の様子

10月13日～10月17日

検出遺構の清掃を行ない、調査指導に備える。10月15、16日、文化庁記念物課水ノ江和同氏、鹿児島県文化財課前迫亮一氏調査指導のため来島。鹿児島大学埋蔵文化財調査室新里貴之氏遺跡見学のため来島。面縄小学校東側隣接空き地にも面縄第2貝塚が広がることは明らかであるが、遺構がまとまって検出された面縄小学校改築に伴う緊急発掘調査の報告書が未刊行であることから、今年度検出された遺構面との関係性が判断しにくいため、面縄小学校改築に伴う面縄第2貝塚緊急調査の報告書を速やかに刊行し、確認調査報告書の中で遺跡の評価を記述するよう指導を受ける。また、面縄小学校のグラウンド内に遺構が残存しているかを明らかにするため、学校から発掘調査の許可が下り次第追加調査を進めることとなった。

10月20日～10月24日

現地説明会に向け、資料作成、経路確保など準備を進める。

10月26日

発掘調査現地説明会を開催する。参加者60名程度を得る。

10月27日～10月31日

E区遺物出土地点の記録を行ない、取り上げを行なう。県道南側海岸部の試掘調査を行なう。遺構、遺物ともに確認されなかった。遺構を保護するため、土糞を用いて埋戻しを行なう。調査を終了する。

(3) 平成21年度(2009年度)

・調査の経過

面縄第1貝塚の第一洞穴内における墓域の広がりを明らかにすることを目的として、洞穴内の確認調査を行なった。第一洞穴には3か所の開口部があり、昭和57年度調査で北側開口部に発見された石棺墓の再検出後、調査区域を南北に拡張して(1トレンチ)、新たな墓跡の発見を目指した。また、残る2箇所の開口部の奥壁側にも調査区を追加し(2、3トレンチ)、第一洞穴における遺構残存状況の確認を進めた。

1トレンチの調査の結果、昭和57年度調査発見の石棺墓の周辺に集石が検出され、人骨が散乱している状況が確認された。また、石棺底面を部分的に掘り下げたところ、わずかながら人骨の細片が出土したため、一次葬人骨が葬られる以前に改葬が行なわれていた可能性がある。洞穴開口部付近には、第一洞穴上方のテラス面に堆積した貝層が流れ込んでいたため、拡張部分に堆積する貝層はすべて採取し、フローテーション処理を行なった。貝層からは貝塚時代後2期のくびれ平底土器や広田上層式に分類される貝符が得られた。

2トレンチでは、崩落石を多く含む表土の下位から、人骨、猪骨、土器片等が出土した。土器は薄手の爪形文土器と呼ばれるもので、洞穴の利用が従前よりも古くさかのぼる可能性が考慮された。



図19 平成21年度面縄第1貝塚確認調査の様子

3トレンチにも東側開口部から流れ込んだ貝層が堆積していたため、これらをすべて採取しフローテーションにより遺物を回収した。貝層下位の砂層(Ⅶ層)からは炉跡と想定される遺構と人骨、貝製品が散布している状況が確認された。土層堆積状況の確認のため調査区南西側に75cm×50cmの深堀区を設け、掘り下げを進めた所、表土直下に黒褐色混土砂層(Ⅷ層)、その下層に爪形文土器を包含する黒褐色混砂土層(Ⅸ層)が確認された。

・調査日誌

11月16日～11月20日

面縄第1貝塚の伐採作業、発掘機材の搬入、テント設営を行なう。調査開始前状況の写真撮影を行ない、旧調査区の復旧を行なう。昭和57年度調査発見の石棺墓を一部検出する。佐弁トマチン遺跡シンポジウム参加者調査現場見学のため来跡。

11月23日～11月27日

教育委員会行事のため作業休止。

11月30日～12月4日

石棺内埋土の除去作業および調査区内の清掃を行ない、調査区復旧状況の写真撮影を行なう。調査区の断面清掃を行なう。

12月7日～12月11日

調査区北側に拡張し、集石および人骨を検出する。1トレンチ土層断面の写真撮影および石棺再検出状況の写真撮影を行なう。調査区南壁、西壁の土層断面図を作成する。

12月14日～12月18日

1トレンチを南北側に拡張し、掘り下げを開始する。表土除去後写真撮影を行なう。南側拡張区上面、流れ込みによって2次堆積した貝層は全て採取し、水洗によって遺物を抽出することとした。拡張区を掘り下げ、Ⅱ層、Ⅲ層検出状況と人骨出土状況の写真撮影を行なう。出土位置を記録し、遺物を取り上げる。

12月21日～12月25日

人骨出土状況の実測と取り上げを行なう。年末のため、道具を洗浄し、撤収作業を行なう。

1月11日～1月15日

2トレンチの設定と掘り下げを行なう。

1月18日～1月22日

3トレンチの設定と掘り下げを行なう。1トレンチ拡張区を南側に延長し掘り下げを進める。各トレンチの調査状況を写真に取める。

1月25日～1月29日

1トレンチ拡張区と2トレンチの掘り下げを行なう。洞穴内に測量用の基準杭を追加し、出土位置の記録後、遺物の取り上げを行なう。1トレンチ南側拡張区の人骨検出状況の写真撮影を行なう。3トレンチ南西壁側Ⅱ層中より焼石、焼砂、炭化物が集中する遺構が検出される。炉跡と推定されるが、伴っていた土器が細片のため明確な時期は不明である。

2月1日～2月5日

文化庁調査官清野孝之、鹿児島県文化財課中村和美氏調査指導のため来島。今年度調査で検出された墓や炉跡などの遺構は現状を保存しながら下層の調査に当たる必要がある。今後は遺跡の明確な範囲を確定し、面縄小学校改築に伴う発掘調査報告書を速やかに刊行して遺跡の価

値付けに当たるよう指導を受ける。

2月8日～2月12日

町内文化財悉皆調査のため、作業休止。

2月15日～2月19日

各トレンチの掘り下げと出土遺物の記録、写真撮影を行なう。

2月22日～2月26日

各トレンチの掘り下げと出土遺物の記録、写真撮影を行なう。

3月1日～3月5日

各トレンチの掘り下げと出土遺物の記録を進める。1トレンチ南側拡張区鍾状貝製品出土状況の写真撮影を行なう。

3月8日～3月14日

琉球大学土肥直美氏(3月13日)、鹿児島女子短期大学竹中正巳氏(3月13日)、沖縄県立埋蔵文化財センター片桐千亜紀氏(3月13日)調査指導のため来島。人骨の取り上げ方法と人骨出土状況から推定される埋葬方法について指導を受ける。昭和57年度検出石棺墓の底面を掘り下げた結果、少量ながら人骨片が出土したため、これらは再葬が行われていた可能性があるとの指導を得る。

3月15日～3月19日

検出遺構の実測と遺物の取り上げを行なう。沖縄県立博物館・美術館藤田祐樹氏(3月16日)、天城町教育委員会具志堅亮氏調査協力のため来跡。3トレンチの南側に拡張し、掘り下げと土壤の採取を行なう。

3月22日～3月26日

天城町教育委員会具志堅亮氏調査協力のため来跡。検出遺構の写真撮影、実測、出土遺物の取り上げを行なう。鹿児島県立埋蔵文化財センター森幸一郎氏(3月24日)、調査指導のため来島。今年度の調査は既検出遺構の記録に留め、次年度に体制を整え追加調査を行なうよう指導を受ける。

3月29日～3月30日

機材撤収、道具洗浄を行なう。貝層採取土壤を搬出し、今年度の調査を終了する。

(4) 平成22年度(2010年度)

・調査の経過

平成21年度1トレンチ拡張区の土壤サンプリングと調査区の埋戻し行なう(調査期間4月28日～30日)。

平成21年度における面繩第1洞穴3トレンチの調査区を西側に拡張し、追加調査を行なった。層位確認のため3トレンチ西南端に75cm×50cmの深堀区を設け、Ⅶ、Ⅷ層の堆積を確認した。Ⅷ層は爪形文土器期の包含層であることが明らかとなった(調査期間7月5日～9日)。

また、面繩小学校敷地内における遺構の残存状況を確認するため、体育馆入口付近における試掘、確認調査を実施した。調査の結果、グラウンド直下には白砂層の堆積が認められ、砂層を掘り込んだ近世の墓跡が複数検出された(調査期間:8月24日～26日)。出土遺物は古銭(寛永通宝)、近世陶器などが得られた。さらに、面繩第1貝塚の範囲を確定する目的で、崖上の台地に7箇所の調査区を設定し、確認調査を行なった(調査期間:9月27日～10月26日)。

一部包含層の残存が認められたが、その堆積は非常に薄く、地表下20cmに岩盤が検出された。

さらに、面縄第3貝塚東側の台地の試掘調査を実施した(調査期間:10月27日～11月5日)。本調査地では表土から土器片が得られたのみで、表土下には地山が堆積している状況が確認され、包含層、遺構面は確認できなかった。

・調査日誌

面縄第1貝塚第1洞穴内南側開口部の確認調査

4月28日～30日

平成21年度1トレンチ拡張区の土壤サンプリングと調査区の埋戻し行なう。

7月5日～7月9日

平成21年度面縄第1貝塚洞穴内3トレンチの西端に直交させる南北方向のトレンチを設定し、掘り下げを行なう。表土下に堆積するⅦ層より人骨片と貝製品が出土する。沖縄県立博物館・美術館専門員山崎真治、天城町教育委員会学芸員具志堅亮氏調査指導のため来跡。調査区の土層断面図を作成し、調査区の埋戻しを行なう。

面縄小学校校庭内体育館前の試掘調査

8月24日～8月26日

重機により表土剥ぎを行なう。表土下の白砂層より近世の藏骨器、寛永通宝および土層された人骨を検出する。検出状況の写真撮影を行ない、調査区の埋戻しを行なう。

面縄第一貝塚東側崖上の試掘調査

9月27日～10月1日

伐採作業と調査区の設定を行なう。

10月4日～10月8日

1トレンチ(2m×3.8m)、2トレンチ(1m×6m)、3トレンチ(2m×4m)の掘り下げを行なう。

10月11日～10月15日

4トレンチ(1m×4m)、5トレンチ(1m×3m)、6トレンチ(1m×3m)の設定と掘り下げを行なう。文化庁記念物課福宜田佳男調査官、県文化財課中村和美氏調査指導のため来島。独特の景観をもつ面縄第1貝塚からは、これまでの調査で複数時期におよぶ出土品が多数得られているが、遺構は墓が主で集落の状況が不明瞭であることから、遺跡の範囲と構造を明らかにする必要があり、指導委員会を立ち上げ調査の指針を仰ぐこと。また、



図20 平成22年度面縄小学校体育館前試掘調査の様子



図21 平成22年度面縄第1貝塚崖上部試掘調査の様子

遺跡周辺に農村整備事業が差し迫っているので、保護する範囲を速やかに確定し、農村整備課と密に協議するよう指導を受ける。

10月18日～10月22日

降雨により作業中止。

10月25日～10月26日

7トレンチ(3m×3m)の設定と掘り下げを行なう。各トレンチの調査所見を記録し、埋戻しを行なう。

面縄第3貝塚東側台地の試掘調査

10月27日～10月29日

2箇所のトレンチを設定し、重機による表土剥ぎを行なう。いずれも表土からは土器片が出土した。

11月1日～11月5日

両トレンチの掘り下げを進めたが、直下より地山が検出され、包含層、遺構は残存していないと判断した。鹿児島県文化財課川口雅之氏、調査指導のため来島。本調査区域に遺構は認められないため、史跡指定の範囲から除外するべきとの指導を得る。

(5) 平成23年度(2011年度)

・調査指導委員会の開催

今年度は過去における調査を踏まえた今後の調査方法と遺跡の内容を明らかにするための分析課題を明確にするため、面縄貝塚発掘調査指導委員会を開催した。伊仙町教育委員会が過去の調査における遺物出土状況の総括によって、遺跡立地の時間的な変遷について説明したところ以下の指導を受けた。

面縄第1貝塚からは、比較的多く人骨が得られているため、それらの所属年代を明らかにし、各時代における人の形質的な特徴や食性を明らかにすることは遺跡を理解するうえで欠かせない分析となる。

面縄第2貝塚からは貝塚時代前4期の遺構や遺物が豊富に得られており、面縄貝塚における土地利用の変遷を明らかにするためには平成14年度における緊急調査の報告書の刊行に向けた整理作業を優先的に進める必要がある。また、面縄第2貝塚の範囲と包蔵状態を明らかにすることが重要となるため、面縄小学校敷地内の確認調査を行なう必要がある。

遺跡の範囲を明確にするためには、面縄第1貝塚周辺の低地や面縄第4貝塚南側の畑地の試掘確認調査が必要で、自然環境の変遷と土地利用の関係を明らかにするための良好な分析資料を得る必要がある。これによって得られた資料は土器や炭化物の年代測定によって層位の年代を把握しながら、各層順における微化石、動物遺体群、植物遺体群を詳細に分析することによって古環境の変遷を明らかにし、各時代における生活域、墓域の空間利用を追究することが重要なとなる。



図22 平成22年度面縄第3貝塚東側台地の試掘調査の様子

・調査の経過

以上の指摘を受け、今年度は面縄小学校校庭内における面縄第2貝塚の包蔵状態を確認するため、平成14年度における緊急調査区域の東側にあたる現駐車場部分に3か所のトレンチを設定し、発掘調査を実施した。学期中グラウンドが通常利用されているため、十分な調査期間を確保できなかつたが、設定したすべてのトレンチから遺物包含層、竪穴式の建物跡が確認された。出土遺物はこれまでの調査と大差ないことから貝塚時代前4期の集落跡であった可能性が高く、平成20年度調査の成果と合わせて、面縄第2貝塚が良好な状態で包蔵されていることが明らかとなった。

1トレンチでは遺物が多く出土する黒褐色砂層(Ⅲ層)を掘り下げると、固結した混灰砂を含む暗黒褐色砂層が検出された。精査の結果、平面形が円形状を呈し、東側の一部を掘り下げた結果、褐色砂層(V層)を掘り込んだ状態が確認された。そのため本層は竪穴式の建物の埋土と判断し、平面、断面、遺物の出土状況の記録を行なった。本トレンチからは円形状に堆積する混灰砂層が他に2箇所で認められ、これらも遺構である可能性が考えられた。

2、3トレンチにおいても円形または方形状に堆積する黒色砂層が確認されたため、一部を掘り下げ、検出状況の記録を行なった。判然とはしないがこれらも砂層に掘り込まれた何らかの遺構である可能性が考えられた。

・調査日誌

12月12日～12月16日

発掘機材を搬入し、重機による表土剥ぎを行なう。鹿児島県立埋蔵文化財センター堂込秀人氏調査指導のため来島。1トレンチより黒色砂層の円形状のプランを検出する。2、3トレンチにも同様の黒色砂層が認められたため、精査を進める。1トレンチのⅢ層(遺物包含層)はすべてフルイにかけ、遺物の回収を行なう。遺構検出状況の写真撮影と平面図の作成を行なう。

1トレンチの遺構は東側にサブトレンチを設け、掘り下げを進める。2、3トレンチの遺構も一部掘り下げを進め、遺物出土状況、平面プランの実測を行なう。各トレンチにおける完掘状況の写真撮影を行なう。各トレンチの断面図を作成し、層序所見の記録を行なう。各調査区を埋戻し、調査を終了する。



図23 平成23年度調査指導委員会の様子



図24 平成23年度面縄第2貝塚確認調査の様子

(6) 平成 24 年度(2012 年度)

・調査の経過

昭和 57 年度面繩第 1 貝塚の確認調査で報告されていた人骨の埋葬状況を検討するため、旧 C - 0 区の南側に拡張区を設定し、確認調査を実施した。調査の結果、拡張区における黒色包含層(Ⅱ層)から一次層人骨が検出され、石灰岩台地の崖下も墓地として利用されていたことが明らかとなった。人骨は副葬品を伴っていなかったため詳細な時期は確定できないため、周辺の炭化物を採取し年代測定分析に備えた。

また、昭和 57 年度調査 C - 5 グリッドにおいても人骨の出土が報告されているため、旧調査区の復旧後、南側に 2 m 拡張し、発掘調査を実施した。V 層には石灰岩の多量な堆積が認められ、人骨の散布も確認された。遺物は細片が多く、詳細な時期の決定には至らなかった。

・調査日誌

2月4日～2月8日

台風による倒木の撤去作業および周辺の伐採作業を行なう。

2月18日～2月24日

発掘機材を搬入し、調査区近景の写真撮影を行なう。旧 C - 5 区の復旧作業と拡張トレンチの掘り下げを行なう(B トレンチと命名)。調査区復旧状況の写真撮影を行なう。調査区東側では V 層にて人骨の集中が認められる。旧 C - 0 区の復旧後、南側に拡張区を設定し(A トレンチと命名)、掘り下げを進める。B トレンチ各層の土壤サンプリングを行なう。

2月25日～3月2日

A トレンチ、B トレンチの掘り下げを進める。B トレンチ V 層の人骨出土状況の実測図を作成する。A トレンチにて一次層人骨を検出する。人骨検出状況の写真撮影を行なう。A トレンチ検出の人骨は写真撮影後白砂で埋戻し、図化と取り上げは次年度以降に見送ることとした。

各トレンチの調査区配置図、土層断面図を作成し、写真撮影後、埋戻しを行ない、調査を終了する。

(7) 平成 25 年度(2013 年度)

・調査の経過

前年度 A トレンチ、B トレンチの継続調査および A トレンチと B トレンチで確認された白砂層(IV 層)の堆積状況を確認するため、両トレンチを連結させる東西方向の調査区を設定し(C トレンチ)、掘り下げを行なった。B トレンチでは VI 層における石灰岩の出土状況の図化、A トレンチでは昨年度埋め戻した人骨の実測と取り上げを行なった。C トレンチの IV 層(白砂層)からは土器や人骨(頭部)が出土したが、南壁断面において西側に向かって傾斜しながら堆積している状況が確認されたため、表土が水平に堆積以前には現在よりも深い谷地形が展開して



図 25 平成 24 年度面繩第 1 貝塚確認調査の様子

いたが明らかとなった。またIV層下位に堆積する玉砂利、砂礫を多く含むV、VI層は、雨天時に谷底を流れた流水と関連する堆積層だと見られるが、わずかながら人骨や人工遺物の出土が認められた。Cトレンチの断面の観察から、旧地形となる谷の側縁に堆積した白砂層(IV層)に墓地が営まれた可能性が考慮された。

・調査日誌

2月24日～3月2日

機材を搬入し、調査区の設定を行なう。重機により表土を除去し、前年度調査区を復旧する。Aトレンチの調査区を人力で復旧し、昨年度に記録後埋め戻した埋葬人骨の再検出を行なう。人骨再検出状況の写真撮影後、A、Bトレンチの壁面、床面清掃を行ない、Cトレンチを設定する。熊本大学文学部教授木下尚子氏、奄美群島文化財保護対策連絡協議会現場視察のため来跡。埋葬人骨検出を周知するため現地で報道発表を行なう。

3月3日～3月8日

鹿児島女子短期大学竹中正巳氏調査参加。Bトレンチ遺物出土状況、Aトレンチの埋葬人骨検出状況の平面図を作成し、Aトレンチの掘り下げを進める。IV層中より石灰岩が検出される。

3月9日～3月15日

明治大学谷畑美帆、袖ヶ浦市教育委員会稲葉理恵氏発掘調査参加。Aトレンチ埋葬人骨立面図を作成し、取り上げを行なう。Aトレンチ南壁のセクション図を作成する。埋葬人骨検出面精査の結果、配石が確認できたため石棺墓となる可能性が考慮される。配石の平面図を作成する。Cトレンチを掘り下げII層(黒色混貝層)を完掘する。III層を掘り下げ、IV層より人骨頭部の一部を検出する。人骨出土状況の写真撮影と土壤のサンプリングを行なう。

3月17日～3月21日

Cトレンチ西側の掘り下げを進める。玉砂利層、砂礫層より爪形文土器、骨片が出土する。東側IV層人骨出土状況の図化を行なう。千葉県立中央博物館黒住耐二氏、早稲田大学樋泉岳二氏調査指導のため来跡。調査区断面および崖上テラス面に堆積する貝層の土壤サンプリングを行なう。

3月24日～3月29日

Bトレンチ石灰岩出土状況の平面図とCトレンチ南壁の線引きとセクション図、土壤サンプリング位置図を作成する。各トレンチの調査区配置図を作成する。現地説明会後埋戻しを行ない、調査を終了する。

(8) 平成26年度(2014年度)

・調査の経過

新たな埋葬人骨を確認するためAトレンチを北側に拡張し、掘り下げを進める。AトレンチではIV層から石灰岩や人骨が出土し、墓域が北側へ拡大する可能性が高まった。また、昭和57年度調査D-1区の再調査を行ない(Dトレンチとする)、以前に検出されていた一次葬人



図26 平成25年度面縄第1貝塚確認調査の様子

骨の埋葬状況を確認するための北側に調査区を拡張しながら掘り下げを進めた。調査の結果、一次葬人骨は屈葬の状態で葬られており、頭部が取り除かれている状況が確認された。副葬品は出土していないが、断面の観察によると、中世の青磁や陶器が含まれる土坑よりも下位に営まれている可能性があるため、グスク時代以前に廻る可能性が考慮された。



図 27 平成 26 年度面縄第 1 貝塚確認調査の様子

・調査日誌

3月 14 日～3月 21 日

A トレンチの復旧作業と写真撮影を行なう。A トレンチを北側に拡張し、掘り下げを進める。大形の崩落石は重機により取り除く。拡張区より配石状に並ぶ石灰岩と人骨を検出する。D トレンチの調査区を復旧のため重機により掘り下げを行ない、人力によって人骨を再検出する。人骨の埋葬状況を把握するため D トレンチは北側を拡張し掘り下げを進める。鹿児島女子短期大学竹中正巳氏調査参加のため来跡。

3月 22 日～3月 27 日

D トレンチ人骨検出作業と埋葬状況の写真撮影を行なう。人骨埋葬状況の実測作業を行なう。人骨の取り上げは次年度に見送ることとし、調査区を埋め戻して作業を終了する。

4. 整理等作業の経過

平成 19 年度：出土遺物の洗浄、注記、土壤サンプルのフローテーション

平成 20 年度：出土遺物の洗浄、注記

平成 21 年度：出土遺物の洗浄、注記

平成 22 年度：出土遺物の洗浄、注記

平成 23 年度：出土遺物の洗浄、注記、土壤サンプルのフローテーション作業

平成 24 年度：出土遺物の洗浄、注記、伊仙町歴史民俗資料館の移転に伴う収蔵遺物台帳作成

平成 25 年度：調査図面のトレース、出土遺物の洗浄、注記、実測、トレース

平成 26 年度：自然科学的分析、調査図面のトレース、出土遺物の実測、トレース

平成 27 年度：自然科学的分析、挿図及び図版作成、原稿執筆、報告書刊行

第2節 面縄第1貝塚の確認調査

1. 調査の概要（図28）

面縄第1貝塚は、昭和3年に発見された遺跡で、これまでの調査によって貝層（貝塚時代後2期）、石棺墓（貝塚時代前5期）、人骨や貝製品を含む砂層（貝塚時代前1～後2期）が検出されている。今回は洞穴内における墓域の広がり、テラス面および崖上部における遺物、遺構の包含状況、崖下部における人骨出土層の堆積状況を確認する目的で確認調査を行なった（図28）。調査年度は平成21年度（2009年度）、平成22年度（2010年度）、平成24年度（2012年度）、平成25年度（2013年度）、平成26年度（2014年度）の5年度に渡る。以下、洞穴、崖上、崖下の順に各調査区の発掘状況を報告する。

2. 洞穴内の調査（図29～38）

（1）調査区の設定（図29）

洞穴の西側に3か所の開口部があり、北から順に北側開口部、中央開口部、南側開口部と名付けて、開口部正面に3つの調査区を設定した。北側開口部の調査区は昭和57年度調査の2区、3区と対応し、北側、南側の拡張区を含めて1トレンチとした。中央開口部に2トレンチ、南側開口部に3トレンチを設定して、今回新たに発掘調査を実施した。調査は平成21年度（11月～3月）、平成22年度（6月）の2ヶ年にかけて行なった。

（2）1トレンチの調査

・層序（図30）

昭和57年度調査で発見された石棺墓の再調査によって墓域の広がりを確認するため、洞穴北側開口部の旧調査区を復旧し、南壁断面の精査を行なった。石棺墓の南東縁に当たる箇所には落ち込み状の堆積砂層が認められたため、石棺墓構築時の掘り込み層と考えた。この層はV層の堆積後VI、VII層を掘り込んだ状態で確認された。

断面図の作成後、北側は洞壁際まで、南側に約4m程度調査区を拡張し、掘り下げを行なった。拡張区南側は表土となるI層直下に流れ込みの貝層（II層）が堆積していたため、それらはすべて回収した。貝層より下位には石灰岩礫を多く含む砂層（III層）が堆積しており、人骨の小破片が散乱している状況が確認された。砂層であるII、III、V、VI層は南側に傾斜して堆積し、南側拡張区内で収束していた。

・遺構（図32、33）

石灰岩を長方形状に配した石棺墓は昭和57年度調査の洞穴内2、3区のIV層で検出されたものである。石棺の東側は比較的大型の礫が配され、西側は中型の礫を積み重ねて側石が設けられ、小口として南側に平面形四字形の大型礫、北側に立面形凹字状を呈する扁平石が配されていた。北側小口は立位状態で配置され、両小口石とも頂部に抉り加工が施されている。検出された人骨は壮年女性で（松下・石田1985）、検出時には土器の副葬が確認された（牛ノ浜・堂込編1985）。埋葬状態は仰臥伸展葬で、頭位方向はS-20°-Eを測る。

石棺墓の周辺には大型の石灰岩礫が集中して堆積している状況が確認され、それを北側集石、南側集石と名付けて図化を行なった。集石の間隙で確認された人骨は、平面位置、標高



図28 平成21、22、24、25、26年度面縄第1貝塚確認調査トレンチ配置図

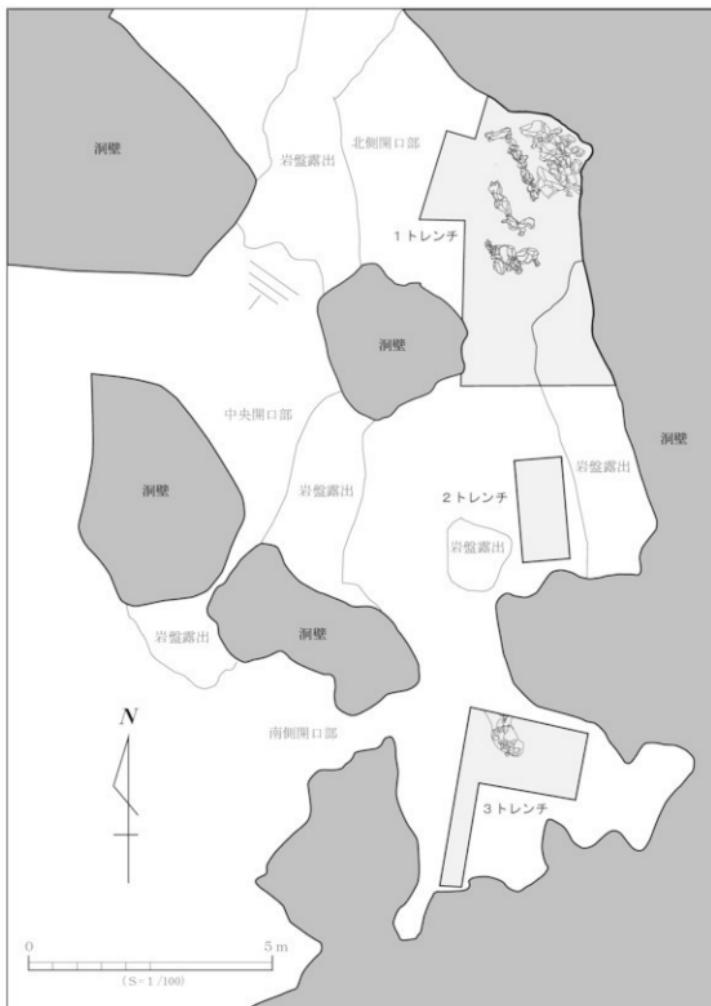


図 29 洞穴部トレンチ配置図

の記録後取上げを行なった。集石下位の確認は行わず、記録後埋戻して現地に保存した。

なお、図 32 は既報告の実測図と今回改めて図化した石棺墓、石棺墓周辺の集石および人骨散布状況の実測図を重ね合わせて合成した人骨の埋葬状況の復元図である。

石棺墓底面を 10cm 程度掘り下げたところ、骨片が数点出土した。石棺墓周辺や底面から人

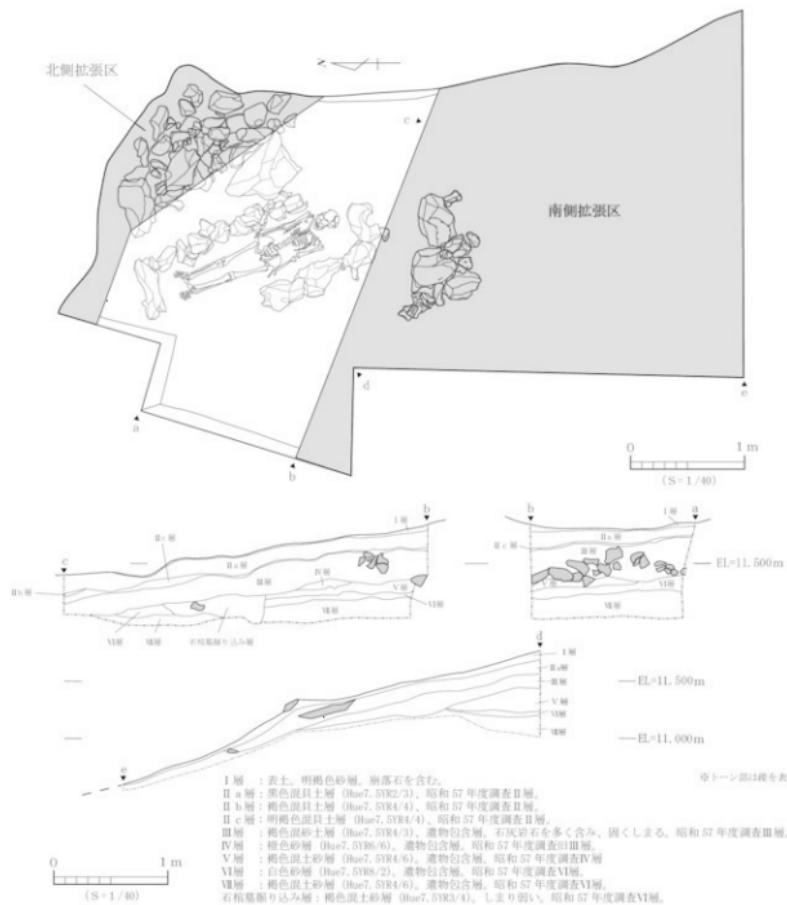


図30 1トレンチ平面図、土層断面図



図31 1トレンチ南側拡張区出土遺物
(1:II層出土、2:III層出土、3:VII層出土)



図 32 1トレンチ検出埋葬人骨検出状況

骨が検出される状況から、再葬が行なわれていた可能性が考えられる。また、石棺墓の掘り込み面上層に堆積するⅢ層に石灰岩礫が多く含まれることを重視すると、石棺墓の上面に無数の礫を敷き詰めた、上部構造を有する墓であった可能性も残る。

・出土遺物(図31)

南側拡張区のⅡ層(貝層)からは貝符1点が出土した(図31-1)。素材はイモガイ科の貝類で、6つの角をもつ非対称な外形をもち、外面中央には外形の形状に沿った2条の沈線が描かれている。広田上層式に該当するとみられる。

2は、南側拡張区Ⅲ層から出土した土器である。沈線文による区画帯の中には爪形様の刺突文が充填され、区画帯の下位には沈線文が施される。文様の特徴から嘉徳I式B(河口1996e)と呼ばれるものに該当すると見られる。

3は、凸基を有する錐状貝製品で、全面に研磨跡が認められる。貝種はウグイスガイ科のクロチョウガイもしくはシュモクアオリと推察される。南側拡張区Ⅶ層から出土した。

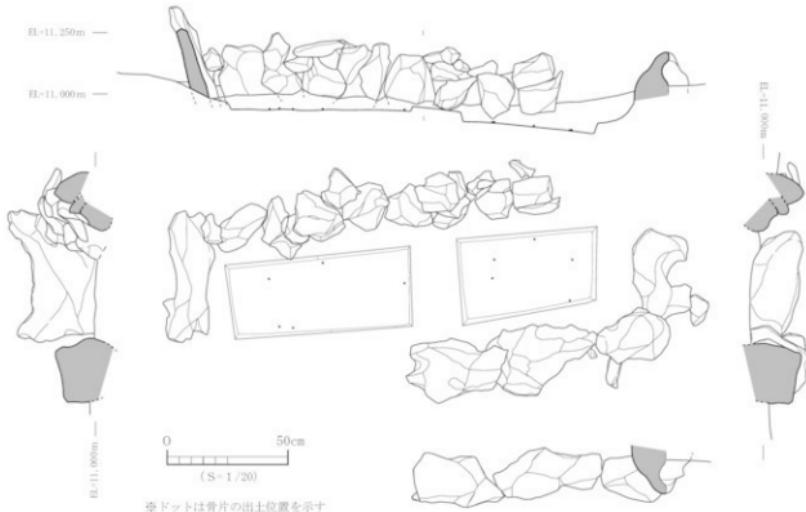


図 33 石棺墓実測図および骨片出土状況

(3) 2トレンチ

・層序(図34)

表土直下より石灰岩礫を多く含む褐色泥土砂層が確認された。層の状況から1トレンチVII層と同一層であるとみられ、人骨片が数点検出された。その下位には、黒褐色混砂土層(VIII層)が堆積しており、少量ながら遺物が出土した。

・遺物(図35)

外面に明らかな指頭圧痕文を残す薄手の土器3点がVII層より得られた。いわゆる爪形文土器の範疇に収まるものであるが、細片のため器形は定かではない。その他イノシシの骨が数点出土している。

(4) 3トレンチ

・層序(図36)

表土となるI層下位からは貝層(II層)が検出された。洞穴奥壁には小さな開口

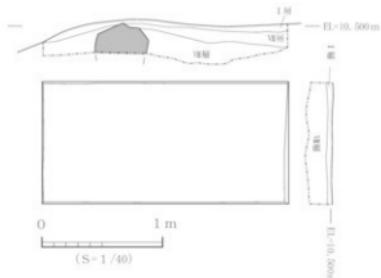


図 34 2トレンチ平面図、断面図



図 35 2トレンチ出土遺物(1~3:VII層出土)



図 36 3トレーニチ平面図、断面図



図 37 3トレーニチ検出炉跡平面図

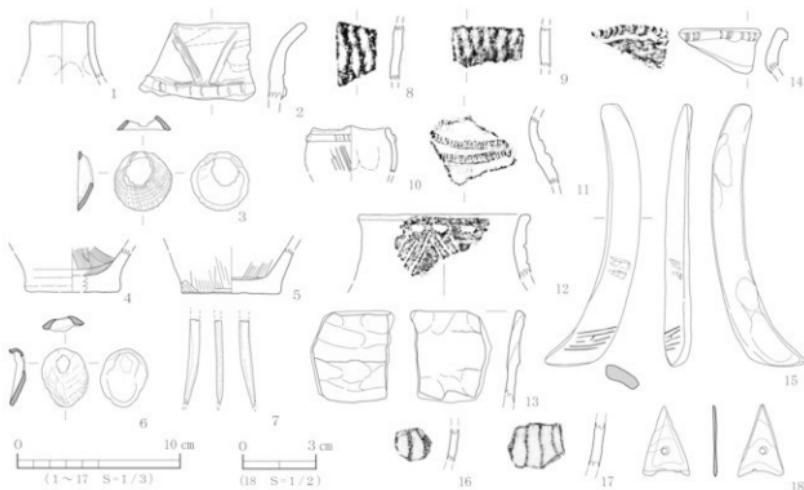


図 38 洞穴内採集遺物および3トレーニチ出土遺物

(1~2: トレーニチ周辺採集遺物、3: II層上部、4~13: II層下部、14~15: VII層、16~18: VIII層)

部が確認できることから、洞穴上面のテラス部に堆積する貝層が洞穴内部に流れ込んでいることは明らかであった。貝層の下部は土質が強くなることから流れ込みの貝層である上面とは区別して遺物を取り上げたが、北壁断面では判別が困難であった。本層は南側開口部付近で収束しており、トレンチ南壁断面では確認できなかった。

トレンチの西側ではⅠ層下位に1、2トレンチで確認されたⅦ層が堆積している状況が認められ、各種遺物とともに人骨が検出された。トレンチの洞穴開口部側の一部を深く掘り下げたところ黒褐色混砂土層が確認され、土質と出土遺物の特徴から2トレンチⅦ層と同一の包含層であると判断した。

・遺構(図37)

Ⅷ層中より炭化物、焼土を伴う集石が検出された。焼石も一定量含まれていることから火を使用した遺構で炉跡であったと考えられる。ただし、遺物は土器の細片が1点検出されたのみで、帰属する時代は明らかにできなかった。本遺構は現地保存するため下層の確認は行なわず、記録後に埋め戻すこととした。

・出土遺物(図38)

遺物は各層から出土しているが、洞穴上部テラス面から流れ込んでいる貝層(Ⅱ層)は上位、下位に分けて遺物を取り上げた。出土遺物は土器、貝製品、骨製品や人骨、貝類、獸骨などで、表面採集(1~2)、Ⅱ層上部(3)、Ⅱ層下部(4~13)、Ⅶ層(14、15)、Ⅷ層(16~18)に分けて図示している。

土器は、採集資料を含めて各層から出土しており、文様や器形の特徴から兼久式土器(1、2、4、5)、爪形文土器(8、9)、面縄前庭式(10、11、14)、犬田布式土器(12)、仲原式土器(13)に該当するものとみられる。貝製品は有孔貝製品(3、6)のほか、沈線が刻画された鎌状の貝製品(15)、鍼状貝製品(18)がある。その他、研磨加工が認められる骨製品も1点出土している(7)。

3. 崖上部の調査

(1) 調査区の設定(図28)

洞穴上方のテラス面に堆積する貝層の広がりを確認するため、崖上部の試掘調査を行なった。7か所にトレンチを設定し、人力によって掘り下げた結果、2、4、6トレンチにおいて地表下5cm程度の深さに遺物包含層である黒褐色土を検出した。またテラス面における貝層の内容を把握するため、貝層のコラムサンプリング(30cm×30cm)を行なった。

(2) 出土遺物(図39、図40)

出土遺物は図化に堪えない小破片がほとんどであったが、図39は2トレンチ遺物包含層出

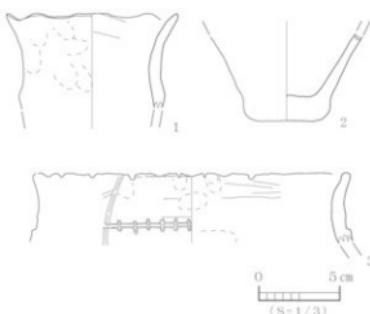


図39 崖上部出土土器と採集遺物

土器で、外面に指圧痕を残す無文の小型の甕である。外反した口縁と胴部に明瞭な陵を残す器形の特徴から兼久式土器の範疇に収まる資料と推察される。僅かながら得られた土器は、テラス面上に堆積する貝層出土品の特徴と一致することから崖上部には貝塚時代後2期の遺物包含層が残されていることが明らかとなった。

テラス面上に堆積する貝層はコラムサンプリングを行なったが、試料の水洗選別により、ツノガイ珠1点とイモガイ類の貝玉2点が得られた。なお、過去の調査で本貝層からは兼久式土器や開元通宝が出土しているため（牛ノ浜・堂込1985）、これらも貝塚時代後2期に対応するとみられる。

4. 崖下部の調査

(1) 調査区の設定（図28）

崖下部では、昭和57年度調査で出土が報告されていた人骨の包蔵状態を把握する目的で、確認調査を行なった。

平成24年度は昭和57年度調査C-0区、C-1区を復旧し、C-0区を南側に拡張して調査を進めた（Aトレンチ）。調査の結果、Aトレンチ南縁では、IIb層より解剖学的位置をある程度留めた埋葬人骨が1体検出された。また、C-5区の復旧後、南側に2mの調査区を拡張し（Bトレンチ）、掘り下げを行なったところ、石灰岩礫を多く含むV、VI層より人骨や人工遺物が検出された。

平成25年度は崖下における層位の堆積状況を把握する目的で、Aトレンチ、Bトレンチを連結させる東西方向のトレンチ（Cトレンチ）を設定し掘り下げを行なった。Cトレンチでは兼久式土器を含む黒褐色土層（II層）、その下位に無遺物層であるIII層を挟んでIV層となる白砂層の堆積が確認され、本層から土器や比較的残りの良い人骨（頭蓋骨）が得られた。遺物包含層であるV、VI層からも爪形文土器、貝製品とともに人骨が一定量出土した。

平成26年度は、Aトレンチを北側に2.5m拡張したところ、大型の崩落石直下からIV層が検出され、石灰岩とともに人骨が確認された。人骨は写真撮影後に埋戻し、平面的な広がりの確認については将来の調査に委ねることとした。また、旧D-1区で確認されていた人骨について再調査を行ない（Dトレンチ）、調査区北側を一部拡張して検出状況の記録を行なった。

(2) 層序（図41、45）

・A、B、Cトレンチの層序（図41）

各トレンチとも表土直下において兼久式土器を含むII層が確認される。II層は貝類の包含状況や色調等により6層に分層できたが、Aトレンチ北壁では確認されず、Aトレンチ西壁では南側に向かって落ち込みながら堆積しており、なおかつCトレンチ南壁では、東西方向から谷底に流れ込んだような状況が確認された。このことから崖下部におけるII層は明確な造構面ではなく、周辺から谷底に向かって流れ込んだ二次堆積層であると判断された。

IV層はBトレンチ西壁で薄く、Cトレンチ南壁の中央付近で収束していたため、谷状の旧地形に沿って東側の崖縁に比較的厚く堆積した遺物包含層であることが明らかとなった。

IV層の下位には土器や人骨を含むV、VI層が認められたがVI層は玉砂利状の円礫を多く含

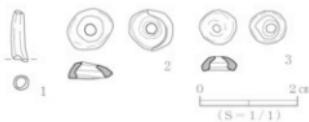


図40 テラス表面層出土貝製品

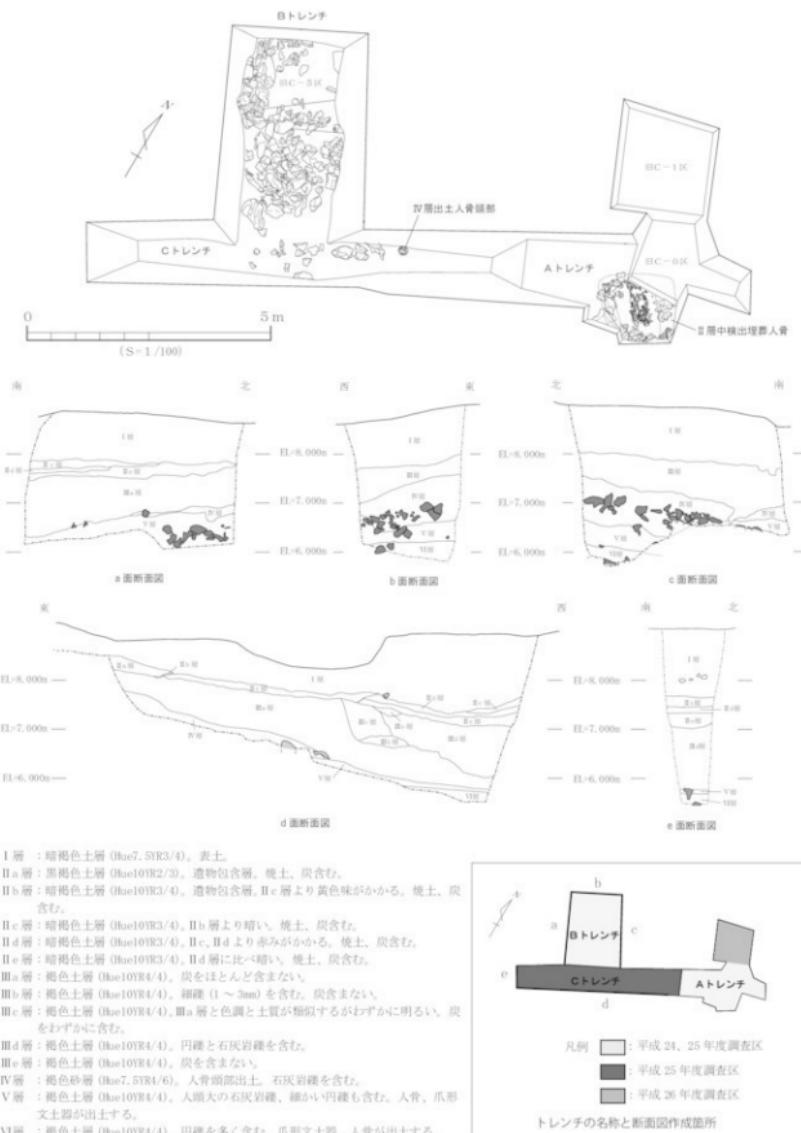


図 41 平成 24 年度、25 年度、26 年度調査区平面図、断面図

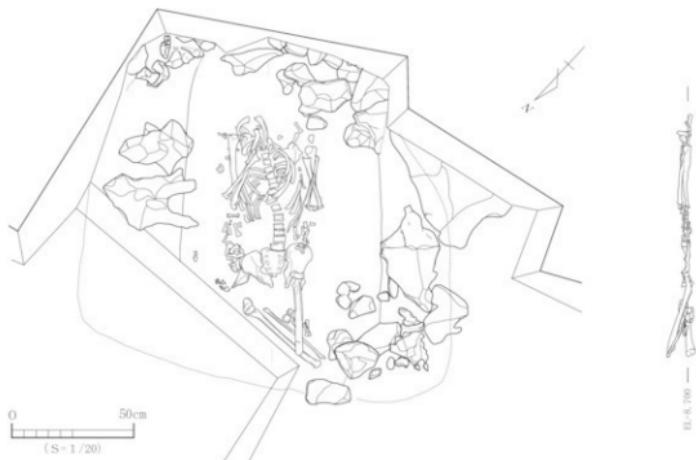


図 42 A トレンチ埋葬人骨検出状況

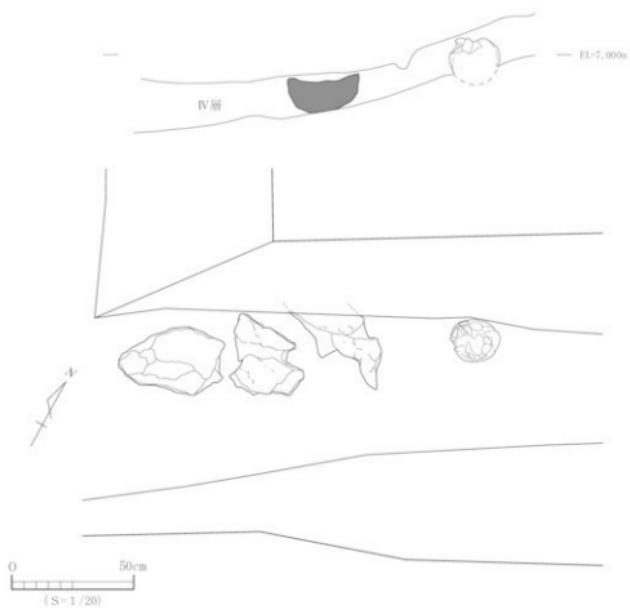


図 43 C トレンチIV層人骨頭部出土状況

み、掘り下げ時には湧水が認められたことから、谷底を流れる河川と関連する堆積層であると判断した。

・Dトレーナーの層序（図45）

所見は昭和57年度調査に準ずる。表土下から石灰岩礫を含む褐色混砂土層（Ⅱ層）が検出され、その下層より土坑の掘り込み層である褐色粘質砂層（Ⅲ層）が確認される。Ⅲ層は青磁、陶器、土器片を包含しており、レンズ状に堆積する焼土層が含まれるⅣ層からは山ノ口式土器が出土することが報告されている（牛ノ浜・堂込編 1985）。

（3）人骨の検出状況

・AトレーナーⅡb層検出埋葬人骨（図42）

検出されたのは成人男性の人骨1体で、埋葬姿勢は仰臥屈葬であった。人骨は崩落石を除いた空間内に配置され、接着する床面は平滑に仕上げられていた。頭蓋は確認できず、脛骨の一部とともに別の場所へ再葬されたとみられる。両肘は強屈し、左右共に手曲と中手骨の位置が合致していない。左鎖骨は解剖学的位置を留めず、頸椎が右上腕骨付近から出土していることから、埋葬、白骨化の後、頭蓋の取り出しのため寛骨付近まで露出させ、両中手骨および椎骨を寛骨上部に配置して埋め戻したと推定される。頭位はS-44°-E方向を測る。人骨周辺から土器片等が出土したが、副葬品は検出されなかった。

放射性炭素年代分析では、人骨周辺採取炭化物がAD1682-1935(BP268-15、 2σ)、埋葬跡床面採取の炭化物がAD1439-1616(BP511-438)、埋葬人骨の左肋骨片がModernの測定結果であった。

・Cトレーナー東側Ⅳ層検出入骨（図43）

Cトレーナーの東側Ⅳ層中からは頭骨のみが単独で検出された。下顎は無く、頭頂部を下に、前頭を北西に向かう状態で検出された。検出状況から東側崖下の埋葬跡から再葬されたと推察される。人骨の年代測定ではBC896-807(BP2845-2756、 2σ)、貝塚時代前5期相当の結果が得られた。

・Dトレーナー検出埋葬人骨（図45）

昭和57年度調査において一部が確認されていたが、北側に調査区を拡張して全身を検出し、埋葬状況の記録を行なった。埋葬姿勢は仰臥屈葬で、頭蓋と頸椎が無い成人男性の人骨であった。右手を上に両手を重ねた状態で、左足は脛骨に接着しており、非常に窮屈な姿勢で埋葬されている。昭和57年度調査で土坑の埋土から青磁や陶器が出土したこと報告されているが、今回の調査範囲からは副葬品の有無は確認できなかった。頭位方向はN-89°-Wであった。

人骨の年代測定ではAD1519-1655(BP431-295、 2σ)となっており、土坑にはグスク時代の遺物が含まれていることから16世紀代の埋葬人骨である可能性が高い。

（4）遺物（図44）

遺物は各トレーナーから出土しているが、その数量は概して少ない。崖下のBトレーナーにおい

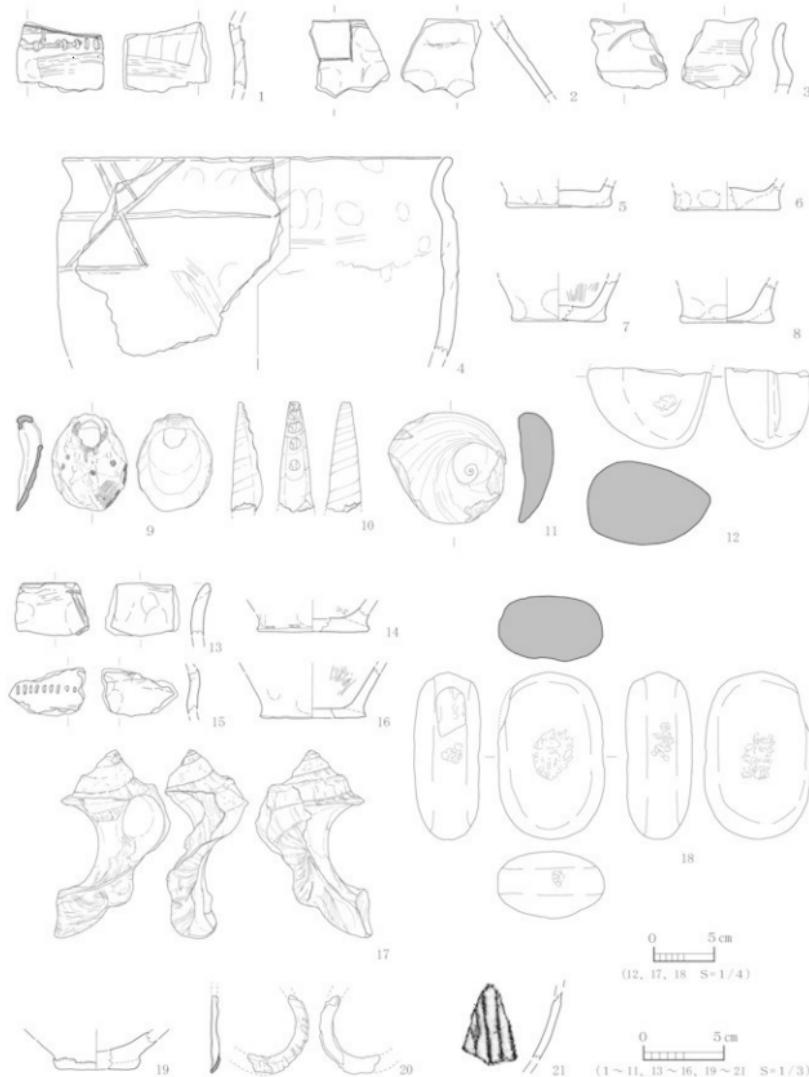


図44 Aトレンチ、Bトレンチ、Cトレンチ出土遺物
(1~11:Aトレンチ表土、12:表採、13~14:CトレンチII層、15~18:AトレンチII層、19~20:BトレンチV層、21:CトレンチVI層)

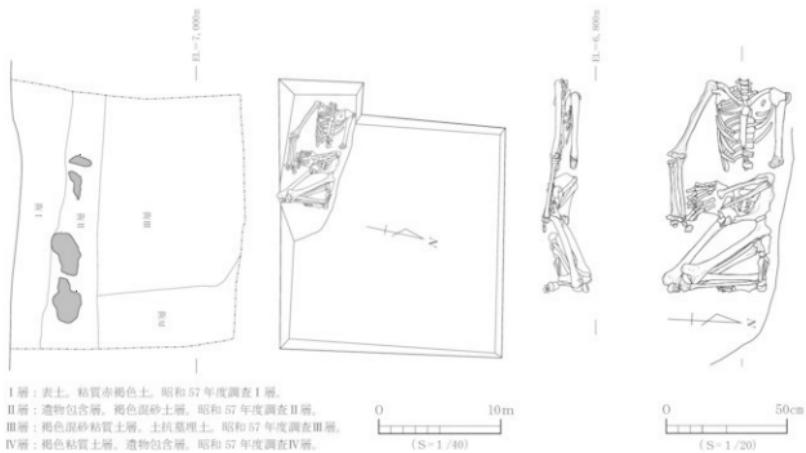


図45 ロトレンチ平面図、断面図および埋葬人骨検出状況

ては、テラス面に堆積した貝層が流れ込んでいるため、表土から兼久式土器(1~8)や貝製品(9、10)が出土し、BトレンチⅡ層(15、16)、CトレンチⅡ層(13、14)からもほぼ同時期の遺物が検出される。BトレンチV層からは土器底部(19)や貝製品(20)が、CトレンチIV層からは爪形文土器(21)が得られている。

5. 小結

(1) 層序

面繩第1貝塚における洞穴部、崖上部、崖下部における調査によって、以下のことが明らかとなった。

洞穴部の各トレンチにて上位テラス面より流れ込んだ貝塚時代後2期(兼久式土器期、古代並行期)の貝層(Ⅱ層)が確認されたが、その下位には貝塚時代前期(縄文時代早期~弥生時代前期並行期)における遺構や遺物包含層が残存していた。各トレンチの土層堆積状況は一様でないが、全てのトレンチにおいてⅦ、Ⅷ層が確認された。したがってⅦ層以下の層順が本洞穴における安定的な堆積土層であると判断され、洞穴利用の実態を知る上で重要な基準層となるものと推察される。

崖下部においても貝塚時代後2期におけるⅡ層の堆積が認められ、それより下位より貝塚時代前期の砂層が確認された。特にAトレンチでは褐色砂層であるⅣ層からは比較的のよい人骨が出土していることから、本層の面的な広がりを確認し、東側に隣接する洞穴内部の堆積層との対応関係を把握することが今後の課題となる。

B、CトレンチのV、VI層からも人工遺物や人骨が出土するが、これらは谷底に傾斜しながら堆積していた。特にVI層は流水と関係するとみられる玉砂利が多く含んでおり、遺構の存在はあまり期待できないとみられる。したがって崖下部においては東側崖縁にあたるAトレンチ周辺に良好な遺構面が残存していることが予想された。

なお、崖上部においては貝塚時代後2期の遺物包含層が確認されたが、その堆積は薄く明確な遺構面は把握できなかった。

(2) 遺構

洞穴内の1トレンチにおいては、昭和57年度発見石棺墓の再検出後、調査区域を広げた結果、石棺墓の周辺に石灰岩の集石と人骨が検出された。各トレンチから人骨片が出土しているので、複数の埋葬跡の存在が予想されるものの、明確な遺構として把握することはできなかつた。3トレンチ南半部では、VII層中より焼石と炭化物が集中する炉跡とみられる遺構が検出されている。

崖下部においては、AトレンチとDトレンチより一次葬人骨2体が検出された。いずれも頭蓋を欠いた成人人骨で、副葬品は検出されなかつたが、人骨の年代は、Aトレンチ人骨が現代、Dトレンチ人骨が16世紀代と測定された。

(3) 遺物

出土した土器は小破片が多いものの所属時期は多岐にわたり、貝塚時代前3、4、5期および貝塚時代後2期に位置付けられるものが得られている。また、貝製品、骨製品も出土しており、特に洞穴内1トレンチⅡ層出土の広田上層式貝符は本遺跡では初の検出例となつた。出土遺物と層位の対応関係を見てみると、洞穴内1、3トレンチで確認された貝層からは貝塚時代後2期(古代並行期)の兼久式土器期が出土しており、昭和57年度調査におけるテラス面、A-0区貝層出土遺物と概ね対応する。ただし3トレンチ貝層下位からは貝塚時代前3、4、5期の土器が出土していることから、時代の異なる貝層が存在していた可能性が高いが、今回の調査では明確な分層が出来なかつた。今後の課題としたい。

洞穴内VII層からは貝塚時代前3期の面縄前庭式土器と鎌状に加工された刻画貝製品が出土し、少なからず人骨片の出土も見られたため、VII層中には埋葬跡が包蔵されている可能性がある。2トレンチ、3トレンチで確認されたVII層には爪形文土器が単独で包含されており、3トレンチの深堀区では鎌状貝製品の出土も認められた。VII層は完掘できていないため層厚は不明であるものの、洞穴内全面に安定的な状態で堆積している可能性が高く、今後の調査では注意が必要である。

崖下部においても貝塚時代後2期の包含層であるII層の堆積が確認され、テラス面の貝層が流れ込んでいる様子が窺えた。Cトレンチでは無遺物層となるIII層以下から残存状態の良い人骨を含むIV層が比較的厚く堆積している状況が確認された。層の堆積から兼久式土器期より古い貝塚時代前期の包含層であると判断されるが、洞穴内における層序との対応関係は今回の調査では明らかにできなかつた。また、谷状の地形に沿って堆積しているV層からは平底土器の底部、オオツタノハ製貝輪、人骨片が出土する。その下に堆積するVI層からは爪形文土器、人骨片が検出されたため、洞穴内のVII層と時期的に重なることに間違いないが、層序のつながりは確認できていない。洞穴と崖下における層の堆積状況については、今後の追加調査によって明らかにしていきたい。

(4) 放射性炭素年代

詳細は後述するが、ピックアップや土壤水洗によって得られた炭化物と人骨の放射性炭素年

代測定を行なった結果、洞穴内 1 トレンチ西壁において確認された石棺墓掘り込み層出土炭化物は AD690 – 880(2 σ)と測定されおり、副葬品である土器(貝塚時代前 5 期)の年代と齟齬が生じている。1 トレンチ南壁からはコラムサンプリングによって各層からの炭化物を採取しているので、今後分析資料を追加して層位の年代を検証することが課題となる。なお、石棺北側集石にて出土した人骨片の年代は BC804 – BC751(BP2753 – 2700, 2 σ)であった。

3 トレンチ II 層では AD750 – 890(BP1210 ± 30, 2 σ)、1 トレンチ南壁の VI 層で BC4040 – 3950(BP5170 ± 30, 2 σ)の年代が得られた。層位の上下関係と炭化物の年代に矛盾はないが、3 トレンチのように時代の異なる土器が同一層順から出土し、かつ洞穴内に墓地が展開していた可能性を踏まえると、遺構の構築に伴って包蔵物が巻き上げられている状況も十分に考えられる。そのため、炭素年代を層の堆積年代にそのまま適用することはここでは控えておきたい。

崖下部においては、C トレンチ II c 層の炭化物が AD645 – 692(BP1305 – 1258, 2 σ)、A トレンチ II b 層の炭化物が AD340 – 430(BP1650 ± 30, 2 σ)の測定結果となっており、洞穴内の II 層よりはやや古い年代が得られた。洞穴内 II 層の年代測定結果と合わせ、II 層は古めに見積もって 4 世紀代、下限を 9 世紀頃とする包含層だと考えておきたい。

第3節 面縄第2貝塚の確認調査（図 46 ~ 73）

1. 調査の概要（図 46）

昭和 5 年に発見された面縄第 2 貝塚は、昭和 10、28、29、31 年に学術的な調査が行われているが、伊仙町教育委員会による昭和 57 年度調査では、貝塚時代前 4 期の集石遺構が報告されている。

平成 14 年度に行われた面縄小学校改築に伴う面縄第 2 貝塚の発掘調査によって、面縄小学校グラウンド内に貝塚時代前 4 期における集落跡が良好な状態で包蔵されていることが明らかとなり、本遺跡の明確な範囲を把握するため、同小学校東側隣接敷地、校庭内東側の駐車場、校庭内西側の体育館前の 3 地点の確認調査を行なった。調査年度は、平成 20 年度（面縄小学校東側隣接敷地）、平成 22 年度（面縄小学校校庭西側体育館前）、平成 23 年度（面縄小学校校庭内東側駐車場）である。なお、面縄小学校校庭内における発掘調査では、掘削廃土を層位ごとに置き分け、調査後のグラウンドに復旧に備えた。

2. 平成 14 年度面縄第 2 貝塚緊急調査の概要と包含層出土遺物（図 46 ~ 図 59）

平成 14 年度における面縄第 2 貝塚の緊急調査については既に平成 25 年度に発掘調査報告書が刊行されているが（新里編 2014）、紙幅の都合により包含層出土遺物は未報告のままであったので、今回これらの追加報告を行なう。

調査では、敷石遺構（SK-01）、炉跡とみられる集石（SK-07、SK-08、SK-12、SK-13）、住居跡の可能性がある素掘りの竪穴状遺構（SK-02、SK-03、SK-04、SK-05、SK-06、SK-09）、土坑（SK-10、SK-11）、ピット群が検出され、砂層の堆積状況を検討した結果、複数の遺物包含層中に遺構が確認され、以下に示す 5 期の遺構面が存在していたと想定されている。

第 1 期（IV 層）：調査区内では遺構無し

第 2 期（VI 層）：SK-03、SK-04、SK-12

第 3 期（V 層）：SK-10、SK-11

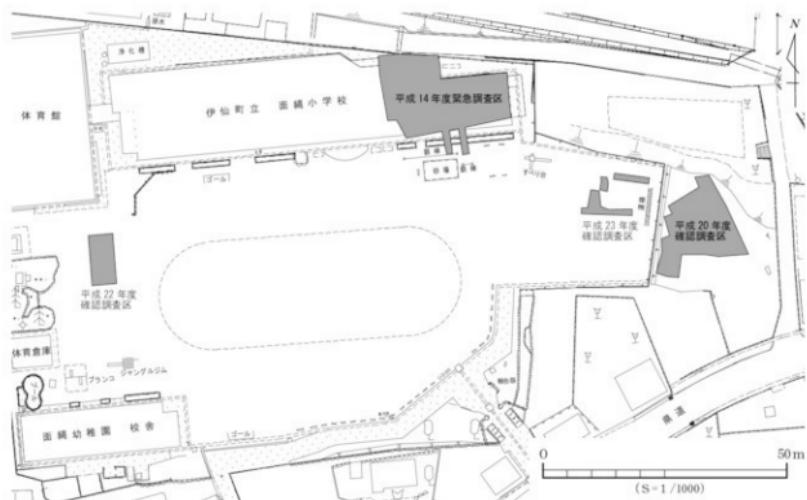
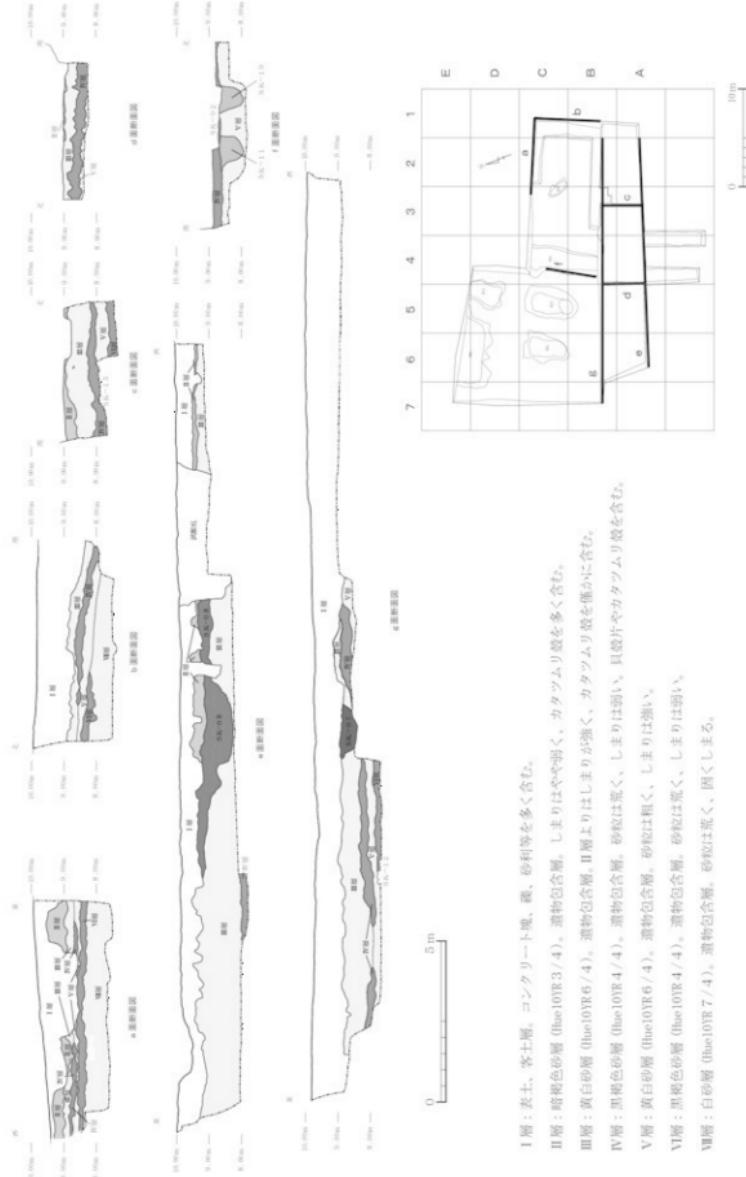


図 46 面縄第2貝塚調査区配置図



図 47 平成 14年度面縄第2貝塚緊急調査区遺構配置図



- I層：表土、客土層、コンクリート塊、礫、砂利等を多く含む。
 II層：暗褐色砂層 (blue) OR 3 / 4。遺物包含層。しまりはやや弱く、カタツムリ殻を多く含む。
 III層：黄白色砂層 (blue) OR 6 / 4。遺物包含層。II層よりはしまりが強く、カタツムリ殻を含む。
 IV層：黒褐色砂層 (blue) OR 4 / 4。遺物包含層。砂粒は粗く、しまりは弱い。貝殻片やカタツムリ殻を含む。
 V層：黄白色砂層 (blue) OR 6 / 4。遺物包含層。砂粒は粗く、しまりは弱い。
 VI層：黒褐色砂層 (blue) OR 4 / 4。遺物包含層。砂粒は粗く、しまりは弱い。
 VII層：白砂層 (blue) OR 7 / 4。遺物包含層。砂粒は粗く、固くしまる。

図48 平成14年度面縫第2貝塚緊急調査区土壌断面図



参考写真1 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査出土遺物1(既報告遺物)



参考写真2 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査出土遺物2(既報告遺物)

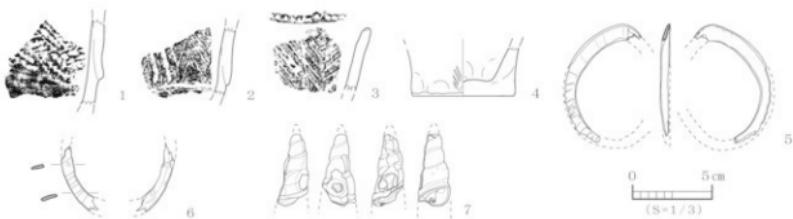


図49 平成14年度面縄第2貝塚緊急調査I層出土遺物

第4期(IV層)：SK-02、SK-05、SK-06、SK-13

第5期(III層)：SK-01、SK-07、SK-08、SK-09、ピット群

図47、48に緊急調査時における遺構配置図と土層断面図を再掲し、図49から図59に各包含層と搅乱層から出土した遺物の実測図を示したので、既報告と合わせて参照されたい。

3. 平成20年度面縄小学校東側隣接敷地の調査

(1) 調査区の設定(図46)

昭和57年度調査A-2区で検出された集石遺構の再調査を行なうため面縄小学校の東側の

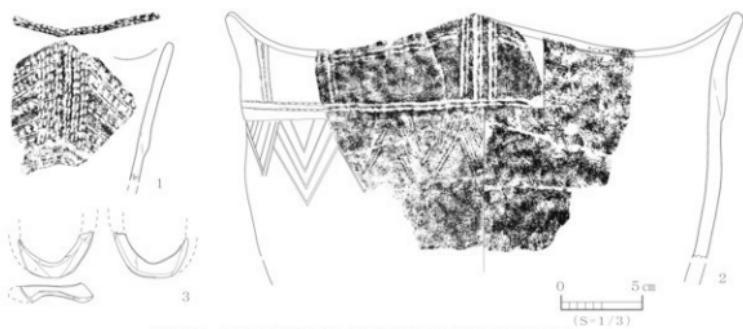


図 50 平成 14 年度面縄第 2 貝塚緊急調査 II 層出土遺物



図 51 平成 14 年度面縄第 2 貝塚緊急調査 III 層出土遺物

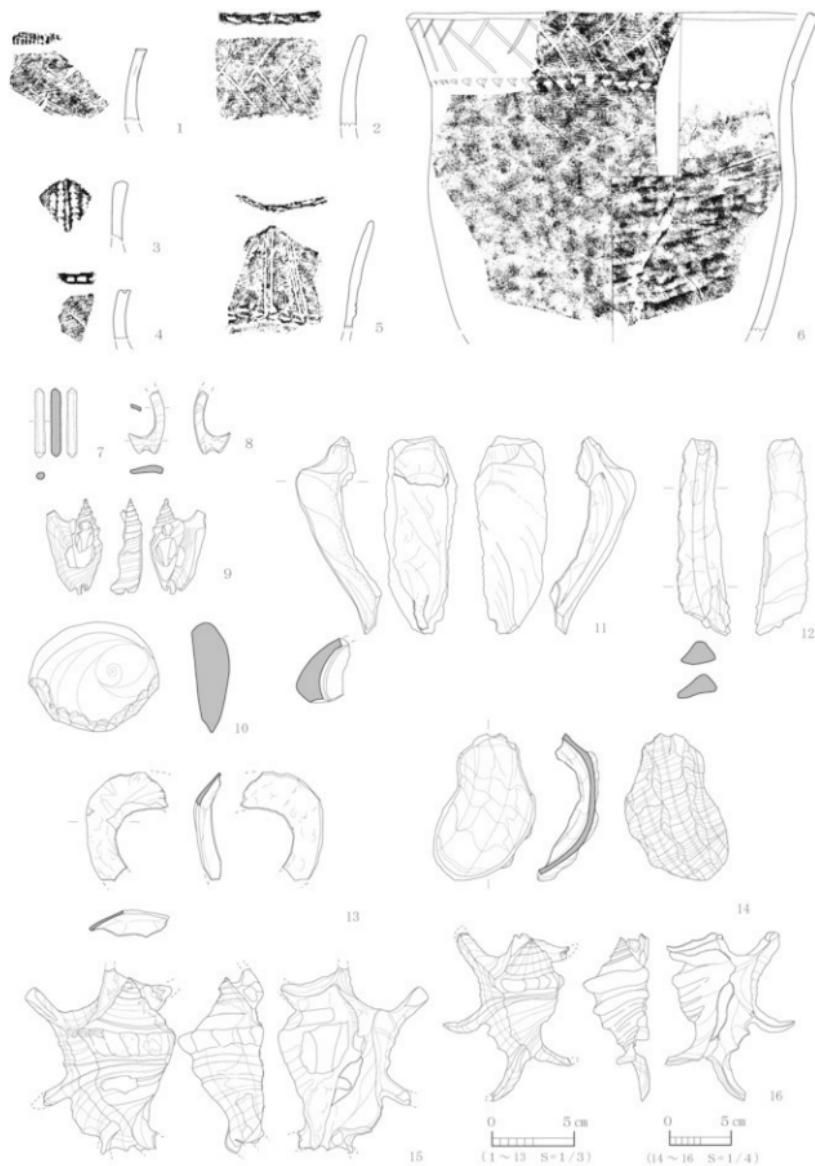


図 52 平成 14 年度面縄第 2 貝塚緊急調査 IV 層出土遺物

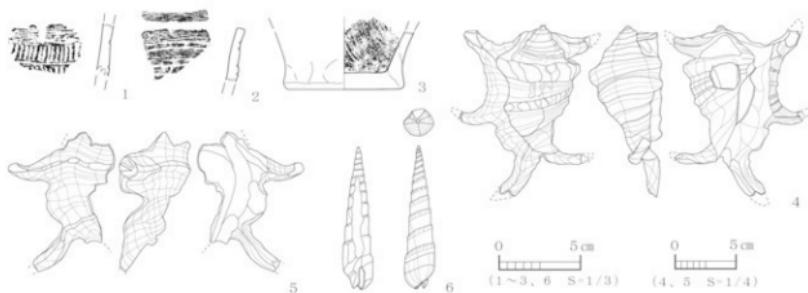


図 53 平成 14 年度面縄第 2 貝塚緊急調査 V 層出土遺物

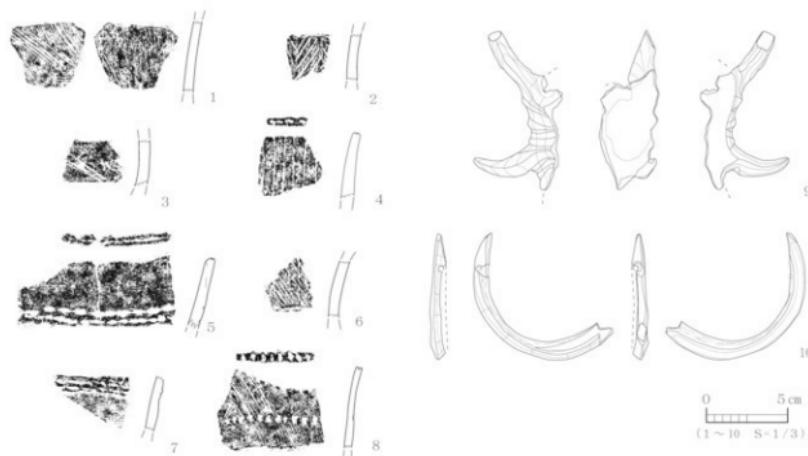


図 54 平成 14 年度面縄第 2 貝塚緊急調査 VI 層出土遺物

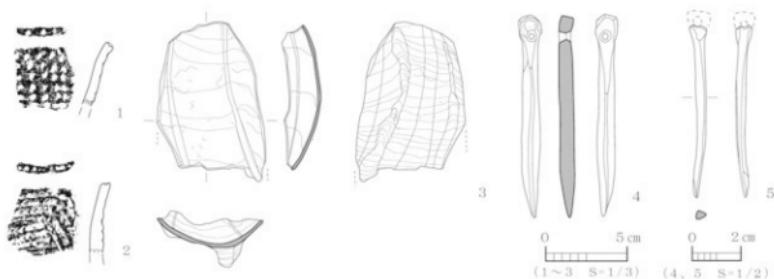


図 55 平成 14 年度面縄第 2 貝塚緊急調査 VII 層出土遺物

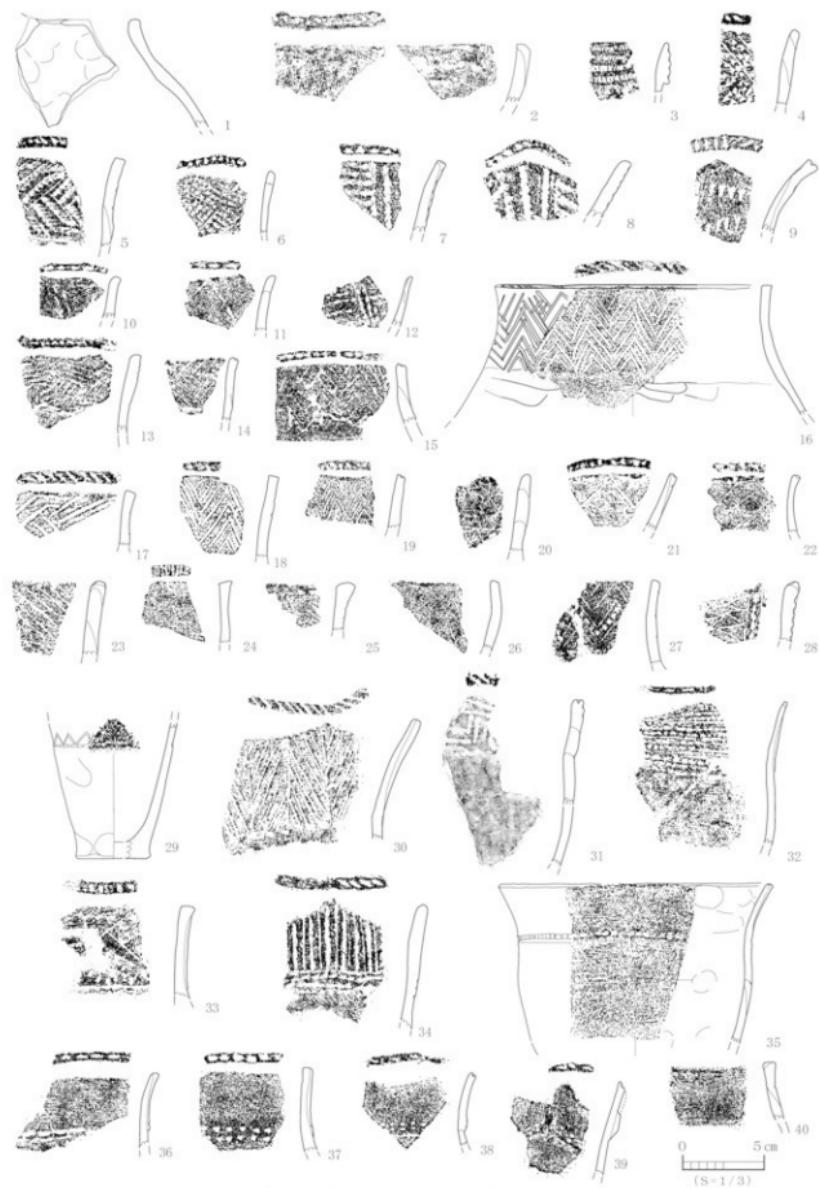


図 56 平成 14 年度面縄第2貝塚緊急調査発乱層出土土器 1

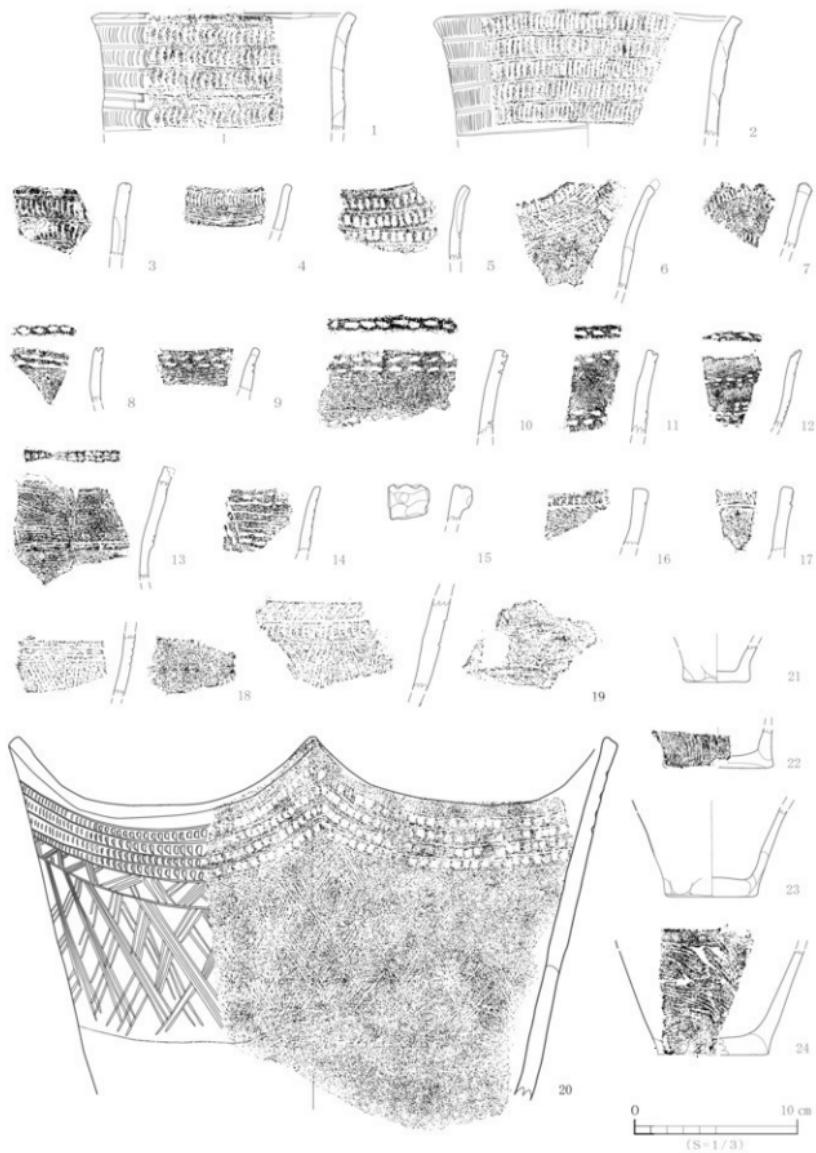


図 57 平成 14 年度面縄第 2 貝塚緊急調査撹乱層出土土器 2



図 58 平成 14 年度面繩第 2 貝塚緊急調査撲滅層出土貝製品

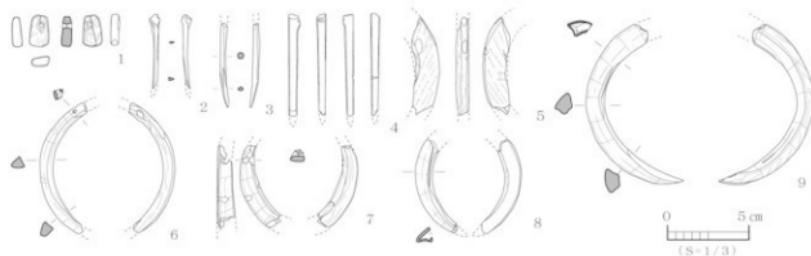


図 59 平成 14 年度面繩第 2 貝塚緊急調査撲滅層出土骨製品

隣接敷地の確認調査を実施した。調査対象地は個人所有で、廃土置き場に制限があったが、面繩小学校の東側駐車場に接する砂丘地表土の除去後、過去の調査図面をもとに、東西方向のトレーナー(A区)と南北方向のトレーナー(B~F区)を設定して砂丘地の精査を行なった。しかし、各トレーナーにおいて遺物包含層(Ⅲ層)が確認されたため、昭和57年度調査におけるA~2区は改築後に拡張された面繩小学校の学校敷地下に包含されていると判断し、新たな遺構の検出を目指して掘り下げを進めた。

(2) 層序 (図 60)

Ⅱ層(無遺物層)以下に安定的な遺物包含層が堆積しており、貝塚時代前4期の遺物が出土した。A区北壁、東壁断面において黒褐色砂層と白色砂層が交互に堆積する状況が確認されたので、砂層を色調の違いによって5層に分層した。最も遺物が多いのがⅢ層(黒褐色砂層)で、一部削平を受けているが調査区の全面に広がっていると予想される。遺物を僅か含む白色砂層(IVa層)下にはレンズ状に堆積する暗褐色砂層(IVb層)が確認され、B区ではIVb層中から集石遺構の一部が検出された。遺物包含層となるIVc層の直下には黒褐色砂層であるV層が堆積しており、D区からは本層より大型の円形集石遺構が検出された。集石遺構の掘り込み面となるVI層も遺物包含層と見られるが、今回の調査では一部の発掘に留めたため、層厚および堆積範囲は明らかにできなかった。

(3) 遺構と遺物

・1号集石遺構 (図 62)

B区のIVb層下位には、炭化物を含む白色砂層(IVc層)が確認され、本層中より集石の一部が検出された。検出できたのは集石の南縁に当たり、残りはE区内に包蔵されているとみられる。調査期間の都合からE区の掘り下げが行なえなかつたため、遺構の全面検出は今後の調査に委ねることとなった。

・2号集石遺構 (図 63)

D、F区ではIVc層の下位に炭化物を多く含む黒褐色砂(V層)が堆積しており、本層を掘り下げた結果、平面梢円形を呈する集石遺構が検出された。大小の円碟や角碟を配置して、平面形を円形に整えたとみられるが、一部は調査区外に包蔵されている。集石には被熱して赤変しているものも見受けられ、火を利用するための施設であったと想定される。

集石北側は、一部石を取り除きながら50cmほど掘り下げ、断面の観察を行なった結果、底面が半円状となるよう砂層を掘り込み、石を充填している状況が確認された。深さは70cm程度に達すると見込まれ、平面が梢円形、立面が半円形の集石であると判断された。なお、2号集石も記録後埋戻し、現地に保存することとした。

出土遺物はV層中より土器(1、2)とヤコウガイ製品(3)が得られている。外面に施された沈線文の特徴から貝塚時代前4期における嘉徳II式土器と判断された。

(4) 包含層出土遺物 (図 65、66)

遺物は包含層であるⅢ層とⅣ層より出土しているが、その量は前者が圧倒的に多い。Ⅲ層出土の土器には、平口縁と山形口縁の有文土器である第1文様帶施文土器(7~9)と第1、第

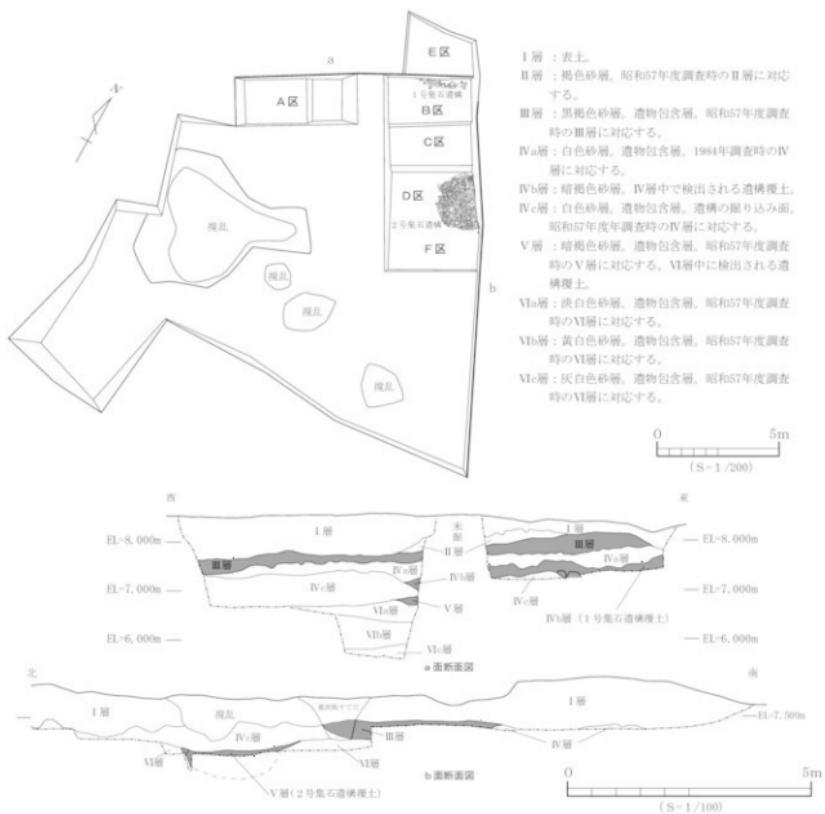


図 60 平成 20 年度面縄第2貝塚確認調査区平面図、土層断面図

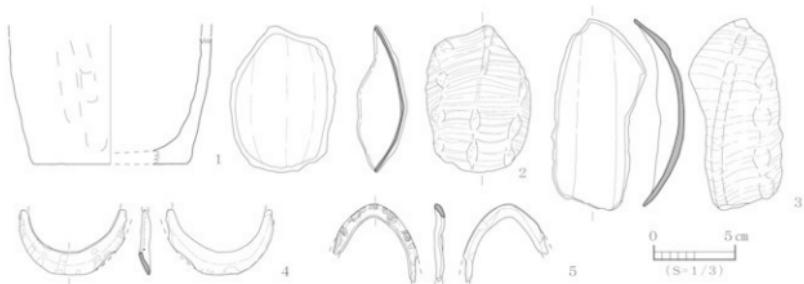


図 61 平成 20 年度面縄第2貝塚確認調査表土および搅乱層出土遺物

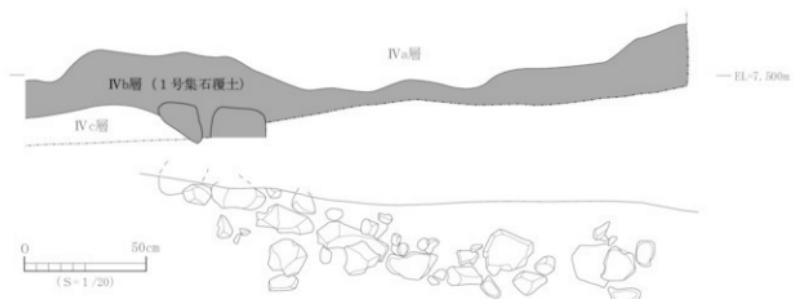


図 62 平成 20 年度面縄第2貝塚確認調査 1号集石平面図、断面図

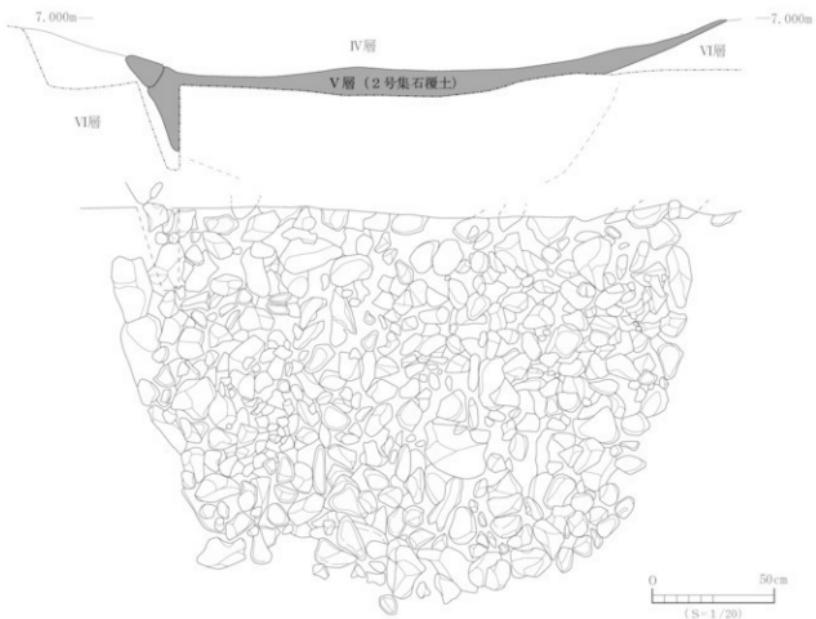


図 63 平成 20 年度面縄第2貝塚確認調査 2号集石平面図、断面図

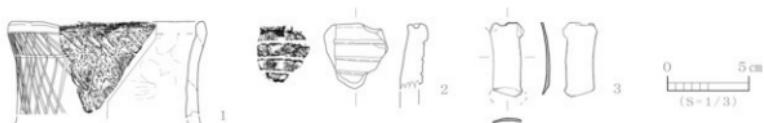


図 64 平成 20 年度面縄第2貝塚確認調査 2号集石覆土出土遺物



図65 平成20年度面縄第2貝塚確認調査Ⅲ層出土土器
(1~4:A区、5~11:B区、12~17:D区、18:E区、19:出土区不明)

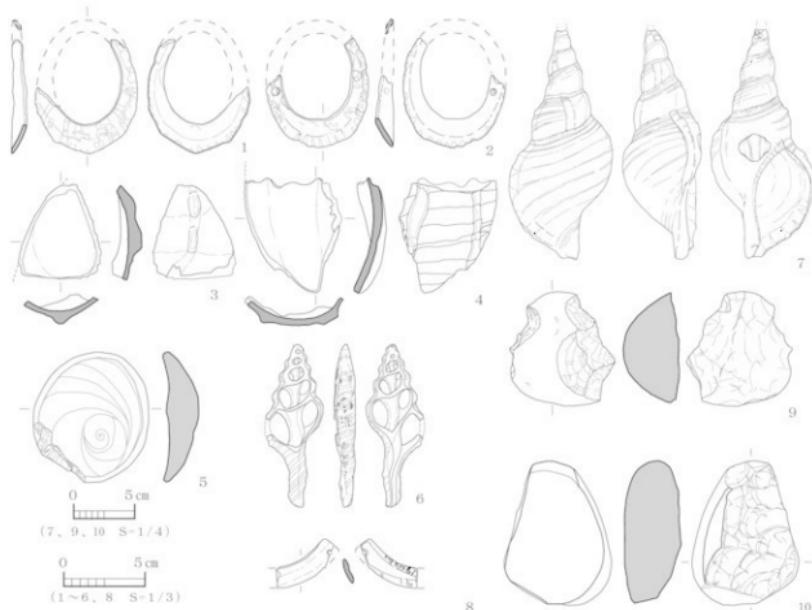


図 66 平成 20 年度面縄第 2 貝塚確認調査Ⅲ層出土貝製品、骨製品、石器
(3・4・6~8:A 区、1:B 区、2:C 区、5:D 区、9・10:E 区)

2 文様帶施文土器 (6、13など) と無文土器 (5、12) があり、第一文様帶は刺突文のみが施されるものと刺突文と沈線文で構成されるものが混在している。

Ⅲ層には貝製品も多く含まれており (図 66)、オオツタノハ製貝輪 (1、2)、ヤコウガイ製匙状製品 (3、4)、ヤコウガイ蓋製利器 (5)、チトセボラ製研磨穿孔製品 (6)、有孔ホラガイ製品 (7)、などが出土しており、これらの他、猪牙製品 (8) や磨石 (9、10) も得られている。

IV 層は出土遺物こそ少ないものの、比較的大型の土器が数点出土した。Ⅲ層と同様、器形は平口縁、山形口縁を呈し、第一文様帶施文土器 (3)、第 1、第 2 文様帶施文土器 (1、2、4) の両者が認められた。

4. 平成 23 年度面縄小学校校庭内東側の調査 (図 68 ~ 73)

(1) 調査区の設定 (図 68)

調査地点は平成 14 年度の緊急調査区の南東側約 50 m、平成 20 年度調査区の西側約 30 m に当たり、現在学校用グラウンドとして整備されている。遺構の検出を目的としたため、調査区外形を任意のものとし、順次調査区を追加し、最終的に 3 調査区の発掘調査を実施した。

(2) 層序 (図 69、71、73)

I 層となるグラウンドの整地層以下が砂丘面で、白色砂層と黒色砂層が交互に堆積している状況が確認された。白砂層である II 層以下が遺物包含層となるが、遺物は白色砂層 (II、IV、VI、VII 層) で少なく、黒褐色砂層 (III、V 層) から多く出土する。

1 トレンチの III 層直下、2、3 トレンチの V 層直下より黒色混灰砂層が確認されたが、精査の結果、平面形円形状に堆積している状況が確認できため、本層を竪穴遺構の埋土と判断して記録を行なった。V a 層はこれら遺構の掘り込み面となるが、本層以下にも遺物包含層が堆積していると推定される。

(3) 遺構と遺物 (図 69～73)

・1 トレンチ検出の遺構と遺物 (図 69、図 70)

1 トレンチでは III 層下位において平面形円形状に検出された暗褐色灰混砂層 (V b 層) を遺構埋土と判断し、東壁に 30cm 幅の先行トレンチを一部掘り下げ、平断面の記録を行なった。断面の観察の結果、V 層は VI 層を掘り込んで堆積している状況が確認されたため、円形状プランを呈する竪穴状の建物遺構であると判断し、記録後保護砂を充填し、現地保存を行なった。また、本遺構の周辺にも方形や円形状を呈する平面プランが確認されたため、検出状況の記録のみを行ない、そのまま埋め戻して保存している。

1 トレンチ 1 号竪穴跡の埋土における出土土器は、第 1 文様帶、第 1、第 2 文様帶施文土器があり、刺突文土器 (1)、刺突文 + 沈線文土器 (2)、沈線文土器 (3) で構成されており、包含層出土土器と類似するものの、大形の破片が多い。

・2 トレンチ検出の遺構と遺物 (図 71)

2 トレンチにおいては V 層下位より黒褐色砂層が検出され、南西側の一部を掘り下げたところ VII 層を掘り込んで堆積している状況が確認されたため、竪穴遺構と判断して、記録を行なった。調査上の都合から一部検出にとどまっているため、規模や形状は明らかにできなかつたが、平面プランは方形状を呈すると推測される。

出土遺物は少ないものの、遺構埋土内から刺突文を主文様とする山形口縁の第 1 文様帶施文土器が出土している。



図 67 平成 20 年度面縄第 2 貝塚確認調査 IV 層出土土器

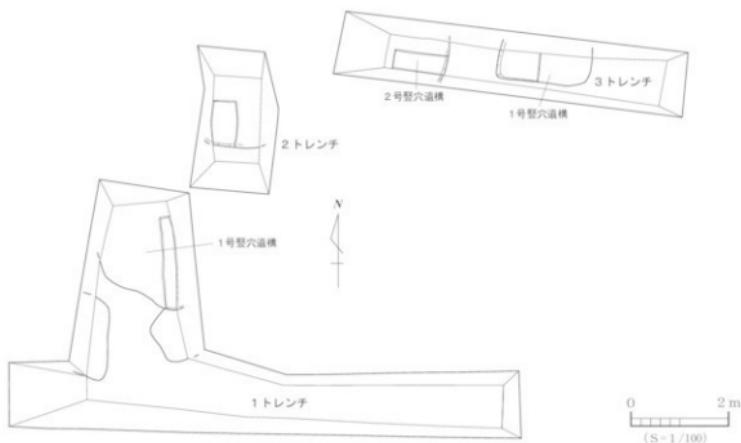


図 68 平成 23 年度面縄第 2 貝塚確認調査トレンチ配置図

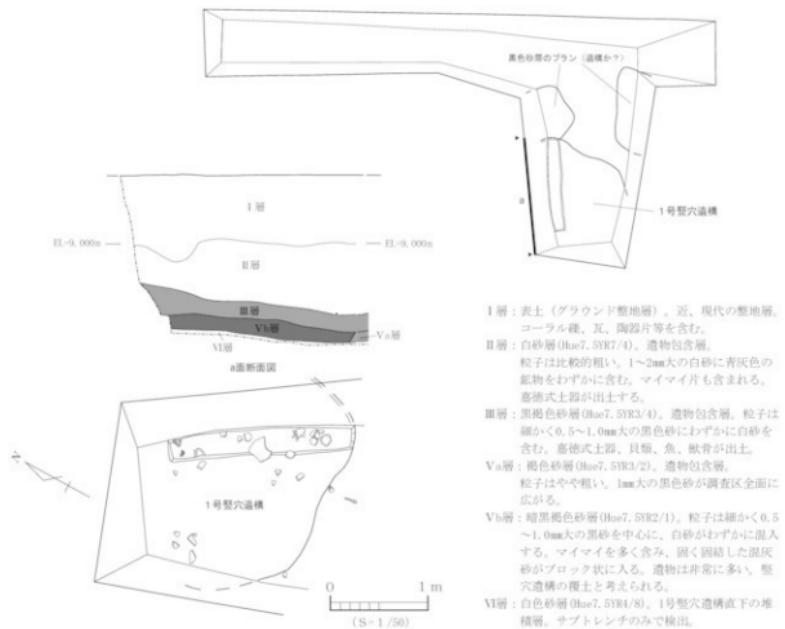


図 69 平成 23 年度面縄第 2 貝塚確認調査 1 トレンチ検出遺構平面図、断面図



図 70 1トレンチ1号竪穴遺構出土遺物

・3トレンチ検出の遺構と遺物（図72）

3トレンチの西端と中央部においてV層下位に掘り込み状のプランが検出され、1、2トレンチと同様に竪穴遺構として一部掘り下げと記録を行なった。1号竪穴遺構は西半分部、2号竪穴遺構は南半部のみの検出で、それぞれ方形状、円形状の平面プランを呈すると想定されるが、全貌の把握は今後の調査に委ねることとした。

出土遺物は少なく、1号竪穴遺構の床面から山形口縁を呈する刺突文土器（第1、第2文様帶施文土器）が1点のみ出土している。

・表土、包含層出土遺物（図73）

各トレンチから遺物が得られているが、黒褐色砂層となるⅢ層からの出土遺物が最も多く、種類も豊富であった。

面縄第2貝塚における過去の調査資料と同様、土器は平底を基本に山形口縁や平口縁を有するもので、無文土器、第1文様帶施文土器、第1、第2文様帶施文土器の3群で構成される。Ⅲ層においてはこれら土器群に伴ってヤコウガイ蓋製利器(21)、ゴホウラ製貝輪(22)、オオツタノハ製貝輪(23)、有孔サメ歯製品(24)が検出された。

5. 平成22年度面縄小学校校庭内西側の確認調査

(1) 調査区の設定

調査地点は面縄小学校校庭内西側にある体育館の正面、野球用バックネットの隣接地に当たる。調査区は $10 \times 20\text{ m}$ で設定し、重機による表土剥ぎの後、人力によって砂層の掘り下げを行なった。

(2) 層序

表土となるグラウンド整地層の下層に白砂層の堆積が確認され、白砂層中から人骨や藏骨器

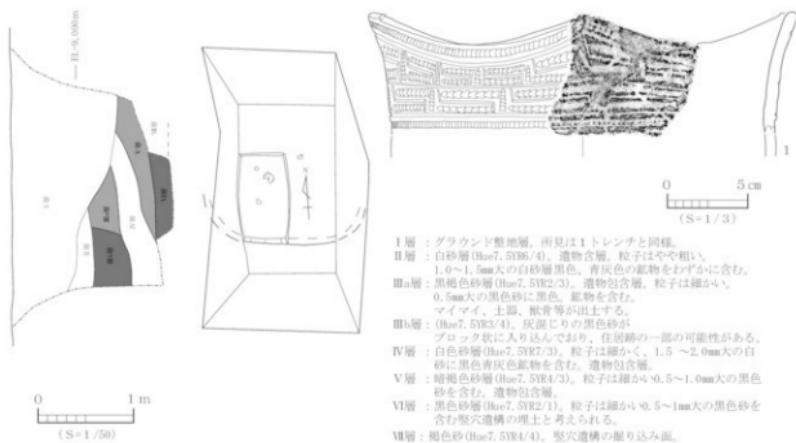


図 71 平成 23 年度面縄第 2 貝塚確認調査 2 トレンチ検出遺構平面図、断面図、出土遺物

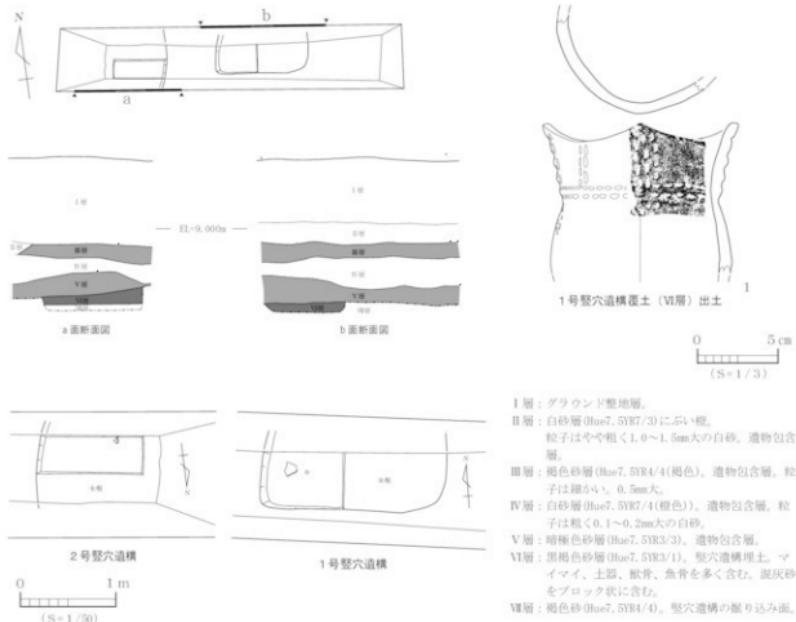


図 72 平成 23 年度面縄第 2 貝塚確認調査 3 トレンチ検出遺構平面図、断面図、出土遺物



図 73 平成 23 年度面縄第2貝塚確認調査表土、包含層出土遺物



参考写真3 近世人骨検出状況1



参考写真4 近世人骨検出状況2

となる陶器が検出された。地表下2m程度まで白砂層を掘り下げたが、その堆積はさらに深部へ及ぶとみられる。

(3) 遺構と出土遺物（参考写真3、4）

白砂層中から、頭骨を欠いた仰臥伸展葬と座葬の埋葬人骨がそれぞれ1体検出された。うち仰臥伸展葬の人骨は寛永通宝を伴っており、その他陶器等の特徴から近世以降の埋葬跡であることが明らかとなった。聞き取りによって、体育館の建設に伴って旧墓地が移転されたとの証言が得られたことから、面縄小学校西側の敷地には近世以降の墓地が包蔵されていることが明らかとなった。

6. 小結

(1) 層序

平成20年度、23年度調査によって面縄小学校東側隣接地および校庭内東側において遺物包含層および遺構が確認された。いずれの調査区でも遺物が包含される白砂層と黒色砂層が重層的かつ交互に堆積し、とりわけ黒色砂層中より多くの遺物が出土する状況が確認された。黒色砂層下からは集石遺構が検出され、灰が多く混じる黒色砂層は円形や方形状の平面プランとして認識されることから、炉跡や竪穴遺構の埋土となる場合もある。

(2) 遺構

遺構としては集石や竪穴竪穴遺構が検出され、砂丘上に良好な遺構面が残存している状況が確認された。検出された遺構の種別、形状、規模は多様であるが、保存目的の調査であったため、発掘調査は一部に留め、すべてを現地に保存している。また、近世以降の墓跡も検出された。

(3) 遺物

遺物は土器、貝製品、サメ歯製品などが得られているが、とりわけ土器は、平底を基本とする山形口縁や平口縁の器形で、刺突文、沈線文などの文様の特徴から総じて貝塚時代前4期に位置付けられるものであった。出土土器は嘉徳I式A、Bと嘉徳II式と分類されるもので過去の調査で得られたものと大差は無かった。

(4) 遺跡の性格と範囲

複数検出された集石や堅穴建物遺構などの検出遺構の特徴から、本遺跡は砂丘地に営まれた集落跡と結論付けられた。遺構および包含層の残存状況から、当該期における遺跡の範囲は、面縄小学校敷地内の東半部から面縄川の下流にかけての範囲であったと想定される。

第4節 面縄第3貝塚の確認調査（図74～78）

1. 平成19年度調査

(1) 調査区の設定（図74）

面縄小学校東側約200mに位置する面縄カトリック教会の裏側畠地に2か所の調査区(2×4m)を設け、南側を1トレンチ、北側を2トレンチとして発掘調査を行なった。調査個所は教会の約50m東側にある石灰岩の岩陰の前面、従来知られていた面縄第3貝塚よりも150mほど海岸寄りの地点に当たる。

(2) 層序（図75、77）

・1トレンチ（図75）

耕作土であるI層下に遺物が含まれる砂層が堆積しており、色調の違いから3層に分層した。遺物は黒褐色砂層となるIII層より多く出土し、人工遺物の他、貝類や獸骨が比較的多く得られた。IV層は完掘していないが、その下にも厚く砂層が堆積していると予想される。

・2トレンチ（図77）

耕作土(I層)と褐色土(II層)の下位に遺物包含層である暗褐色土層(III層)が堆積しており、それより下位のIV、V層は砂層であった。

遺物包含層であるIII層は、調査区中央部の南壁においては溝状に落ち込んだ状態が確認され、底面がフラスコ状に広がる不自然な堆積を示していた。人為的な掘削の結果ではなく、砂丘の窪地に土壤(III⑦～III⑨層)が堆積し、その後薄い砂層に覆われ(IV④層)、再び土壤(III⑤、⑥層)が砂層を削りながら堆積した結果であると解釈して分層を行なった。III層は水の作用によって堆積した可能性も想定される。IV層以下は少量の土を含む砂層となり、III層堆積以前は砂丘が形成されていたと判断された。

(3) 出土遺物

・1トレンチ（図76）

砂層となるIII、IV層から遺物が出土している。土器は薄手でミミズ腫れ状の凸帯文をもつもの(1、4)と口縁部が直立して立ち上がる沈線文が施されたもの(2、3)があり、いずれも器種は甕であった。器形や文様の特徴から貝塚時代後2期に位置付けられるスセン當式土器に該当し、底部は出土していないものの、中空の脚をもつ一群と想定される。

その他的人工遺物としては、バイブウニ製品(5)、ヤコウガイ蓋製利器(6)、有孔貝製品(7)などが出土している。

・2トレンチ（図78）

1は地表面からの採集品で、一部に磨り面が認められる方形の石材である。I層からはバイ

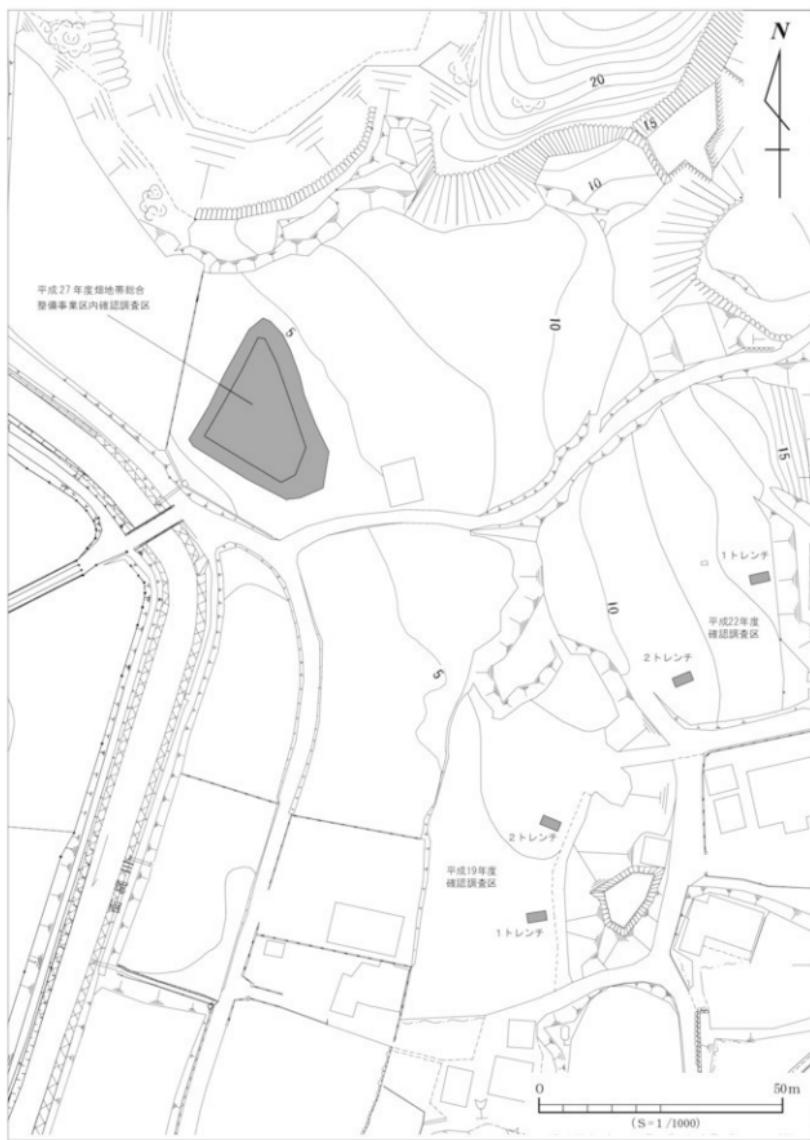
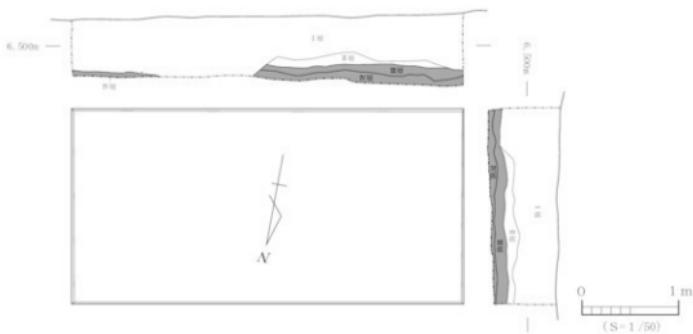


図74 面縄第3貝塚確認調査トレンチ配置図



I層：耕作土。
II層：褐褐色混土砂層 (Blueish brown mixed soil-sand layer)。砂粒は粗い。粘性弱い。遺物は出土しない。
III層：暗褐色混土砂層 (Dark brown mixed soil-sand layer)。砂粒は細かい。粘性強い。明褐色の火山噴出物を多く含む。遺物包含層。
IV層：黄褐色混土砂層 (Yellowish brown mixed soil-sand layer)。粒子は粗い。粘性強い。遺物包含層。サンゴ礁が多く出土する。

図 75 平成 19 年度面縄第3貝塚確認調査 1トレンチ平面図、断面図

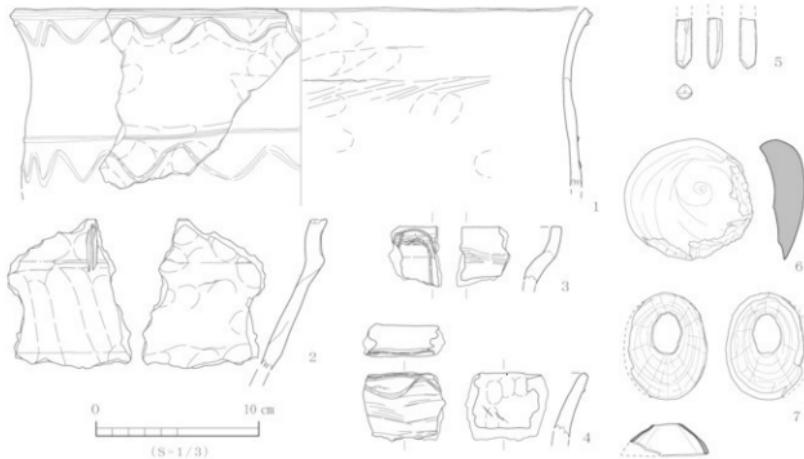


図 76 平成 19 年度面縄第3貝塚確認調査 1トレンチ出土遺物
(1～3、5～7：Ⅲ層、4：Ⅳ層)

ブウニ製品(2)とオオツタノハ製の貝輪片(3)が得られた。

遺物包含層であるⅢ層(黒褐色土層)、Ⅳ層(暗褐色混土砂層)から遺物が出土している。土器は口縁を肥厚させる類が限定的に出土しており、肥厚帯が方形状のもの(4)と丸みを帯びるもの(5～7)に分けられる。これらは貝塚時代前5期に位置付けられる肥厚口縁を特徴と

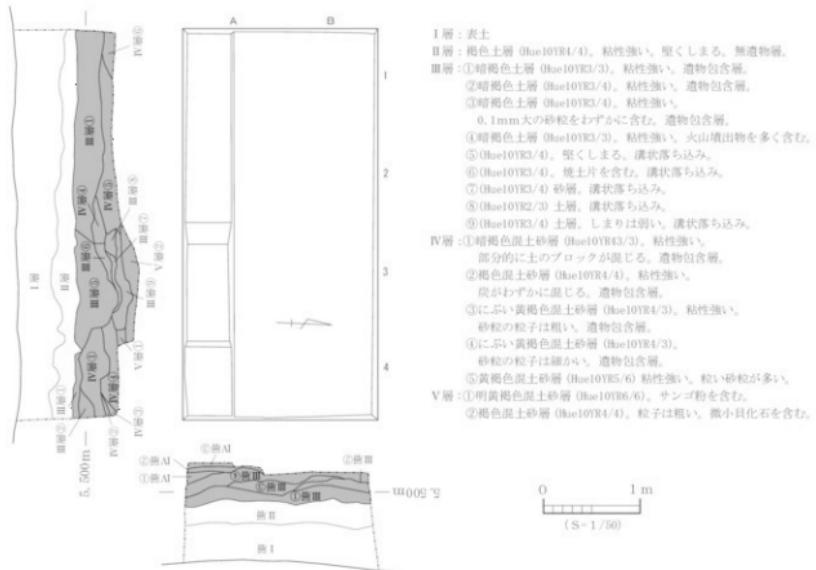
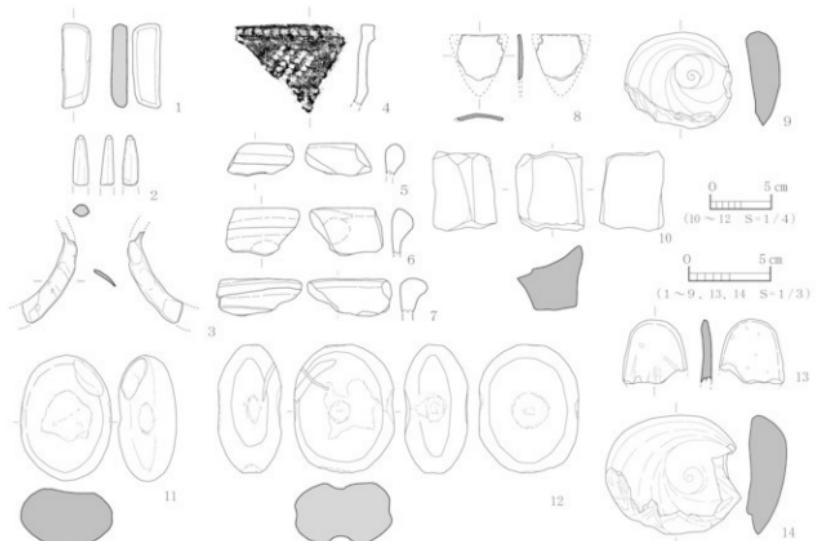
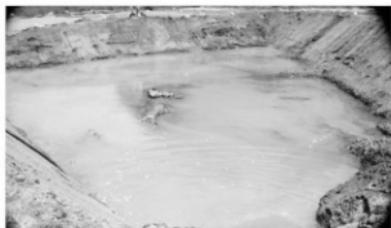
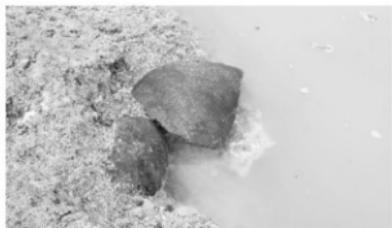


図 77 平成 19 年度面縄第 3 貝塚確認調査 2 トレンチ平面図、断面図

図 78 平成 19 年度面縄第 3 貝塚確認調査 2 トレンチ出土遺物
(1: 表面採集、2, 3: I 層、4~12: III 層、13・14: IV 層)



参考写真5 平成27年度畠地帯総合整備事業区内
確認調査区包含層検出状況



参考写真6 平成27年度畠地帯総合整備事業区内
確認調査区土器出土状況

する一群である。IV層からは土器の転用品と見られる土製品(13)が出土した。

貝製品には、側縁に鋸歯状の刻みをもつ有孔製品(8)やヤコウガイ蓋製利器(9、14)があり、前者はサメ歯製品の模造品とみられる。石器も比較的多く、砥面を有する方形状の石器(10)、や敲打痕をもつ円碟(11、12)などがある。

2. 平成22年度調査（図74）

平成19年度調査区の北東に隣接する台地上に調査区（ $2 \times 4\text{ m}$ ）を2か所設定し、確認調査を行なった。表土からは土器片等が出土するが、表土直下には地山となる明黄褐色土層が堆積しており、包含層、遺構面は残存していないと判断した。

3. 平成27年度畠地帯総合整備事業に伴う面縄第3貝塚の確認調査（図74）

平成27年は畠地帯総合整備事業の浸透池配置予定箇所の確認調査を実施した。地表化3mより砂層が検出され、土器、石器、貝製品、貝類、獸骨、魚骨等が比較的多く出土した（参考写真5、6）。出土土器は、条痕文土器（貝塚時代前2期）、室川下層式土器（貝塚時代前3期）が大半であった。面縄川に接するためか、検出砂層からは水が湧き、電動ポンプを投じても調査区全面が水没する状況であった。現状の体制では十分な調査が行なえないと判断したため、県農村整備課と協議し、これ以上の掘り下げは行なわず、遺跡を地下保存することとした。

畠地帯総合整備事業の一環として調査を行なったため、調査内容の詳細については改めて報告を行なうが、良好な遺物包含層が包蔵されている状況を鑑みて、本地点の畠地整備は行なわず、現状を保存することで地権者に了承をいただいた。

4. 小結

面縄第3貝塚の調査では、平成19年度調査の1、2トレンチにおいて遺物包含層が確認されたことから、遺跡の範囲が従来よりも南に拡大することが明らかとなった。南側の1トレンチにおいては貝塚時代後2期の包含層、北側の2トレンチでは貝塚時代前5期、さらに最北に位置する畠地帯総合整備事業計画区内の調査区では貝塚時代前2期の砂層が確認されたことから、面縄第3貝塚では、貝塚時代前期から後期に至る長期間の土地利用が行なわれ、なおかつ海手に近いほど時代の新しい砂層が堆積していることが明らかとなった。

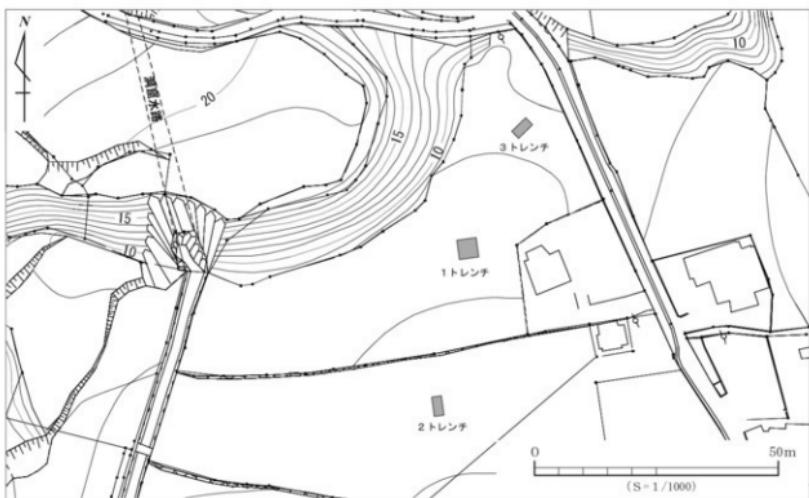


図 79 平成 19 年度面縄第 4 貝塚確認調査トレンチ配置図

第5節 面縄第4貝塚の確認調査（図 79～87）

1. 平成 19 年度調査（図 79）

（1）調査区の設定

調査地点は、面縄第2貝塚の北側約200mに位置し、従来知られている面縄第4貝塚付近に当たる。東側を流れる面縄川と北西の洞窟水路から注ぐ小河川に開まれた平坦地で、現在は畑地として利用されている。北側の石灰岩台地の崖下部に面した畑地に1トレンチ(4×4m)と3トレンチ(2×4m)、その南側に隣接した畑地に2トレンチ(2×4m)を設定し、確認調査を実施した。

（2）層序（図 80、82、84）

・1トレンチ（図80）

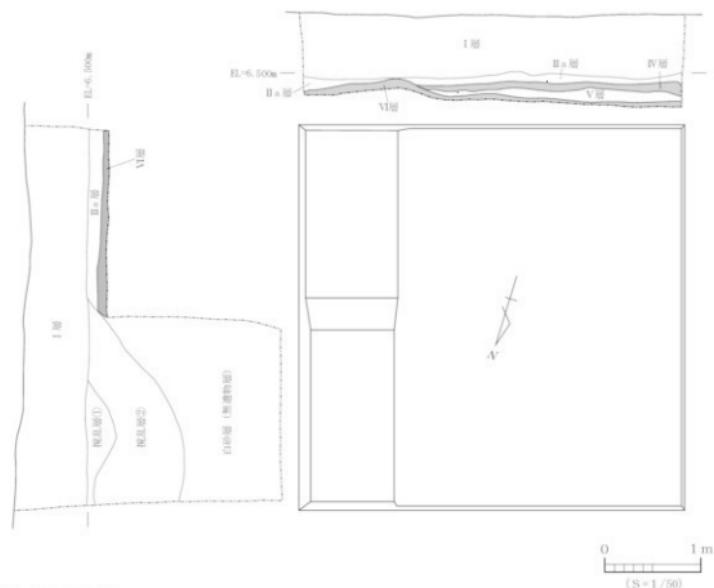
現耕作土となるI層、無遺物層であるIII層の下位に遺物包含層が確認された。トレンチの北東側を東西1m、南北2mの範囲を掘り下げ、遺物を含まない白砂層(VII層)を検出したが、厚さ2m以上堆積していたため、下位の状況は明らかにできなかった。

・2トレンチ（図82）

表土は厚く堆積しており、無遺物層のII、III層以下から遺物が出土する。遺物包含層であるIV、V、VI層は南側ほど落ち込んで堆積している状況が確認されたことから、砂丘面の傾斜に沿って土壤が堆積したとみられる。

・3トレンチ（図84）

1トレンチの層序所見と同様であったが、表土下に近世以降の包含層となるII層が堆積して



- I層：表土。耕作上。
 II層a：にじやけ褐色土層 (Hue10IR4/3)。水分を多く含み粘性が強い。堅くしまる。粒子は粗い。千枚岩状の小砂利をやや含む。
 IV層：暗褐色混砂土層 (Hue10IR3/4)。遺物包含層。砂粒を多く含む。粘性は強いよりは弱い。
 V層：褐色混砂土層 (Hue10IR4/4)。水分を多く含むやしまる。
 VI層：暗褐色混砂層 (Hue10IR3/4)。貝（マイマイ・サザエ）の砂片を多く含む。（貝層）遺物包含層。南側ほど低く落ち込む。

図 80 平成 19 年度面縄第 4 貝塚確認調査 1 トレンチ平面図、断面図

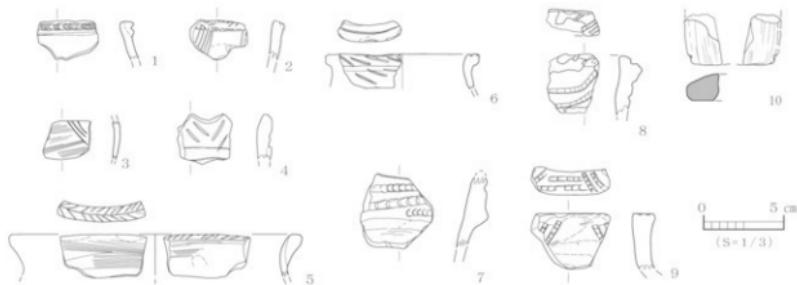
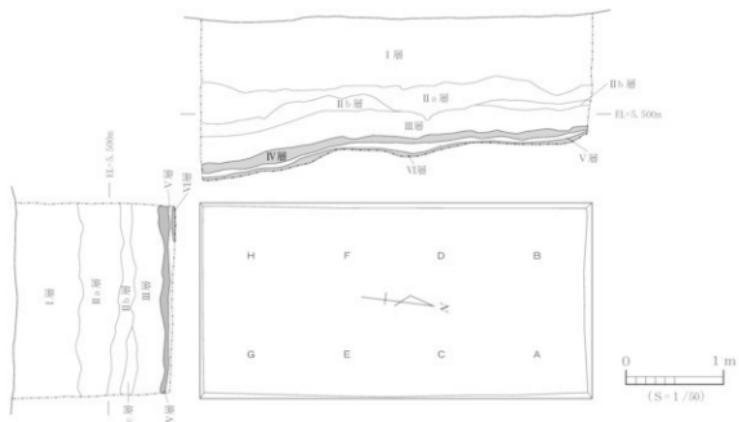


図 81 平成 19 年度面縄第 4 貝塚確認調査 1 トレンチIV層出土遺物



I層：表土・耕作土。
 II層a：にじいろ色土層 (Hue10YR4/3)。水分を多く含み粘性が強い。堅くしまる。粒子は粗い。千枚岩状の小砂利をやや含む。
 II層b：にじいろ色土層 (Hue10YR4/3)。粒子は粗い土層の特徴は上に同じ。上よりはしまりが弱い千枚岩状に破砕する小礫を多く含む。
 III層：褐色土層 (Hue10YR4/4)。水分を多く含み粘性は強い。しまりはやや弱い。
 IV層：暗褐色泥砂土層 (Hue10YR3/4)。遺物包含層。砂粒を多く含む。粘性は強いばかりは弱い。
 V層：褐色泥砂土層 (Hue10YR4/4)。水分を多く含む。ややしまる。
 VI層：暗褐色混土砂層 (Hue10YR3/4)。貝（マイマイ・サザエ）の砂片を多く含む。（貝層）遺物包含層。南側ほど低く落ち込む

図 82 平成 19 年度面縄第 4 貝塚確認調査 2 トレンチ平面図、断面図

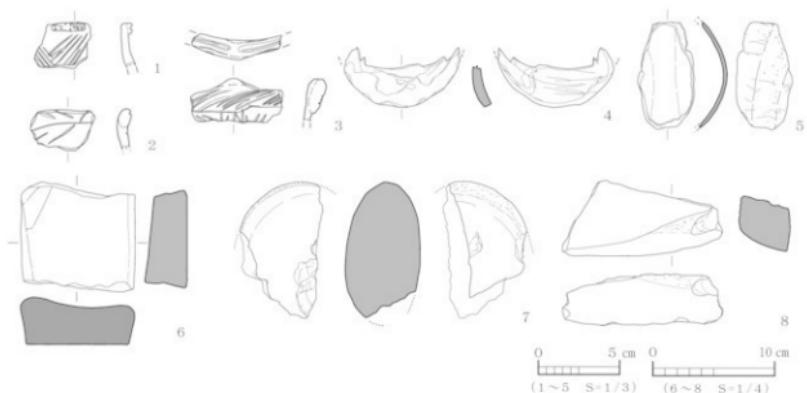


図 83 平成 19 年度面縄第 4 貝塚確認調査 2 トレンチIV層出土遺物

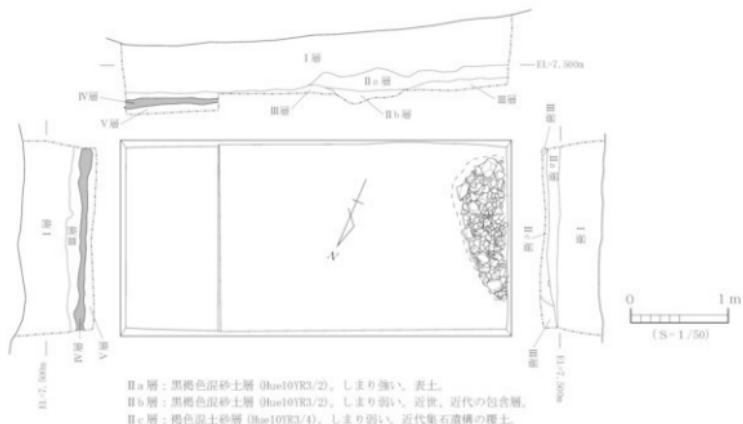


図 84 平成 19 年度面繩第4貝塚確認調査3トレンチ平面図、断面図

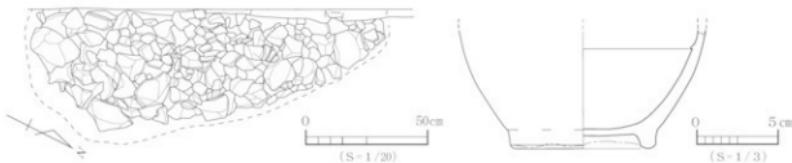


図 85 3トレンチ検出集石遺構平面図

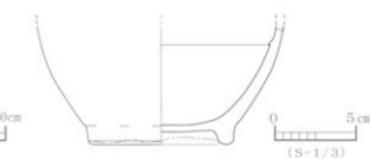


図 86 3トレンチ検出集石遺構覆土出土陶磁器

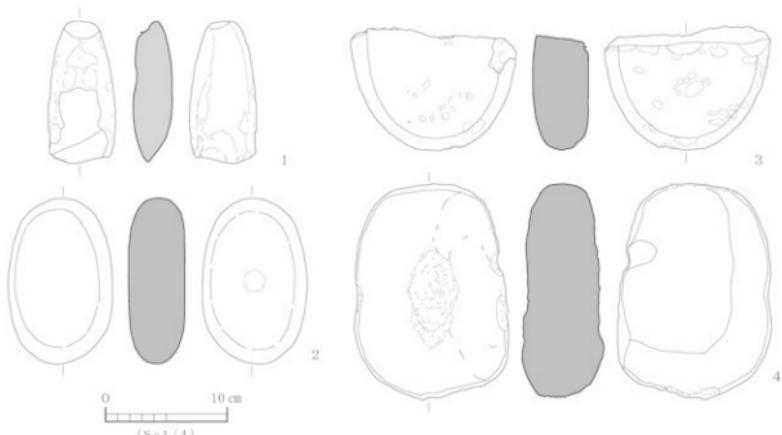


図 87 平成 19 年度面繩第4貝塚確認調査3トレンチ表土および周辺採集遺物

おり、無遺物層のⅢ層挟んで、遺物包含層となるⅣ層が検出された。東側の一部を深く掘り下げた結果、Ⅳ層以下には砂層が堆積しており、遺物の包含が確認された。

(3) 検出遺構と出土遺物（図 81、83、85～87）

・ 1 トレンチ（図 81）

黒褐色土層であるⅣ層より少量ながら遺物が出土した。出土した土器には、口縁部を肥厚させ、頭部から胴部にかけて沈線が施されるもの（1～3）、沈線文が施されるもの（4、6）、口縁端部に沈線文が施されたもの（5）、押し引き文が施されたもの（7）、口縁と口縁端部に押し引き状の刺突文が施されたもの（8、9）などがある。その他、研磨加工が認められる骨製品（10）が得られた。

・ 2 トレンチ（図 83）

黒褐色土層のⅣ層出土土器は、肥厚した口縁をもち頭部に沈線が施される1や、沈線文を有する2、3があり1トレンチⅣ層出土土器と類似する。貝製品としてはゴホウラの粗加工品（4）、ヤコウガイ殻製の貝匙（5）があり、石器は、窪んだ磨り面をもつ石皿（6）、磨り面をもつ円碟片（7、8）が出土している。7、8は磨り石の破損品と見られる。

・ 3 トレンチ（図 85～図 87）

3トレンチ西端において、石灰岩疊の集石が検出された。全面を検出していないものの梢円状の平面プランを呈すると予想される。Ⅱ層中から検出されており、近世以降に比定される白磁の壺（図 86）を伴っていた。集石は平面の記録のみに留め、そのまま埋め戻して現地に保存している。

耕作土となる表土からは石斧（1）や敲き石（2～4）が出土している。Ⅳ層には土器や貝類が包含されているが、図化に堪えうる資料は検出されなかった。

2. 小結

全てのトレンチから遺物包含層が確認され、従来の面縄第4貝塚の範囲が南側に拡大することが明らかとなった。各トレンチから検出された黒褐色土層（Ⅳ層）は、面縄前庭式土器（図 81－1～3、図 83－1）、室川式土器（図 81－8、9）、面縄東洞式（図 81－7）、仲泊式類似土器（図 81－4～6、83－2、3）など貝塚時代3、4期（一部は5期か）における土器を包含しており、Ⅳ層以下には砂層（V、VI層）の堆積が認められることから、各トレンチにおける層位は連続していると推定され、面縄第4貝塚は一連の堆積環境下に営まれた生活跡であると結論付けられる。

出土遺物觀察表

表5 出土土器観察表

区	番号	出土位置	出土種別	出土材	内面調査	外面調査	備考
7	3 不明	不明	縦型		ナデ、擦押さえ	ナデ、擦押さえ	良好
4 不明	不明	丸好	チャート、石英、石灰岩、金雲母	ナデ、擦押さえ	ナデ、擦押さえ	良好	
9 不明	不明			ナデ、擦押さえ	ナデ、擦押さえ	良好	
10 不明	不明			ナデ、ハケ目状	ナデ、ハケ目状	良好	
11 不明	不明			丸ナデ、擦押さえ	丸ナデ、ナデ、擦押さえ	良好	
12 不明	第3層	縦型		ハケ目状、ナデ	ハケ目状、ナデ、擦押さえ	良好	
31 2 1トレンチ	縦型	丸好	石英、チャート	ナデ、擦押さえ	ナデ	良好	
1 2トレンチ	縦型	丸好	金雲母、石英、砂粒	面押さえ	ナデ	良好	
35 2 2トレンチ	縦型	丸好	砂粒、石英	面押さえ	ナデ	良好	
3 2トレンチ	縦型	丸好	砂粒	ナデ	ナデ	良好	
1 3トレンチ	横集	縦型	チャート	ナデ、ハラナデ、擦押さえ	ナデ、ハラナデ、擦押さえ	良好	
2 3トレンチ	横集	砂粒		ハケ目状、擦押さえ	ナデ	良好	
4 3トレンチ	縦下部	丸好	金雲母、砂粒	ナデ、ハケ目状	ナデ	良好	
5 3トレンチ	縦下部	丸好	金雲母、砂粒	ハケ目状	ハケ目状	良好	
6 3トレンチ	縦下部	丸好	金雲母、砂粒	擦押さえ	ナデ	良好	
9 3トレンチ	縦下部	小やれい	チャート、砂粒	ナデ	ナデ	良好	
10 3トレンチ	縦下部	丸好	砂粒	面押さえ、ナデ	ナデ	良好	
11 3トレンチ	縦下部	小やれい	石英、砂粒	ナデ	ナデ	良好	
12 3トレンチ	縦下部	小やれい	石英、砂粒	面押さえ、ナデ	ナデ	良好	
13 3トレンチ	縦下部	丸好	砂粒	面押さえ、ナデ	ナデ	良好	
14 3トレンチ	縦型	丸好	砂粒	ナデ	ナデ	良好	
16 3トレンチ	縦型	小やれい	砂粒	ナデ	ナデ	良好	
17 3トレンチ	縦型	小やれい	砂粒、石英	ナデ	ナデ	良好	
29 1 2トレンチ	縦型	丸好	砂粒、チャート、金雲母	ナデ	ナデ、擦押さえ	良好	
2 2層上部	未保	丸好	チャート、葉目	面押さえ、ナデ	ナデ	良好	
3 2層上部	未保	丸好	金雲母	ナデ、擦押さえ	ナデ、擦押さえ	良好	
44 1 Aトレンチ	丸好	砂粒		ナデ、擦押さえ	ナデ、擦押さえ、ハラナデ	良好	
2 Aトレンチ	縦型			ナデ、擦押さえ	ナデ、擦押さえ	良好	
3 Aトレンチ	縦型			ナデ、擦押さえ	ナデ、擦押さえ、ハケ目状	良好	
4 Aトレンチ	丸好	チャート、砂粒		面押さえ、ナデ、ハケ目状	面押さえ、ナデ、ハラナデ	良好	
5 Aトレンチ	丸好	砂粒	チャート、砂粒	ナデ、擦押さえ	ナデ、擦押さえ	良好	
6 Aトレンチ	丸好	石英、砂粒	チャート、砂粒	ナデ、擦押さえ	ナデ、擦押さえ	良好	
7 Aトレンチ	丸好	石英、質穀?	チャート、砂粒	ナデ、擦押さえ	ナデ、擦押さえ	良好	
8 Aトレンチ	丸好	砂粒	チャート、砂粒	ナデ、擦押さえ	ナデ、擦押さえ	良好	
13 Cトレンチ	縦型			ナデ、面押さえ	ナデ、面押さえ	良好	
14 Cトレンチ	縦型			ナデ、面押さえ	ナデ、面押さえ	良好	
15 Aトレンチ	縦型			ナデ、面押さえ	ナデ、ハラナデ、擦押さえ	良好	
16 Aトレンチ	縦型	面	質穀、砂粒	ナデ	面押さえ	良好	
19 Bトレンチ	V型	縦型	砂粒	ナーラナデ	ナデ	良好	
21 Cトレンチ	V型	面	石英	ナデ	ナデ	良好	
1 平成14年度 3 熊野灘地区	1層	小やれい	砂粒	ナデ	ナデ	良好	
2	1層	小やれい	砂粒	ハケ目状	ナデ	良好	
4	1層	小やれい	砂粒	ナデ	ナデ	良好	
50 1	II層	小やれい	砂粒	面押さえ	ナデ	良好	
2	II層	小やれい	砂粒	チャート、ナデ	ナデ、ハケ目状	良好	
1	III層			ナデ	ナデ	良好	
2	III層			ナデ	ナデ	良好	
3	III層			ナデ	ナデ	良好	
4	III層			ナデ	ナデ	良好	
5	III層			ナデ	ナデ	良好	
6	III層			ナデ、面押さえ	ナデ	良好	
7	III層			ナデ	ナデ	良好	
8	III層			ナデ	ナデ	良好	
9	III層			ナデ	ナデ	良好	
10	III層			ナデ	ナデ	良好	
82 1	IV層	丸好	砂粒	ハケ目状、擦押さえ	ナデ	良好	
2	IV層	丸好	砂粒	ナデ	ナデ	良好	
3	IV層	小やれい	砂粒	ナデ、面押さえ	ナデ	良好	
4	IV層	小やれい	砂粒	ナデ	ナデ	良好	
5	IV層	小やれい	砂粒	ナデ	ナデ	良好	
6	IV層	小やれい	砂粒	ナデ、板ナデ	ナデ、ハケ目状	良好	
53 1	V層	縦型	チャート、砂粒	ナデ	ナデ	良好	
2	V層	小やれい	砂粒	ナデ、ハケ目状	ハケ目状	良好	
3	V層	小やれい	砂粒	ナデ、面押さえ	ナデ、面押さえ	良好	
54 1	VI層	縦型	チャート、砂粒	ナデ、面押さえ	ハケ目状	良好	
2	VI層	縦型	チャート、砂粒	ナデ	ナデ	良好	
3	VI層	縦型	砂粒	ナデ	ナデ	良好	
4	VI層	小やれい	砂粒	ナデ	ナデ	良好	
5	VI層	小やれい	砂粒	ナデ、面押さえ	ナデ	良好	
6	VI層	小やれい	砂粒	ナデ	ナデ	良好	
7	VI層	小やれい	砂粒	ナデ	ナデ	良好	
8	VI層	小やれい	砂粒	ナデ、面押さえ	ハケ目状	良好	

表5 出出土器観察表

国	番号	出土位置	出土層位	出土	面繩	内面調査	外面調査	地成
55	1	平成14年度 緊急調査区	縫繩 縫繩	小やねい 小やねい	砂粒、チャート 砂粒、チャート	ナダ、面押さえ ナダ	ナダ	良好
	2		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	3		縫繩	小やねい	金雲母、チャート	ナダ、面押さえ	ナダ	良好
	4		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	5		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	6		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	7		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ	良好
	8		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ	良好
	9		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ハケ目状	良好
	10		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ	良好
	11		縫繩	小やねい	石英、雲母、砂粒	ナダ、面押さえ	ハケ目状	良好
	12		縫繩	小やねい	砂粒、チャート	ナダ	ナダ	やや悪い
	13		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	14		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ	良好
	15		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	16		縫繩	小やねい	砂粒、石英、チャート	面押さえ、ナダ	ナダ	良好
	17		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	18		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ	良好
	19		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	20		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ	良好
	21		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ	良好
	22		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	23		縫繩	小やねい	砂粒	ハケ目状	ナダ	良好
	24		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	25		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	26		縫繩	小やねい	石英、砂粒	ナダ	ナダ	良好
	27		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	28		縫繩	小やねい	砂粒、チャート	ナダ、面押さえ	ナダ	良好
	29		縫繩	小やねい	砂粒、チャート	ナダ	ナダ、面押さえ	良好
	30		縫繩	小やねい	砂粒、チャート	ハケ目状	ナダ	良好
	31		縫繩	小やねい	砂粒	ハケ目状	ナダ	良好
	32		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	33		縫繩	小やねい	チャート、石英岩	ナダ、ハケ目状	ハケ目状	良好
	34		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	35		縫繩	小やねい	砂粒	ハケ目状、面押さえ	ハケ目状	良好
	36		縫繩	小やねい	砂粒	面押さえ、ナダ、ハケ目状	ハケ目状	良好
	37		縫繩	小やねい	砂粒	面押さえ、ナダ	ハケ目状	良好
	38		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	39		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	40		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
56	1		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ	良好
	2		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ	良好
	3		縫繩	小やねい	砂粒	ハケ目状、面押さえ	ハケ目状	良好
	4		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	5		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	6		縫繩	小やねい	砂粒	面ナダ、ハケ目状	入込みナダ	良好
	7		縫繩	小やねい	砂粒	面ナダ、面押さえ	ナダ、面押さえ	良好
	8		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	9		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ハケ目状	良好
	10		縫繩	小やねい	砂粒、石英	ナダ	ハケ目状	良好
	11		縫繩	小やねい	砂粒	ハケ目状、面押さえ	ナダ	良好
	12		縫繩	小やねい	砂粒	ハケ目状	ハケ目状	良好
	13		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ハケ目状	良好
	14		縫繩	小やねい	砂粒	ハケ目状	ハケ目状	良好
	15		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ、面押さえ	良好
	16		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	面押さえ	良好
	17		縫繩	小やねい	雲母	ナダ	面押さえ	良好
	18		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ハケ目状	良好
	19		縫繩	小やねい	砂粒、石英	ナダ、面ナダ	ハケ目状	良好
	20		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ	良好
	21		縫繩	小やねい	金雲母、砂粒	ナダ、面押さえ	ハケ目状	良好
	22		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ	ナダ	良好
	23		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ、面押さえ	良好
	24		縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ、板ナダ	ナダ、面押さえ	良好
61	1	1 号区	縫繩	小やねい	金雲母、砂粒	面押さえ	ナダ、面押さえ、ハケ目状	良好
62	1	2 号集石	縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、ハケ目状	ハケ目	良好
63	2	2 号集石	縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、ハケ目状	ナダ	良好
	1	A 区	縫繩	小やねい	金雲母、石英、砂粒	面押さえ	面押さえ	良好
	2	A 区	縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ、面押さえ	良好
	3	A 区	縫繩	小やねい	金雲母、石英、砂粒	面押さえ、ナダ	ナダ、面押さえ	良好
	4	A 区	縫繩	小やねい	砂粒	ナダ、面押さえ	ナダ、面押さえ	良好

表5 出土土器観察表

国	番号	出土位置	出土	出土材	内表調査	外表調査	地成
65	5	B区	織柄	白砂	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
	6	B区	織柄	白砂	ナゲ、沿押さえ	ナゲ、沿押さえ	良好
66	7	B区	織柄	白砂	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
	8	B区	織柄	金雲母、白砂、砂粒	ハケ目状、沿押さえ	ナゲ	良好
67	9	B区	負好	石英、白砂	沿押さえ	ナゲ	良好
	10	B区	負好	金雲母、白砂	ナゲ、沿押さえ	ナゲ、ヘラナゲ	良好
68	11	B区	負好	白砂	ナゲ	ナゲ、ヘラナゲ	良好
	12	D区	負好	白砂	ナゲ、沿押さえ	ナゲ、沿押さえ	良好
69	13	D区	負好	金雲母、石英	ナゲ	ナゲ、沿押さえ	良好
	14	D区	負好	金雲母、石英、砂粒	ナゲ、沿押さえ、ハケ目状	ナゲ、ハケ目状	良好
70	15	D区	負好	金雲母、砂粒	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
	16	D区	負好	白砂粒	ハケ目状、ナゲ	ナゲ	良好
71	17	D区	負好	砂粒	ナゲ	ナゲ、沿押さえ	良好
	18	E区	負好	金雲母、石英、砂粒	ナゲ、沿押さえ、ハケ目状	ナゲ、ハケ目状	良好
72	19	不明	織柄	石英、砂粒	沿押さえ、ハケ目状	ナゲ	良好
	1	A区	負好	石英、砂粒	沿押さえ、ハケ目状	ナゲ、ハケ目状	良好
73	2	A区	負好	白砂	ナゲ	ナゲ	良好
	3	A区	負好	織柄	ナゲ、ヘラナゲ	ナゲ	良好
74	4	D区	負好	砂粒	ナゲ、沿押さえ、ヘラナゲ	ハケ目状	良好
	5	1号住居	織柄	負好	砂粒	ナゲ、沿押さえ	ナゲ、ハケ目状
75	6	2号住居	織柄	負好	金雲母、砂粒	沿押さえ、ナゲ	良好
	7	3号住居	織柄	砂粒	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
76	8	1号住居	織柄	砂粒	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
	9	1号住居	織柄	砂粒	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
77	10	1号住居	負好	砂粒	ナゲ、ハケ目状、沿押さえ	ナゲ	良好
	11	1号住居	織柄	金雲母、石英、砂粒	沿押さえ、ナゲ	ナゲ	良好
78	12	1号住居	負好	白砂、石英	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
	13	1号住居	負好	金雲母、砂粒	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
79	14	1号住居	砂粒	ナゲ、白砂	沿押さえ	ナゲ	中等悪い
	15	1号住居	負好	金雲母、砂粒	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
80	16	1号住居	織柄	金雲母、砂粒	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
	17	1号住居	砂粒	砂粒	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	中等悪い
81	18	1号住居	負好	砂粒	沿押さえ	ナゲ	良好
	19	1号住居	負好	金雲母、石英	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
82	20	1号住居	砂粒	砂粒	ナゲ	ナゲ	良好
	21	1号住居	砂粒	砂粒	ナゲ、沿押さえ、ハケ目状	ナゲ、沿押さえ	良好
83	22	1号住居	負好	砂粒	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
	23	1号住居	負好	砂粒	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
84	24	1号住居	織柄	砂粒	ナゲ、沿押さえ	ナゲ	良好
	25	1号住居	砂粒	砂粒	ナゲ	ナゲ	良好
85	26	2号住居	負好	砂粒	ナゲ	ナゲ	良好
	27	2号住居	負好	砂粒	ナゲ	ナゲ	良好
86	28	2号住居	織柄	砂粒	ナゲ	ナゲ	良好
	29	2号住居	砂粒	砂粒	ナゲ	ナゲ	良好

表6 出土貝製品観察表

固	番号	出土位置	出土地位	種別	成形	調査	地在長(cm)	地在幅(cm)	重量(g)
8	1	不明	不明	オオツナノガイ		研磨	0.0	1.4	0.3
	2	不明	不明	オオツナノガイ		研磨	4.5	5.8	6.0
	3	便下	2層	ヤコウガイ	打削	研磨	6.7	36.4	37.2
31	1	1トレンチ	II層	ヤコウガイ		研磨	4.7	1.4	0.3
	2	1トレンチ	III層	タコチャウガイ		研磨	4.8	2.9	4
	3	3トレンチ	II層上部	リュウキウガルガイ?	打削	研磨	2.6	5.5	7
38	6	3トレンチ	II層	種別不明	打削(穿孔部)	研磨	2.6	2.6	4
	15	3トレンチ	V層	シマツガイ科		研磨	10.0	2.0	67
	18	3トレンチ	II層	ヤコウガイ	PPU剥離?	研磨	2.9	1.9	3
40	1	テラス面	貝塚	ツブガイ(セケンノガイ)		研磨	1.1	30.2	0.04
	2	テラス面	貝塚	イセガイ類		研磨	0.9	30.8	0.26
	3	テラス面	貝塚	イセガイ類		研磨	0.8	30.8	0.23
9	9	Aトレンチ	表土	種別不明	穿孔部打削	研磨	6.1	4.6	15
	10	Aトレンチ	表土	タコチャウガイ	穿孔部打削	研磨	6.9	2.0	11
	11	Aトレンチ	表土	ヤコウガイ	打削	研磨	6.9	2.2	127
44	17	Aトレンチ	II層	ヤコウガイ	打削		15.7	30.0	295
	20	Bトレンチ	V層	オオツナノガイ	打削	研磨	4.9	5.1	2
	5	平成14年度 既知調査点	I層	オオツナノガイ		研磨	7.4	25.0	6
49	6	既知調査点	I層	オオツナノガイ		研磨	4.4	21.1	3
	7	既知調査点	I層	タコチャウガイ		研磨	4.4	2.0	7
	50	3	II層	ゴボウラ		入念な研磨	2.9	14.7	7
51	12	III層	タコチャウガイ		再研磨か?	1.7	1.1	0.3	
	13	III層	オオツナノガイ		内部に凹凸なし研磨	0.0	3.0	4	
	14	III層	ウミウツガイ		自然な複数	6.7	4.3	2.6	
52	15	III層	タコチャウガイ		打ち欠き	研磨	5.9	3.5	4.9
	16	III層	ゴボウラ		入念な研磨(面部)	0.0	3.5	56	
	17	III層	ヤコウガイ		自然な複数	9.3	2.9	11	
53	18	III層	タコチャウガイ		打削	研磨	11.0	5.1	60
	19	III層	スジシガイ		打削	研磨	10.2	12.4	297
	20	III層	ゴボウラ		打ち欠き	研磨	14.1	6.9	160
54	7	IV層	種別不明		全体的に研磨	4.2	0.6	2	
	8	IV層	ヤコウガイ		研磨	3.8	2.3	3	
	9	IV層	カラフジマイノゾ		研磨	0.9	2.4	13.3	
55	10	IV層	ヤコウガイ類		打削	研磨	6.7	30.0	149
	11	IV層	ゴボウラ		打削	研磨	12.6	4.5	93
	12	IV層	ゴボウラ		打削	研磨	12.6	5.2	70
56	13	IV層	タコチャウガイ		穿孔部打削	研磨	6.6	5.0	12
	14	IV層	ヤコウガイ		打削	研磨	11.9	5.3	99
	15	IV層	スジシガイ		穿孔部研磨	研磨	12.2	35.4	464
57	16	IV層	スジシガイ		研磨	15.1	23.0	156	
	1	V層	スジシガイ		打削	研磨	14.0	30.7	241
	2	V層	スジシガイ		打削	研磨	11.4	36.7	399
58	3	V層	タコチャウガイ		打削	研磨	2.8	16.6	12
	4	VI層	スジシガイ		打削	研磨	0.7	4.9	38
	5	VI層	ヤコウガイ		打削	研磨	0.9	30.7	60
59	6	VI層	ヤコウガイ		打削	研磨	9.9	28.3	91
	7	VI層	ヤコウガイ		打削	研磨	6.0	36.5	92
	8	VI層	ヤコウガイ		打削	研磨	3.1	35.6	5
60	9	VI層	ヤコウガイ		打削	研磨	0.5	30.4	41
	10	VI層	スジシガイ		打削	研磨	18.2	34.2	470
	11	VI層	スジシガイ		研磨	7.6	4.1	38	
61	12	VI層	スジシガイ		研磨	5.4	5.6	26	
	13	VI層	ヤコウガイ		研磨	1.5	6.6	0.3	
	14	VI層	ヤコウガイ		入念な研磨	4.5	26.0	9.0	
62	15	VI層	シマツガイ科		研磨	9.7	2.0	34	
	16	VI層	タコチャウガイ		研磨	9.6	23.1	21	
	17	VI層	タコチャウガイ		研磨	5.2	4.0	3.5	
63	18	VI層	種別不明		研磨	5.0	24.0	3.5	
	19	VI層	ゴボウラ		入念な研磨	5.0	25.6	7	
	20	VI層	ゴボウラ		入念な研磨	7.4	4.2	10	
64	2	D区	地在	ヤコウガイ	打削	再研磨?	9	36.3	61
	3	地在	ヤコウガイ		打削	研磨	11.7	5.2	59
	4	B区	表土	オオツナノガイ	打削	研磨	4	36.4	6
65	5	E区	表土	オオツナノガイ		研磨	6.7	5.2	5
	6	2号施設	地在	ヤコウガイ	打削	研磨	4.9	21.1	4
	7	B区	地在	カサガロガイ	打削	研磨	7.9	36.2	16.5
66	8	C区	地在	オオツナノガイ	打削	研磨	6.8	36.3	14.7
	9	A区	地在	ヤコウガイ	打削	研磨	5.8	35.1	24

表6 出土貝製品観察表

回	番号	出土位置	層位	種別	成形	調査	保存長(cm)	保存幅(cm)	重量(g)
4	A区	面繩	ヤコウガイ	打削	研磨	2.0	0.2	30	
5	D区	面繩	ヤコウガイ巻	打削		0.0	0.5	145	
6	A区	面繩	チトセボラ	打削?	研磨	0.1	0.4	19	
7	A区	面繩	ホワガイ科	打削		0.8	0.6	151	
21	1トレンチ	面繩	ヤコウガイ巻	打削?	研磨	0.7	0.5	175	
22	1トレンチ	面繩	ゴボウラ	入念に研磨		2.8	2.6	20	
23	2トレンチ	面繩	オオタグノハガイ	打削?	研磨	0.5	0.9	3	
5	1トレンチ	面繩	ハイブニ	打削?	研磨	0.9	0.6	2	
6	1トレンチ	面繩	ヤコウガイ巻	打削?		2.4	2.8	154	
7	1トレンチ	面繩	オオバッコウガサ	打削	研磨?	0.5	0.8	13	
2	2トレンチ	1層	ハイブニ		研磨	2.0	1.0	1	
3	2トレンチ	1層	オオタグノハガイ	打削?	研磨	0.8	1.7	6	
8	2トレンチ	面繩	イモガイ	打削?	研磨	2.8	2.9	2	
9	2トレンチ	面繩	ヤコウガイ巻	打削?	研磨	0.9	0.6	96	
14	2トレンチ	面繩	ヤコウガイ巻	打削?		2.3	0.5	188	
4	2トレンチ	IV層	ゴボウラ		研磨?	0.7	2.2	0.5	
5	2トレンチ	IV層	ヤコウガイ			0.6	0.5	0.5	

表7 出土骨製品観察表

回	番号	出土位置	層位	種別	調査	保存長(cm)	保存幅(cm)	重量(g)	
4	不明	土壌	種別不明	研磨		0.6	0.4	0.4	
5	不明	土壌	イノシシ	研磨		0.9	1.6	21.6	
6	不明	土壌	イノシシ	研磨		0.8	1.6	6.4	
7	不明	土壌	種別不明	研磨		0.1	0.6	0.4	
8	不明	不明	種別不明	研磨		2.5	0.4	0.4	
27	7	3トレンチ	II層下部	イノシシ?	研磨	0.3	0.3	0.4	
51	11	学成1年度 駒込調査区	面繩	イノシシ?	研磨	2.6	0.7	0.8	
54	10	駒込調査区	VI層	イノシシ	研磨	2.4	0.9	7	
55	4		種別不明	研磨		0.3	0.8	3.2	
5		種別不明	研磨			0.1	0.7	1.2	
1		埋瓦層	イノシシ?	研磨		0.9	0.6	2	
2		埋瓦層	魚骨	研磨		0.6	0.7	0.4	
3		埋瓦層	種別不明	研磨		0.3	0.4	0.7	
4		埋瓦層	イノシシ	研磨		0.3	0.7	0.8	
5		埋瓦層	イカルウ	研磨		0.0	1.5	1.1	
6		埋瓦層	イノシシ	研磨		0.1	0.8	4.4	
7		埋瓦層	イノシシ	研磨		0.0	1.0	0.3	
8		埋瓦層	イノシシ	研磨		0.0	1.0	4	
9		埋瓦層	イノシシ	研磨?		0.8	1.5	14	
66	8	A区	面繩	イノシシ	研磨	2.0	1.4	3	
73	24	2トレンチ	面繩	オオタグノサメ?	研磨?	0.8	0.9	0.06	
81	10	1トレンチ	IV層	種別不明	研磨	2.1	2.2	1.7	

表8 出土石製品観察表

回	番号	出土位置	出土層位	種別	成形	保存長(cm)	保存幅(cm)	保存厚(cm)	重量(g)
7	1	D-I-1	不明	砂岩	打削	0.0	0.6	4.2	不明
	2	D-I-1	不明	緑色変形?	打削	0.2	0.3	0.1	不明
	12	古保	泥鰌筋			0.2	0.4	0.0	275
44	18	A区トレンチ	II層	泥鰌筋		0.8	0.8	0.5	1120
66	9	E区	面繩	砂岩	打削	0.4	0.4	4.6	271
	10	E区	面繩	泥鰌筋	打削	0.6	0.7	4.6	685
	1	古保	砂岩			0.2	1.2	1.0	18.6
28	10	2トレンチ	面繩	砂岩	打削	0.3	0.9	4.9	248
	11	2トレンチ	面繩	泥鰌筋?		0.3	2.4	4.7	673
	12	2トレンチ	面繩	泥鰌筋		0.5	0.2	0.3	670
	6	2トレンチ	IV層	砂岩?		0.4	0.4	4.2	529
	7	2トレンチ	IV層	砂岩?		0.2	0.8	0.1	377
	8	2トレンチ	IV層	泥鰌筋	打削	0.2	0.1	4.6	496
87	1	3トレンチ	面繩	砂岩?	打削?	0.6	0.6	0.2	250
	2	3トレンチ	埋瓦	砂岩?		0.0	0.6	4.7	922
	3	3トレンチ	古保	砂岩?		0.4	0.55	4.6	965
	4	3トレンチ	埋瓦	砂岩?		0.7	0.5	6.7	2400

第IV章 自然科学的分析

第Ⅳ章. 自然科学的分析

第1節. 面縄貝塚の貝類遺体（予察）

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

はじめに

面縄貝塚は、徳之島伊仙町に位置する貝塚時代前1期（以下、貝塚時代を省略）からグスク時代にわたる複合遺跡であり、特に貝塚時代の各時期の貝塚（第1～第4）を有し、著名で極めて興味深い遺跡である。本遺跡の貝類遺体については、第2および第4貝塚のリストが吉田裕・網尾勝調〔査〕として報告されており（国分ら、1959）、第2貝塚のピックアップ法により得られたおよその組成および特徴が示されている（黒住、2014a）。その結果、サンゴ礁域の貝類遺体が優占しており、一部には陸産貝類が集中する状況も確認されている。

今回、面縄貝塚全体の出土貝類遺体の傾向把握を目的に、これまでの発掘資料に基づいて、その組成・変遷についてアウトラインを示すこととした。

1. 検討資料

(1) 前2期：今回は、平成27年度に確認調査の行われた第3貝塚の資料を検討した。出土土器は条痕文土器が中心とのことで、この時期として表記した。中心となったものは、「南側、白砂層b」とラベルされた5mmメッシュで水洗された一括サンプルである。その他にも、ピックアップ資料の同定を行った結果を水洗資料に追加して、この時期のものとして集計した。

(2) 前2・3期主体：伊仙町教育委員会に保管されていた昭和57・59年度の発掘調査（牛ノ浜・堂込、1985）における第4貝塚「東洞部」とラベルされたピックアップ抽出資料である。包含層中の貝類が大半を占めるが、層序不明のものや表採資料も、包含層の貝類遺体と組成・貝の質感が異なっていなかったことから検討対象とした。条痕文・室川下層式が主体となり、一部面縄前庭式の土器が含まれるとのことでの、前2・3期主体とした。

(3) 前3・4期主体：上記と同じ調査で第4貝塚の「西洞部」のピックアップ資料で、包含層のものが多く、やはり表採等の貝類も含めた。ただ貝類遺体は少量であった。主体となる土器は、面縄前庭式・仲泊式・面縄東洞式であるとのことから、前3・4期主体とした。

(4) 前4期：黒住（2014a）で報告した第2貝塚のデータを用いた。このサンプルは、ピックアップ法によるものである。土器は、嘉徳式土器が多いとのことである。

(5) 後2期：平成19年度調査の2トレンチのスセン當式土器の包含層からピックアップ法で得られたものを対象とした。

(6) 後2期：第1貝塚のテラス面の純貝層（牛ノ浜・堂込、1985）の上面から、柱状に15cmの深さまで4つのサンプルを採取し、これまでと同様に9.5・4・2・1mmのメッシュを用いた水洗選別を行い、浮遊部分（LF）は0.5mm未満のネットで回収した（黒住、1997）。今回は都合上、

沈殿部分 (HF) は②サンプル (0.5 ~ 4cm) の 4.7 リットルを対象とし、浮遊部分は③サンプル (4 ~ 10cm) の 3.9 リットルのものから抽出を行った。ただ、先史時代の純貝層でありながら、貝層は現地表面から存在しており、現代の落葉も多く、土壤動物による搅拌によって、③サンプルでも極めて大量の落葉等が含まれていたので、これらを、4・2・1・0.5mm のメッシュで篩い、メッシュごとに貝類遺体を抽出・検討した。なお、この地点の純貝層は後述するようにリュウキュウヒバリとナガウニ類が極めて優占しており、小さなメッシュのものは分割して抽出を行った。

2. 結果および考察

全体として、海産腹足類 33 科 137 種、海産二枚貝類 21 科 46 種、多板類（ヒザラガイ類）1 科 1 種、掘足類（ツノガイ類）2 科 2 種、陸・淡水産腹足類 5 科 7 種、その他の海産動物 6 種（表 9）と約 200 種が確認され、さらに微小貝類が 30 種程度抽出されている。

表 9 の値は、最少個体数 (MNI) ではなく、同定標本数 (NISP) とした。これは、時間的な問題のほかに、昭和 57・59 年度の調査時のサンプルには破片も多いことや、後 2 期のサンプル中にはナガウニ類も大量に含まれていたために、現時点で各時代を通して検討する場合に、同定標本数の方が良いと判断したためである。なお、前 2 期は前述のように 5mm メッシュで篩われたものであり、後 2 期の値は 9.5 と 4mm メッシュに残ったものである。同定標本数では、二枚貝の左右やサザエ類の殻とフタはそれぞれ別に集計されるため、過大評価になってしまふ。奄美・沖縄の遺跡における最少個体数と同定標本数の関係では、同定標本数が最少個体数のおよそ 1.4 倍 ~ 1.7 倍という結果も示されている（黒住, 2015）。ただ、ナガウニ類に関しては、殻板の値のみを用い、棘や顎板の値は含めなかつた。

（1）食用貝類の優占種と採集空間

100 個体以上確認された時期のサンプルで 2 % 以上を占める種を優占種とし、各時期の変化を表 10 にまとめた。前 2 期ではオハグロガイが多く、カワニナ・オオヤマタニシ類・イソハマグリ・ヤコウガイと続いていた。前 2・3 期ではバイブウニが最も多く、シラナミ類・イソハマグリ・クモガイ・ヤコウガイ・ニシキアマオブネ類・リュウキュウマスオも多かつた。前 3・4 期の出土数は少ないが、シラナミ類が最も優占し、さらにイソハマグリ・チョウセンサザエとなっていた。前 4 期では、マガキガイ・ヤコウガイが多く、チョウセンサザエ・シラナミ類・クモガイも目立っていた。後 1 期でも出土数が少ないものの、オオヤマタニシ類・ヤコウガイが多く、チョウセンサザエ・オキニシも高い比率を示していた。後 2 期では、ナガウニ類が半数以上となり、リュウキュウヒバリも極めて優占し、ミドリアオリが他の種より多かつた。表 10 の優占種の全体に占める割合は、前 2 期で 63 % とやや低く、後 2 期は 95 % と高率で、他は 70-77 % と約 3/4 を占めていた。

各時期の生息場所類型組成の変遷を図 88 に示した。前 2 期ではオハグロガイやイソハマグリの採集されるサンゴ礁域の岸側潮間帯 (I - 0 / 1) が約 40 % と最も多く、内湾域 (II / III)・淡水域 (IV)・陸域 (V) も 10 % となっていた。前 2~4 期の第 4 貝塚の東西洞穴部は類似しており、サンゴ礁域のイノー内 (I - 2) が最も多いものの、岸側潮間帶・干瀬 (I - 3)・礁斜面 (I - 4) も高い割合を示していた。前 4 期も第 4 貝塚に類似するが、イノー内の割合が増加していた。後 1 期では干瀬と礁斜面・陸域が多くを占めるようになっていた。後 2 期では岸側潮間帶とイノー内が約半数程度となっていた。

表9 面縄貝塚出土貝類遺体の詳細組成 (NISP)

		面縄第3 東洞部	面縄第4	面縄第4 西洞部	面縄第2	面縄第3	面縄第1
			前2期	前2・3期 主体	前3・4期 主体	前4期	後1期
軟体動物門/腹足綱(海産) Mollusca / Gastropoda (marine)							
ツタノハ科 Patelidae	ツタノハ	I-3-a			12		18
ヨメガサ科 Nacellidae	ヨメガサ	I-1-a	1		2		
	クルマガサ	I-0-a			1		
	オオベッコウガサ	I-1-a	1		4		
	ベッコウガサ	I-0-a	1		2		
ユキノカサ科 Lottiidae	カモガイ	I-0-a	1		3		
	リュウキュウアオガイ	I-1-b	1				
	リュウキュウウノアシ	I-1-a	1				2
ミミガイ科 Halitidae	イボアナゴ	I-2-a	1		4		
	マアナゴ	I-3-a			10		
	ミミガイ	I-3-a			160		
リュウテン(ササエ)科 Turbinidae	コンドカサザエ		1				
	チヨウセンサザエ	I-3-a	1	7	4	403	7
	チヨウセンサザエ/フタ					79	1
	リュウテン	I-4-b				1	
	ヤコガイ	I-4-a	7	11	2	524	4
	ヤコウガイ/フタ		2			89	10
	オオウラウズ	I-2-a				2	
ニシキウズ科 Trochidae	ニシキウズ	I-2-a	2			38	
	ムラサキウズ	I-3-a	2	1		26	
	ウズイテモンジ?	I-4-a			4	3	
	ギンタカハマ	I-4-a				72	1
	サラバハイラ	I-4-a	2	6	1	64	
	オキナワシダタミ	II-1-b	8	2			
	ニシキウズ科不明					4	
アマオブネ科 Neritidae	イシダタミアマオブネ類	I-0-a	8	3		2	33
	コジタカアマガイ	I-1-b	2			18	1
	キバアマガイ	I-0-a	1	1			
	リュウキュウアマガイ	I-0-a	1				
	アマオブネ	I-1-b	8		1	17	1
	マルクアマオブネ	II-1-b	1				
	ニシキアマオブネ	I-1-c	5	9	2	13	1
	ヌリツヤアマオブネ	I-1-c	3				5
	カラコガイ	III-0-e					1
	イガカノコ	IV-5	2				
	フネアマガイ	IV-5	5				1
	アマオブネ科不明					1	
オニツノガイ科 Cerithidae	オニツノガイ	I-2-c				145	1
	コオニツノ	I-2-a		2		1	
	メオニツノ	I-4-b				2	
カタベダマシ科 Modulidae	カタベダマシ	I-2-b	1				
タマキビ科 Littorinidae	ホンシジウズラタマキビ	I-0-a	1				
	コンベイトウガイ	I-0-a	2				
スイショウウガイ科 Strombidae	ムランタモトガイ	I-2-c				7	
	オハグロガイ?	II-2-c	1				
	マガキガイ	I-2-c	5	7		666	1
	イボンデガイ	I-2-c				1	
	コホウラ	I-4-c		2	?1	6	?1
	クモガイ	I-2-c	1	14		322	2
	ラクダガイ	I-4-c		2		6	
	スイジガイ	I-2-c	1		!	215	1

表9 面縄貝塚出土貝類遺体の詳細組成(つづき-1)

		面縄第3 前2期	面縄第4 東洞部 前2・3期 主体	面縄第4 西洞部 前3・4期 主体	面縄第2 前4期	面縄第3 後1期	面縄第1 後2期
スズメガイ科 Hipponicidae	アツキクスズメ	I-3-a			3		
	カワチドリ	I-3-a	2				
ムカデガイ科 Vermetidae	フタモチヘビガイ	I-2-a			10		
	リュウキュウヘビガイ	I-2-a			3	1	
	ヘビガイ類	I-1-a					4
タカラガイ科 Cypraeidae	キイロダカラ	I-1-a	1		20	1	
	ハナビラダカラ	I-1-a			17		7
	コモンドカラ	I-2-b			3		
	ハナマルユキ	I-3-a	3	1	98	4	15
	ハチジョウダカラ	I-1-a	2	1	1		
	ヤナギボリダカラ	I-2-b			1		
	ヤクシマダカラ	I-2-a	2	1	60	1	
	タルダカラ	I-2-a			0		
	ホシダカラ	I-2-a			3		
	ホンキヌタ	I-2-a	1		25	2	
	タカラガイ科不明					2	
ウミウサギ科 Ovulidae	ウミウサギ	I-2-a				3	
タマガイ科 Naticidae	トミガイ	I-2-c		1			
ヤツシロガイ科 Tonnidae	ウズラガイ	I-2-c	1			7	
	イワカワトキワガイ	II-2-c				1	
フジツガイ科 Ranellidae	シロジノマキ	I-2-a	1				
	ミツカドボラ	I-2-a					6
	サツマボラ	I-2-a				1	
	シオボラ	I-2-a				2	
	ホラガイ	I-4-a			1	8	
オキニシ科 Bursidae	イワカワウネボラ	I-2-a				2	
	オキニシ	I-3-a		4	1	101	5
	シロナトルボラ	I-4-a				1	
アッキガイ科 Muricidae	ガンゼキボラ	I-2-a	1	1			
	ツツレイシ	I-1-a	1	3		1	
	シラクモガイ	I-3-a	1	2	3	24	1
	ツノテツレイシ	I-1-a		4		3	
	ツノレイシ	I-3-a				11	
	コイボテツレイシ	I-3-a	1	4			
	ツツボラ	I-2-a				3	
	ホンスジテツボラ	I-1-a	1			1	
	レイシダマシ	I-1-a				1	
	フトコロレイシダマシ	I-1-a	1				
	コムサモイタマシ?	I-4-a				1	
	ウネレイシダマシ	I-1-b				2	
	レイシダマシモドキ	I-1-b					2
	ヒメシロレイシダマシ?	I-2-a	1				
	ハナワレイシ	I-3-a				1	
	ムラサキイガレイシ	I-3-a				1	
	キマダライガレイシ	I-3-a				1	
	シロイガレイシ	I-3-a					2
	アカイガレイシ	I-3-a				11	
	レイシ類						11
オニコブシ科 Vasidea	オニコブシ	I-3-a	1	3		4	
	コオニコブン	I-2-a	1	3		69	
フトコロガイ科 Columbellidae	オビニナ	I-2-b	1				

表9 面縄貝塚出土貝類遺体の詳細組成 (つづき-2)

		面縄第3	面縄第4 東洞部	面縄第4 西洞部	面縄第2		面縄第3	面縄第1	
					前2期	前2-3期 主体	前3-4期 主体	前4期	後1期
エゾバイ科 Buccinidae	ノシガイ	I-1-a					1		
	ホラダマシ	I-2-a					1		
	スジクロホラダマシ	I-3-a	2				4		
	ヒメホラダマシ	I-2-a		1					
オリレイヨバイ科 Nassariidae	サメムシロ	I-2-c	1						
	ヒメアリイレムシロ	II-2-c	3						
	ヨフバイモドキ	II-2-c		1					
	ミスジヨバイ	I-1-b					1		
イトマキボラ科 Fasciolaridae	イトマキボラ	I-2-b					6	1	
	ナガイトマキボラ	I-2-a		1		76			
	リュウキュウツノマタ	I-3-a				1	41	2	1
	ベニマキ	I-2-a	1						
	チトセボラ	I-2-c		1		26			
マクラガイ科 Olividae	オオシマボタル	I-2-c	1						
ミノムシガイ科 Costellariidae	アラレオトメフデ	I-3-a					1		
イモガイ科 Conidae	マダラモ	I-1-a	2				5		
	サヤガタイモ	I-1-a	3			14		3	
	ハナワイメ	I-1-a				0			
	キヌカツギイモ	I-2-a	1			2		2	
	イボシマミモ	I-2-a	1	2		14		2	
	ハイイロミナシ	I-2-a				1			
	ヤナギシボリイモ	I-3-a				9			
	サラサミナシ	I-4-c				1		1	
	イタチイモ	I-4-a				1			
	カラミナシ	I-4-c	1						
	ツヤイモ	II-2-c				1			
	アラレモ?	I-3-a	1						
	ニシキミナシ	I-2-c				4		1	
	シロアーボイナ	I-2-c				1			
	ミカドミナシ	I-2-c				1			
	クロザキモドキ	I-2-c				2			
	アンボンクロザメ	I-2-c		1		12			
	クロモドキ	I-2-c				44			
	小形イモガイ		2			4			
	中形イモガイ			1		8	2	2	
	大型イモガイ					1			
タケノコガイ科 Terebridae	タケノコガイ	I-2-c				2			
	ベニタケ	I-2-c				4			
	キバタケ	I-2-c				4			
	ゾウゲタケ	I-2-c		1					
トウガタガイ科 Pyramidellidae	オオクチキレ	II-2-c	1						
ナツメガイ科 Bullidae	ナツメガイ	I-2-c	1						
カラマツガイ科 Siphonariidae	コウダカラマツ	I-0-a				6			
	ヒラカラマツ	I-0-a	1			1		4	
オカミミガイ科 Ellobiidae	ヒメラシイノミ	V-10	1						
	ハマシイノミ	V-10	1						
不明巻貝								3	
軟体動物門/二枚貝綱(海産) Mollusca / Bivalvia (marine)									
フネガイ科 Arcidae	エガイ	I-1-a	4	2		125			
	ベニエガイ	I-2-a	1			36	1		
	コシロガイ	I-2-a	1						

表9 面縄貝塚出土貝類遺体の詳細組成（つづき-3）

			面縄第3	面縄第4 東洞部	面縄第4 西洞部	面縄第2	面縄第3	面縄第1
			前2期	前2・3期 主体	前3・4期 主体	前4期	後1期	後2期
タマキガイ科 Glycymeridae	ゾメワケグリ	II-2-c				2		
イガイ科 Mytilidae	シロインコ	I-2-a	2			2		
	リュウキュウヒバリ	I-1-a				24	1	669
	ヒバリガイモドキ類	I-1-a				1		
ウグイスガイ科 Pteridae	ミドリアオリ	I-1-a				4		37
	アコヤガイ	II-2-b				1		
	クロチョウガイ	I-4-a		1	2	5		
シュモクアオリ科 Isognomonidae	カシアオリ類	II-2-b	I	2		63	I	
	ヘリトリオリ	I-0-a	1					
ハボウキ科 Pinnidae	ハボウキ	II-2-c	I					
	クロタイラギ	II-4-c		1	2	2		
イシガキモドキ科 Plicatulidae	カスリイシガキモドキ	I-2-a	1					
ウミギク科 Spondylidae	メンガイ類	I-2-a		1		15		
イタボガキ科 Ostreidae	オハグロガキ	I-1-a	25			2	214	
	ニセマガキ	I-0-a					6	
ツキガイ科 Lucinidae	クチベニツキガイ	II-2-b					12	
	ウラキツキガイ	II-2-c	1				5	
	ヒメツキガイ	I-2-c	2				3	
キクザル科 Chamidae	シマザル(ナハラキクザル)	I-2-a					2	
	シラガザル?	I-3-a	1					
ザルガイ科 Cardidae	カワラガイ	II-2-c					3	
	オキワヒシガイ	II-2-c					1	
シャコガイ科 Tridacnidae	オオシラナミ	I-2-a					91	2
	オガジシコ(ガリシラナミ)	I-2-a		14	9	47		
	シラナミ類	I-2-a		1	5	419	3	
	ヒレジャコ	I-2-c	1				61	1
	ヒメジャコ	I-2-a					20	
	シラゴウ	I-2-c		1			10	
バカガイ科 Mactridae	リュウキュウバカガイ	II-2-c	1	1	1	1		
チドリマスオガイ科	イノハマグリ	I-1-c	13	15	8	196	4	1
Mesodesmatidae	ナミノコマスオ	I-1-c					2	
ニッコウガイ科 Tellinidae	リュウキュウシラトリ	II-1-c	6				1	
	サヌミラ	I-2-c	2	5			56	I
	ゴンキザクラ	I-2-b					2	
	ハスマザクラ	III-1-c	1					
イソシジミ科 Psammobiidae	リュウキュウマスオ	II-1-c	3	9	1	132	2	
キヌタアゲマキ科 Solecurtidae	オオズブグリアゲマキ?	II-2-c		1				
シジミ科 Cyrenidae	シレナシジミ	III-0-c		1			19	1
マルスレガレイ科 Veneridae	マルスレガレイ	I-2-b					2	
	アラヌメガイ	I-3-c	1				5	I
	ホンスジイナミガイ	II-1-c	1				9	
	アラスジケマンガイ	III-1-c					7	
	ヒメナミ(イカヅイ)	I-1-c					1	
	ケショウオミエナシ	II-2-c					1	
	マルオミエナシ	I-2-c					4	
	ヒメアサリ	II-1-c	5					
軟体動物門/振足綱(海産) Mollusca / Scaphopoda (marine)								
ツノガイ科 Dentaliidae	マルツノガイ類	VI-12	1					
サケツノガイ科 Fustriidae	サケツノガイ?	VI-11						1
軟体動物門/多板綱(海産) Mollusca / Polyplacophora (marine)								
ヒザグアイ科 Chitonidae	ヒザグアイ類	I-1-a	1					34

表 9 面縄貝塚出土貝類遺体の詳細組成 (つづき - 4)

	面縄第3	面縄第4 東洞部	面縄第4 西洞部	面縄第2	面縄第3	面縄第1		
				前2期	前2・3期 主体	前3・4期 主体	前4期	後1期
軟体動物門/腹足綱(陸・淡水産) Mollusca / Gastropoda (terrestrial & freshwater)								
ヤマタニシ科 Cyclophoridae	オオヤマタニシ類	V-8	19		4	15	21	
カワニナ科 Semisulcospidae	カワニナ	IV-5-6	22					
キセルガイ科 Clavilidae	ヒルグチキセル	V-7			1			
ナンバンマイマイ科 Camænidae	テリメンオシマムイマイ	V-8	4			?1	9	
	トクノシマヤマタカマイマイ	V-8	1				4	
オナジマイマイ科 Bradybaenidae	オキナワウスカワマイマイ	V-9				2	12	
	トクノシマオオペソマイマイ	V-7	1					
節足動物門/甲殻類(海産) Arthropoda / Crustacea								
蔓脚類 Cirripedia	タイワンクロフジツボ	I-1-a		4	1	101		
	クロフジツボ類	I-1-a				4	2	
	フジツボ類			1				
十脚類 Decapoda	カニ類				1		11	
棘皮動物門/ウニ綱 Echinodermata / Echinoidea								
ナガウニ科 Echinometridae	ナガウニ類/殻	I-2-a					971	
	ナガウニ類/棘	I-2-a					168	
	ナガウニ類/頸骨	I-2-a					210	
	バライウニ/棘	I-3-a	18					
その他 Others	化石/キンチャクガイ類	VI-12	3	1				
	化石/イタヤガイ科	VI-12	1	1				
	化石/カキ類	VI-12	2	1				
	化石/カシパン類	VI-12	1					
	化石有孔虫塊	VI-12	5					
	造礁サンゴ片	VI-11		1	2			
合計			250	195	62	5448	99	2275

前2期のサンプルは5mmメッシュで篩われたものであり、食用と考えられない小形種（タマキビ類・フトコロガイ類等）が多く、磨滅した破片の割合も高く、また陸・淡水産種も優占することから、「当時の海岸部に貝塚が形成され、小河川が流れ込む位置に存在していた」ことがわかる。ヤコウガイ等の大形食用貝類の破片も磨滅していたものが多く、海岸部に貝殻を廃棄していた可能性が高い。温暖化が明瞭であった繩文海進より少し後の時代ではあるが、「非食用種を含め、現在徳之島に生息していない／極めて少ない種は認められなかった」ことから、沖縄島で指摘した海域環境が現在と同様であった（黒住、2014b）ことが北に位置する徳之島においても確認された。内湾域を含め岸側潮間帯の種が多いということは、“サンゴ礁の形成途中にあったため”と理解することも可能であるが、筆者はヤコウガイ・ムラサキウズ等の熱帯域の干瀬・礁斜面に生

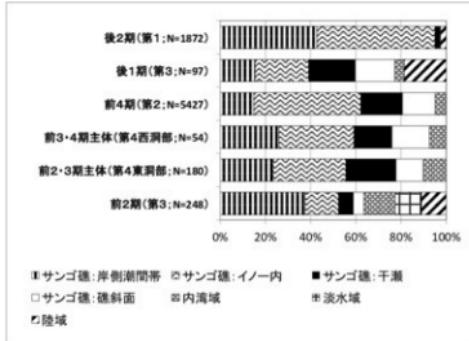


図 88 面縄貝塚の各貝塚の生息場所類型組成の変化

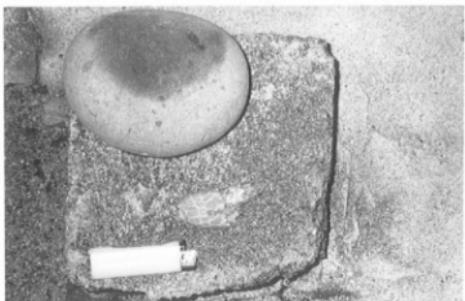
表 10 面縄貝塚の各貝塚の優占種

		面縄第3	面縄第4	面縄第4 東洞部 西洞部	面縄第2	面縄第3	面縄第1
	生息場所 類型	前2期	前2・3期 主体	前3・4期 主体	前4期	後1期	後2期
オハグロガキ	I-1-a	10.1	0.0	3.7	3.9	0.0	0.0
イソハマグリ	I-1-c	5.2	8.3	14.8	3.6	4.1	0.1
ヤコウガイ	I-4-a	3.6	6.1	3.7	11.3	14.4	0.2
ニシキアマオブネ類	I-1-c	3.2	5.0	3.7	0.2	1.0	0.3
イシダタラアマオブネ類	I-0-a	3.2	1.7	0.0	0.0	0.0	1.8
アマオブネ	I-1-b	3.2	0.0	1.9	0.3	1.0	0.0
オキナワシダタミ	II-1-b	3.2	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0
リュウキュウシラトリ	II-1-c	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ヒメアサリ	II-1-c	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
リュウキュウマスオ	II-1-c	1.2	5.0	1.9	2.4	2.1	0.0
マガキガイ	I-2-c	2.0	3.9	0.0	12.3	1.0	0.0
エガイ	I-1-a	1.6	1.1	0.0	2.3	0.0	0.0
クロフジツボ類	I-1-a	0.0	2.2	1.9	1.9	4.1	0.1
シラナミ類	I-2-a	0.0	8.4	26.0	8.6	3.1	0.0
クモガイ	I-2-c	0.4	7.8	0.0	5.9	2.1	0.0
バイブニ/棘	I-3-a	0.0	100	0.0	0.0	0.0	0.0
ハナマルユキ	I-3-a	1.2	0.6	0.0	1.8	4.1	0.8
サラサバティラ	I-4-a	0.8	3.3	1.9	1.2	0.0	0.0
チョウセンサンザエ	I-3-a	0.4	3.9	7.4	8.9	8.2	0.1
オキニシ	I-3-a	0.0	2.2	1.9	1.9	5.2	0.2
スイジガイ	I-2-c	0.4	0.0	1.9	4.0	1.0	0.0
オニノゾンガイ	I-2-c	0.0	0.0	0.0	2.7	1.0	0.0
ミミガイ	I-3-a	0.0	0.0	0.0	2.9	0.0	0.0
ナガウニ類/殻板	I-2-a	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	51.9
リュウキュウヒバリ	I-1-a	0.0	0.0	0.0	0.4	1.0	35.7
ミドリアオリ	I-1-a	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	2.0
カワニナ	IV-5.6	8.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
オオヤマタニシ類	V-8	7.7	0.0	0.0	0.1	15.5	1.1
フネアマガイ	IV-5	2.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
オキナワスカワマイマイ	V-9	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1	0.6
合計		248	180	54	5427	97	1872
		2%~5%未満	5%~10%未満	10%以上			

息する種が採集されていることと上述のように遺跡立地が小河川河口域であったことに起因する現象ではないかと考えており、イノーの発達は悪いものの、現在とそれ程変わらないサンゴ礁環境にあったものと想定している。

前3期頃から後1期までは、サンゴ礁の中大形種が優占する比較的類似した組成で安定しているようにも思われる。ただ、前4期を除いてサンプル数が少ないので、その詳細は今後の課題と言えよう。ただ、前4期の第2貝塚の報告でも指摘したが（黒住, 2014b）、イノー内でも大形種が目立ち、干瀬・礁斜面の種も多いことは（表10・図88）、沖縄諸島の前4期とは異なり、同諸島の後1期の組成に類似し、貝類採集状況が徳之島において時代をさかのぼる可能性が出てきた。

後1期の遺体は極めて少数でしかないが、干瀬・礁斜面の中大形種が多く、ゴホウラ等の南海産貝交易と関連した貝類採集の可能性も考えられる。また、徳之島・沖永良部島の先史遺跡



1. 丸石でニシキノキバフデを打ち割った状況

スケールのライターの長さは 73mm



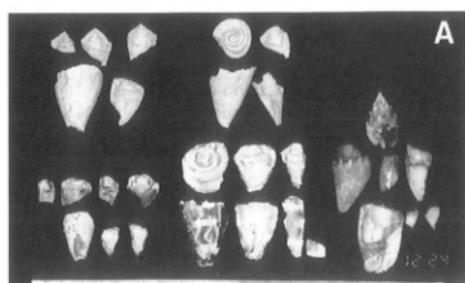
A

B



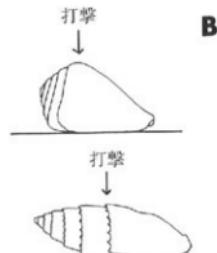
2. タカラガイ類の打ち割られた殻 (A)

上段は貝塚のもの、下段は現生。左からハナマルユキ、キイロダカラ、キイロダカラ



A

B



3. イモガイ類の打ち割られた殻 (A)

上段は貝塚のもの、下段は現生。左からハイイロミナシ、マダライモ、ニシキノキバフデ

図 89 貝塚時代後2期の用見崎遺跡における貝類の打ち割り状況 (黒住, 1998)

で“好まれている”オキニシ（黒住, 2006b, 2013a）の出土も顕著である。

ア) 陸産貝類、特にヤマタニシ類の食用に関して

国分ら（1959）の調査でも、第2貝塚の一部にはヤマタニシ類が極めて高密度に包含されていることが述べられており、これらは食用と考えられている（p. 46）。表10でも第2貝塚でオオヤマタニシ類の割合は高く、今回検討できなかったがヤマタニシ類がほとんどを占める土坑の資料も存在している。さらに、伊仙町の前5期を中心とする犬田布貝塚でもヤマタニシ類が出土貝類の大半を占める結果が報告されている（植之原, 1984）。奄美・沖縄の前4・5期の住居址内貝層を中心にヤマタニシ類等の陸産貝類が貝類遺体中で高頻度を占める状況は、他にも徳之島トマチン遺跡（黒住, 2013a）、沖永良部島・住吉貝塚（黒住, 2006b）、沖縄諸島の古宇利島遺跡（上原, 1983；黒住, 2014bも参照）、シヌグ堂遺跡（比嘉, 1985）等の多くの遺跡で知られている。このヤマタニシ類を中心とした陸産貝類の“食料としての利用”に関して、筆者は、1) 住居址内貝層において陸産貝類が上層に多いこと（沖縄・知場塚原遺跡：黒住, 1988）、2) 遺跡出土ヤマタニシ類の殻径組成が自然状態のものと類似していること（沖縄・平良グスク：黒住・金城, 1988）、3) 現在でも時には自然に死亡した陸産貝類が極めて集中すること（八重山・カイジ浜貝塚：黒住, 1994）、4) 海産貝類でよく観察される焼けた破片が陸産貝類ではほとんど見られないこと（沖縄・ナガラ原東貝塚：黒住, 2013b）等から、「食用ではなく、自然に死亡したもの」と考えている。しかし、時代が限られることに対して明瞭な説明にはなっていない。今後、面縄貝塚の資料を用いて、この現象に関して再検討を加えてみたい。なお、この陸産貝類の増加に関しては、伊藤（1993）は、沖縄諸島において前5期に遺跡が台地上で見られるようになり、魚介類残滓が激減することから農耕が開始された可能性も示唆されていた（例えば沖縄考古学会, 1978）ことに加え、陸産貝類の大量出土も事象の一つとして、“焼畑農耕”的存在を示唆している。

イ) 貝塚時代後2期の変化

後2期の兼久式土器期になると、組成は一変し、ナガウニ類とリュウキュウヒバリ・ミドリアオリがほとんどとなっており、千瀬・礁斜面のものは極めて少なくなっていた。この時期に、リュウキュウヒバリの優占する状況は、奄美大島の用見崎遺跡（黒住, 1995）や沖縄のナガラ原東貝塚（黒住, 2013b）等で知られている。また、アマオブネ類やカサガイ類等の岸側潮間帯の小形貝類が多い奄美大島北部のマツノト遺跡（一部の層準）・用安良川遺跡（黒住, 2005）も存在している。ナガウニ類も、用安良川遺跡では「ウニ土坑」とされるところから大量に廃棄されており（黒住, 2006a）、およそ同時期の沖縄・平敷屋トウバル遺跡でもナガウニ類が優占する層が認められている（金子, 1996）。このように、ナガウニ類の利用は貝塚時代後期にいくつかの集團で顕著になる現象と捉えることができると思われる。ただ、現在、ナガウニ類の食用利用事例はほとんどなく、その利用方法は今後の課題である。

イモガイ類やタカラガイ類等の殻口の狭い種では食用のために、茹でた後、殻を割って身を取り出すことは当然多くの遺跡で行われているが、奄美地方の兼久式土器期では詳細な検討は未了であるが、他の種を含め破損個体の割合が高いように思われる。その方法は、図89に示したような単純な打ち割りと考えられるが、面縄貝塚では“この小形貝類の打ち割り方法や割合の変化”を示すことができることも考えられる。

一方、奄美大島の兼久式土器期ではヤコウガイが集中する遺跡（ヤコウガイ大量出土遺跡）

も多い（例えば木下, 2006）。しかし、今回の報告サンプルのみならず、面繩第1貝塚からはヤコウガイの大量出土は確認されていない（国分ら, 1959；牛ノ浜・堂込, 1985；新里, 2014）。表10のように前2期から後1期までヤコウガイは優占種となっており、また現在も徳之島南部はヤコウガイの高密度生息地として知られている。さらに、ヤコウガイはカムイヤキの“対価”との見解もある中で、カムイヤキ陶器窯跡も近接する本貝塚群から後2期でも大量のヤコウガイ（殻は“交易に用いられて採集地に残らない”可能性も想定されるが、交易品にならないフタは残されるはずであろう）が出土していない現象は興味深いものと思われる。「ヤコウガイ交易」に関しても、本貝塚のデータは新たな視点を投げかけることになるのかもしれない。

（2）貝製品等に関連して

ここでは、食用ではない貝製品の素材等に関連した事象について簡単に述べておきたい。

ア) ゴホウラ

南海産貝交易で利用された中心の種で、前2期から貝輪としての利用が認められている（例えば山野, 2014）。今回も、第4貝塚の古い時代から確認されており、同時に同様な生息場所のラクダガイも出土している。かなり積極的な採集が想定できよう。

イ) ツノガイ類

今回、2種2点が確認された。大形個体は、「マルツノガイ類」としているが（表9）、分類学的には「ヤスリツノガイ類似種」とする方がより正確かもしれないが、後述するようにこれらは化石と考えられ、特徴の少ないツノガイ類で、しかも一部分のみの標本を正確に同定することは現時点では不可能である。そのため、筆者は太く、密で明瞭な肋を有する遺跡出土個体に関しては、暫定的に「マルツノガイ類 *Fissidentalium* sp. cf. *vernerdi*」と表記しておくことが望ましいと考えている。

今回のマルツノガイ類は前2期の第3貝塚から発掘された（第Ⅲ章第3節）。奄美諸島における類例には、奄美大島の宇宿貝塚からの例が知られている（本田, 1979；黒住, 2014c）。本田（1979：第95図-7）の資料は報告書の実測図と写真から本種に同定したが、もしかしたら磨滅したニシキツノガイの可能性も残る。沖縄においては、やはり前2期のサキタリ洞遺跡（山崎, 2015）や前3期の古我地原貝塚（島袋, 1987）の例がある。マルツノガイ類の現生個体は通常水深50m以深に生息し、海岸に打上げられることはなく、奄美・沖縄のいずれの製品も化石個体を利用したものと考えられる。ただ、その化石产地の推定（沖縄のみならず九州の可能性も想定される）も行っていない。また、本遺跡の資料と宇宿貝塚の図示資料は、水磨を受けているように見え、今後人為的な研磨かどうかの検討が必要である。水磨を受けているのならば、“化石が海岸に洗いだされたものを採集した”ということになり、化石产地推定の手掛かりとなろう。

小形個体のサケツノガイ？に関しては、後2期のものであり、第Ⅲ章第2節を参照されたい。

ウ) ツタノハ類

本遺跡群からは、製品のオオツタノハは比較的多く出土しているものの（本報告書）、奄美・沖縄の貝塚時代の他遺跡と同様に、今回もオオツタノハの未加工個体や加工残滓は確認できなかつた。現時点では、ある程度加工された個体が持ち込まれたと考えられる。なお、後2期の



図 90 面縄第1貝塚の土壤サンプルから得られた貝製品（下）と食用遺体（上中）の泥付着状況

表 11 面縄第1貝塚沈殿部分（HF）の2mm未満から抽出されたもの

	2.0mm*	1.0mm*
海産動物		
リュウキュウヒバリ	9(1B)/7u	1u/2u
ミリアオリ	1u/0	
ヒザラガイ類	1tv	
カワチドリ	1e	
ダンダラノミカニモリ？		1lje
巻貝（同定不能）	1ue	2ue
ナガウニ類/殻板	212f	未
ナガウニ類/棘	198(1B)	未
ナガウニ類/殻板	12	未
陸産貝類		
トクノシマヤマタカマイマイ	1uc	
ノミギゼル類	1ab	1ab, 1u, 1w
オナジマイマイ科		1u
その他		
コガネムシ類の糞	82	未

* 全体の1/16分割: 未, 未抽出; B: 煙け, e: 磨滅 f: 破片.
tv: 尾板. u: 殻頂. 陸産貝類の略号は表1参照: 二枚貝は左／右.

の海産動物が少數のみ確認された。食用種の小破片等が多く、カワチドリ・ダンダラノミカニモリ？は死殻や磨滅した破片であり、リュウキュウヒバリ等の足糸間にトラップされた堆積物由来と思われる。

この結果は、これまでにも指摘してきたように（黒住, 2002）、この時期の本遺跡でも「海

ツタノハのうち、計測可能であった7個体は、殻長19～23mmとかなり小形の個体であった。

エ) マガキガイ貝玉

小形ツタノガイと同じ後2期の土壤サンプルから抽出されたもので、詳細は第III章第2節に述べられている。この貝玉は同時に水洗抽出された食用のリュウキュウヒバリ等とは異なり、資料に泥の付着はほとんど認められなかった（図90）。これは、貝玉が人に利用され、磨かれ方や人からの付着物（脂等）により、殻表面の状態が普通の食用遺体の殻とは異なっていたことも想定される。通常の発掘資料では、ブラシによる洗浄が普通であるが、もし付着物が存在していると考えられるならば、今後、洗浄方法の検討も必要なようと思われる。

オ) 化石貝類等

第3貝塚の洞穴部資料には、比較的多くの化石貝類等が含まれていた（表9）。簡単な観察では、研磨等の加工は認められなかった。単に周辺の石灰岩中の崩落に由来する可能性もあるが、もしかすると、島内の他地域からの持込みの可能性も否定できない。今後の調査時に注意の払われることを望みたい。

(3) 海産微小貝類

今回の報告資料中には、第1貝塚の兼久式土器期でのみ土壤サンプルの2および1mmメッシュ上の微小貝類を検討した。その結果、沈殿部分（HF）からは6種程度（表11）、浮遊部分（LF）からは3種（表12）

表 12 後2期の面縄第1貝塚の浮遊部分（LF）から抽出された貝類遺体（暫定）

	4mm	2mm	1mm	0.5mm*	0.5mm>*
陸産貝類					
オキナワヤマキサゴ	1jc?	7a,14lj,2mj,1u,1w	27.2op	10.1op	
ゴマオカタニシ類			44	7	
オオヤマタニシ類		2sj			
ゴマガイ類			1ab		
トクノシマアズキガイ?		1mj	2sj		
ホラアナゴマオカチグサガイ類				1	
ケシガイ類				40	1u
ノミガイ			15c	23c	
スナガイ			18a	5	
ミジンサナギガイ				71	9
ヒコマルナタネ類			7c	7	
オオシマキセルモドキ?		1u	9		
キカイミギセル?		4a,3ab,1ljb			
ノミギセル類			27	22	
シリブト・オカチョウジ	1ab,10lj,2mj	2a,1ab,8lj			
ホソオカチョウジガイ	1a	2a			
オカチョウジガイ類			78	59	
オカチョウジガイ類?(卵)			2	2	
ナタネガイ類				3	
カサキビ?		1lj			
ナハキビ			2		
マルキビ?			3		
タカキビ?			1		
ヒラシタラ			18	13	
ヒメベコウ類 spp.			15	8	
コハクガイ類?				11c	2
トクシマヤマタカマイマイ	1sj				
ナンバンマイマイ科		15sj			
オキナワスカワマイマイ	1mj	10mj,2mj,b,16sj,2u			
マメヒロペソマイマイ	1a	2mj			
トクシマオオペソマイマイ		1mj,18sj			
トクシマケマイマイ		1mj,5sj			
タメモマイマイ		2sj			
オナジマイマイ科			81	3u	
陸産貝類/不明					5u
淡水産貝類					
トウガタワニナ	1a				
海産貝類					
イシダミアオブネ	1a				
ダンダラノミカニモリ?			1sje		
チヤツボ型?				1a	

*: 1/3抽出数、a: 成貝、b: 体殻、c: 色彩残り、e: 磨滅、lj: 大形幼貝、mj: 中形幼貝、sj: 小形幼貝。

u: 鰓頂、w: 蟛殻。略号のないものはNISP。

藻類の利用」や「海藻等の上に生息する葉上性貝類を指標にした初期製塩の検証」はできなかつたことになる。面縄貝塚の中では、新しい時代に属する第1貝塚のサンプルであることから、以前の時代においても葉上性貝類から検証できる行為はなかったと考えたい。

また、沖縄の同時期（後2期）のナガラ原東貝塚でもリュウキュウヒバリとミドリアオリが優占し、後者は真珠貝の一種で、微小ながら真珠も得られており、筆者は真珠採集の可能性もあるのではないかと考えてきた（例えば黒住, 2011）。第1貝塚のサンプルでは、ミドリアオ

りはかなり少なく（表9）、また2cm程度の幼貝も多かった。また真珠は確認できなかった。このことから、少なくともこのサンプルからは積極的な真珠採集は想定しづらかった。

（4）陸貝微小貝類

海産微小貝類と同様に、第1貝塚の土壌サンプル中より、浮遊部分から30種、多数の陸産貝類が抽出された（表12）。今回は時間がなく詳細なチェックはできなかったが、ノミガイ等多くの種で色彩の残った現生個体（表中のc）がかなり高い割合で含まれていた。これは、表11にコガネムシ（ハナムグリ）類の糞で示したように、この深さ（4～10cm）においてもコガネムシ幼虫による土壌の攪拌の影響が強く及んでいることを示している。そのため、後2期の陸産貝類遺体から環境を復元することはできなかった。

ただ、表12の種の中には、ヒラドマルナタネ類・ナタネガイ類・カサキビ？・タカキビ？・コハクガイ類？等のこれまでに徳之島から正式な報告のなかったと思われる種や、ゴマガイ類・トクノシマアズキガイ？・ミジンサンナギガイ等の“希少種”も含まれており、今後、考古年代の明らかな搅乱の少ない土壌サンプルを処理・分析することによって、上記の種の変遷を検討できよう。それによって、奄美・沖縄地域において初めて、一地域における人間活動が周囲の森林にどのような影響を与えたのかという大変興味深いデータを示すことができると期待される。

謝辞：伊仙町教育委員会の新里亮人氏には極めて興味深い本貝塚の資料を検討させて頂く機会を与えて頂いた。また同教育委員会の方々には困難な一次同定・カウントでお世話になった。本報告の一部には、科学研究費（15H05966：研究代表者：金原正明、15K02990：研究代表者：種泉岳二）を用いた。

引用文献

- 比嘉春美, 1985. 貝類. シヌ堂遺跡, 沖縄県文化財調査報告書, (67): 180-181, 2 pls. 沖縄県教育委員会, 沖縄.
- 本田道輝, 1979. 貝器・装飾品, In 河口貞徳（編）, 宇宿貝塚, 笠利町文化財調査報告, pp. 92-95, 167-171, 201-204.
- 伊藤慎二, 1993. 琉球縄文文化の枠組, 南島考古, (13): 19-34.
- 金子浩昌, 1996. 動物遺体（軟体動物を除く）, 平敷屋トウバル遺跡, 沖縄県文化財調査報告書 (125): 168-183.
- 木下尚子, 2006. ヤコウガイ交易の可能性, In 木下尚子（編）先史琉球の生業と交易2—奄美・沖縄の発掘調査から—, pp. 201-219. 熊本大学文学部.
- 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨・原口正三, 1959. 奄美大島の先史時代, In 九学会連合奄美大島共同調査委員会（編）, 奄美-自然と文化, 論文編, pp. 196-271, 14 pls. 日本学術振興会, 東京.
- 黒住耐二, 1988. 軟体動物遺存体, 知地塙原遺跡, 本部町文化財調査報告書, (5): 95-115.
- 黒住耐二, 1994. 沖縄県竹富町カイジ浜貝塚出土の貝類, カイジ浜貝塚, 沖縄県文化財調査報告書, (115): 89-100, 248-259.
- 黒住耐二, 1995. 貝類遺存体, 用見崎遺跡, 笠利町文化財調査報告, (20): 34-43.
- 黒住耐二, 1998. 1997年の用見崎遺跡調査で得られた貝類遺存体（予報）, 用見崎遺跡(Ⅲ), 熊本大学文学部考古学研究室活動報告, (33): 38-45.
- 黒住耐二, 2002. 貝類遺体からみた奄美・沖縄の自然環境と生活, In 木下尚子（編）, 先史琉球の生業と交易－奄美・沖縄の発掘調査から－, pp. 67-86. 熊本大学文学部.

- 黒住耐二, 2005. 用安良川遺跡から得られた貝類遺体（予報）, 安良川遺跡, 笠利町文化財調査報告書, (27):72-76.
- 黒住耐二, 2006a. 貝類遺体からみた遺跡の立地環境と生活, In 木下尚子(編), 先史琉球の生業と交易 2—奄美・沖縄の発掘調査からー, pp. 115-134. 熊本大学文学部。
- 黒住耐二, 2006b. 貝類遺体からみた沖永良部島住吉貝塚の特徴, 住吉貝塚, 知名町埋蔵文化財調査報告書, (10): 132-141.
- 黒住耐二, 2011. 琉球先史時代人とサンゴ礁資源－貝類を中心－, In 高宮広土・伊藤慎二(編), 先史・原史時代の琉球列島～ヒトと景観～, pp. 87-107. 六一書房, 東京。
- 黒住耐二, 2013a. トマチン遺跡出土の貝類遺体, In 新里貴之(編), 德之島トマチン遺跡の研究, pp. 186-196. 鹿児島大学。
- 黒住耐二, 2013b. ナガラ原東貝塚の貝類遺体, In 木下尚子(編), ナガラ原東貝塚の研究, pp. 340-362. 熊本大学文学部。
- 黒住耐二, 2014a. 面繩第2貝塚の貝類遺体（予察）, 面繩貝塚群Ⅱ, 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書, (15): 54-58.
- 黒住耐二, 2014b. 貝類遺体からみた沖縄諸島の環境変化と文化変化, In 高宮広土・新里貴之(編), 琉球先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究, 研究論文集, 第2集, 琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷, pp. 55-70. 六一書房, 東京。
- 黒住耐二, 2014c. 化石貝と微小貝からみた資源利用, 季刊考古学別冊, (21): 149-153.
- 黒住耐二, 2015. 平安山原B遺跡の調査で得られた貝類遺体, 平安山原B遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (37): 388-404.
- 黒住耐二・金城亜信, 1988. 豊見城村の長嶺、保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類, 豊見城村の遺跡, 豊見城村文化財調査報告書, (3): 137-155.
- 沖縄考古学会(編), 1978. 石器時代の沖縄, 140 pp. 新星図書, 沖縄。
- 島袋春美, 1987. 貝製品, 古我地原貝塚, 沖縄県文化財調査報告書, (84): 278-301.
- 新里亮人(編), 2014. 面繩貝塚群Ⅱ, 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書, (15): 1-80, 4 pls.
- 上原 静(編), 1983. 古宇利原遺跡発掘調査報告書, 今帰仁村文化財調査報告書, (8): 1-149.
- 植之原道義, 1984. 大田布貝塚出土の貝について, 大田布貝塚, 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書, (2): 64-73.
- 牛ノ浜 修・堂込秀人(編), 1985. 面繩貝塚群, 伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書, (3): 1-182.
- 山野ケン陽次郎, 2014. 先史琉球列島における貝製品の変化と画期一貝製装飾品を中心にー, In 新里貴之・高宮広土(編), 琉球先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究, 研究論文集, 第1集, 琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化, pp. 277-291. 六一書房, 東京。
- 山崎真治(編), 2015. 沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書Ⅱ, 100 pp. 沖縄県立博物館・美術館, 沖縄。

第2節 面縄貝塚から出土した脊椎動物遺体群の特徴と重要性

樋泉岳二（早稲田大学）

はじめに

徳之島南部の伊仙町に所在する面縄貝塚（第1～第4貝塚）では、平成14年度以降の発掘調査によって貝塚時代前1期（縄文時代早期～前期並行期）から後2期（古墳時代～古代並行期）にいたる各時代の遺跡が確認され、脊椎動物遺体（魚骨・鳥獸骨など）が出土した。ここでは、これらの概要を報告し、その特徴について考察する。

1. 分析資料と分析方法

今回分析した資料の一覧を表13に示した。採集された資料には、ピックアップ資料（発掘時に現場で目視確認され、手で取り上げられた資料）と、水洗選別資料（堆積物サンプルを水洗選別して回収された資料）がある。資料の採取方法や水洗選別方法は調査区により若干の違いがあるので、詳細は調査区ごとに後述する。なお現時点において、面縄第2貝塚の平成23年度調査資料については分析を終えていないため、今回の報告には掲載していない。

同定対象部位については、魚類は主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・椎骨を必須部位とし、それ以外にも分類群に応じて同定可能な部位を適宜同定対象資料とした。魚類以外については、部位の判別可能な資料を同定対象とした。ただし鳥類と哺乳類の四肢骨骨幹破片のうち、骨幹の全周を残さないものは対象外とした。同定方法は原則として現生標本との比較によった。なお、水洗選別資料の2mm・1mmメッシュで回収された椎骨の多くは、硬骨魚類（真骨類）ではあるが同定の手掛かりとなる特徴に乏しく詳細な分類群を特定することが困難であった（これらについては「真骨類（保留）」とした）。

2. 分析結果

（1）第1貝塚

分析資料は平成25年度調査の際に第1貝塚東側の崖の中段にある「テラス」部分に堆積した兼久式期（貝塚時代後2期＝古墳時代～古代並行期）の貝層サンプル（「テラス面No.4」）から水洗選別によって検出された資料である。水洗選別作業は黒住耐二氏（千葉県立中央博物館）によって行われた。水洗に使用されたメッシュは9.5mm、

表13 面縄貝塚平成14年度以降の調査で採集された脊椎動物遺体資料のリスト

地区	年度	位置	年代	採集方法	備考
面縄第1	平成25	テラス面	兼久	水洗H ^b	
	平成14	校舎改築	鹿港	ピックアップ 水洗H ^b	
	平成23	面縄小学校校庭内 東側	鹿港	ピックアップ 水洗H ^b	分析未了
面縄第3	平成19	1)レンチⅢ層	スセン當	ピックアップ 水洗H ^b	
		2)レンチ	宇原上層	ピックアップ	水洗選別実施せず
	平成27	砂丘面	条痕文	現地乾拭い(約5mm)	
面縄第4	平成19	2)レンチⅣ層	面縄前庭/仲泊	ピックアップ	
				水洗H ^b	

表14 面録貝塚平成14年度以降の調査で採集された脊椎動物遺体の種名一覧

和名	学名	第1貝塚	第2貝塚	第3貝塚	第4貝塚
		平成25年度 新久	平成14年度 喜徳	平成19年度 宇宙土壤 スセン霊	平成27年度 条痕文
軟骨魚綱(板鰓類)					
イタチザメ	<i>Galeocerdo cuvieri</i>			○	
ホホジロザメ属	<i>Carcharodon</i>			○	
サメ目	Lamniformes ?		○	○	○
エイ目	Rajiformes		○		
硬骨魚綱(真骨類)					
ウナギ属	<i>Anguilla</i>	○			○
ウツボ科	Muraenidae	○	○		○
アラゴ科	Congridae	○	○		
エフ科	Synodontidae	○			
ダツ科	Belontiidae		○		○
イシのダイ科	Holocentridae			○	○
ハク鯛(マハク型)	<i>Serranidae cf. Epinephelus</i>		○		○
ハク鯛(スジアラ型)	<i>Serranidae cf. Plectropomus</i>		○		
ハク鯛	Serranidae		○		
アノ利科?	Carangidae ?		○		
エソ科	Lutjanidae		○		
クロダイ属	<i>Acanthopagrus</i>		○		
メチダニ属(ショウダイ型)	<i>Gymnochromis cf. G. japonicus</i>		○		
ヨシマシマクロダイ	<i>Monopterus grandoculis</i>		○		
エフキダマ属(ハマフエフキ型)	<i>Lethrinus cf. L. nebulosus</i>				
エフキダマ属	<i>Lethrinus</i>		○		
エフキダマ科?	Lethrinidae	○	○		○
スズメダイ科?	Chaetodontidae		○		
ベラ科(タカベラ型)	Pomacanthidae			○	
ベラ科	Labridae				
ベラ科A	Labridae A		○		
ベラ科B	Labridae B		○		
ベラ科(その他)	Labridae (others)		○		
ベラ科	Labridae	○	○		○
イロノダイ属	<i>Balistespolylepis</i>		○		
オオノダイ属	<i>Scorpaenidae</i>	○	○	○	○
ブダ科	Scorpaenidae	○	○	○	○
ニザギ科	Acanthrinidae	○	○		
アイゴ属	Siganidae	○	○		
カレイ亜目	Pleuronectoidei	○	○		
モンガラカワハギ科	Balistidae	○	○		○
ハコグダ科?	Ostraciidae ?		○		○
フグ科	Tetraodontidae		○		
ハリセンボン科	Diodontidae ?	○	○		○
両生綱					
カエル属	AMPHIBIA				
隕虫綱	Anura	○			
ヘビ類	RRPHTILIA				
ワニガメ	Serpentes	○	○	○	○
鳥綱	AVES				
カラス属	<i>Corvus</i>		○		
鳥類(同定不可)	Order indet.	○	○		○
哺乳綱	MAMMALIA				
ネズミ亜科	Murinae		○		
ネズミ科	Muridae	○	○	○	○
ウサギ科	Leporidae		○		
イス	<i>Canis familiaris</i>		○	○	
イヌシ	<i>Sus scrofa</i>	○?	○	○	○
ウシ	<i>Bos taurus</i>		○	○	○
ジバゾ	<i>Dugong dugon</i>		○		
クジラ	Cetacea (large)		○		

4mm、2mm、1mm の 4 種類で、骨の抽出は 9.5mm・4mm 回収資料は黒住氏、2mm・1mm 回収資料は筆者が行った。

同定結果を表15に、同定資料数(NISP)による組成を表16に示した。資料のはほとんどは

表 16 面縄第1貝塚平成25年度調査「テラス面No.4」地点の貝層サンプルから検出された脊椎動物遺体の組成 (NISP)

魚類の歯・鱗・棘をのぞく。

種類	(1)				(2)				(3)				(4)				合計				
	0.5mm	4mm	2mm	1mm	21	0.5mm	4mm	2mm	1mm	21	0.5mm	4mm	2mm	1mm	21	0.5mm	4mm	2mm	1mm	21	
ウナギ属	0	0	1	1	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	
アナゴ科	0	0	1	1	2	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	0	2	2	
ウツボ科	0	0	3	1	4	1	2	3	1	2	3	2	3	0	0	2	3	10	10	10	
エソ科	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	
ハタ科	0	0	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	0	4	
ハタ型	1	1	1	1	1	1	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	4	1	6	
フルカクダイ科	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
チラ型	1	1	2	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	2	
チクワツウツボ科?	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
ハタ科	1	1	1	1	3	1	0	0	0	2	2	0	0	0	0	1	4	4	4	9	
アオダイ属	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
ブダイ科	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	
ニザダイ科	1	1	7	7	7	1	1	1	1	6	6	6	1	14	0	15	0	0	0	0	
アイゴ属	1	1	2	3	3	3	3	3	3	0	0	0	1	7	0	8	0	0	0	1	
カレイ(辰日)	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	
モンガラカワハギ科	1	1	2	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
ハリセンボン科	(13)	(13)	(22)	(40)	(40)	(20)	(13)	(13)	(13)	(13)	(13)	(13)	(13)	(27)	(22)	(9)	(9)	(9)	(9)	(9)	
真骨類未判定	0	0	3	3	3	0	3	3	3	0	0	0	0	0	0	0	2	6	8	8	
真骨類(保留)	1	2	1	4	1	5	3	9	7	12	19	10	7	17	2	24	23	49	49	49	
真骨類(判定不可)	1	1	1	1	1	2	2	5	2	8	10	1	5	11	2	30	15	27	27	27	
魚類合計	1	6	7	1	15	0	7	30	19	47	0	0	1	26	13	40	1	14	82	53	150
カエル類	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	
両生・爬虫類	0	0	0	0	0	0	2	2	2	2	0	0	0	0	0	0	2	2	2	2	
ヘビ	0	0	0	0	0	0	2	2	2	2	1	1	1	1	1	0	3	0	3	3	
鳥類(同定不可)	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	
ネズミ科	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	
イノシシ科	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	
小型哺乳類(同定不可)	1	1	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1	1	1	2	
計	1	8	7	2	14	0	9	21	10	50	0	1	29	25	24	0	1	27	12	41	1

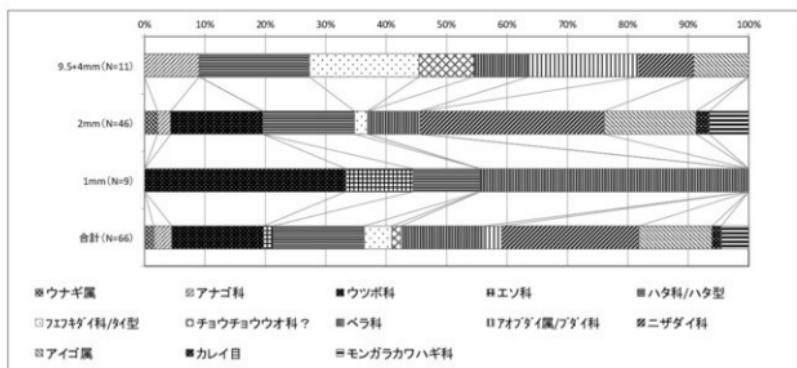


図 91 面縄第1貝塚平成25年度調査「テラス面No.4」地点貝層サンプルから検出された魚類遺体の組成 NISP 比 (歯・鱗・棘を除く)

4mm メッシュ以下で回収されており、とくに 2mm・1mm メッシュの回収資料が多い。資料のほとんどは魚類で、それ以外ではカエル類・ヘビ類・鳥類・ネズミ類・イノシシ? などがわずかに確認されたのみである。魚類組成については「真骨類(保留)」とした資料が多いが、科レベル以下で分類群を特定できた資料についてみると(図 91)、全体としてウツボ科・ハタ科・ベラ科・ニザダイ科・アイゴ属が多い。

今回の調査ではピックアップ資料が得られていないため、大型の鳥獣類の内容については明らかでないが、昭和 57 年度調査では兼久式期の A 区から哺乳類と魚類を主体とする多数の脊

椎動物遺体が出土している（西中川 1985）。魚類の内容は不明だが、鳥獣類についてはイノシシを主体とし、イス、ネズミ類、鳥類、カメ類（おそらくウミガメ）も若干確認されている。

（2）第2貝塚

平成14年度に実施された発掘調査において、嘉徳式期（貝塚時代前4期＝縄文時代後期並行期）の造構や包含層から多数の脊椎動物遺体が採集されている。ピックアップ資料と水洗選別資料がある。これらの概要については、すでに植泉（2014）で報告したが、ピックアップ資料についてはその後さらに追加分析を行い、全資料の同定を完了したので、ここで改めて報告する。

ピックアップ資料：同定結果を表17～19に、同定資料数（NISP）、最小個体数（MNI）による組成を表20に示した。脊椎動物全体の組成（図92）をみると、多様な魚類とイノシシを中心とする陸獣類が大半を占めており、他にウミガメ類、鳥類、海獣類（クジラ類）が確認されている。

魚類はハタ科、フエフキダイ科、ブダイ科、ニザダイ科が多く、ベラ科、モンガラカワハギ科、ウツボ科なども普通にみられる（図93・94）。量的な組成は層準や造構によってかなりの変動があるが、上記の魚種が優占種となる点では一貫している。

ハタ科はマハタ属と思われるものが多いが、スジアラに類するものもみられる。なおハタ科の椎骨は他の類似種との判別が難しいものがあるため「ハタ型」としたが、これらの多くもハタ科のものと考えられる。フエフキダイ科はフエフキダイ属（前上顎骨はハマフエフキに類するものが主体）が多く、他にヨコシマクロダイ、メイチダイ属（シロダイに類するタイプ）が確認されている。ブダイ科の咽頭骨・前上顎骨・歯骨の大半はオオブダイ属で、ほかにイロブダイ属が1点みられた。ベラ科の咽頭骨には「ベラ科A」「ベラ科B」（金子1996）およびそれ以外の種が混在している。

出土した魚類の大半は奄美・沖縄諸島のサンゴ礁やその周辺の内湾域の普通種である。

哺乳類はイノシシが圧倒的に多く、ウサギ科（アマミノクロウサギと思われる）も普通である。他にネズミ科、イスが確認された。ネズミ科の顎骨はすべてネズミ亜科で、かなり大型の個体もみられることから、ケナガネズミが含まれている可能性が強い。

水洗選別資料：検出数は少ない。同定結果を表21に、NISPによる組成を表22に示した。大半は魚骨で、他にヘビ類の椎骨、ネズミ亜科やイスの歯がわずかに確認された。魚類組成については「真骨類（保留）」とした資料が多いが、科レベル以下で分類群を特定できた資料に関してはウツボ科、ハタ科、フエフキダイ科、ブダイ科、ニザダイ科、アイゴ属の出現頻度が比較的高い（図95）。これはピックアップ資料とおおむね同傾向だが、アイゴ属やウツボ科がやや多い。

（3）第3貝塚

平成19年度調査（1トレンチ・2トレンチ）および平成27年度調査の出土資料がある。

平成19年度調査：1トレンチからスセン當式期（貝塚時代後1期＝弥生～古墳時代並行期）、2トレンチから宇宿上層式期（貝塚時代前5期＝縄文時代晚期並行期）のピックアップ資料が得られているが（表23）、いずれも資料数はごく少なく、同定できた資料は1トレンチでイノシシ3点、2トレンチでイノシシ4点、イス・ウシ各1点のみである（ウシは後世資料の混入

表 18 面縄第2貝塚平成14年度調査地点から出土したイノシシ下顎骨・遊離歯の詳細

* 残存位置の[]は顎骨の残存範囲を示す。

遺構	層準	グリッド	部位	左右	枚	残存位置*	備考
SK-02	MI層	B-4/5-C-4/5	下顎骨	R	1	[m2-m3]	全齒残存、幼齢
SK-03	MI層	C-2	下顎B2	L	1		
SK-03			下顎M1	L	1		
SK-03			下顎骨	L+R	1	連合部	
SK-03	MI層	C-2	下顎骨	R	1	[H-C]	C以外脱落、少
SK-03			下顎骨	R	1	[M3-糸-開歯突起]	
SK-03			下顎骨	R	1	[m1-M1]	m3以降脱落、幼齢
SK-03	MI層	C-2	下顎H1	R	1		
SK-04			下顎骨	L	1	下顎枝	
SK-04	MI層	C-2	下顎C	L	1		
SK-05			下顎骨	L	1	[H-C]	全齒脱落、♂
SK-05	MI層	B-1/2-C-1/2	下顎H1	L	1		
SK-06	半段時理土	B-3	下顎B2	L	1		
SK-07	MI層	B-3/4	下顎C	R	1		
SK-09	MI層	D/E-7	下顎骨	L	1	[m3]	幼齢
SK-09	MI層		下顎B2	L	1		
SK-09	MI層		下顎D1	R	1		
SK-09	MI層		下顎骨		1	術槽最後部	
SK-09	MI層	D/E-7	下顎骨		1	連合部	
SK-09?	MI層	D-7	下顎骨		1	術槽最後部	
遺構外	黒層(白砂)	C-2	下顎骨	R	1	[P3-P4]	P3脱落
遺構外	III層底下～IV層5cm	C-2先行ハンチ	上顎H1	L	1		
遺構外	IV層(白砂)0/15cm	B-2	下顎骨	L	1	[M2-M3]	全齒脱落
遺構外	V層	B-1	下顎骨	R	1	[I1-m1]	全齒脱落、幼齢
遺構外	VI層	A/B-3	下顎骨	?	1	[P4]	術槽落
遺構外	VII層	C-2	下顎骨	R	1	[I1-m2]	全齒脱落、幼齢

表 19 面縄第2貝塚平成14年度調査地点から出土したイヌ遺体の詳細

* 残存位置の略号凡例は表17を参照。

層準	資料No.	グリッド	袋No.	部位(元)	残存位置	左右	枚	備考
SK-02 MI層				上顎C		L	1	
SK-02 MI層				第1中手骨		R	1	
1層	530			軸椎		1	♂や大型	
1層	1182			上腕骨	d	R	1	
III層	881			下顎骨	[吻端-M2]	L	1	C×P4+M1残存、P1+P2+M3欠損
III層	881			下顎骨	[ほぼ完存(下顎角欠)]	R	1	P3+M1+M2残存、P1+M3欠損、Lと同一個体
III層	881			蝶椎		1	おそらく下顎骨と同一個体・蝶椎か?	
III層	894			上腕骨	<P>	R	1	
III層	A-5	471		胸椎		1	おそらく以下同一個体	
III層	A-5	471		腰椎		1		
III層	A-5	471		椎骨	椎体	1		
III層	A-5	471		椎骨	棘突起	1		
III層	A-5	471		更骨(脚骨)	E1	R	1	
III層	A-5	471		更骨(脚骨)	E1	L	1	
III層	A-5	471		更骨(脚骨)	E1	R	1	おそらく同一個体
III層	A-5	471		更骨(脚骨)	E1	L	1	
III層	A-5	471		大脛骨	<P>	R	1	
III層	A-5	471		肋骨	P	9		
III層	A-5	471		肋骨	M	8		
IV層下限10～20cm	B-5	442		上顎C		R	1	
V層(黒砂)	A-3	435		中手・中足骨	<P>-d	?	?	
V層(黒砂層)	A/B-4	443		上腕骨	(p1)-(p2)-d	L	1	
V層(黒砂層)	A/B-4	443		腕骨	(p3)-(p4)-d	R	1	
V層(黒砂層)	A/B-4	473		椎骨		R	1	
V層(黒砂層)	A/B-4	473		更骨(脚骨)	E1	R	1	傷骨+座骨+恥骨
V層(黒砂層)	A/B-4	473		更骨(脚骨)	E1	L	1	
V層(黒砂層)	A/B-4	473		肋骨	P	1		
V層	231			大脛骨	M	R	1	
VI層	1422			下顎骨	[C-M1]	R	1	P1+P2脱落前標記、C+P3+M1残存

表20 面縫第2目塚平成14年度調査地点から出土した脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成
＊MNIは全資料の合計値に基づいて算出した。

種類	NSP																	MNI	
	1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	8層	9層	10層	11層	12層	13層	14層	15層	16層	17層		
サメ類	2																	1	
エイ科	1	1																2	
ウツボ科		1	3															4	
アナゴ科							2											2	
ダツ科																		1	
マツタケ型	2						6											11 (3)	
スジアコ型							1											3 (2)	
ハコ科	2	3	3	4	1	5												22 (7)	
ハク型	2	3	1	2	5													18 (—)	
フルギ科		1	2	1	1													6 (2)	
クロダイ属						2												3 (2)	
メイダゲンシロダイ属							1											1 (1)	
ヨコマカガメ							3											6 (2)	
ハコフカフキ型							4	4										1 (10) 8	
フルフカフキ属							3											9 (4)	
フルフカフキ科	1	2	1	1	6	5												28 (9)	
タガ型	1						1	1										11 (—)	
バク科A							4	1										7 (4)	
バク科B							2											3 (3)	
バク科(その他)	1																	2 (2)	
バク科	1	1	2	1	1													8 (3)	
イオブダイ属							1											1 (1)	
イオブダイ属	3						8	1	1									29 (6)	
ブダイ科	2		2	11	1	1												22 (11)	
ニザグサ科	4	7	2	5	5	11												1 (40) 4	
モンガラカラハモ科	2		1	3	1	1												8 (4)	
フグ科	1																	1 (1)	
ハセハボン科																		2 (1)	
魚骨類(未留)	1	4	1	3	2	1												23 (—)	
魚骨類(同定不可)	2		1	1														4 (—)	
ハビ類(ハブタ)							1											1 (1)	
ウミガメ	1	2		2		1	2											11 (1)	
カラス属						1												4 (2)	
鳥類(未同定)							2											2 (1)	
鳥類(同定不可)							2	1										5 (—)	
鳩類/サザウ							1											1 (—)	
ホバヒ原科							2											2 (2)	
ホバヒ科	2	3		1														1 (7) (3)	
ホバヒ科?							1											1 (3) (—)	
ウサギ科		3	2			4												25 (4)	
イヌ	2	30	1	8	1													44 (2)	
イノシシ	16	27	6	12	14	2	26		1	1	4	25	14	2	5	4	4	185 (7)	
イノシシ?	4	5	2	4		3	1											24 (—)	
小型哺乳類(保育)	2																	3 (—)	
小型哺乳類(同定不可)	3																	3 (—)	
小/中型哺乳類(同定不可)	2	1		2														5 (—)	
哺乳類(保育)							4		1									6 (—)	
ジヌガン							1											1 (1)	
クジラ																		1 (3) (1)	
合計	18	95	40	41	108	11	90	1	1	0	0	45	37	55	5	6	7	5	292 (76)

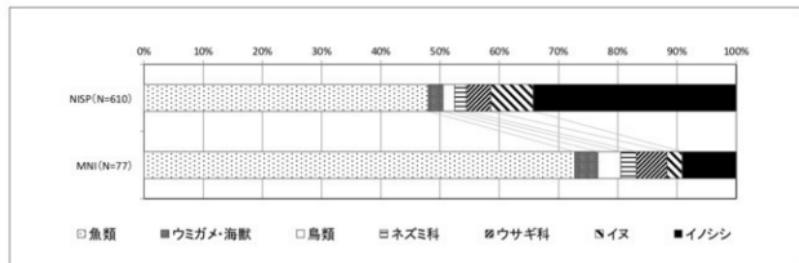


図 92 面縄第2貝塚平成14年度調査地点から出土した脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成

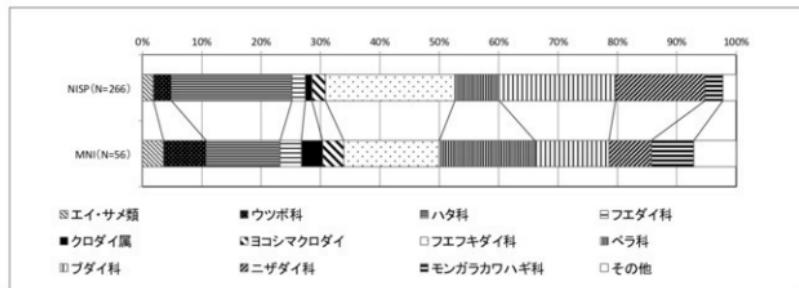


図 93 面縄第2貝塚平成14年度調査地点から出土した魚類遺体（ピックアップ資料）の組成

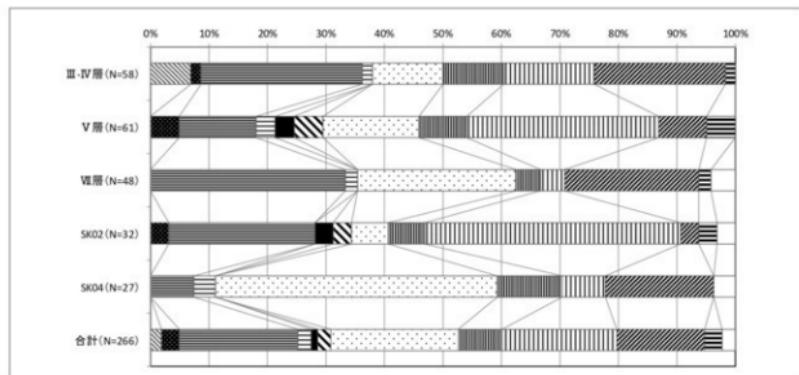


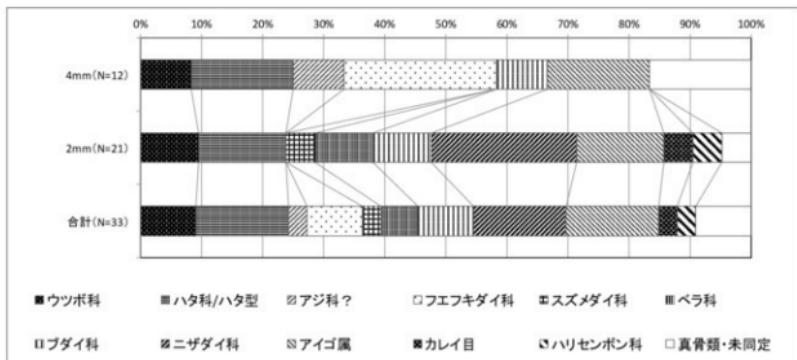
図 94 面縄第2貝塚平成14年度調査地点から出土した魚類遺体（ピックアップ資料）の層準・遺構別組成（NISP比）

表 22 面縄第2貝塚平成14年度調査地点の水洗選別資料から検出された脊椎動物遺体の組成 (NISP)

4mm・2mmのいずれかの表示がないサンプルは、そのメッシュから同定対象となる骨が検出されなかつたことを示す (1mm メッシュからは遺体が検出されなかつた)。

< > に付したもの（術、鱗、棘）は合計値に含めていない。

種類	SK-01								SK-03				SK-07				SK-08				合計
	上位M1		上位M2		上位理上		中位理上		下位理上		M1		M1		M1		M1		M1		
	北東 1/4	北西 1/4	北東 1/4	北西 1/4	南西 1/4	北東 1/4	南西 1/4	北東 1/4	北東 1/4	北東 1/4	-	1.20cm -F30cm	1.30cm -F50cm	超下解 b-7	4mm	2mm	2mm	4mm	4mm	2mm	合計
	2mm	2mm	2mm	4mm	2mm	4mm	2mm	2mm	2mm	4mm	2mm	2mm	2mm	2mm	4mm	2mm	2mm	4mm	4mm	2mm	合計
ウツボ科									1					1				1	1	2	3
ハタ科											2	2							2	2	4
ハタ型											1									1	1
アジ科?											1								1	1	
フエフキダイ科											1								3	3	
タイ型									(1)									*	*	*	
スズメダイ科														1					1	1	
ペラ科		1												1					2	2	
ブダイ科	1													1					1	2	3
ニザダイ科												4			1				5	5	
アゴノ属											2	3							2	3	5
カレイ目											1								1	1	
ハコフグ科											(1)	(3)						*	*	*	
ハリセンボン科									1		(1)								1	1	
真骨類・未定											2	1							2	1	3
真骨類・保留											4	26	1					6	27	33	
真骨類・同定不可	1					1	1	1			8			2				1	12	13	
ヘビ類	1													1				1	1	2	
サバ科																		1	1	1	
小型哺乳類・保留	1											1							1	1	
イヌ														1					1	1	
合計	2	2	1	1	1	2	1	1	12	47	1	3	3	3	1	1	1	20	64	84	

図 95 面縄第2貝塚平成14年度調査の水洗選別資料から検出された魚類遺体の組成 (NISP 比)
術、鱗、棘は含めていない。

である可能性が高い）。また1トレンチでは水洗選別も実施されているが（表24）、やはり検出された資料は少なく、水洗された11サンプルのうち同定可能な資料が得られたのは5サンプルのみで、ハタ型椎骨1点、詳細な同定が困難な真骨類2点、イノシシ2点、ヘビ類・ウミガメ・ネズミ科各1点が確認されるにとどまった。ヘビ類とネズミ科は自然の遺散の可能性が高い。

平成27年度調査：条痕文土器を伴う砂丘堆積物から、調査現場での5mm メッシュを使用したフルイがけによってやまとまつた資料（NISP 合計38点）が得られている（表25、図96）。内容はイノシシが26点ともっと多く、他にオオブダイ属・ブダイ科7点、サメ類5点（イ

表 23 面縄第3貝塚平成19年度調査地点から出土した脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の同定結果
※残存位置の略号凡例は表17を参照。

地点No.	グリッド	層準	年代	種類	部位	残存位置*	左右	数	備考
1トレンチ		Ⅲ層	スセン當	イノシシ	上腕骨	<d>	R	1	
1トレンチ		Ⅲ層	スセン當	イノシシ	尺骨	m	R	1	
1トレンチ	A-3	IV層	スセン當	イノシシ	尺骨	潘車切歯	R	1	
2トレンチ		Ⅲ層	宇宙上層	イヌ	脛骨	<p>,<d>	R	1	ごく小型→幼獣?
2トレンチ	B-3	Ⅲ層	宇宙上層	イノシシ	上顎II		L	1	
2トレンチ	A-2	IV層	宇宙上層	イノシシ	下顎骨	[P2-M1]	R	1	全齒残存
2トレンチ	A-2	Ⅲ層	宇宙上層	イノシシ	脛骨	(6)	L	1	
2トレンチ		Ⅲ層	宇宙上層	イノシシ	踵骨		L	1	小型→幼獣?
2トレンチ	B-2	Ⅲ層	宇宙上層	ウシ	中足骨	pfr	L	1	

表 24 面縄第3貝塚平成19年度調査地点の水洗選別資料から検出された脊椎動物遺体の同定結果

地区	層準	古帳番号	水洗量	種類	部位	残存位置	左右	数	備考
1トレンチ	IV層	78	30	ハタ型	腰椎			1	
1トレンチ	IV層	78	30	真骨類同定不可	尾椎			1	
1トレンチ	IV層	111	40	真骨類同定不可	歯			1	
1トレンチ	IV層	80	30	ヘビ類	椎骨			1	ハブ型
1トレンチ	IV層	83	3.50	ウツガメ	甲板	破片		1	
1トレンチ	IV層	110	30	ネズミ科	下顎I			1	
1トレンチ	IV層	50	20	イノシシ	中節骨	完存	1	塊	
1トレンチ	IV層	78	30	イノシシ	下顎II		L	1	
1トレンチ	IV層	51	30	同定対象資料なし					
1トレンチ	IV層	79	30	同定対象資料なし					
1トレンチ	IV層	81	30	同定対象資料なし					
1トレンチ	IV層	82	3.50	同定対象資料なし					
1トレンチ	IV層	82	3.50	同定対象資料なし					
1トレンチ	IV層	112	40	同定対象資料なし					

タチザメとホホジロザメ属の歯各1点を含む）およびNISP算定対象外の資料としてウミガメの甲板破片3点が確認された。ホホジロザメ属の歯は廃土中からの回収資料だが、大型でエナメル質のみ残存しており、化石の可能性も考えられる。そのほかに攪乱層からウシ1点が採集されている。

（4）第4貝塚

平成19年度調査において2トレンチIV層（面縄前庭～仲泊式期：貝塚時代前3～4期=縄文後期並行期）からピックアップ資料と水洗選別資料が得られている。

ピックアップ資料は溶解進行・細片化したものが多く、同定可能な資料が少ない（とくにDグリッドで顕著）。確認されたのはイノシシ13点、ヘビ類2点、ハタ型1点・ベラ科（タキベラ型）・アオブダイ属各1点だが（表26）、資料の保状態存が悪く、比較的小型の魚骨などは溶解消失している可能性もあるため、本来の組成をどの程度正確に示しているかは明らかでない。

水洗選別はAグリッド・Bグリッドで実施されている。同定結果を表27、NISPによる組成を表28に示した。資料のほとんどは4mm・2mm メッシュの回収資料で、1mmの回収資料は

表 25 面縄第3貝塚平成27年度調査において現地フライによって採集された脊椎動物遺体の同定結果

＊残存位置の略号凡例は表17を参照。

種名	地点	日付	種類	部位	保存位置*	左丸	既	測定	備考
白鯫	南側	①	H270612	アオブダイ属	上頸骨	1	1		
白鯫	南側	①	H270612	アオブダイ属	前上顎/歯骨	1~8	1		左右融合
白鯫	南側	①	H270612	アオブダイ属	歯骨	1	1		
白鯫	南側	①	H270612	ブダイ科	山上顎/歯骨	2	1		
白鯫	南側	①	H270612	ブダイ科	尾椎		1		
白鯫	南側	①	H270612	ウミガメ	甲板		1		
白鯫	南側	①	H270612	イノシシ	下顎骨	1	1		
白鯫	南側	①	H270612	イノシシ	下顎骨	既	1		
白鯫	南側		H270611	イタチザサ	歯		1		既1.7g
白鯫	南側		H270611	サメ類	歯骨	3	3M-M	既	メジロザメ?
白鯫	南側		H270611	アオブダイ属	歯骨	1	1		
白鯫	南側		H270611	ウミガメ	甲板		2		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	前頭骨	既度上面	1		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	上顎骨	既	1		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	下顎骨	[P1s/P4]	1		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	下顎骨	既	1		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	下顎骨	既	1		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	下顎骨	既	1		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	下顎骨	既	1		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	上顎骨	[d1-d2]	1		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	歯骨	[p1-p4]	2		既
白鯫	南側		H270611	イノシシ	歯骨	m	1		既
白鯫	南側		H270611	イノシシ	大顎骨	m	1		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	歯骨	m	1		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	歯骨	m	1		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	歯骨	m	1		
白鯫	南側		H270611	イノシシ	中手/中足骨	(d1-d2)	2		既
白鯫	南側		H270611	イノシシ	趾端骨	(p1-p4)	2		既
白鯫	南側		H270611	イノシシ	未認骨	m	1		
白鯫	南側		H270611	小・中型哺乳類	肋骨	m	1		
白鯫	東側	-		イノシシ	上胸骨	[d1-d2]	既	1	
白鯫	東側	-		イノシシ	大顎骨	(d1-d2)	1		
白鯫	東側	-		イノシシ	歯骨	1	1		
白鯫	東側	-		未確認	未確認		1		
未確認必須		H270521	イノシシ	尺骨	m	既	1		
灰褐色骨盤		-	アオブダイ属	上頸骨	既	1	1		
灰褐色骨盤		-	イノシシ	尺骨	[p1-p4]	1	1		既 漢季3回の間の部分
灰褐色骨盤		-	イノシシ	胫骨	m	既	1		既
ガフテ士(表土)	-	-	イノシシ	下顎骨	下顎骨	1	1		
ガフテ	-	-	イノシシ	前中骨	[d1-d2]	既	1		既既
ガフテ	-	-	イノシシ	上胸骨	m	1	1		既既
ガフテ士(表土)	-	-	ウシ	大顎骨	(d1-d2)	1	1		既既
原土中		H270708	ホホリゾバ属	歯	エナメル質のみ残存	既	1		大型化石の可能性あり

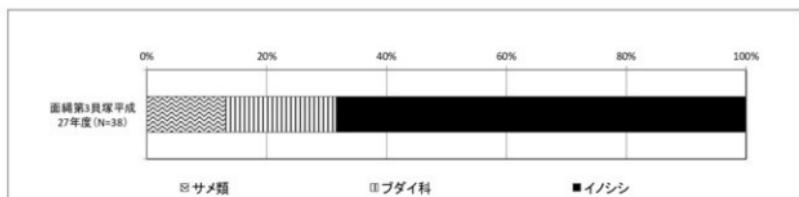


図 96 面縄第3貝塚平成27年度調査において現地フライによって採集された脊椎動物遺体の組成 (NISP比)

＊ウミガメの甲板破片は含めていない。

ごく少ない。資料の多くは魚類で、ヘビ類(ハブの可能性の高いものが多い)も普通にみられる。それ以外ではイノシシ・ネズミ科・ウサギ科・鳥類などがわずかに確認されたのみである。ネズミ科は自然の遺骸と思われるが、ヘビ類は少數ながら多くのサンプルから安定的に検出されており、また大型のものが多いことから、意図的に捕獲されたものである可能性も考えられる。魚類組成については「真骨類(保留)」とした資料が多いが、科レベル以下で分類群を特定できた資料についてみると(図97)、ブダイ科、フエフキダイ科、ハタ科、ニザダイ科などが多い。

表26 面縄第4貝塚平成19年度調査地点から出土した脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の同定結果

※ 残存位置の略号凡例は表17を参照。

本地区的資料は溶解進行・細片化したものが多く、同定可能資料が少ない（とくにDグリッドで顕著）。

地区	基準	グリッド	日付	袋No.	種類	部位	残存位置*	左右	数	備考
2トレシ	IV層	A	H190831		イノシシ	下頸骨	下頸角fr	?	1	
2トレシ	IV層	A	H190831		イノシシ	上頸骨	m- <lt;fr>< td=""><td>L</td><td>1</td><td></td></lt;fr><>	L	1	
2トレシ	IV層	A	H190831		イノシシ	尺骨	済車切痕-m	L	1	
2トレシ	IV層	A	H190831		イノシシ	尺骨	済車切痕	L	1	
2トレシ	IV層	A	H190831		イノシシ	尺骨	m	R	2	
2トレシ	IV層	A	H190831		イノシシ	胫骨	<p>	R	1	
2トレシ	IV層	A	H190831		イノシシ	胫骨		R	1	雄
2トレシ	IV層	A	H190831		イノシシ	第2中足骨	p	R	1	
2トレシ	IV層	A	H190831		小・中型哺乳類	胫骨	m	?	1	イス/イノシシ?
2トレシ	IV層	A	H190831		小・中型哺乳類	肋骨?	m	?	1	肋骨とすればおそらくイノシシ
2トレシ	IV層	B	H190831		ハタ型	腹裡			1	
2トレシ	IV層	B	H190831		アオブダイ属	前上頸骨		R	1	やや大
2トレシ	IV層	B	H190831		イノシシ	尺骨	済車切痕上部fr	L	1	雄
2トレシ	IV層	B	H190831		イノシシ	尺骨	m	?	1	
2トレシ	IV層	B	H190831		海獣類?	肋骨?	m	?	1	雄
2トレシ	IV層	D	H190831		ヘビ類	椎骨			2	ハブ型
2トレシ	IV層	-	H190831	36	タキベラ型	上頸頭骨		L	1	
2トレシ	IV層	-	H190831	36	イノシシ	尺骨	済車切痕-m	R	1	
2トレシ	IV層	-	H190831	36	イノシシ	胫骨	m	?	1	
2トレシ	IV層	-	H190831	ウシ		中足骨	gsfr	L?	1	

3. 考察

(1) 面縄貝塚における脊椎動物資源利用の変遷

以上のように面縄貝塚では、断続的ではあるが、全体として貝塚時代前2期から後2期にいたる各時代の脊椎動物遺体が得られている。ただし、貝塚時代前5期～後1期（第3貝塚平成19年度調査）では資料数が少なく、様相を明確にとらえることができなかった。また他の時期についても、地点によってピックアップ資料と水洗選別資料の違いがあるため、全体を統一的な基準で比較できないが、ここでは上記の分析結果をもとに、本遺跡における脊椎動物の利用状況の変遷について明らかになった点をまとめ、その特徴について考察する（図98～99）。

貝塚時代前2期（条痕文土器期）の第3貝塚（平成27年度調査）では、現地5mmフルイ採集資料のみであるが、脊椎動物全体の組成ではイノシシが圧倒的に多い。魚類は資料数が少ないが、アオブダイ属・ブダイ科とイタチザメ・ホホジロザメ属を含むサメ類がみられた。

ピックアップ資料・水洗選別資料ともに豊富なデータが得られた貝塚時代前4期（嘉德式期）の第2貝塚（平成14年度調査）では魚類とイノシシを主体としてウミガメ類や海獣類が混じる組成が確認された。魚類はピックアップ資料・水洗選別資料とともにハタ科、フエフキダイ科、ブダイ科、ニザダイ科などの多様なサンゴ礁性魚類が混在している。

その他の時期については資料数が少なく、とくに十分なピックアップ資料が得られなかつたため、大型哺乳類に関するデータが不足しており、このため脊椎動物遺体全体の組成についても不明確である。ただし昭和57年度調査では、貝塚時代後2期（兼久式期）の第1貝塚A区からイノシシと魚類を主体とする多数のピックアップ資料が得られており、第2貝塚と類似の様相と推測される。また、本遺跡と同じく徳之島南海岸の伊仙町内に所在する貝塚時代前5期

表 27 (つづき)

地区	種類	（%）	台帳番号	長さ* mm	種類	部位	保存状態*	左右	数*	計測	備考
25レント	アフ	8	95	4	ダツ科	頭部			1		
25レント	アフ	8	95	4	ヘビ類	頭部			2		ハブ型
25レント	アフ	8	95	4	イノシシ	中手/中足骨	△	?	1		頭
25レント	アフ	8	95	4	イノシシ	中足骨	△	?	1		頭
25レント	アフ	8	95	4(2)	ハタ型	尾椎			1		
25レント	アフ	8	95	4(2)	ハタ科	上顎骨	R	1			
25レント	アフ	8	95	4(2)	高脊椎保留	頭骨			1		
25レント	アフ	8	95	4(2)	真骨類同定不可	頭骨			2		1点はウツボ科
25レント	アフ	8	95	1	同定対象資料なし						
25レント	アフ	8	96	4	ダツ科	頭部			1		
25レント	アフ	8	96	4	エフキダイ科	主上顎骨	L	1			
25レント	アフ	8	96	4	ブダイ科	上顎骨	R	1			
25レント	アフ	8	96	4	ニザダイ科	頭部		?	1		
25レント	アフ	8	96	4	ヘビ類	頭骨		?	1		ハブ型
25レント	アフ	8	96	4(2)	サメ類	頭			1		エナメル質のみ残存
25レント	アフ	8	96	4(2)	ハタ型	頭部			1		
25レント	アフ	8	96	4(2)	ニザダイ科	頭部			1		
25レント	アフ	8	96	4(2)	高脊椎保留	頭骨			1		ニザダイ型
25レント	アフ	8	96	4(2)	真骨類同定不可	頭骨			2		
25レント	アフ	8	96	4(2)	同定対象資料なし			?	1		頭
25レント	アフ	8	96	1	同定対象資料なし						
25レント	アフ	97	4	ダツ科	尾椎				1		
25レント	アフ	97	4	ヘビ類	頭部				4	L	ハブ型
25レント	アフ	97	4	小・中型哺乳類	肋骨	III			2		ウツボ/インシラ
25レント	アフ	97	4(2)	エフキダイ科	骨角	R	1				
25レント	アフ	97	4(2)	ニザダイ科	頭部				1		
25レント	アフ	97	4(2)	高脊椎保留	頭骨				1		トライアゴニウム
25レント	アフ	97	4(2)	真骨類同定不可	頭骨				2		
25レント	アフ	97	4(2)	同定対象資料	口蓋				1		
25レント	アフ	97	4(2)	ネズミ科	下顎	R	1				
25レント	アフ	97	4(2)	ウサギ科	頭				1		
25レント	アフ	97	1	同定対象資料なし							

(仲原式期) のトマチン遺跡（樋泉 2013）でも魚類とイノシシが主体とする組成が確認されている。

魚類については、水洗選別資料のみのデータではあるが、第2貝塚に先行する貝塚時代前3～4期（面縄前庭～仲泊式期）の第4貝塚（平成19年度調査資料）ではブダイ科、エフキダイ科、ハタ科、ニザダイ科などが主体であり、貝塚時代後2期（兼久式期）の第1貝塚（平成25年度調査資料）ではウツボ科・ハタ科・ベラ科・ニザダイ科・アイゴ属が多い。

本遺跡で確認された魚類の大半はサンゴ礁やその周辺域の生息種であり、その他ではダツ科・サメ類といった外洋沿岸性の回遊魚類、マングローブ域などの低塩分水域

表 28 面縄第4貝塚平成19年度調査地点の水洗選別
資料から検出された脊椎動物遺体の組成 (NISP)

* < > に付したもの（衝、鱗、棘）は NISP の算定期除外。

種類	4mm	2mm	1mm	合計
サメ属		1		1
ウナギ属		1		1
ウツボ科	1	1		2
ダツ科	3			3
イットウダイ科		1		1
マハタ型	1			1
ハタ型	4			4
エフキダイ科	2	3		5
タケ型	2			2
ベラ科		2		2
ブダイ科	2	6		8
ニザダイ科	2	2		4
アイゴ属		1		1
モンガラカワハギ科	<1>			<1>
ハコフグ科？	<1>			<1>
ハリセンボン科	<1>	<2>		<3>
真骨類(保留)	3	16	1	20
真骨類(同定不可)	1	16	2	19
ヘビ類	18	2		20
鳥類(同定不可)	1			1
ネズミ科		3		3
ウサギ科		1		1
イノシシ	8			8
小・中型哺乳類(同定不可)	2			2
合計	46	60	3	109

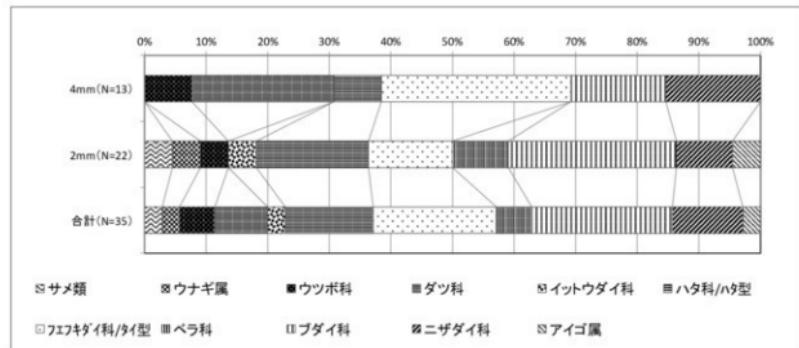


図 97 面縄第4貝塚平成19年度調査地点の水洗選別資料から検出された魚類遺体の組成（NISP比）
歯、鱗は含めていない。

を好むクロダイ属などがみられるが、いずれもごく少数である。水洗選別資料において「真骨類保留」とした資料の中にも回遊魚類（ニシン科・ダツ目・アジ科・サバ科など）の可能性のある資料はほとんど含まれていない。なお貝塚時代前5期のトマチ遺跡でもブダイ科、フエフキダイ科、モンガラカワハギ科、ハリセンボン科などが多く（樋泉 2013）、類似の様相である。

(2) 面縄貝塚における脊椎動物資源利用の特徴

奄美・沖縄諸島の貝塚時代の全体的動向（樋泉 2011、2014）をみると、前1期の嘉手納町野国貝塚B地点、宜野湾市・北谷町新城下原第二遺跡IX層、名護市大堂原遺跡VII層ではイノシシが卓越し魚類が少ないに対し、前2期になると北谷町伊礼原遺跡低湿地区14層や大堂原遺跡VII層で魚骨の増加が認められ、さらにやや後続すると思われる奄美市宇宿小学校構内遺跡第3・4文化層ではイノシシよりも魚類が卓越するようになる。

本遺跡にみられる前2期（第3貝塚平成27年度調査資料）の様相は、資料数が少ないとめ不確実ではあるが、魚類とイノシシが混在しており、なおかつ後の時代よりもイノシシが優勢である点で、同時代の伊礼原遺跡や大堂原遺跡VII層と類似した傾向を示しているように思われる。これは、貝塚時代初期における沖縄諸島と徳之島を含む奄美諸島南部の脊椎動物資源利用の様相が連動したものであった可能性を示すものといえる。また、野国貝塚B地点ではサメ類がやや多くみられる点も特徴で、本遺跡も年代はやや遅れるが、これに類似した様相といえるかもしれない。

いっぽう前4期（第2貝塚）にみられるサンゴ礁魚類とイノシシを主体としてウミガメなどが混じる組成は、奄美・沖縄の貝塚時代前3期～後期に普遍的にみられる特徴と合致しており、後2期の昭和57年度調査第1貝塚A区も、魚類の内容が不明ではあるが類似の様相である可能性が高い。

また、少なくとも魚類については貝塚時代前3期～後2期を通じて類似の様相が継続していた可能性が強い。すなわち、ハタ科、フエフキダイ科、ブダイ科、ニザダイ科、ベラ科、アイゴ属、ツボ科などのサンゴ礁域やその周辺に生息する種類が圧倒的多数を占めており、また組成の多様性が強く突出した優占種がない。こうした特徴は、トマチ遺跡をはじめ、奄美諸

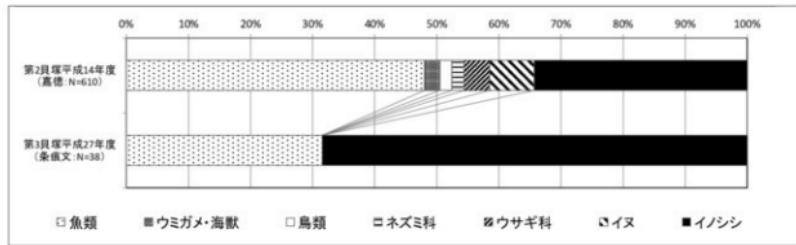


図 98 面縄貝塚における脊椎動物遺体（ピックアップ資料）の組成比較（NISP 比）

※資料数の多い第2貝塚（平成14年調査）と第3貝塚（平成27年調査）のみを示した。

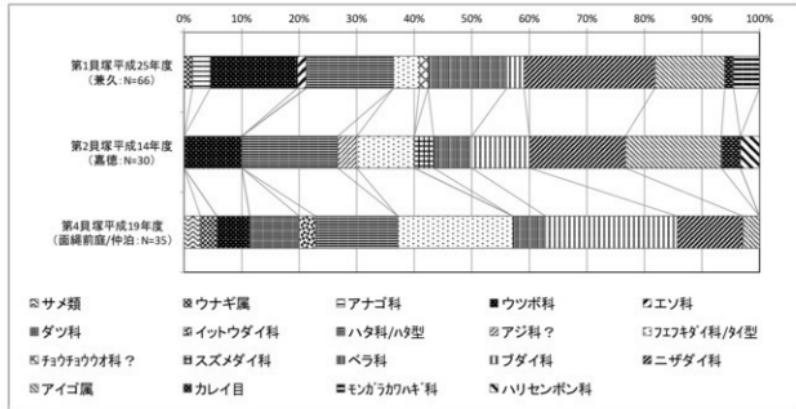


図 99 面縄貝塚における魚類遺体（水洗選別資料）の組成比較（NISP 比）

※資料数の多い第1貝塚（平成25年調査）、第2貝塚（平成14年調査）、第4貝塚（平成19年調査）のみを示した。

島の貝塚時代の特徴（名島 2003、樋泉 2006）と合致しており、ブダイ科またはフエキダイ科・ベラ科など、特定の種類が卓越する沖縄諸島とは傾向が明確に異なる。このことは、奄美諸島南部において、貝塚時代前3期～後2期を通じて沖縄諸島とは異なった漁労文化圏が継続していた可能性を強く示すものといえる。

哺乳類等については、内容が明確に確認されたのは前4期（第2貝塚）と後2期（昭和57年度調査第1貝塚 A区）のみだが、イノシシが圧倒的に多く、イスやウミガメ類などが混じる点で、奄美・沖縄の貝塚時代前期～後期に普遍的な特徴を示している。いっぽう、ウサギ類については、これまでにアマミノクロウサギが面縄第1・第2・第4貝塚、大田布貝塚、ヨツキ洞穴で確認されており（西中川 2011）、本遺跡の資料もアマミノクロウサギに同定される可能性が強い。この点は徳之島に固有の特徴である。

以上のように本遺跡は、断続的ではあるが、貝塚時代前期～後期の長期間にわたる脊椎動物遺体のデータが得られた点できわめて重要である。とくに条痕文土器期の様相に関する所見が得られたこと、また魚類については奄美南部（徳之島・沖永良部）でこれまで十分なデータが得られていたのは前5期のみであったが、今回の調査で条痕文土器期、面縄前庭・仲泊式期お

より兼久式期の様相がある程度明らかになったことにより、この地域の長期的な魚類資源利用の変遷に関する見通しが得られたことは特筆される。奄美諸島において、こうした遺跡はこれまで例がなく、本遺跡が今後も長く保存され、さらなる調査・研究によって詳細な実態解明が進展することが強く望まれる。

参考文献

- 金子浩昌 1996 「平敷屋トウバル遺跡出土の動物遺体（軟体動物を除く）」『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県文化財調査報告書第125集 沖縄県教育委員会
- 樋泉岳二（2006）「脊椎動物遺体にみる奄美と沖縄」『先史琉球の生業と交易2－奄美・沖縄の発掘調査から－』熊本大学文学部
- 樋泉岳二（2011）「琉球先史時代人と動物資源利用－脊椎動物遺体を中心に－」『先史・原史時代の琉球列島－ヒトと景観～』六一書房
- 樋泉岳二（2013）「トマチン遺跡出土の脊椎動物遺体」『徳之島トマチン遺跡の研究』鹿児島大学
- 樋泉岳二（2014）「面繩第2貝塚2002年調査で採集された脊椎動物遺体の概要」『面繩貝塚群II－面繩小学校改築に伴う面繩第2貝塚の緊急調査－』鹿児島県伊仙町教育委員会
- 名島弥生（2003）「琉球列島における遺跡出土魚種組成の比較」『東海史学』38：75-96頁
- 西中川 駿（1985）「面繩貝塚出土の動物骨について」『面繩貝塚群』鹿児島県伊仙町教育委員会
- 西中川 駿（2011）『遺跡から出土する動物たち』西中川駿先生古希記念論集刊行会

第3節 面縄第1貝塚、面縄第4貝塚出土の植物遺体

高宮広士（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

1. 調査の概要

- a : 遺跡の所在 鹿児島県大島郡伊仙町面縄
 b : 遺跡の名称 面縄第1貝塚、面縄第4貝塚
 c : 調査の機関 伊仙町教育委員会
 d : 調査担当者 新里亮人
 e : 発掘期間 平成21年11月～平成22年3月（面縄第1貝塚）、平成19年8月（面縄第4貝塚）
 f : 遺跡の年代 面縄第1貝塚（貝塚時代後2期）、面縄第4貝塚（貝塚時代前3～4期）
 g : 放射性炭素年代 AD7、8世紀（面縄第1貝塚）

2. 面縄第1貝塚：土壤サンプリングおよび回収された植物遺体

拡張区Ⅱ層（貝塚時代後2期・兼久式土器）および拡張区Ⅷ層（貝塚時代前1期・爪形文式土器）の土壤をサンプリングした。前者では23サンプル計166.6ℓの土壤を、後者では1サンプル7.5ℓの土壤（表29・表30）を回収し、フローテーション処理を行った。拡張区Ⅱ層では、計324.84g、拡張区Ⅷ層では252gの浮遊物が回収された。まず、爪形文式土器の時期である拡張区Ⅷ層には目的とする植物遺体は含まれていなかった（表30）。

計23の土壤をサンプリングしたⅡ層においては、LF15以外のすべてのサンプルから植物遺体を得た。以下に検出された植物遺体について簡単に記す。

表29 面縄第1貝塚平成21年度調査洞穴内1トレンチ南側拡張区Ⅱ層出土の植物遺体

LF No.	層序	土壤サンプル量 (ℓ)	浮遊物量 (g)	イタジイ子葉 (粒)	堅果殼子葉 (片)	堅果殼子葉? (片)	堅果皮 (片)	UNI (片)	計 (粒/片)
5	拡張区Ⅱ	10.5	15.94	45	12			8	35
6	拡張区Ⅱ	9	25.24	22	8				30
7	拡張区Ⅱ	4	8.64	5	7			2	14
9	拡張区Ⅱ	6	9.99	27	3	1	6	37	
10	拡張区Ⅱ	4	7.54	8	6		7	21	
11	拡張区Ⅱ	6	9.02	5	2		2	9	
12	拡張区Ⅱ	5.8	10.98	1	10	3			14
13	拡張区Ⅱ	6.5	14.71	1	8	5		4	18
14	拡張区Ⅱ	5.5	13.59	10	7	1			18
15	拡張区Ⅱ	6	7.39						0
16	拡張区Ⅱ	6	7.38	1				2	3
17	拡張区Ⅱ	10	24.47	1	16	8	3	3	31
18	拡張区Ⅱ	7	9.29	2	1	1			4
19	拡張区Ⅱ	8.5	12.44	7	5		7		19
20	拡張区Ⅱ	10.5	26.66	3	15	14		23	55
21	拡張区Ⅱ	8	11.33	3	11			3	17
22	拡張区Ⅱ	9	18.07	1	5	11		6	23
23	拡張区Ⅱ	8.5	16.2	16	7			4	27
24	拡張区Ⅱ	6.5	10.47	1	19	11	2	13	46
25	拡張区Ⅱ	4.8	10.11	14	15			17	46
26	拡張区Ⅱ	8.5	22	7	20			7	34
27	拡張区Ⅱ	7	14.17	1	4				5
28	拡張区Ⅷ	9	19.21	24	15			4	51
計		166.6	324.84	9	243	169	8	118	547

表30 面縄第1貝塚平成21年度調査洞穴内1トレンチ南側拡張区Ⅷ層出土の植物遺体

LF No.	層序	土壤サンプル量 (ℓ)	浮遊物量 (g)
19	拡張区Ⅷ	7.5	2.52

表31 面縄第4貝塚2トレンチⅣ層出土植物遺体

LF No.	層序	シマサルナシ (粒)	堅果殼子葉 (片)	計 (粒/片)
8	2トレンチⅣ層 AGR	1		1
97	2トレンチⅣ層 BGR	1		1
108	2トレンチⅣ層 AGR		1	1
計 (粒/片)		2	1	3



図 100 面縄第1貝塚出土の植物遺体



図 101 面縄第4貝塚出土の植物遺体

i) イタジイ *Castanopsis sieboldii* (Mak.) Hatusima 子葉（半形）(図 100)

イタジイ子葉の半形が計 9 粒回収された。そのうち、8 粒が計測可能でその平均の長さ × 幅 × 厚さは $10.3 \times 6.8 \times 3.7$ mm であった。

ii) 堅果類子葉（片）

堅果類子葉の破片が計 243 (片) 確認された。おそらくイタジイの子葉の破片と思われる。

iii) 堅果類子葉？（片）

堅果類の子葉と思われるが保存状態が良好ではなく、堅果類子葉に含めることのできない破片を堅果類子葉？とした。計 169 (片) 回収されている。

iv) 堅果皮？（片）

堅果皮と思われる破片が計 8 片検出されている。

v) 同定不可能

保存状態が悪く、同定ができなかった植物遺体（計 118 片）をこのカテゴリーに含めた。

3. 面縄第4貝塚：回収された植物遺体

前3期（面縄前庭式土器）～前4期（伸泊式土器）の包含層から回収された 3 サンプルに含まれていた植物遺体の同定を行なった結果、シマサルナシ *Actinidia rufa* (Siebold et Zucc.) Planch. ex Miq 2 (粒) (図 101-1) と堅果類子葉 1 (片) であった (図 101-2) (表 31)。

4.まとめ

面縄第1貝塚Ⅶ層には炭化種子は含まれていなかった。Ⅱ層からは計 23 サンプル中 22 サンプルからイタジイ、堅果類子葉、堅果類の子葉と思われる破片、堅果皮、および同定不可能が回収された。面縄第4貝塚からはシマサルナシおよび堅果類子葉が同定され、今まで不明瞭であった貝塚時代前3期の生業が狩猟採集であったことを示唆する結果となった。徐々にではあるが、奄美諸島においても貝塚時代の植物食利用が明らかになりつつある。今後も地道にこのような分析を実施することが必要であろう。

謝辞

面縄第1貝塚および第4貝塚出土の植物遺体を分析する機会を与えてくださった、またそのために面倒なフローテーション処理を実施してくださった伊仙町教育委員会新里亮人氏およびそのメンバーに心より感謝申し上げます。

紙幅の都合により詳細な情報については今後公表したい。

第4節 德之島面縄第1貝塚から出土した人骨

竹中正巳（鹿児島女子短期大学）

はじめに

面縄第1貝塚は、鹿児島県大島郡伊仙町面縄に所在する複合遺跡で、貝塚、洞穴、開地からなる。昭和57年度に発掘調査が行われ、第1貝塚の第1洞穴から石棺墓が検出された（伊仙町教育委員会、1983）。石棺墓からは保存良好な仰臥伸展葬の入骨1体が出土した。

この面縄第1貝塚から出土した人骨は、南西諸島から出土する多くの貝塚時代後期人と共通する、短頭、低顎、低身長という特徴を持つ。琉球列島の貝塚時代後期人の身体形質を考え上で貴重な資料となっている。貝塚時代後期の南島中部圏では下頸の切歯を抜去する抜歯風習が存在したことが知られている（峰、1992）。面縄第1貝塚出土人骨の歯槽中に、下頸左中切歯の根尖部と考えられる硬組織が遺存していることが指摘され、この残存根尖は風習的抜歯が施された際に折れ残ったものであろうと考えられている（竹中ほか、2005）。また口腔病変としては、下頸の左右両側の第1小白歯の根尖周囲に硬組織が確認され、根尖性セメント質異形成症と診断された（竹中、2006）。この様に面縄第1貝塚出土人骨に関する再調査が行われ、新知見が明らかにされつつある。今回、面縄第1貝塚の石棺墓から出土した人骨の性別と年齢および頸口腔領域の病変について再調査を行った。

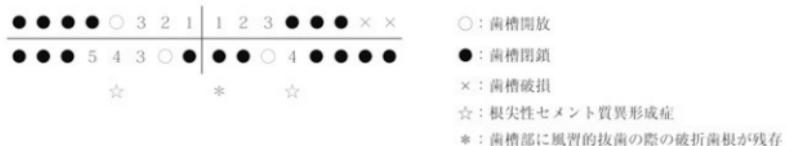
近年、新たに面縄第1貝塚の発掘調査が行われ、AトレンチとDトレンチから墓が検出され、それぞれ人骨1体が出土した。またCトレンチ東側IV層からも頭蓋が出土している。本稿では、面縄第1貝塚の箱式石棺墓から出土した人骨に関する再調査の結果および最近の発掘調査で出土した人骨の概要について報告する。

1. 石棺墓から出土した人骨の性別と年齢について

面縄第1貝塚の石棺墓から出土した人骨（図102）についての人類学的報告は、既に松下・石田（1983）によって行われている。性別と年齢については、女性で壮年と判定されているが、今回再検討を行った。性別は、左右寛骨の大坐骨切痕の角度が大きいこと、眉弓の突出が弱く、左右側頭骨の乳様突起が小さいこと、加えて外後頭隆起の突出が弱いことから、松下・石田と同様、女性と判定された。

頭蓋3主縫合の癒合状況は、前頭縫合の内板の一部が癒合しているだけである。他に癒合している部位は認められない。本人骨の歯式は次の通りである。

う歯のひどい歯が多く、生前、多くの歯を喪失している。特に上下頸臼歯部、下頸前歯部



に喪失歯が多く、歯槽が閉鎖している。残存歯の咬耗は Martin の 2~3 度である（図 103・104）。

下部胸椎から腰椎には骨棘が認められ、骨質は脆い。これらの所見と寛骨耳状面の形状を合わせて考えると老年と推定するのが妥当である。

2. 石棺墓から出土した人骨の顎顔面領域の古病理学的観察結果

面繩第 1 貝塚の石棺墓から出土した老年女性人骨の大半の小白歯や大臼歯は脱落し、歯槽は閉鎖している。下顎大臼歯部の閉鎖歯槽は、骨吸収が進み、顎舌骨筋線の直上まで下がっている。

以下に取り上げる歯と顎関節については、古病理学的観察結果と考察を個別に記す。

(1) 上顎左中切歯（図 103・104）

咬耗は Martin の 2 度で、咬耗は著しい。現在の歯槽骨はセメント・エナメル境から 3.6mm 程度下の位置に下がっている。唇側から本歯を見た場合、水平に咬耗が進んでいることがわかる。したがって、唇面の咬耗面は平坦である。上顎右中切歯の咬耗面の形状とは異なる。

(2) 上顎左側切歯（図 103・104）

咬耗は Martin の 2 度で、咬耗は著しい。歯槽骨はセメント・エナメル境から 2.3mm 程度の位置に下がっている。この側切歯の舌側面窩に盲孔が認められた。舌側面窩の盲孔は基底結節の内側で歯頭部に向けて伸びている孔で、両側性であることも多い。本人骨も両側性であった。一般にう食の好発部位と言われている。発生率は報告者によって大きく異なるが、日本人の上顎側切歯では 30% ~ 40% で発生していると考えられている。

本歯には、う歫が遠心面の歯頭部に認められ、歯冠は唇面近くまで広がっている。歯根側はセメント質側に 2 ~ 3mm 広がっている。う歫は象牙質内で収まっており、露髓してはいない。このう歫は、隣接する上顎左犬歯のう歫による歯冠崩壊に伴い、本歯の遠心歯頭部に摂食物の滞留が生じ、それがう食を引き起こした原因の一つであると考えられる。

(3) 上顎左犬歯（図 103・104）

本歯の根尖周囲の歯槽骨は球状に破壊されている。歯冠は平坦に咬耗しており、咬耗度は Martin の 3 度である。う歫が進行し、咬合面中央が梢円状に崩壊し、露髓している。エナメル質は近心側を欠く。う歫は C4 で、露髓しており、咬合面から見ると、象牙質は根管に向かって、すり鉢状に窪んでいる。う食の進行により、根尖周囲の歯根膜・歯槽骨にも病変が及び、歯槽骨が球状に破壊されたと考えられる。根尖周囲の病変は、歯根囊胞か歯槽膿瘍によるものと考えられるが、確定診断はできない。

(4) 上顎右中切歯（図 103・104）

本歯の咬耗は Martin の 2 度。咬耗は著しい。歯槽骨はセメント・エナメル境から 1.2mm 程度下まで下がっている。

唇側から本歯を見た場合、上顎右側切歯方向と、上顎左中切歯方向に咬耗が進んでいる。すなわち、唇面の咬耗面は平坦ではない。上顎右中切歯から同右犬歯にかけて、唇面からみると曲線を描くように咬耗していることがわかる。切端の咬耗部分の遠心側に梢円形の窪みが存在

する。この窪みは下顎を左側に動かした際、下顎右犬歯の切端が接触する点である。

(5) 上顎右側切歯（図 103・104）

本歯の咬耗は Martin の 2 度で、咬耗が著しい。歯槽骨はセメント・エナメル境から 1.5mm 程度下まで下がっている。この側切歯の舌側面窩にも、上顎左側切歯同様、盲孔が認められた。

(6) 上顎右犬歯（図 103・104）

本歯の咬耗は Martin の 3 度で、咬耗が著しい。根尖周囲の歯槽骨は球状に破壊されている。歯槽骨は上顎右第 1 小臼歯に向かって下がる。う蝕が進行し、咬合面中央が楕円形に崩壊し、露髓している。エナメル質は遠心側が少ない。う蝕は C4 で、露髓しており、咬合面からみると、象牙質は根管に向かって、すり鉢状に窪んでいる。根尖周囲の病変は、歯根囊胞か歯槽膿瘍によるものと考えられるが、確定診断はできない。

(7) 上顎右第 1 小臼歯（図 103・104）

開存歯槽が残るのみである。歯は喪失し、所在不明となっている。歯根の唇側面の歯槽壁は非常に薄くなっている。根尖周囲の歯槽骨は破壊され、歯槽中の骨表面は粗造である。やはり根尖周囲の病変は、歯根囊胞か歯周膿瘍によるものと考えられるが、確定診断はできない。

(8) 下顎左中切歯（図 103・104）

本歯の歯槽は閉鎖している。歯槽骨中に歯根の根尖が残る。この残存根尖は既に報告されており、風習的抜歯が施された際に折れ残ったものであろうと考えられている（竹中ほか, 2005）。

(9) 下顎左側切歯（図 103・104）

本歯の歯槽は閉鎖している。歯槽骨は下顎左犬歯方向に下がっていく。歯槽骨の表面は粗造であり、炎症による骨反応が起こっていると考えられる。

(10) 下顎左犬歯（図 103・104）

本歯の歯槽は閉鎖している。開存歯槽が残るのみである。歯は喪失し、所在不明となっている。根尖周囲の歯槽骨は球状に破壊されている。歯槽内の近心、舌側、遠心の骨表面は粗造である。根尖周囲の球状の骨破壊は、歯根囊胞か歯槽膿瘍、または歯周膿瘍によるものと考えられるが、確定診断はできない。

(11) 下顎左第 1 小臼歯（図 103・104）

本歯については、既に竹中(2006)により、根尖の周囲に硬組織の形成が確認され、根尖性セメント質異形成症と報告されている。本歯の咬耗は Martin の 3 度である。歯槽骨はセメント・エナメル境から 4.1mm 下まで下がっている。

(12) 下顎右中切歯（図 103・104）

本歯の歯槽は閉鎖している。歯槽頂は平坦である。下顎左中切歯に風習的抜歯が施されたと

考えられており（竹中ほか、2005）、奄美・沖縄諸島の風習的抜歯の型式は下顎両側中切歯を基本とすることから、本歯にも風習的抜歯が施されていた可能性が考えられる。

(13) 下顎右側切歯（図 103・104）

開存歯槽が残るのみである。歯は喪失し、所在不明となっている。特に病的所見は認められない。

(14) 下顎右犬歯（図 103・104）

本歯の根尖周囲の歯槽骨は球状に破壊されている。根尖から歯根のほぼ中央にかけての頬側および遠心側の歯槽は崩壊しており下顎右第1小白歯の近心側の歯槽と連続している。う蝕が進行し、歯冠は崩壊している。エナメル質は頬側から近心側にかけて残る。この部の咬合面は平坦で、咬耗により象牙質まで露出している。う蝕はC4で、露髓しており、咬合面から見ると、象牙質は根管に向かって、すり鉢状に窪んでいる。根尖周囲の病変は、歯根囊胞か歯周膿瘍によるものと考えられるが、確定診断はできない。

(15) 下顎右第1小白歯（図 105）

本歯についても、既に竹中(2006)により、根尖の周間に硬組織の形成が確認され、根尖性セメント質異形成症と診断されている。本歯の歯根の唇側面の歯槽壁の一部が開いている。根尖から歯根中央にかけての頬側・近心側の歯槽は崩壊しており、下顎右犬歯の歯槽と連続している。う蝕が進行し、歯冠は崩壊している。エナメル質は頬側から遠心側にかけて残る。この部の咬合面は平坦で、咬耗により象牙質まで露出している。う蝕はC4で、露髓しており、咬合面から見ると、象牙質は根管に向かって、すり鉢状に窪んでいる。う食の進行が、根尖性セメント質異形成症の発症に影響をあたえ、根尖周囲の骨破壊を進めたと考えられる。

(16) 下顎右第2小白歯（図 104・106）

本歯の歯槽は遠心方向への骨吸収により拡大している。歯根の遠心面（セメント・エナメル境から43mm下）にセメント質の過形成（4.6×28mm）が認められる。この過形成はセメント腫と診断される。

歯冠はう蝕が進行し、崩壊している。エナメル質は頬側にのみ残る。う蝕はC4で、露髓しており、咬合面から見ると、象牙質は根管に向かって、すり鉢状に窪んでいる。進行したC4う蝕が、歯槽の遠心方向への拡大に関係していると考えられる。

(17) 左顎関節（図 107）

下顎頭の関節面の中央部から前方に、粗造な骨形成が認められる。下顎窩にも関節結節に薄いが骨過形成が確認できる。関節結節の過形成部分には擦過痕も確認される。本人骨で上下の歯が咬み合う場所は前歯部の一部だけであり、咬合をほぼ失っている。顎運動は上下の歯が捕っていた時期の運動範囲を超えていたと考えられ、過度に下顎を動かしたことにより、顎関節も正常咬合時の運動範囲を超えた運動が行われるようになり、下顎頭や下顎窩に骨過形成や擦過痕が生じたと考えられる。変形性顎関節症と診断される。

(18) 右頸関節（図 107）

下頸頭の関節面の中央部から前方に、粗造な骨形成が認められる。下頸窩も関節結節の部分に薄層ながら、骨過形成が確認できる。また、過形成部分に擦過痕が確認できる。右頸関節も左同様、変形性頸関節症と診断される。

3. A ドレンチから出土の人骨について

単体埋葬で、仰臥屈葬の姿勢で埋葬されている。非常に窮屈な姿勢である。副葬品は遺存していない。頭蓋が認められない。また、第1頸椎から第2胸椎にかけてと、左右の鎖骨および左右の手の指の骨などが動かされている。これらは遺体が白骨化した後、墓が再度掘り返され、頭蓋が抜き取られ、椎骨や鎖骨、指の骨などが動かされたためである。

人骨の性別は、寛骨の大坐骨切痕の角度が小さいことから男性と判定される。年齢は寛骨耳状面の形状から壮年と推定される。下部腰椎の椎体に骨棘が認められる。

4. C ドレンチ東側IV層から出土した頭蓋について

頭蓋がCドレンチ東側IV層から出土した（図108）。保存状態はよい。しかし、顔面頭蓋の鼻部から上顎歯槽部を欠く。性別は、眉弓の突出が強く、乳様突起が大きく、外後頭隆起が大きいことから、男性と判定される。年齢は頭蓋3主縫合の内外版に癒合が認められないことから、壮年と推測される。脳頭蓋の頭蓋長幅示数は過短頭である。眼窩は低い。鼻根部は陥凹し、鼻骨は高い。これら過短頭、低眼窩、鼻骨が高いという特徴は、琉球列島の先史時代人の特徴と同一である。

5. D ドレンチから出土の人骨について

単体埋葬で、仰臥屈葬の姿勢で埋葬されている。左足は脛骨に密着しており、非常に窮屈な姿勢である。副葬品は遺存していない。頭蓋と上部頸椎が認められない。これらは遺体が白骨化した後、墓が再度掘り返され、頭蓋と頸椎が抜き取られたためである。

現在の所、本人骨は取り上げられていない。人骨の形質の詳細については、取り上げ後に検討を行っていく。

引用文献

- 1) 伊仙町教育委員会：面繩第1・第2貝塚（伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)）、鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会、鹿児島県大島郡伊仙町、1983
- 2) 松下孝幸・石田 肇 (1983) 鹿児島県伊仙町面繩第1貝塚出土の弥生時代人骨、面繩第1・第2貝塚（伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)）、鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会、pp.51-64、1983
- 3) 竹中正巳：面繩第1貝塚出土人骨に認められた根尖性セメント異形成症、Archaeology from the South、鹿児島大学考古学研究室25周年記念論文集、pp.235～239、2006
- 4) 竹中正巳・新里貴之・中村直子・新里亮人・義 恒和：徳之島伊仙町面繩第1貝塚出土人骨の風習的抜歯、鹿児島女子短期大学紀要、40巻、pp.33-36、2005



図 102 面縄第 1 貝塚出土老年女性人骨頭蓋



図 103 面縄第 1 貝塚出土老年女性人骨上下
顎歯

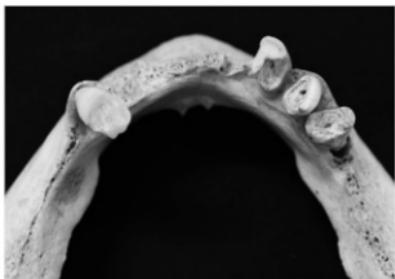


図 104 面縄第 1 貝塚出土老年女性人骨上下顎歯（左：上顎歯、右：下顎歯）



図 105 面縄第 1 貝塚出土老年女性人骨の下
顎右第 1 小臼歯に認められた根尖性セメン
ト質異形成症



図 106 面縄第 1 貝塚出土老年女性人骨の下
顎右第 2 小臼歯に認められたセメント腫

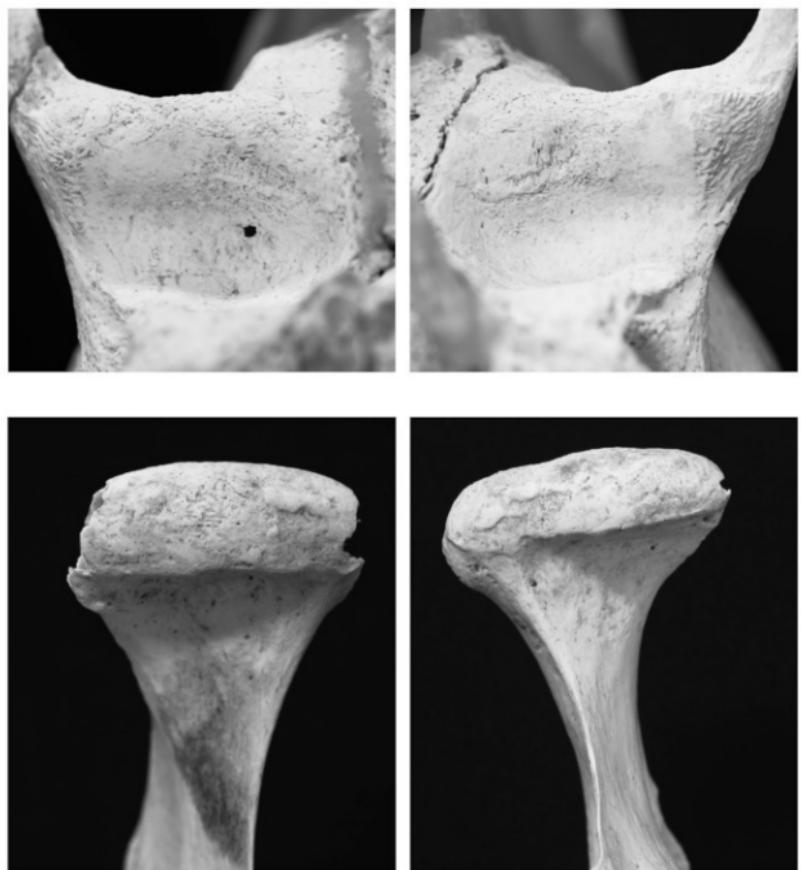


図 107 面繩第 1 貝塚出土老年女性人骨頸関節（左：右頸関節、右：左頸関節）



図 108 面繩第 1 貝塚 C トレンチ東側IV層から出土した頭蓋（男性・壯年）
(上段：正面観、中段：左側面観、下段：上面観)

第5節 面縄第1貝塚における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

1. 試料と方法

次表に、試料の採取箇所、種類、前処理・調整法および測定法を示す。

表 32 試料の採取箇所、種類、前処理・調整法、測定法

試料名	採取箇所	種類	前処理・調整	測定法
No.1	洞穴内3トレンチ拡張区、II層	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄	AMS
No.2	洞穴内1トレンチ拡張区、VI層	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄	AMS
No.3	洞穴内1トレンチ拡張区、堀込	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄	AMS
No.4	崖下部Aトレンチ東壁、II b層	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄	AMS

2. 測定結果

加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および曆年代（較正年代）を算出した。次表にこれらの結果を示す。

表 33 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	未補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	^{14}C 年代 (年 BP)	曆年代（較正年代） $2\sigma \cdot 95\%$ 確率
No.1	374349	1220 \pm 30	-25.6	1210 \pm 30	Cal AD 710-750, 770-890
No.2	374350	5180 \pm 30	-25.7	5170 \pm 30	Cal BC 4040-4020, 4000-3950
No.3	374351	1250 \pm 30	-26.1	1230 \pm 30	Cal AD 690-880
No.4	374352	1680 \pm 30	-27.0	1650 \pm 30	Cal AD 340-430

Beta : 米国 Beta Analytic Inc の測定番号、BP : Before Physics、Cal : Calibrated、BC : 紀元前、AD : 西暦

(1) 未補正¹⁴C年代

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5,730年であるが、国際的慣例により Libby の5,568年を用いている。

(2) δ (デルタ)¹³C測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比(¹³C/¹²C)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。試料の δ ¹³C値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(3) ¹⁴C年代

δ ¹³C測定値により同位体分別効果を補正して算出した年代。暦年代較正にはこの年代値を使用する。

(4) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中¹⁴C濃度の変動および¹⁴Cの半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な¹⁴C測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と¹⁴C年代の比較により作成された較正曲線(IntCal 09)を使用した。

暦年代は、¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した年代の幅を表し、ここでは信頼限界 2σ (シグマ)(95%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。

3. 所見

加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1では 1210 ± 30 年BP(2 σ の暦年代でAD 710~750, 770~890年)、No.2では 5170 ± 30 年BP(BC 4040~4020, 4000~3950年)、No.3では 1230 ± 30 年BP(AD 690~880年)、No.4では 1650 ± 30 年BP(AD 340~430年)の年代値が得られた。

文献

Paula J Reimer et al. (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves.

0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon. 51, p.1111-1150.

中村俊夫(2003)放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社. p.301-322.

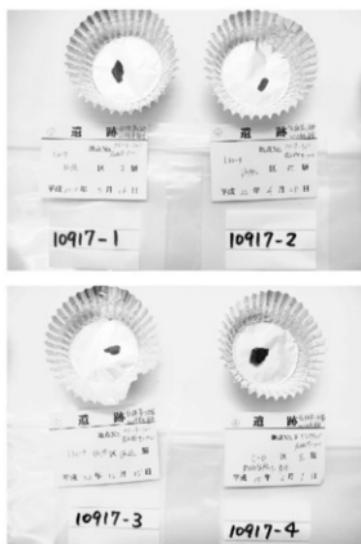
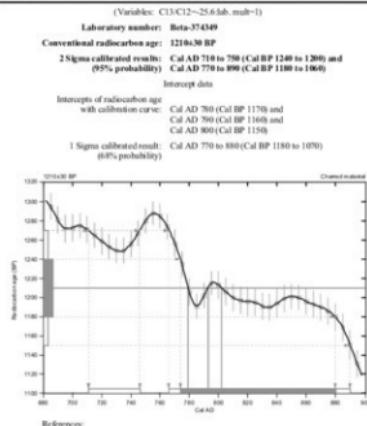


図 109 分析試料

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

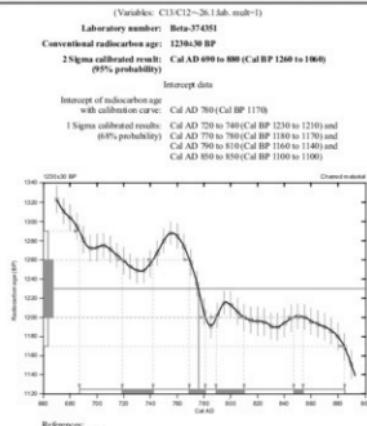


Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

400 S.W. 7th Court, Miami, Florida 33130-3324 • Tel: (305) 467-1347 • Fax: (305) 467-0904 • E-Mail: www.banrc.com

図 110 試料 No1 の測定結果

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

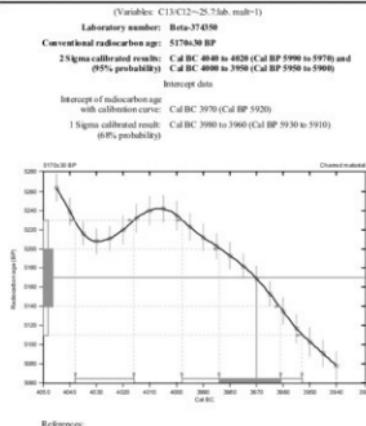


Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

400 S.W. 7th Court, Miami, Florida 33130-3324 • Tel: (305) 467-1347 • Fax: (305) 467-0904 • E-Mail: www.banrc.com

図 112 試料 No3 の測定結果

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

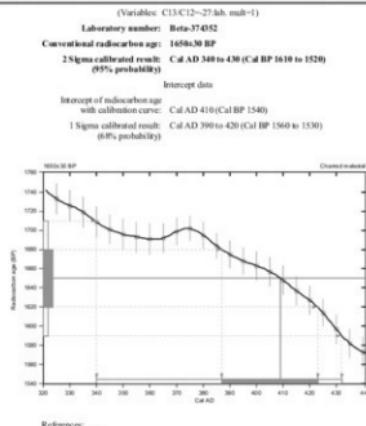


Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

400 S.W. 7th Court, Miami, Florida 33130-3324 • Tel: (305) 467-1347 • Fax: (305) 467-0904 • E-Mail: www.banrc.com

図 111 試料 No2 の測定結果

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS



Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

400 S.W. 7th Court, Miami, Florida 33130-3324 • Tel: (305) 467-1347 • Fax: (305) 467-0904 • E-Mail: www.banrc.com

図 113 試料 No4 の測定結果

第6節 面縄第1貝塚検出炭化物の年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

面縄第1貝塚は伊仙町の面縄小学校西側に隣接する石灰岩層段丘の崖下に所在する。貝塚時代前1期からグスク時代（縄文時代前期～中世並行期）までの長期間、墓地として利用された可能性が示唆されている。土器は主に兼久式土器が出土している。本報告では遺跡から出土した炭化材を対象として、放射性炭素年代測定を行う。

1. 試料

試料は、面縄第1貝塚から出土した炭化材3点である。

2. 分析方法

土壤や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをビンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

この試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空中にして封じきり、500°C（30分→850°C（2時間）で加熱してCO₂を発生させる。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.10(Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に、暦年較正結果を表34に示す。試料の測定年代（補正年代）は、Cトレンチ東側コラムIIc層は1,350±20BP、AトレンチII層人骨周辺は120±20BP、Aトレンチ埋葬跡底面は400±20BPの値を示す。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 7.1.0のマニュアルにし

表34 放射性炭素年代測定結果

試料番号・層位	種類 (樹種同定結果)	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
Cトレンチ東側コラム II c層	炭化材 (アカガシ亜属)	1,350±20	-26.34±0.49	1,370±20	IAAA-143845
Aトレンチ II 層 埋葬人骨周辺	炭化材 (広葉樹)	120±20	-25.58±0.49	120±20	IAAA-143846
Aトレンチ埋葬跡底面	炭化材 (広葉樹)	400±20	-29.47±0.55	480±20	IAAA-143847

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表35 曆年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	曆年較正年代(cal)							相対比	Code No.			
		σ	cal AD	655	-	cal AD	674	cal BP	1,295	-	1,276	1.000	IAAA-143845
Cトレンチ東側コラム II c層	1,345±23	2σ	cal AD	645	-	cal AD	692	cal BP	1,305	-	1,258	0.965	IAAA-143846
			cal AD	749	-	cal AD	761	cal BP	1,201	-	1,189	0.035	
Aトレンチ II 層 埋葬人骨周辺	115±22	σ	cal AD	1,691	-	cal AD	1,708	cal BP	259	-	242	0.155	IAAA-143846
			cal AD	1,718	-	cal AD	1,728	cal BP	232	-	222	0.093	
			cal AD	1,811	-	cal AD	1,827	cal BP	139	-	123	0.142	IAAA-143847
			cal AD	1,832	-	cal AD	1,887	cal BP	118	-	63	0.521	
		2σ	cal AD	1,911	-	cal AD	1,921	cal BP	39	-	29	0.088	IAAA-143847
			cal AD	1,682	-	cal AD	1,738	cal BP	268	-	214	0.291	
			cal AD	1,805	-	cal AD	1,897	cal BP	145	-	53	0.562	IAAA-143847
			cal AD	1,902	-	cal AD	1,935	cal BP	48	-	15	0.146	
Aトレンチ埋葬跡底面	404±23	σ	cal AD	1,445	-	cal AD	1,480	cal BP	505	-	470	1.000	IAAA-143847
		2σ	cal AD	1,439	-	cal AD	1,512	cal BP	511	-	438	0.916	
			cal AD	1,601	-	cal AD	1,616	cal BP	349	-	334	0.084	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)分析目を丸めるのが慣例だが、曆年較正曲線や曆年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。5)相対比は、 σ 、 2σ のそれそれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

たがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。曆年較正是北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された曆年代は、将来的に曆年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

測定誤差を σ として計算させた結果、Cトレンチ東側コラム II c層が calAD655-674、Aトレンチ埋葬人骨周辺が calAD1,691-1,921、Aトレンチ埋葬跡底面は calAD1,445-1,480 である。

本遺跡からは、兼久式土器が出土することから、Cトレンチ東側コラムに II c層の炭化材は、7世紀を示し調和する年代であった。他2点は、17世紀後半～20世紀前半、15世紀と新しい年代であった。

第7節 面縄第1貝塚出土人骨の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鹿児島県大島郡伊仙町面縄に所在する面縄貝塚は、面縄川が兼久浦の小湾に注ぐ袋状地形の隆起珊瑚礁崖下に形成された貝塚である。発掘調査からは、貝塚時代前5期（縄文時代晚期～弥生時代前期）と想定される石棺墓に埋葬された人骨などが出土している。

ここでは、調査区内より出土した人骨を対象に、埋葬年代に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定を実施したので、その結果を報告する。

1. 試料

分析試料は、いずれも面縄第1貝塚より検出されている。それぞれ、Cトレーナ東側のIV層（砂層）より検出された人骨、洞穴内1トレーナ石棺墓北側集石検出入骨、Dトレーナ埋葬人骨、Aトレーナ埋葬人骨の、計4点である。人骨の部位については、結果と併せて表に示す。

2. 分析方法

骨試料はコラーゲン抽出(Collagen Extraction)を行う。試料を超純水の入ったガラスシャーレに入れ、ブラシ等を使い、根・土壌等の付着物を取り除く。試料をビーカー内で超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

0.2Mの水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったビーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで1時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換し、その後、超純水で溶液を中性に戻す。試料を凍結乾燥させ、凍結粉碎用セルに入れ、粉碎する。リン酸塩除去のため試料を透析膜に入れ、1Mの塩酸で酸処理を行い、超純水で中性にする。透析膜の内容物を遠心分離し、得られた沈殿物に超純水を加え90℃に加熱した後、濾過する。濾液を凍結乾燥させ、コラーゲンを得る。

試料を燃焼させたあと、真空ラインで不純物（水など）を取り除き、CO₂を精製する。これを鉄で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、小型タンデム加速器にて測定する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730 ± 40年)を較正することである。暦年較正は、CALIB7.1.0のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統

表36 放射性炭素年代測定結果

試料名	種類	部位	処理	補正年代 BP	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
Cトレンチ東側 IV層(砂層)	人骨	頭蓋片(露窓上部の破片)	CoEx	2,690±20	-15.30±0.24	2,530±20	IAAA-150956
洞穴内1トレンチ石棺墓北側集石検出入人骨	人骨	大膝骨片	CoEx	2,560±20	-14.90±0.25	2,400±20	IAAA-150957
Dトレンチ埋葬人骨	人骨	手の指・基節骨	CoEx	290±20	-14.28±0.23	110±20	IAAA-150958
Aトレンチ埋葬人骨	人骨	左肋骨片	CoEx	20±20	-17.52±0.27	Modern	IAAA-150959

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表37 历年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	历年較正年代(cal)							相対比	Code No.		
		σ	cal BC	891	-	cal BC	879	cal BP	2,840	-	2,828	0.181
Cトレンチ東側 IV層(砂層)	2,892±24	σ	cal BC	845	-	cal BC	810	cal BP	2,794	-	2,759	0.819
		2σ	cal BC	896	-	cal BC	807	cal BP	2,845	-	2,756	1.000
洞穴内1トレンチ石棺墓北側集石検出入人骨	2,564±23	σ	cal BC	795	-	cal BC	773	cal BP	2,744	-	2,722	1.000
		2σ	cal BC	804	-	cal BC	751	cal BP	2,753	-	2,700	0.923
Dトレンチ埋葬人骨	289±21	σ	cal BC	682	-	cal BC	669	cal BP	2,631	-	2,618	0.033
		2σ	cal BC	633	-	cal BC	629	cal BP	2,582	-	2,578	0.005
Aトレンチ埋葬人骨	17±22	σ	cal AD	1,526	-	cal AD	1,556	cal BP	424	-	394	0.614
		2σ	cal AD	1,632	-	cal AD	1,648	cal BP	318	-	302	0.386

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.O(Copyright 1986-2015 M.Stuiver and PJ Reimer)を使用。

2)計算には表に示したやむる前の値を使用している。

3)桁目を丸めるのが慣例だが、历年較正曲線や历年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真的値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。5)相対比は、 σ 、 2σ のそれそれをとした場合、確率的に真的値が存在する比率を相対的に示したものである。

6)プログラムと対応年代は約～46,401BPのため、盲人入骨は历年較正の対象外。

計的に真的値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真的値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真的値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された历年年代は、将来的に历年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

3. 結果および考察

同位体効果による補正を行った測定結果を表36に、历年較正結果を表37に示す。試料の測定年代(補正年代)は、Cトレンチ東側のIV層(砂層)出土人骨は $2,690 \pm 20$ BP、洞穴内1トレンチ石棺墓北側集石検出入人骨は $2,560 \pm 20$ BP、Dトレンチ埋葬人骨は 290 ± 20 BP、Aトレンチ埋葬人骨は 20 ± 20 BPの値を示す。

測定誤差を σ として計算させた結果、Cトレンチ東側のIV層(砂層)はcalBC 891-810、洞穴内1トレンチ石棺墓北側集石検出入人骨はcalBC 795-773、Dトレンチ埋葬人骨はcalAD 1,526-1,648である。なお、Aトレンチ埋葬人骨は、補正年代が历年較正プログラムの対応年代外のため、历年較正を実施していない。

測定結果を比較すると、大きく2つのグループに分けられる。Cトレンチ東側東側のIV層(砂層)と洞穴内1トレンチ石棺墓北側集石検出入人骨の2試料は、補正年代で約2,600BP前後、縄文時代晚期頃の年代を示す。これに対し、Dトレンチ埋葬人骨は、補正年代で290BP、暦年代で16世紀前半～17世紀中頃と、比較的新しい年代を示した。これらのことから、対象とした墓坑には、時期差がある可能性が指摘できる。また、Aトレンチ埋葬人骨については、現代に近い値が得られていることから、更に新しい時代の人骨が混入した可能性も想定される。

第V章
總 括

第V章. 総括

第1節. 調査の成果

1. 面縄貝塚とは

面縄貝塚は、鹿児島県大島郡伊仙町面縄に所在する貝塚時代前1期（縄文時代早期～前期並行期）からグスク時代（中世並行期）にかけての遺跡である。貝塚と呼ばれるものの、これまでの調査で埋葬跡、竪穴遺構、集石遺構も見つかっており、遺跡が生活域と墓域で構成されることが明らかとなっている。また、遺物も豊富に出土し、特に、本遺跡を標識とする兼久式土器、面縄東洞式土器、面縄西洞式土器、面縄前庭式土器は琉球列島における土器編年上の基礎資料としてよく知られている。

以下では、過去の調査成果を踏まえながら、平成14年度以降の調査によって得られた成果を総括し、本書のまとめとしたい。なお、これまでの発掘調査および遺物の散布状況を踏まえると、遺跡の大方の範囲は図114のようになり、今後は面縄川を境界として分割される4つの遺跡（面縄第1～第4貝塚）を一括して「面縄貝塚」と呼ぶことにしたい。

2. 確認調査の成果

（1）面縄第1貝塚

面縄第1貝塚では、兼久式土器や開元通宝の出土が報告されていたが（山崎1930、小原1932）、昭和57年度の確認調査によって、テラス面上に貝層（貝塚時代後2期）、洞穴内に石棺墓（貝塚時代前5期）が検出され、崖下部の調査区では土器（貝塚時代前1期、前4期、後1期）、貝製品が人骨に伴う状況や埋葬人骨が確認されていた（牛ノ浜・堂込編1985）。

平成21年度以降の確認調査によって、崖上部に貝塚時代後2期の包含層が確認され、また、洞穴内のすべてのトレンチより土器（貝塚時代前1期、前3～5期）、貝製品、骨製品などが出土したことにより洞穴全面に包含層や遺構面が残存していることが明らかとなった。特に、人骨片が比較的多く得られることは、洞穴内が主に埋葬地として利用されたことを示しており、また、Ⅶ層からは貝塚時代前1期（縄文時代早期～前期）の爪形文土器が単独で出土することから、洞穴の利用がこの頃までさかのぼり、Ⅶ層下位には当該期以前の包含層が残存する可能性も想定された。崖下部においては、白砂層（IV層）より人骨頭部（放射性炭素年代：BP2800前後）が出土したが、Dトレンチで再検出した埋葬人骨（放射性炭素年代：AD16世紀前後）を含めると、崖下にも各時期の埋葬跡が包蔵されている可能性がある。

以上のことから、面縄第1貝塚は、貝塚時代前1期の生活跡をはじめとして、貝塚時代後2期の貝層、貝塚時代前3期からグスク時代に至る埋葬跡が包蔵された、やや複雑な様相を呈した遺跡であることが明らかとなった。崖上部や洞穴内全域から遺物が出土したことから、結果的には遺跡の範囲がこれまで以上に拡大し、良好な包蔵状態を留める遺跡であることが判明したのは大きな成果であった。

（2）面縄第2貝塚

昭和5年に発見された面縄第2貝塚は、貝塚時代前4期（縄文時代後期並行期）の土器や貝



図 114 面縄貝塚の範囲

製品がまとまって得られており（大山・小原 1933、三友・国分 1959）、戦前の学校建設にともなって貝塚時代前5期（縄文時代晚期～弥生時代前期並行期）の完形に近い土器も発見されていた（河口 1956）。昭和 57 年度調査においては集石遺構（牛ノ浜・堂込編 1985）、平成 14 年度緊急調査では面縄小学校校庭内に集石遺構や竪穴遺構が当該期の遺物と共に多く検出され、出土炭化物の放射性炭素年代測定では BP3500 年前後の年代が報告されている（新里編 2014）。

平成 20 年度と平成 22 年度における確認調査でも、集石遺構（平成 20 年度）、竪穴遺構（平成 23 年度）が検出され、面縄小学校校庭内の東半から面縄川の西岸にかける範間に貝塚時代前 4 期の生活跡が良好な状態で包蔵されていることが明らかとなった。白砂層と黒褐色砂層が交互に堆積している状況はこれまでの調査でも確認されており、黒色砂層中に非常に多くの遺物が含まれていることが明らかとなっている。

遺構は白色砂層、黒色砂層の両者から検出されるが、複数の砂層が累積的に厚く堆積する状況は、遺跡が良好な状態で残存し、なおかつ、当該時期における遺構や遺物の変遷過程を層位的にさらに細かく追及するための格好の素材となることを示している。調査面積が広いことにもよるが、出土遺物量と遺構の件数、密度ともに他の貝塚を凌駕しており、面縄第 2 貝塚は、その包蔵状態も含めて本遺跡の核心をなす地点であると評価できる。

（3）面縄第 3 貝塚（旧兼久貝塚）

兼久式土器の標識遺跡である面縄第 3 貝塚は、昭和 29 年に発見されたが、石灰岩丘陵縁辺に形成された小洞穴やテラス面で遺物包含層が確認されていた（牛ノ浜・堂込 1985）。出土し

た土器は貝塚時代前3、4、5期と同後2期のものであったが、第3洞穴内からは貝塚時代後2期以前の層から人骨の出土も報告されている。

平成19年度における確認調査では、1トレンチより貝塚時代後1期（弥生時代中期～古墳時代並行期）の包含層、2トレンチより貝塚時代前5期の包含層が検出されており、本遺跡の範囲が南側に大きく拡大することが明らかとなった。また、平成27年度における畠地帯総合整備事業区内確認調査区においては、表土下3メートルに砂丘の堆積が確認され、貝塚時代前2期（縄文時代前期～中期並行期）の土器とともに貝製品等が出土した。以上のことから、面繩第3貝塚は從来の想定よりも古い包含層を残し、なおかつ広範囲におよぶ遺跡であることが確実となった。

（4）面繩第4貝塚

昭和29年に発見された面繩第4貝塚は、面繩前庭式土器（貝塚時代前3期）、面繩東洞式土器（貝塚時代前4期）、面繩西洞式土器（貝塚時代前5期）の標識遺跡で、石灰岩丘陵崖下に形成された洞穴内（東洞穴、西洞穴）と洞穴前庭部に良好な包含層（貝塚時代前2期～前5期）が残存することが確認されていた（三友・国分1959、国分他1959、牛ノ浜・堂込編1985）。

平成19年度の調査では、設定した3つのトレンチすべてから包含層が確認され、遺跡の範囲が従来よりも南に広がることが明らかとなった。土器は、貝塚時代前3、4期を中心とするものであったが、小破片が多く、遺構は検出されなかったことから、本遺跡の中心を把握するには至っていない。なお、最北の3トレンチにおいては近代の陶磁器を伴う集石遺構も検出されており、遺跡周辺の土地利用がごく最近まで下ることが明らかとなった。最南に設定した2トレンチでは、海に向かって緩傾斜する砂層の堆積も確認され、貝塚時代前3期以前の遺物が包蔵されている可能性も想定された。

3. 自然科学的分析の成果

（1）貝類遺体

過去の調査で検出された貝類遺体の組成（NISP: 同定個体数）を時期別に検討した結果、貝塚時代前2期はサンゴ礁岸側潮間帯の貝類が多く、淡水産貝類も一定量占め、貝塚時代前3期から4期にかけて徐々にイノー内の貝類の比重が高まる傾向が捉えられた。また、イノーにおける大形種と干瀬、礁斜面の貝類の積極的獲得が沖縄諸島よりも古い貝塚時代前4期に遡り、こうした状況が貝塚時代後1期まで継続することは本遺跡の大きな特徴で、こうした推移を明らかにできたのは大きな成果であったと言える。

貝塚時代後2期においては、以前の時代と大きく異なりリュウキュウヒバリ、ミドリアオリが優占する状況が確認された。このような傾向は同時代の奄美大島や沖縄諸島の遺跡でも認められている。

（2）脊椎動物遺体

貝類遺体と同様、脊椎動物遺体についても過去の調査で出土した資料の組成（NISP）を時期別に検討した。貝塚時代前2期において魚類とイノシシが混在しながら、イノシシが優勢である状況は、沖縄諸島、奄美諸島南部の特徴で、脊椎動物資源の利用様相が連動的であることが示された。

一方、貝塚時代後3期以降はサンゴ礁魚類とイノシシを主体としながら、ウミガメが加わる組成となり、奄美、沖縄両諸島の普遍的特徴と合致するという。しかしながら、この時期のサンゴ礁魚類に注目すると、沖縄諸島と比べて多様性に富み、突出した優占種が認められないという。こうした様相は奄美諸島の同時代遺跡と類似し、沖縄諸島とは異なる漁労文化が展開していた可能性が徳之島においても示されることとなった。

(3) 植物遺体

面縄第1貝塚、面縄第4貝塚より採取した土壌のフローテーション処理によって、貝塚時代前3、4期の土器が出土する包含層からシマサルナシと堅果類、貝塚時代後2期の貝層よりスダジイと堅果類が検出された。これまで面縄貝塚においては、面縄第2貝塚で貝塚時代前4期と対応するエノキの種子が検出されていたのみであったが（株式会社古環境研究所 2014）、今回の分析によって植物遺体資料の増加が認められ、土壌のフローテーション処理の有効性が示されることとなった。今後もサンプリングを継続的に実施して資料の充実を図り、本遺跡における植物利用について検討を進めていきたい。

また、平成24年度における土器の圧痕調査では、各時期の土器よりコクゾウムシや不明種子が発見されているが（小畠・真邊 2014）、植物資料に関するさらなる情報の獲得を目指し、今後も調査を継続する必要がある。

(4) 出土人骨

面縄第1貝塚より出土した人骨の分析では、昭和57年度調査洞穴部石棺墓の埋葬人骨の再調査と平成24、25、26年度調査における崖下部A、Cトレンチで検出された人骨の観察によって以下のことが明らかとなった。

昭和57年度調査洞穴内石棺墓の埋葬人骨は壮年の女性と鑑定されていたが、頭蓋3主縫合の癒合状況、残存歯の咬耗度合、下部胸椎から腰骨の状況、寛骨の形状から老年の女性であるとの所見が得られた。また、崖下部Aトレンチの埋葬人骨は、検出状況から埋葬、白骨化の後、墓が掘り返されて頭部が抜き取られたことが示され、寛骨の観察結果から壮年男性であると判定された。Cトレンチ東側IV層より検出された頭蓋骨は、壮年男性と推測され、計測の結果、琉球列島先史時代人の特徴を備える形質であることが明らかとなった。

なお、Dトレンチ埋葬人骨は時間的都合から取り上げを行なえず、形質人類学的な所見は今のところ得られていない。Aトレンチ埋葬人骨と同様に頭骨が抜き取られた状態で発見されたが、こうした埋葬状況は近隣のトマチン遺跡（貝塚時代前5期、新里編 2013）や面縄小学校体育館前の近世墓（第Ⅲ章第3節）においても確認されており、徳之島の特徴的かつ伝統的な埋葬習俗であった可能性も想定される。今後も注意が必要となろう。

(5) 放射性炭素年代

面縄第1貝塚においては、砂丘の堆積年代と人骨の埋葬年代について結論を得るために、出土炭化物と人骨の放射性年代測定分析を実施した。

洞穴内では貝塚時代後2期（古代並行期）のII層でAD8、9世紀、VI層でBC4000年前後の年代が得られ、洞穴内の貝層と砂層の年代をおおむね把握することができた。ただし、洞穴内1トレンチにおける石棺墓堀り込み層の炭化物はAD690-880を示し、石棺墓の年代（貝塚

時代前5期（縄文時代晩期～弥生時代前期並行期）とは齟齬が生じている。これについては今後の課題としたい。

崖下部CトレンチII層（貝塚時代後2期）出土炭化物の年代は、AD 7、8世紀代と洞穴内のII層と近しい値を示した。Aトレンチでは埋葬人骨周辺の炭化物3点と人骨の年代測定を行なったが、それぞれAD 4、5世紀、AD15世紀前後、AD17世紀前後と安定しておらず、人骨そのものは現代に近い値しか得られなかつた。ここでは貝塚時代の人骨であると結論付けられないが、土層や骨質は古い様相を呈していたので、将来追加分析を行ない、評価を定めたい。

崖下部Cトレンチ東側IV層の人骨頭部はBP2700年前後、洞穴内1トレンチ石棺墓北側集石周辺の人骨はBP2700年前後の結果が得られており、遺構・遺物の年代観と合致し、貝塚時代前5期（縄文時代晩期～弥生時代前期並行期）に収まる人骨と判断できる。崖下部Dトレンチ埋葬人骨の年代はAD16世紀前後であったが、埋土から青磁や陶器も出土していることから（牛ノ浜・堂込1985）、測定通り琉球王国時代頃の埋葬人骨と認定することができる。

第2節 検出遺構の特徴

1. 壊穴遺構と集石遺構

面繩第2貝塚では、砂丘面を掘り込んだ素掘りの壠穴遺構と集石遺構がまとまって検出されしており、出土遺物からは貝塚時代前4期（縄文時代後期並行期）の遺構群と判断された。

壠穴遺構は、炉や柱穴を伴う事例（平成14年度緊急調査SK-03）から、住居跡であった可能性が考えられる。奄美諸島においては当該期の壠穴遺構検出例として、奄美大島の長浜金久第II貝塚（弥栄1984）、半川遺跡（寺原・松村2005）、徳之島の下原遺跡（黒川編2004）が知られる。このうち砂丘地での検出例は長浜金久第II貝塚にあるもの、周辺に石窓を有する点において本遺跡の事例とは異なる。集成を参考にすると（杉井2002、2006）、奄美、沖縄諸島で砂丘に掘り込まれるこの種の遺構はほとんどが貝塚時代前5期以降に対応することから、検出例が少ない遺構であることに間違いはない。数少ない類例としては沖縄本島の平敷屋トウバル遺跡において壠穴住居跡として報告された遺構SI-2が挙げられる。規模は28×1.8mで、隅丸方形の平面形を呈しており、砂丘上に堆積した砂利を含む黒褐色土（V層）中より検出され、遺構内からは伊波式、荻堂式（貝塚時代前4期）が出土している（照屋他2008）。

平成23年度調査では、灰交じりの固結砂を含む黑色砂が円形様のプランとして認識されたため、これを遺構認定の根拠としたが、奄美大島の万屋下山田III遺跡（中山編1991）では、炉跡と報告される固く締まった混灰砂が検出されており、本遺跡と同様、この混灰砂が壠穴遺構の埋土であった可能性も考えられる。砂丘地における検出例が乏しいことはその見極めが困難であることに起因するのかもしれない。

その他の代表的な遺構に集石遺構があり、面繩第2貝塚平成14年度緊急調査におけるSK-07、08、12、平成20年度確認調査における2号集石遺構がこれに該当する。これらの特徴は、砂層を掘り込んで礫を充填し、覆土となる黑色砂層から炭化物が多く検出され、礫群は比熱して赤変している点にあり、炉としての機能を有していたと想定される。ただし、形態や規模は多様で、平面形円形を呈する集石遺構は直径1m前後（SK-07,12）と直径2m前後（2号集石）のものがあり、平面形方形を呈するSK-08は特に大型で、8m×7mの規模を有する。用途に応じて規模と形状が異なっていた可能性が想定される。これらは奄美、沖縄諸島の遺跡で多く確認されており（安座間2005）、普遍的な遺構と判断されるが、上述の壠穴遺構

の検出例が稀であることを踏まえると、堅穴遺構とセットで発見されること自体が本遺跡の大いな特徴で、稀少な事例となる。

なお、炉跡とみられる集石は面縄第1貝塚平成21年度調査洞穴内3トレンチにおいても確認されているが、洞穴内の入骨を包含するⅧ層から検出されているので、埋葬に伴う特殊な用途も想定しなければならないだろう。

2. 埋葬跡

面縄第1貝塚の洞穴部と崖下部からは複数の埋葬跡が発見されており、本地点が洞穴や崖下岩陰を利用した墓地であったことは明らかである。

洞穴内1トレンチの石棺墓は、昭和57年度に発見されたが、平成21年度の再調査によって石棺墓の南北に石灰岩の集石が検出されたことから、これらは一連の遺構となる可能性がある。石棺墓周辺に散在する人骨や石棺底面の掘り下げによって得られた骨片は、複数回にわたる石棺墓への再葬の結果残されたものと考えられる。さらに、石棺墓検出層直上には礫が多く含まれるⅢ層が堆積しているが、これらが崩落石でないことが明らかにされると、本石棺墓は石の充填による上部構造をもつこととなる。洞穴内における埋葬跡では、今後こうした点を注意しながら調査を進める必要があるだろう。

洞穴を利用する埋葬跡は、伊仙町の喜念原始墓（三宅1943）や喜念クバンシャ岩陰墓（立神・長野編1988）などが知られ、特に後者では棺状の配石が確認されており、本遺跡との関連性が注目される。

また、伊仙町佐弁の砂丘地に立地するトマチン遺跡では、多重構造をもつ石棺墓において再葬が行なわれた形跡が確認されており（新里編2013）、葬法としての類似性が認められ、墓に完形の土器が供獻される点についても共通している。これら供獻土器は両者とともに貝塚時代前5期に位置付けられるが、土器付着炭化物の年代測定では、トマチン遺跡で 2820 ± 22 BP、面縄第1貝塚で 2688 ± 28 BPと前者のほうが古く（新里編2013）、土器の型式学的な前後関係も矛盾はない（新里2013、新里はトマチン遺跡：仲原式、面縄第1貝塚：仲原式後続土器とする）。ただし、面縄第1貝塚の洞穴部では人骨に伴って貝塚時代前5期以前の土器も出土していることから、埋葬地としての洞穴利用はこれよりさらに古く遡ると想定される。

こうした状況から、貝塚時代前5期の徳之島においては、洞穴と砂丘地を利用した埋葬跡の両者が併存していた可能性が高く、墓地の立地が多様であったことが窺える。一方、面縄第1貝塚の石棺墓では土器のみが供獻されていたが、これに対してトマチン遺跡では棺内からヒスイヤゴホウラ製貝輪が出土し、さらに平石を入念に積むことによって石棺が構築され、上部構造として数トンにおよぶ覆石をもつなど、副葬品や墓構造は質的に異なる。こうした観点に立つと、面縄第1貝塚洞穴部における石棺墓は、トマチン遺跡のそれと同様に貝塚時代前5期の埋葬に関わる土地利用、葬法、墓地構造の差異を把握する上で欠かすことのできない重要な遺構であると言える。

第3節 出土遺物の特徴

1. 出土土器の特徴

本遺跡から出土した古手の土器として、貝塚時代前1期（縄文時代早期～前期並行期）の爪形文土器（面縄第1貝塚）、貝塚時代前2期（縄文時代前期～中期並行期）の条痕文土器、室

川下層式土器、(面縄第3、第4貝塚)が挙げられる。

爪形文土器は細片のみで、全形を知れる資料はないが、面縄第1貝塚の洞穴部と崖下部において検出されていることは、沖縄諸島における検出例と類似する。条痕文土器、室川下層式は面縄第3貝塚、第4貝塚の東洞部からまとまって得られているが、これらは石灰岩丘陵崖下に堆積した砂層から検出されており(牛ノ浜・堂込1985)、奄美大島における古期砂丘からの出土様相に近いと考えられる。

貝塚時代前3期(縄文時代中期～後期並行期)の面縄前庭式、同前4期(縄文時代後期並行期)の面縄東洞式、仲泊式は面縄第3、第4貝塚が立地する石灰岩丘陵崖下付近で検出されているが、とりわけ面縄第4貝塚の西洞部での出土が目立つ。また、砂層ではなく、黒色土層から出土していることから(牛ノ浜・堂込1985)、この頃石灰岩丘陵崖下の土壤化が進行していたことが分かる。

貝塚時代前4期(縄文時代後期並行期)の嘉徳I式A、B、嘉徳II式は本遺跡で最も検出量が多い土器群である。当該期の土器はすべての貝塚から検出されているが、その大半は面縄第2貝塚からの出土であった。面縄第2貝塚は、本遺跡の最南にあたる海岸砂丘地に立地していることから、貝塚時代前4期のある時に石灰岩丘陵崖下から海岸砂丘地へ遺跡の立地が変化したことを示している。

貝塚時代前5期(縄文時代晚期～弥生時代前期並行期)の土器としては面縄西洞式、犬田布式、室川式、宇宿上層式、仲原式などがある。出土量はさほど多くはないが、面縄第1貝塚では仲原式後続土器が石棺墓埋葬人骨への供献品として出土しており、また面縄第2貝塚では校舎改築中に完形に近い宇宿上層式が発見された。第3貝塚においても宇宿上層式土器の包含層が確認されているので、本遺跡においては前4期と同様、海岸砂丘地側から出土する土器群であると考えられる。

貝塚時代後1期(弥生時代中期～古墳時代並行期)に位置付けられるスセン當式土器は、第3貝塚の海岸砂丘より出土するが、この砂丘は貝塚時代前5期における包含層よりも南側に位置している。これらを包含する砂層はいわゆる新期砂丘に該当し、これらは遺跡の南東側に堆積していることが明らかである。続く貝塚時代後2期(古墳時代～古代並行期)の兼久式土器は、本遺跡においては、面縄第1、第3貝塚の石灰岩丘陵崖下テラス面や崖下部から検出される傾向にある。しかし、奄美諸島においては海岸側の新期砂丘から出土する例が多いことから、本期の包含層は、後1期の遺物を含む砂丘よりも南側に堆積している可能性がある。

これらに加えて春日式、市来式、山ノ口式などの搬入土器が在地土器と共に出土するなど、縄文時代、弥生時代における南九州との断続的な交流の痕跡も確認され、奄美諸島と南九州における時代的な対応関係を把握する上で貴重な資料となる。

このように、面縄貝塚では琉球列島の貝塚時代のほぼ全時期を網羅する土器群が緩やかに地点を分けながら層位的に出土し、なおかつ、九州島からの搬入品と共に共存する状況がしばしば確認される点で特徴的であり、これらは貝塚時代における遺跡立地の推移や当時の環境変化、また九州との並行関係等を明らかにする上で確実な時間的尺度となり得るものである。

2. 出土貝製品の特徴

本遺跡出土の最も古い貝製品は、貝塚時代前1期の爪形文土器と共に巖状貝製品であるが、続く貝塚時代前2、3期にスイジガイ製利器やヤコウガイ蓋製品が出現し、サンゴ礁貝類

の利用が明確となる。これらはいずれも利器と想定される遺物であり、貝類はまず日常的生活用品の素材として利用され始めたことを示している。

貝製品の検出量が顕著となるのは貝塚時代前4期で、利器に加えて、ゴホウラやオオツタノハ製貝輪、小型巻貝類の研磨穿孔品、イモガイ珠に代表される多彩な装身具類が著しく増加する。また、埋葬跡と考えられる面縄第1貝塚では、オオツタノハ製貝輪に加え、線刻文が施される貝製品が出土するなど、送葬に伴う特殊な貝製品の出現を予想させる。こうした出土状況は、貝塚時代前4期における貝製品利用の多様化を表しており、当該期は本遺跡における貝文化の転換期と判断される。

貝塚時代後1期は資料数が少ないものの、おおむねこうした傾向が続くとみられるが、貝塚時代後2期に至ると、広田上層式貝符、ツノガイ珠、イモガイ珠が検出されることから、広田遺跡（桑原編2003）に代表される種子島の貝文化との関連性が認められるようになる。なお、貝錘と推定される小型二枚貝の有孔製品もこの頃に増加する印象を受ける。

以上の状況から、本遺跡における貝製品はまず貝塚時代前1期に日常的利器として出現し、サンゴ礁貝類の利用が明確化する同前2、3期を経て、同前4期に種類、用途の多様化と著しい増加が認められるようになり、同後2期に至って琉球列島北縁地域における貝文化の様相が出現する、という一連の推移を辿ることが分かる。こうした動向は奄美、沖縄諸島において普遍的に認められるようである（山野2014）、貝塚時代前4期におけるオオツタノハ製貝輪の検出量はとりわけ多い印象を受け、さらに底状に成形される貝輪や刻画を目的とした面を有する貝製品が一定量含まれることは、徳之島において個性的な貝製品が製作されていたことを示している。こうしたことから、面縄貝塚では、奄美、沖縄諸島と歩調を合わせた貝文化をもちながらも、独特な貝製品が製作されていた点で特徴的であると言える。

第4節 遺跡立地の変遷と砂丘形成過程との関係

これまでの調査によって検出された主な遺構と出土遺物を図115にまとめたが、それを基に遺跡立地の推移について述べてみたい（図116）。

まず、貝塚時代前1期（縄文時代早期～前期並行期）の遺物は非常に少ないが、面縄第1貝塚洞穴部の各トレンチと崖下部VI層から検出されていることから、この時期の生活域は洞穴内または石灰岩丘陵崖下に立地していたと考えられる。貝塚時代前2期（縄文時代前期～中期並行期）の包含層は面縄第4貝塚、面縄第3貝塚の北側に堆積する古砂丘中より検出されており、石灰岩丘陵崖下に立地することが分かる。続く貝塚時代前3、4期（縄文時代中期～後期）は、基本的には前時期の立地と大差はないが、面縄第4貝塚において遺跡範囲の南側への拡大が認められる。遺物は土層中から出土することから、海側に砂丘が形成され、付近の土壤化が進行したと想定される。

本遺跡の立地上大きな変化が認められるのが貝塚時代前4期（縄文時代後期並行期）で、面縄第2貝塚付近に比較的大きな砂丘が形成され、この地が主な生活域として利用されるようになる。

貝塚時代前4期に対応するBP3500年前後は、サンゴ礁の海側への拡大によって消波構造が完成する時期に当たることから（菅2010）、遺跡立地のこうした変化は現在と近い海岸環境の成立と関係している可能性がある。貝塚時代前5期（縄文時代晚期～弥生時代前期並行期）においてもこの状況は継続するとみられ、面縄第3貝塚の南側でこの頃の包含層が確認される。

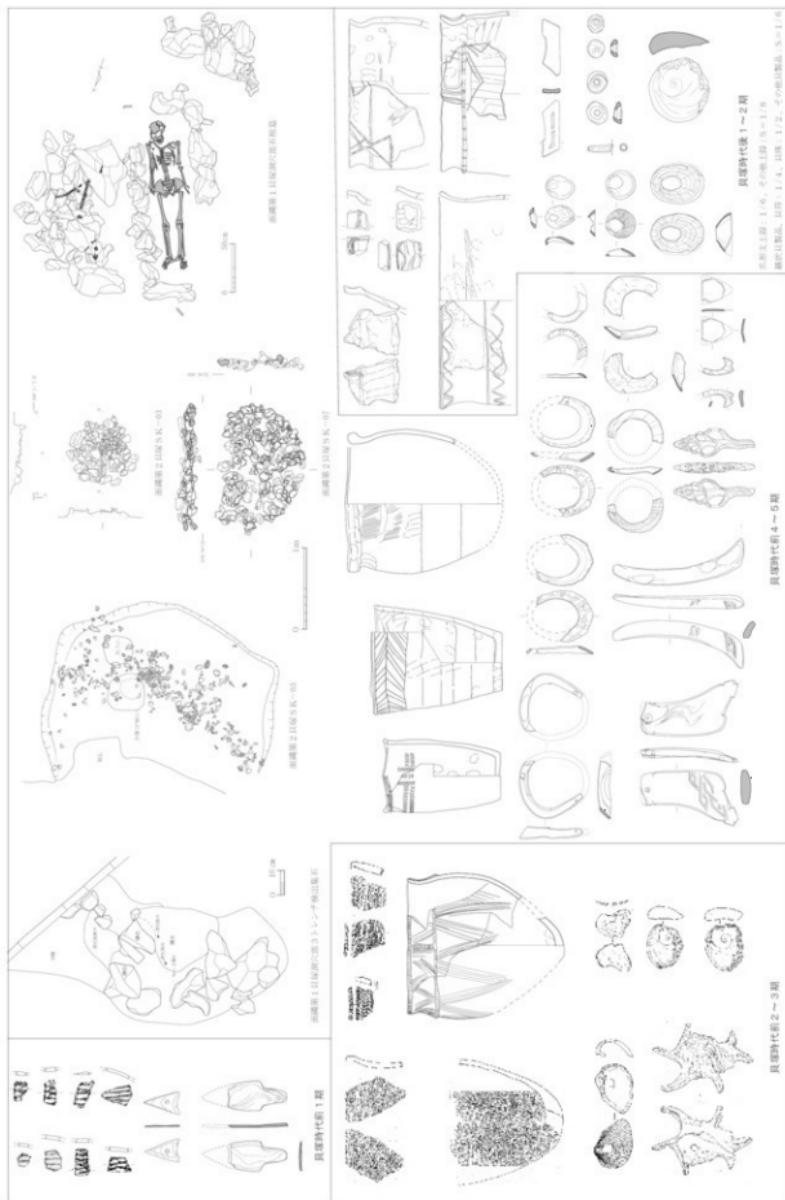


図 115 面埋貝家の主な遺構と遺物

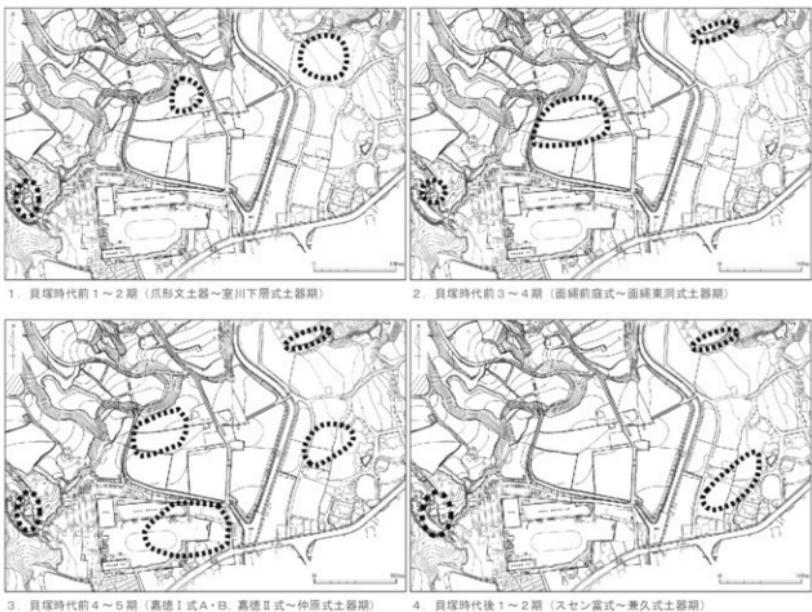


図 116 面縄貝塚における遺跡立地の変遷

貝塚時代後1期（弥生時代中期～古墳時代）、遺跡は面縄第3貝塚の南側に立地することから、新期砂丘の形成と共に遺跡の範囲が南側へ拡大したと理解される。貝塚時代後2期の貝層や包含層は面縄第1、第3貝塚の石灰岩丘陵崖下や崖下テラス面で検出されているが、さらに新しい砂丘の成立を想定すると、面縄第3貝塚南側砂丘地にも本時期の包含層や遺構面が包蔵されている可能性が考慮される。

なお、面縄第1貝塚では、人骨を包含する層から貝塚時代前3期以降の遺物が出土するので、墓地として長期的に利用されていたことは明らかで、こうした状況は琉球王国時代を経て、近世まで続く。面縄第1貝塚における発掘調査の成果を、東西方向の横断図上に概念的に示したのが図117であるが（横断ラインは図114参照）、本遺跡では、包含層、貝層、遺構面が複雑に堆積し、墓地の本体は洞穴内に遺されていると考えられる。今後は、砂層で埋没した洞穴空間の広がりを正確に把握することが課題となる。

図118には、面縄第2、第4貝塚における遺構面、包含層の堆積状況を南北断面の概念図として表現している（縦断ラインは図114参照）。これによると、時期の経過とともに、遺跡の立地が海側へ推移していく様子が確認され、同様の現象は面縄第3貝塚においても認められる（図119、縦断ラインは図114参照）。このことから本遺跡における遺跡立地の変遷は、海側へ向けて拡大していく砂丘の形成と密接に関係し、時代と共に遺跡の範囲が南側に広がる過程を示していると理解される。今後は、以上のような変遷を念頭に置いて、包蔵される遺跡の時代を予測しながら調査を進める必要があるだろう。

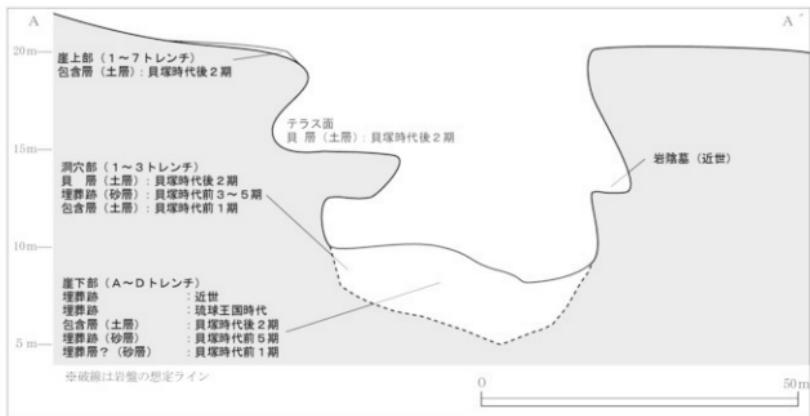


図117 面縄第1貝塚における遺構、包含層の検出状況概念図

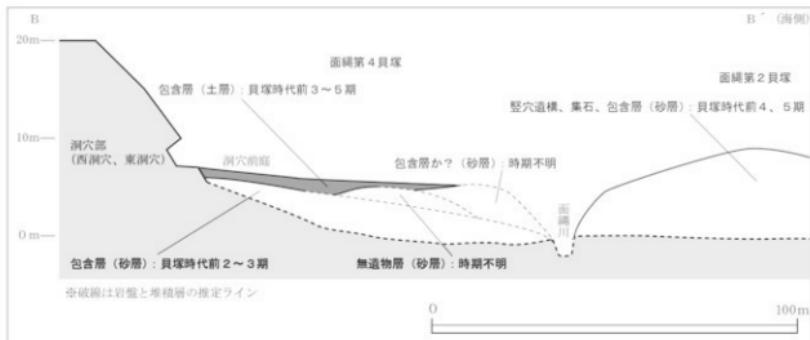


図118 面縄第2、第4貝塚における遺構面、包含層の堆積状況概念図

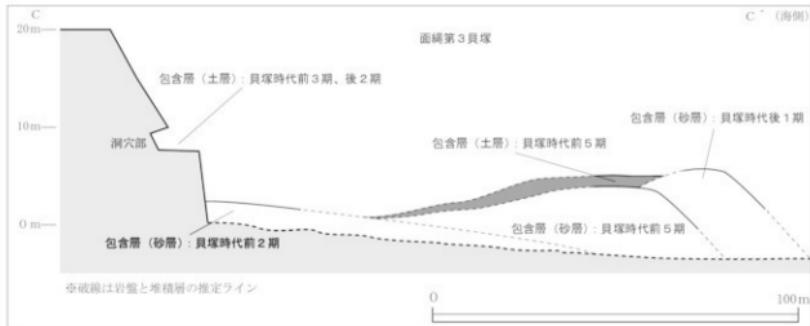


図119 面縄第3貝塚における包含層の堆積状況概念図

第5節 面縄貝塚の歴史的位置

1. 徳之島における面縄貝塚の歴史的位置

徳之島の最南に位置する面縄貝塚は、周辺にサンゴ礁、海岸砂丘、石灰岩丘陵、洞穴、河川など多様な自然環境を備えた、独特な景観を有する遺跡である。徳之島でこうした環境が一体的に残されている地域は本遺跡周辺に限られ、特徴的環境下に成立した貝塚時代の暮らしや文化を通史的に理解する上で欠かすことのできない遺跡である。特に、貝塚時代前2期（面縄第3、第4貝塚）や貝塚時代前4期の砂丘遺跡（面縄第2貝塚）は徳之島では発見されておらず、面縄貝塚は、本島における貝塚時代の空白期を埋める重要な歴史的位置を占めている。

2. 琉球列島における面縄貝塚の歴史的位置

面縄貝塚からは、奄美、沖縄諸島の貝塚時代を網羅する遺物が出土し、洞穴、石灰岩丘陵崖下、砂丘など多様な自然地形の中に埋葬跡と生活跡がセットで検出されている。琉球列島においてこうした遺跡は稀少であるが、時代が異なる各種遺構や遺物が地点を分けながら出土し、遺跡立地の推移がサンゴ礁や砂丘の形成過程と対応している状況が確認されたことは、貝塚時代遺跡の構造的理解に資する貴重な遺跡だと言える。また、自然遺物の分析では沖縄諸島とは異なる地域的特徴が示され、貝塚時代の資源利用の在り方が一様でないことが判明したのは、貝塚時代の文化が地域性をもちながら展開していたことの証拠となる。以上のことから本遺跡は、個性豊かな貝塚時代觀を描くに当たって歴史的に重要で、琉球列島の北側に位置する奄美諸島を代表する遺跡だと言える。

3. 日本列島の縄文文化における面縄貝塚の歴史的位置

貝塚時代にはサンゴ礁と深い関係をもった独特な文化が展開したが、奄美諸島の土器に注目すると、南九州における縄文土器文化の影響が確かに認められる。在地性が強固な沖縄諸島の貝塚時代文化に、日本列島縄文文化の要素を見出すことは一見困難であるが、奄美諸島を介すことによって南九州と沖縄諸島の文化的連続性を把握することができる。このことから、本遺跡は日本列島縄文文化の波及過程や程度を知る上で歴史的に重要な、琉球列島の北側における文化的接触地帯に位置付けられ、貝塚時代の文化的特徴は、奄美諸島を代表する面縄貝塚の正確な理解を経て初めて明らかにされるものと考えられる。

第6節 面縄貝塚の保存と活用

面縄貝塚の歴史的、文化財的価値を鑑みて、伊仙町は本遺跡の適切な保護に当たっての措置を図る予定である。当面の間は一帯の現状維持に努めるが、史跡指定等によって永続的に保護し、遺跡の理解に不可欠な周辺環境の保存と活用の方針もすみやかに定める必要がある。出土遺物や調査記録などは、伊仙町歴史民俗資料館において公開するが、伊仙町教育委員会は、遺跡見学会や講座等の積極的な開催によってその価値を十分に周知しながら、活用拠点の整備に向けた方策を講じ、面縄貝塚の積極的な公開、活用に努めるものとする。本遺跡が徳之島の歴史や文化を通史的に学習し、体感できる場となるよう、今後は伊仙町一丸となった取り組みが課題となる。

最後に本遺跡の調査と報告書作成に協力されたすべての方に感謝申し上げる。

引用・参考文献

- 青崎和憲・伊藤勝徳(編) 2001『カムイヤキ古窯跡群Ⅲ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
伊仙町教育委員会
- 安里嗣淳 2007 「「多和田編年」成立の背景と後期区分の再評価」『南島考古』No.26 沖縄考古学会
- 安座間 充 2005 「沖縄貝塚時代の集石遺構集成」『沖縄埋文研究』3 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 伊仙町誌編さん委員会編 1978 『伊仙町誌』
- 牛ノ浜修・井ノ上秀文 1986 『ヨツキ洞穴』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 伊仙町教育委員会
- 牛ノ浜修・堂込秀人 1985 『面繩貝塚群』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 伊仙町教育委員会
- 大山 柏 1921 「琉球伊波貝塚研究の基礎」『人類学雑誌』36卷1、2、3号 東京人類学会
大山 柏 1922 「琉球伊波貝塚発掘調査報告」
- 大山 柏・小原一夫 1933 「奄美大島群島德之島貝塚出土遺物」『史前学雑誌』5卷5号
- 小畠弘己・真邊彩 2014 「面繩第2・4・1貝塚出土土器の圧痕調査報告」『面繩貝塚群Ⅱ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書15
- 小原一夫 1932 「奄美大島群島德之島貝塚に就て」『史前学雑誌』4卷3・4号
- 鹿児島県 1990 『鹿児島県地質図』
- 鹿児島県立博物館 1996 「奄美の自然」 鹿児島の自然調査事業報告書Ⅲ
- 鹿児島短期大学 南日本文化研究所(編) 1970 『南日本文化』第3号
- 鼎 丈太郎 2014 「奄美諸島における兼久式土器について - その時代背景に就いての若干の考察 - 」『琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』六一書房
- 株式会社古環境研究所 2014 「面繩第2貝塚における樹種同定」『面繩貝塚群Ⅱ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書15
- 河口貞徳 1956 「南島先史時代」『鹿児島大学南方産業科学研究所報告』1卷3号 南方産業科学研究所
- 河口貞徳 1959 「鹿児島県大島郡兼久貝塚」『日本考古学年報』7 日本考古学協会
- 河口貞徳 1974 「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第9号 鹿児島考古学会
- 河口貞徳 1996 a 「面繩前庭式土器」 大川清・鈴木公雄・工楽善道(編)『日本土器辞典』雄山閣出版株式会社
- 河口貞徳 1996 b 「面繩東洞式土器」 大川清・鈴木公雄・工楽善道(編)『日本土器辞典』雄山閣出版株式会社
- 河口貞徳 1996 c 「嘉徳式土器」 大川清・鈴木公雄・工楽善道(編)『日本土器辞典』雄山閣出版株式会社
- 河口貞徳 1996 d 「嘉徳I式A土器」 大川清・鈴木公雄・工楽善道(編)『日本土器辞典』雄山閣出版株式会社

- 河口貞徳 1996 e 「嘉徳I式B土器」 大川清・鈴木公雄・工楽善道(編)『日本土器辞典』 雄山閣出版株式会社
- 河口貞徳 1996 f 「嘉徳II式土器」 大川清・鈴木公雄・工楽善道(編)『日本土器辞典』 雄山閣出版株式会社
- 河口貞徳 1996 g 「宇宙上層式・宇宙下層式土器」 大川清・鈴木公雄・工楽善道(編)『日本土器辞典』 雄山閣出版株式会社
- 河口貞徳 1996 h 「面繩西洞式土器」 大川清・鈴木公雄・工楽善道(編)『日本土器辞典』 雄山閣出版株式会社
- 河口貞徳 1996 i 「喜念I式土器」 大川清・鈴木公雄・工楽善道(編)『日本土器辞典』 雄山閣出版株式会社
- 河口貞徳 1996 j 「兼久式土器」 大川清・鈴木公雄・工楽善道(編)『日本土器辞典』 雄山閣出版株式会社
- 河口貞徳・国分直一・野口義磨、原口正三 1958「徳之島の先史遺跡調査報告」『人間科学』第10集
- 菅 浩伸 2010「琉球列島におけるサンゴ礁の形成史」『考古学ジャーナル』597 ニューサイエンス社
- 義 憲和 1992「徳之島の墓地（古代・中世・近世）」徳之島三町文化財保護審議委員連絡協議会
- 黒川忠広（編） 2004『下原（I～IV）遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書3 天城町教育委員会
- 桑原久男（編） 2003『廣田遺跡』廣田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 国分直一 1959「鹿児島県大島郡面繩第二貝塚」『日本考古学年報』7 日本考古学協会
- 国分直一 1960「面繩第二貝塚の調査(1954)」『農林水産講習所研究報告(人文科学編)』5号
- 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨、原口正三 1959「奄美大島の先史時代」九学会連合奄美大島共同調査委員会（編）『奄美・自然と文化 論文編』 日本学術振興会
- 駒井和愛・江上波夫・後藤守一 1934「琉球の繩文土器」『世界歴史体系』第2巻 東洋考古学（財）沖縄県文化振興会 2006『沖縄県史 図説編 県土のすがた』 沖縄県教育委員会
- 桜井清彦 1953「先史時代の沖縄」『歴史評論』48号
- 白木原和美 1970『徳之島野先史学的所見』『南日本文化』第3号 鹿児島短期大学南日本文化研究所
- 白木原和美 1976『大島郡伊仙町の先史学的所見』『南日本文化』第9号 鹿児島短期大学南日本文化研究所
- 新里亮人（編） 2005『カムィヤキ古窯跡群IV』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(12) 伊仙町教育委員会
- 新里亮人（編） 2010a『川嶺辻遺跡』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(13) 伊仙町教育委員会
- 新里亮人（編） 2010b『中筋川トゥール墓跡』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(14) 伊仙町教育委員会
- 新里亮人（編） 2014『面繩貝塚群II』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(15) 伊仙町教育委員会

- 員会
 新里亮人（編） 2015『史跡 徳之島カムイヤキ陶器窯跡保存管理計画書』 伊仙町教育委員会
 新里貴之（編） 2013『徳之島トマチン遺跡の研究』鹿児島大学
 新東晃一・青崎和憲（編） 1985a『カムイヤキ古窯跡群Ⅰ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書
 （3）伊仙町教育委員会
 新東晃一・青崎和憲（編） 1985b『カムイヤキ古窯跡群Ⅱ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書
 （5）伊仙町教育委員会
 杉井 健 2002「沖縄諸島における居住形態の変遷とその特質」『先史琉球の生業と交易』熊本大学文学部
 杉井 健 2006「居住形態からみた琉球列島の地域性」『先史琉球の生業と交易2』熊本大学文学部
 高梨 修 2004「奄美諸島の土器」『考古資料大観』12 小学館
 立神次郎・長野真一（編）『喜念原始墓・喜念クバンシャ遺跡・喜念クバンシャ岩陰墓』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）伊仙町教育委員会
 多和田眞淳 1956「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会
 角田文衛 1937「上代の種子島・日本文化の南限に就いて」『歴史地理』69卷1号
 寺田仁志 2015「参考資料5 史跡徳之島カムイヤキ陶器窯跡の植生について」『史跡 徳之島カムイヤキ陶器窯跡保存管理計画書』伊仙町教育委員会
 寺原徹・松村智行（編）2005『半川遺跡』竜郷町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書4 竜郷町教育委員会
 照屋孝・赤嶺信也・喜納政英・高野裕二・天久朝海（編） 2008『平敷屋トゥバル遺跡』株式会社イーエーシー（監修）うるま市教育委員会
 堂込秀人・栗林文夫（編） 1994『天城遺跡・下島権遺跡』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書（9）伊仙町教育委員会
 烏居龍藏 1894「琉球二於ケル石器時代ノ遺跡」『東京人類学雑誌』9～49 東京人類学会
 160～163頁
 烏居龍藏 1905 a「沖縄諸島に居住せし先住人民に就て」『東京人類学雑誌』20-227 東京人類学会
 235～244頁
 烏居龍藏 1905 b「八重山の石器時代の住民に就て」『太陽』11卷10号
 烏居龍藏 1926 a「沖縄本島に居住せし先住民に就いて」『有史以前の日本』磯部甲陽堂
 烏居龍藏 1926 b「八重山の遺跡に就て」『有史以前の日本』磯部甲陽堂
 中山清美 2008「マツノト遺跡における兼久式土器の編年基準」『南島考古』No.27 沖縄考古学会
 中山清美（編）1991『節田湊金久・万屋下山田遺跡』笠利町文化財報告No.13
 成尾英仁 2015「参考資料4 史跡徳之島カムイヤキ陶器窯跡周辺域の地質」「史跡 徳之島カムイヤキ陶器窯跡保存管理計画書』伊仙町教育委員会
 松下孝幸・石田肇 1985「鹿児島県伊仙町面繩第1貝塚出土の弥生時代人骨」『面繩貝塚群』伊仙町教育委員会
 松村 瞭 1920a「琉球の貝塚」『人類学雑誌』35～2 東京人類学会

- 松村 嘸 1920b 「琉球荻堂貝塚」東京帝京大学理学部人類学教室研究報告第三編 東京帝国大學
- 弥栄久志 1984 「長浜金久遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書31 鹿児島県教育委員会
- 三友国五郎・国分直一 1959 「徳之島面縄貝塚調査報告 - 面縄第2貝塚と付近の貝塚」「古代学」第8卷2号
- 三友国五郎・国分直一 1960 「鹿児島県大島郡徳之島面縄第二貝塚、およびその付近の遺跡調査概報」「日本考古学年報」8
- 三森定男 1939 「先史時代の西部日本(上)」「人類学・先史学講座」第11卷 雄山閣
- 三宅宗悦 1935 「南島の石器時代に就て」「ドルメン」4卷6号
- 三宅宗悦 1940 「南島の先史時代」「人類学・先史学講座」(16)
- 三宅宗悦 1943 「鹿児島県大島郡徳之島面縄貝塚に就いて」「考古学雑誌」20卷10号 考古学会
- 三宅宗悦・藤岡謙二郎 1940 「徳之島出土の貝塚土器に就いて」「考古学」11卷5号
- 八木獎三郎 1895 「琉球本島ニテ発見ノ石斧」「東京人類学雑誌」10—113 東京人類学会
- 八輔一郎 1950 「琉球先史学に関する覺書 - 考古学上より見た琉球 - 」「民俗学研究」15卷2号
- 山崎五十麿 1924 「石器時代遺物より見たる内地と琉球の関係」「沖縄教育」143号
- 山崎五十麿 1930 「鹿児島県大島郡徳之島面縄貝塚に就て」「考古学雑誌」20卷-10号
- 山野ケン陽次郎 2014 「先史琉球列島における貝製品の変化と画期・貝製装飾品を中心に - 」『琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』
六一書房
- 吉永正史・宮田栄二(編) 1984 「犬田布貝塚」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 伊仙町教育委員会
- 四本延宏・伊藤勝徳 2002 「徳之島・伊仙町小島ガラ竿遺跡の確認調査～AT火山灰下層の出土石器について～」「南島考古だより」69 沖縄考古学会
- 若林勝邦 1892 「種子島及ビ大島ノ石器」「東京人類学雑誌」7-71 東京人類学会

付 編

付編 1. 京都大学総合博物館所蔵の南島遺物

新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター）

はじめに

本編は、徳之島トマチン遺跡の出土遺物の比較研究を実施している際に、京都大学総合博物館第4収蔵庫において、南島関係の考古遺物が保管されているとの情報を得、2008年11月に実査した遺物の報告である。

京都大学総合博物館において南島資料が収蔵されている場所は2か所ある。そのほとんどは考古系の研究展示室に保管されており、故山中一郎氏に許可を賜り、阪口英毅氏に実査の便宜をはかっていただいて、既にその一部は公表した。人類・生物系の第4収蔵庫資料の実査に当っては、京都大学中務真人氏に許可を賜り、本川雅治氏に閲覧・撮影・実査の便宜をはかっていただいた。また、同収蔵庫遺物を確認し、筆者に情報を提供していただいたのは、東京文化財研究所石村智氏（当時、京都大学大学院生）である。以上の方々にこの場を借りて厚くお礼申し上げたい。また、今回、徳之島の他遺跡も含めた遺物の公表をご快諾いただいた伊仙町教育委員会、写真・図面で貝種の同定を賜った黒住耐二氏にも心より感謝申し上げたい。

1. 京都大学総合博物館所蔵南島資料

京都大学総合博物館に保管されていた南島関係の考古資料の一部は既に公表されている。奄美大島関係では三宅宗悦の発掘した万屋ナゴ浜出土資料（新里 2011）、徳之島関係では喜念原始墓の土器類（京都大学文学部 1960、義 1978、新里 2010）、沖縄本島関係では鳥田貞彦が発掘調査を行った崎樋川貝塚（鳥田 1932）の土器・貝製品・骨製品のほか、松村廉が調査した荻堂式貝塚、大山柏による伊波式貝塚の土器類の一部の寄贈品、そして矢倉和三郎・甫一郎などによって沖縄各地から採集された石斧類などが確認されている（嵩元ほか 1997）。以下では筆者が確認した南島遺物の概要と正式報告を行う。

2. 研究展示室（考古・歴史系）所蔵資料

○喜念原始墓出土品（目録番号 044・045・046）（登録番号 4662）

京都大学文学部が1960年に刊行した『京都大学文学部博物館考古資料目録』第1部（日本先史時代）において、出土地名が「大島郡徳之島町喜念・県道脇墓址」、品名・数量等が「土器破片 35 個・人骨破片 2 個・貝殻一括」とされるものである。同『目録』では「1935 年三宅宗悦発掘」とあるため、三宅宗悦が報告している喜念原始墓¹⁾で間違いない。土器類は「京都帝国大学文学部考古学研究室の藤岡謙二郎氏に整理を依頼してある」（三宅 1943）ことから、当時文学部に保管されていたものが考古系の研究展示室に保存されてきたと考えができる。しかし三宅によって調査報告されている多量に出土した貝製品の行方は未だ分かっていない。土器を中心とした遺物は既に図化報告した（新里 2010）。人骨については、峰和治によつて風習的抜歯の再調査がなされているので（峰 1992）、現在では第4収蔵庫に保管されていると思われる。前述『目録』の例言には「沖縄出土品と出土地不明品は、頁数の都合で補遺篇にまわした」とある。今後の追跡調査も必要となろう。



図1 京都大学総合博物館第4収蔵庫（人類・生物系）保管の南島遺物



1～4：面彫第二貝塚

5～7：喜志貝塚

8：徳之島内の古墓

9：出土地不明

写真1 京都大学総合博物館第4収蔵庫（人類・生物系）保管の南島遺物

3. 第4収蔵庫（人類・生物系）所蔵資料

3-1. 「沖縄・南西諸島（清野コレクション）」番号 980「大隅国大島郡笠利村字万屋ナゴ浜出土」

同箱内には、ビニール袋詰め人骨が2つ、箱内に人骨多数とシャコガイ1点、肥前瓶1点が納められたもの、そして箱の蓋に歯を中心とした人骨数点と青磁碗1点、褐釉陶器2点、鉄片数点、鉄滓1点、石片1点が納められ、ビニール袋で封をされたものを含めて、計4つの分類群がある。遺物に注記などがないため出土地点の詳細は定かではないが、遺物内容などから判断して、三宅宗悦のいう万屋ナゴ浜で採集した人骨と遺物で良いのではないかと考える（新里2011）。

3-2. 「沖縄・南西諸島（清野コレクション）」番号なし「徳之島その他南島」

同箱内には6つのビニール袋による分類群がある。そのうちのひとつに「花王石巒²⁾」の紙箱蓋に納められた貝製品及び貝類が8点あり、遺物は全て墨で注記されている。また、蓋の裏書に「キとあるは喜念県道脇原始墓 面トアルハ面繩第二貝塚 喜念貝塚 他ノ原始墓ノモノトハ場所異ル」と万年筆で書かれている。ところが箱内には「キ」と注記された遺物は入っておらず、「徳之島古墓副葬品」注記された貝が入っていた。以下、注記に沿って所属遺跡別に遺物を紹介する。

○面繩第二貝塚資料

1はゴホウラ製の小型背面貝輪未製品である。下部は欠損している。比較的厚手である。残存の外径（横）は8.3cm、内径（横）4.2cm、重さ67.0g。表面には虫食い穴が開いている。表裏面は研磨の痕跡は見られないが、風化したような状態であるため、海の打上げ品を採集、利用したものであろう。環形状に割取った後、外縁部及び腕通しの穴内縁部分を研磨しているが徹底せず、いくつかの研磨面単位を有したままとなっている（図斜線部分）。また、左側欠損部の破断面に虫食い跡が見られることから加工途中で破損したものと考えられ、右側欠損部は再研磨がなされ、再利用しようと試みられた痕跡がある。しかしながら、結果的には廃棄されたものであろう。「面II₁」の注記がある。

2は厚みなどからメンガイ類（カバトゲウミギクカ）を用いたものと考えられるが、判然としない。半環状に割り取られている以外に明確な加工痕は見られない。加工途中で廃棄された未製品であるのか判断がつかない。残存の重さ10.8gを計る。「面II₂」の注記がある。

3・4はオオツタノハ製の貝輪破片である。表面は肋間の凹部自然面と色彩の一部がわずかに残る。3は連結式の貝輪であり、表裏面から回転穿孔した孔が穿たれる。表面外径は4.5～5.5mm、内径2～2.9mm、裏面外径は5～6.5mmである。明確な加工痕跡はなく、表面や外縁部は手慣れ様である。穿孔部とは反対の端部が欠損していることから、破損して廃棄されたものと判断される。残存の重さは3.8gである。「面II₃」の注記がある。4も貝輪破片であるが、両端は欠失している。内径側表面や内縁部はよく研磨されている。加工途中の破損品であろうか。残存の重さは2.5g。「面II₄」の注記がある。

○喜念貝塚資料

5・6はオオツタノハ製の貝輪破片である。どちらも破損後に廃棄されたものであろう。表面は肋間の凹部自然面と色彩の一部がよく残っている。5は両端を欠失したもので、外縁側は

手慣れ様であり、表面と内縁側は研磨されている。上端は虫食いがひどく、そのために破損したものと考えられる。残存の重さは 55g。「喜念貝塚₁」の注記がある。6 も両端が破損している。表面、外縁部、内縁部ともによく研磨されている。内面外縁側は手慣れ様である。残存の重さ 37g。「喜念貝塚₂」の注記がある。

7 はオオベッコウガサガイで、表面には砂が固着しているため、表面の様相は不明である。外径（横）4～（縦）4.9cm、内径（横）2.4～（縦）3.1cm、重さ 38g をはかる。小型であることや孔以外に加工のないことなどから考えて、食料残滓の可能性もある。「喜念貝塚₃」の注記がある。

○「徳之島古墓副葬品」

8 は徳之島の古墓内から出土したことは注記から判断できるが、徳之島のどの古墓なのか不明のものである。メンガイ類（カバトゲウミギクか）の右殻（下殻）であり、海浜部で採集したものであると考えられる。表面の虫食いが著しい。殻口の縁の凸部が研磨されたように平坦になっているが（図斜線部分）、明確な加工であるのか水摩によるものか判断がつかなかつた。殻長は 10.7～12.5cm、重さ 174g である。

3-3. 記載のない箱内 多数の人骨中に含まれた1点の土器

○出土地不明

9 は上記 3-1、3-2 で示した南島資料の箱に近接して置かれた、記載ない箱内にあった土器である。いわゆる南島の「くびれ平底系土器」に形状的に類似した土器であるために、ここで図示した。この資料は洗浄されていないので、表面の諸特徴や胎土の観察が不可能であつた。見込みの部分にわずかに横位の調整痕が確認できる。奄美くびれ平底系に特徴的な木葉痕はみられない。あるいは南島の土器ではなく、九州・本州の縄文時代晩期の深鉢形土器の底部であるかもしれない。底径は 6cm である。

4. 遺物の所属年代について

本編で図示した遺物は、出土地不明の土器を除くと、京都帝国大学清野謙次研究室所属の講師であった三宅宗悦が、南島調査を実施していた 1935（昭和 10）年に、中山英司とともに徳之島に渡り、発掘調査し得られた遺物であると考えられる。三宅はこのとき、徳之島伊仙村（当時）所在の面縄第一・第二貝塚、喜念貝塚、喜念県道脇の原始墓を発掘し、佐弁貝塚も発見している（三宅 1940）。

面縄第二貝塚調査の概要では、面縄小学校に接する芋畑において、南北 3m、東西 1m、深さ 1m のトレンチで調査を実施し、土器片、石器 2 個（1 個は断崖露頭の貝層で採集）、貝輪片などを得たことが記されている。遺物出土状況の表からは地表下 50～80cm 間で遺物が出土し、貝輪片の出土は B グリッドの深さ 50cm 付近からの出土と考えられる。貝塚の主要部分が失われていると判断し、本格的な発掘に移行しなかったとされている。土器の詳細については藤岡謙二郎によって整理研究されているが（三宅・藤岡 1940）、そのほとんどが縄文時代後期後葉に並行する龍目文系の嘉徳Ⅱ式、嘉徳ⅠA 式、嘉徳ⅠB 式である。わずかにそれよりも古い面縄東洞式や奈良・平安時代並行の兼久式らしき資料も含まれる。三宅によれば土器は地表下 60cm 付近を中心に出土しているようなので、貝製品類の出土はそれより上に位置することに

なり、縄文時代後期後葉以降のものであるととらえられる。

喜念貝塚は断面に貝層が露出し、現地表より約 1m が白砂層、その下位 30cm が貝層、その下部 30cm に貝殻や遺物を含み、それ以下は再び白砂層であるとする。遺物は土器片がほとんどで、わずかに磨製石斧片 1 点と敲石を得ている。この南方約 50m の小道の横の試掘では、約 30cm の砂層下に約 30cm の貝層を確認しているが、遺物包含量も僅少であったとされている（三宅・藤岡 1940）。貝輪破片はこの試掘坑から出土している（三宅 1940）。土器の詳細についてはこれも前述藤岡に依っているが、（三宅・藤岡 1940）、その主体は、縄文時代晚期並行肥厚口縁系の宇宿上層式であり、わずかに縄文時代後期後葉に並行する籠目文系の嘉徳 II 式、嘉徳 I A 式、そして古墳時代に並行するスセン當式が得られている。同貝塚の主要な土器は宇宿上層式であるので、貝製品もその時期に帰属する可能性が高い。しかし、土器は貝塚断面出土であるのか、試掘坑出土であるのかも判然としないため、正確な時期は不明である。同貝塚の石器は三宅によって写真紹介されている（三宅 1940）。

「徳之島古墓出土副葬品」とされている資料については、三宅自身の公表した文献中に該当するものが見出せない。三宅は 1935（昭和 10 年）のみ徳之島へ渡り、調査を行っていることから同年得たものであることは間違いない。喜念貝塚の調査では「発掘は困難ではないが時間をするのと、他に古人骨採集の主要目的があったので、十分に精査せず・・・」（三宅・藤岡 1940）また「約 80 例の古人骨の採集、約 200 例の手掌理紋の調査を行った」（三宅 1936）とあるので、奄美諸島や沖縄諸島で実施されたような古人骨収集を主要目的とした墓地調査を徳之島でも行っている可能性が高い。また、三宅は石器時代の墓を「原始墓」、近世以降の墓を現地での呼称にならって「古墓（ふるばか）」と称しているので、近世以降の古墓に副葬されていた資料であったと考えておきたい。

注

- 1) 「南島の石器時代」（三宅 1935）では「徳之島伊仙村喜念の県道脇…原始群集墓」、「南島の先史時代」（三宅・藤岡 1940）では、「徳之島伊仙村喜念の県道脇（原始墓）」とされている。現在、鹿児島県による遺跡名は「喜念原始墓」であるので、これを採用した。
 - 2) 「新装花王石鏡」箱のデザインは、1931（昭和 6）年 3 月から発売されたものであり、1953 年（昭和 28）には別のパッケージとなっている（花王石鏡の歩み：<http://www.kao.co.jp/white/history/index.html>）。
- 1935（昭和 10）年の徳之島発掘調査以後、さほど時間のたなないうちに本人によって書かれた裏書である可能性は高い。

文献（五十音順）

- 義 恵和 1978「伊仙町の先史時代」「伊仙町誌」伊仙町誌編さん委員会 56-84 頁
 京都大学文学部 1960「大島郡徳之島町喜念・県道脇墓址」「京都大学文学部博物館考古資料目録」第 1 部（日本先史時代）298-299 頁
 島田貞彦 1932「琉球崎樋川貝塚」「歴史と地理」第 30 卷第 5 号 史学地理学同考会 50-62 頁
 新里貴之 2010「南西諸島における先史時代の墓制（II）」「地域政策科学研究」第 7 号 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科 139-158 頁
 新里貴之 2011「三宅宗悦調査の万屋ナゴ浜埋葬跡：京都大学総合博物館収蔵資料から」「奄美考古」第 6 号奄美考古学会 26-34 頁

- 嵩元政秀・新田重清・安里嗣淳・小田静夫 1997「京都大学文学部博物館所蔵の沖縄関係考古 資料」「史料編集室紀要」第 22 号 沖縄県教育委員会 205-234 頁
- 峰 和治 1992「南九州および南西諸島における風習的抜歯」『南九州地域における原始・古代文化の諸様相に関する総合的研究』平成 3 年度教育研究省内特別研究費研究成果報告書 鹿児島大学法文学部 55-58 頁
- 三宅宗悦 1935「南島の石器時代に就て」「ドルメン」第 4 卷第 6 号 国書院 149-159 頁
- 三宅宗悦 1936「奄美大島北部住民の手掌理紋の研究」「人類学雑誌」第 51 卷第 11 号 東京人類学会 1-26 頁
- 三宅宗悦 1940「南島の先史時代」「人類学・先史学講座」第 16 卷 雄山閣 1-43 頁
- 三宅宗悦・藤岡謙二郎 1940「徳之島出土の貝塚土器に就いて」「考古学」第 11 卷第 5 号 東京考古学会 235-251 頁
- 三宅宗悦 1943「大隅国德之島喜念原始墓出土貝製品及び出土人骨の抜歯に就て」「考古学雑誌」第 33 卷第 10 号 東京人類学会 1-10 頁

付編 2. 面縄第1貝塚発見者・大村行信の足跡

大村達郎（財宮本記念財團研究員・日本民俗学会会員）

はじめに

面縄貝塚（のちに「面縄第一貝塚」と改称）の発見者として知られる大村行信（おおむら・ゆきのぶ）は、明治 25 年に父・儀佐和徳、母・こせの間に長男として生まれ、昭和 15 年に死去している。享年 48 歳。生前、尋常小学校の教員を務め、3 男 5 女をもうけている。12 年前、初めて徳之島を訪れた筆者に対し「ギセンセイのマアグワ（孫）」と呼ぶかつての教え子の方が健在であったことから、現在 90 歳代以上のご高齢の方々の間には旧姓の「儀」の方がなじみ深いのかもしれない。「大村」姓になったのは面縄尋常高等小学校に赴任する直前の昭和 3 年初頭のことである。以下、わたくし事を綴ってしまうかもしれないが、この場を借りて祖父・行信の足跡について述べることをお許しいただきたい。



写真 1 大村行信 遺影

1. 学業への志、そして教員の道へ

学校の制度や設備が充分に整備されていない明治時代中頃の徳之島にあっては、シマの子どもたちは土地の知識人が開いた私塾に通っていたとされる。面縄間切喜念曇（面縄方）検福村生まれの行信は、昼は小学校に通い、夜は同地の旭家に設けられた私塾で学んでいたという。そして、のちには師の旭福泉（二代目、天保 14 年生一明治 36 年没）氏のもと、友人たちとともに後進の者たちの学習指導を手伝っていたという（注 1）。さらに行信は学業を志して大島農学校（鹿児島県立大島高等学校の前々身）に進学、大正 3 年に卒業し、シマでの野良仕事を経て、尋常小学校の教員として大島郡内各地に赴任している（注 2）。

2. 面縄貝塚との関わり

行信が面縄貝塚を発見したのは昭和 3 年 7 月のことといわれているが、実のところ、発見するに至った詳しい経緯は必ずしも明らかでない。そのあたりの事情は今となっては知る者もなく、記録（文献）の上では、実際に発掘調査にあたった廣瀬祐良氏の報知を受けた山崎五十鈴氏の調査報告に、次のように簡潔に述べられるのみである。

元来同貝塚は開墾等に依り貝殻の散布せるものありたるも遺跡たるを何人も気付かざりしが昭和三年七月偶、面縄小学校訓導大村行信君に依りて発見せられ直ちに同校生徒と協力して試掘し其結果初めて石器時代の貝塚なることを認知するに至りたるものにして最近のことにつき属す。（山崎 1930）

実際、貝塚の地所からは「発見」とされる以前から多くの遺物が出ていたらしく、面縄小学校墓地の西側の崖にガラ（竹）を伐りに行った際には骨や貝類が周囲によく落ちていたという（注 3）。あくまでも筆者の推測であるが、面縄尋常高等小学校に赴任する前後（父・佐和徳は

大正 15 年に死去）に、貝塚の一部を含む地所を所有していたことを一家の長として知らされ、見回りや草刈りの折に形の整った遺物を偶然見つけたというのが真相に近いようである。いずれにせよ、その地所に散見された遺物の価値にいち早く気付き、遺跡の存在を周囲の者に語ったことこそが「発見者」と認識される契機となったのであろう。しかし、のち自身では専門的な発掘調査にはかかわらず、実際の発掘調査は若き学究の廣瀬祐真氏と小原一夫氏に託したのであった。

先の山崎氏の調査報告には、貝塚の発見とともに面縄尋常高等小学校の児童たちとの遺跡の見学会と思しき記述も見えている。尋常科の高学年の中担任をすることが多かった（注 4）行信は、当時でも——とくに奄美、徳之島では——目新しい学問であった「考古学」の世界の一端を、実際に貝塚を訪ね遺物を拾いあげるという「体験」を通じて児童たちに学ばせたのであった。もちろん、その主眼は、シマという場所でも身近な事物から歴史に触れることができることを気付かせることにあったろう。残念なことに、貝塚見学という学びの機会はのちの戦中戦後の混乱期にひき継がれることはなかった。しかし、児童たちとの貝塚見学の事実は戦中戦後生まれの人々によって今日まで語り継がれてきたのであった。

3. 実感の授業

他方、尋常小学校訓導としての行信は、ユニークな授業を試みていたことが知られている。たとえば、当時受け持っていた面縄尋常小学校の低学年の児童に対しての国語の授業では、知人から借りた軍服を自ら身に着け銃の代わりに棒を担いで、児童たちに「スヌメ、スヌメ、ハイタイサン、スヌメ…」と大声で読みあげさせながら、自身は教室の中をにこやかに笑いつつ行進して見せたという（注 5）。児童たちの眼前に具体的なものを示し実感を伴いながら学習を進めていく方法というのは今日では当たり前のことであるが、当時にあってはより効果的に児童たちの学習を助けたことだろう。先の貝塚見学もこうした学習の延長線上にあったことがうかがい知れるのである。

4. 晩年の暮らし

昭和 12 年 4 月、行信は犬田布尋常高等小学校に異動となる。犬田布の教員住宅に幼い小学生の娘一人を伴って住まいながら、週末には古里の自宅に帰って母親・兄弟・妻子と過ごし、週初めの朝早くには犬田布の住宅に戻って小学校で勤務をする、という生活を送る（注 6）。そんな生活を続けていた昭和 15 年のある日、亀徳の港に小学校の備品となる剣道の道具をトラックで取りに行ったという。その帰り道、古里にさしかかったところで自宅での用事でも思い出したのか、しがみついて乗っていたトラックから飛び降りたのだそうだ。しかし運悪く、県道の側溝に落ちて鎖骨（一説には肋骨とも）を骨折するというけがを負ってしまう（注 7）。しばらくは自宅で療養に努めたそうだが、弱った身体にさらに喘息を患い、発作を起こして 7 月 15 日に不帰の人となってしまった（注 8）。以後、面縄貝塚を望む面縄小学校墓地の一隅に眠っている。



写真 2 在りし日の大村行信
(昭和時代初期、徳美佐男氏提供)

一むすびにかえて

祖父・行信が、面繩貝塚の発見者として、また大島郡内の尋常小学校の教員としてシマの人々に記憶されてきたことは、孫として非常にありがたいことである。また、多くの研究者や町の教育委員会の関係各位のご努力のもと、面繩貝塚の文化財的価値が示され、シマの歴史の大きな流れが解明されつつあるのは誠に喜ばしいことである。祖父・行信はシマの未来を児童たちの成長に重ねて見ていた。このたびの研究成果を含め、今後の研究の進展がシマの人々の生活の原動力となることを心から期待している。

【引用文献】

山崎五十麿 1930 「鹿児島県大島郡徳之島面繩貝塚に就て」『考古学雑誌』20卷10号 考古学会 9-10頁

【参考文献】

国分直一ほか「奄美大島の先史時代」九学会連合奄美大島共同調査委員会（編）『奄美—自然と文化—』論文編 日本学術振興会 昭和34年3月

天城町役場・小林正秀（編集）『天城町誌』天城町 昭和53年11月

（注）

1. 検福出身の富山秀次氏（故人）からの平成16年当時の聞き取りによる。富山氏は行信の後輩にあたり、実際に学習指導を受けたことや、青年時代の行信や若者たちが農作業に連れ立って行くさまを懐かしそうに回顧してくださった。
2. 行信の三男・大村啓次郎（昭和14年生—平成15年没、筆者の父）作成の「(大村行信) 縮歴書」による。原資料は伊仙町立面繩小学校所蔵か。参考までに全ての赴任地を以下に示しておく。
大正6年9月、諸鈍尋常高等小学校（代用教員）→大正9年4月、亀津尋常高等小学校（代用教員）→大正12年3月、亀津尋常高等小学校（訓導、以後尋常科勤務）→大正12年4月、神之嶺尋常高等小学校（訓導）→昭和3年4月、面繩尋常高等小学校（訓導）→昭和12年4月、犬田布尋常高等小学校（訓導）。
3. 古里在住の徳富茂雄氏からの聞き取りによる。
4. 行信の義妹・泉ちよからの聞き取りによる。
5. 行信の次女・徳カネ（昭和元年生—平成26年没）からの平成16年当時の聞き取りによる。
6. 行信の長女・大村八重（大正11年生－昭和20年没）旧蔵、徳美佐男家所蔵の古写真に小学校教員の集合写真があり、そこには晩年の姿が収められていた。並み居る教員の中に行信の姿があり、その傍らには、三女・池田ノリ（昭和3年生—平成26年没）の姿があった。
7. 行信の甥・大村元治からの聞き取りによる。
8. 徳カネからの平成16年当時の聞き取りによる。

*本稿の作成にあたり、泉ちよ（大正6年生）、徳富茂雄（大正12年生）、大村元治（昭和6年生）、泉昭久（昭和7年生）、中村宏子（行信の五女、昭和11年生）の諸氏、および伊仙町立面繩小学校校長・吉田隆光氏よりご教示を賜った。また、徳美佐男氏よりご架蔵の古写真を閲覧する機会を賜った。ここに芳名を記して篤く御礼申し上げる次第である。

付編 3. 面縄第1貝塚の調査者・廣瀬祐良について

新里亮人（伊仙町教育委員会）

1. 廣瀬祐良とは

廣瀬祐良とは、面縄第1貝塚の調査をはじめとして数多くの遺跡調査に携わった、戦前の奄美考古学を牽引した人物である。出身地の徳之島で遺跡調査を開始し、戦後、転居先の鹿児島でも研究活動を続けていたが、昭和28年12月21日、病のため48歳の若さで早世された（廣瀬1983）。

ここでは、奄美大島、徳之島を主なフィールドとして積極的な研究活動を展開した氏の足跡を辿り、面縄貝塚の調査がどのような経緯で行なわれ、徳之島での調査研究が学問的にどのような意味をもつのかについて紹介してみたい。

2. 生い立ちと教員時代

廣瀬祐良は5人兄弟の二男として、明治38年10月2日に生まれた。兄秀雄によると、小学校当時から病弱であったが、鹿児島師範学校養成講習科を優秀な成績で卒業し、自ら希望して奄美大島で教員生活をスタートさせたとのことである（廣瀬1983）。

熱心な指導によって注目され、将来を嘱望されたものの、病のため休職を余儀なくされ、しばらくして教職を去ったという。その後廣瀬は、闘病生活を送りながら独学で考古学を学んだが、その詳しい経緯についてはよくわかっていないらしい（廣瀬1983）。

3. 面縄貝塚の発見と調査

廣瀬は退職後、徳之島で朝日新聞の通信員を務めていたようだが（廣瀬1983）、面縄貝塚の発掘調査に携わったのはおそらくこの頃だと推察される。

昭和3年、廣瀬から貝塚らしいものが発見された知らせを受けた山崎五十麿は、廣瀬に発掘調査、地形図作成、写真撮影を依頼してその成果を公表した（山崎1930）。これが奄美諸島で最初の発掘事例になる面縄第1貝塚の調査で、これを機に廣瀬は奄美諸島における遺跡調査の第一人者となった。

この成果を受けた小原一夫（当時早稲田大学学生）は、面縄第2貝塚を発見し（小原1932）、後日、大山柏（大山史前学研究所）との連名でその出土遺物の報告を行なった（大山・小原1933）。大山、小原による調査研究によって、面縄貝塚は沖縄本島の伊波貝塚、荻堂貝塚と並ぶ重要な遺跡と認識されるようになり、「貝器の発達」に代表されるその文化内容は「縄紋系統の一南端文化」との評価を受けることとなった（大山・小原1933）。

4. 廣瀬の調査研究

廣瀬の遺跡調査は、三宅宗悦（当時京都帝国大学医学部講師）の論考によって詳細を知ることができます（三宅1935、1940、1943、三宅・藤岡1940）。

昭和7年、亀津村本川貝塚を発見したことを初めとして、昭和8年、喜念貝塚の発掘によって小児人骨や貝輪を検出し、昭和9年には道路拡幅の工事現場から喜念原始墓を発見している。いずれも徳之島在住時のフィールド調査に基づいた成果とみられるが、三宅（1935）によ

る「奄美群島中徳之島も殊に伊仙村にのみ貝塚の多い事は一見奇異であるが之は同地に前出の廣瀬祐良氏ある為で、他は探されてゐないからである」との記載に注目すれば、廣瀬の地元に根差した調査が当時の考古学研究にどれだけ貢献していたかを知ることができる。

廣瀬はフィールド調査のみならず、当時の研究情勢を整理し、自らの研究成果の総括も進めていた。一般にはあまり知られていないが、鹿児島県立図書館と同館奄美分館には、廣瀬による手書きの著書『昭和八年度郷土史研究 徳之島ノ部』が所蔵されており（図1、廣瀬未出版）、これによって氏の研究成果の一端を知ることができる。本書は祐良の長女によって保管されていたが、兄秀雄が弟の研究軌跡の証として鹿児島県立図書館に寄贈したものらしい（廣瀬 1983）。

面縄貝塚に関する記録はもとより（図2）、亀津村（現徳之島町）の尾母大谷山より出土した按司時代土器（図3）、小原一夫とともに発見したイシャンダリ塚（図4）などに関する記載は本書によってのみ知れる情報である。伊仙町義名山付近に位置する通称イシャンダリの森には塚があり、京都大学の関係者を交えた調査によって大きな棺が発見されたと兄秀雄は回想している（廣瀬 1983）。

さらに本書には、廣瀬の優れた見識や問題提起のみならず、「本邦考古學会の権威鳥居龍藏博士も來島した旨の報知に接し」しており、また、鹿児島で山崎五十磨と居合わせていた島田貞彦（京都帝国大学）から先述した亀津村尾母発見の按司時代土器に関する所見を得て、「按司屋敷と稱さる、位置よりの出土土器なれば、我徳之島に於ける按司の割據の年代に符合すべし。」と結論付けるなど、大学の研究者とも対等にやり取りしていた様子も記されている。こうした記載は、廣瀬が郷土史研究に留まらず、全国的な視野をもちながら研究活動に尽力していくことを如実に物語っている。

5. 廣瀬祐良が果たした学問的役割

廣瀬祐良が関わった面縄貝塚、喜念貝塚、喜念原始墓、本川貝塚などは、後の調査研究によって、琉球列島の先史時代文化を理解する上で重要な遺跡であることが明らかとされている。

面縄第2貝塚の調査では、奄美諸島が沖縄本島と九州の文化的な間隙を埋める重要な地域であり、琉球列島の先史時代土器が日本列島の縄文土器と関係することが示された（大山・小原 1933）。喜念貝塚は喜念式土器の標識遺跡となり、本川貝塚は兼久式土器期の代表的な遺跡であることが明らかとなった（河口 1974）。また、喜念原始墓では、豊富な貝製品とともに抜歯

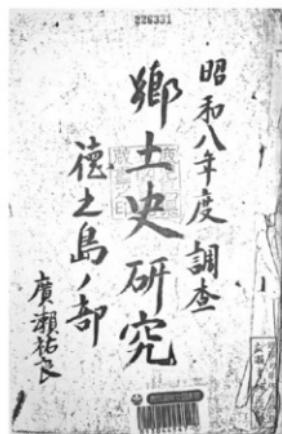


図1 廣瀬による著書



図2 面縄より発見の石器
(廣瀬未出版所収)



図3 亀津村尾母発見の按司時代土器
(廣瀬未出版所収)

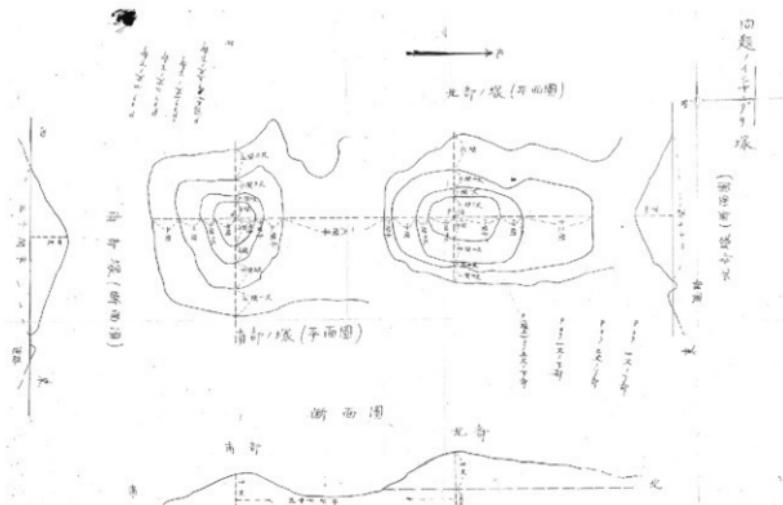


図4 イシャンダリ塚の略測図（廣瀬未出版所収）

人骨が出土し（三宅1943）、後の調査で周辺に新たな埋葬跡が発見された（立神・長野1988）。

現在よりはるかに恵まれない研究環境に置かれていたにも関わらず、地道な情報収集と実地調査を行ない、先駆的な研究者の関心を奄美諸島に導いた点において、廣瀬は学問的に重要な役割を担っていた。地に根差した着実な遺跡調査を進め、研究者との密接な連携のもと、その成果を発信し続けた在地の研究者が確かに存在していたことを、奄美諸島の考古学研究を志す者は忘れてはならない。

参考文献

- 大山柏・小原一夫 1933「奄美大島群島徳之島貝塚出土遺物（第一回）＝面經第2貝塚＝伊波式土器の研究」『史前学雑誌』5卷5号
- 小原一夫 1932「奄美大島群島徳之島貝塚に就て」『史前学雑誌』4卷3・4号
- 河口貞徳 1974「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第9号 鹿児島考古学会
- 立神次郎・長野真一（編）1988「喜念原始墓・喜念クパンシャ遺跡・喜念クパンシャ岩陰墓」伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書7 伊仙町教育委員会
- 廣瀬秀雄 1983『私の八十年』
- 廣瀬祐良 未出版『郷土史研究 昭和八年度調査 徳之島ノ部』鹿児島県立図書館蔵
- 三宅宗悦 1935「南東の石器時代に就て」「ドルメン」4卷6号
- 三宅宗悦 1940「南島の先史時代」「人類学・先史学講座」16
- 三宅宗悦 1943「大隅国徳之島喜念原始墓出土貝製品及び出土人骨の抜歯に就て」「考古学雑誌」33卷10号
- 三宅宗悦・藤岡謙二郎 1940「徳之島出土の貝塚土器に就いて」「考古学」11卷5号
- 山崎五十鈴 1930「鹿児島縣大島郡徳之島面經貝塚に就いて」「考古学雑誌」考古学会

付編4. 面縄第2貝塚の発見者・小原一夫について

新里 亮人（伊仙町教育委員会）

面縄第2貝塚の発見者として知られる小原一夫は、明治39年11月21日、鹿児島県川辺郡（現在の枕崎市、南さつま市の大部分、南九州市の一部）に生まれ、鹿児島県立鹿児島第二中学校（現鹿児島県立甲南高等学校）を卒業後、昭和4年に早稲田大文学部史学科に進学した（中村ほか1989、西村1964）。国史学を専攻したものの文化人類学に強い関心を持ち、奄美・沖縄・先島諸島におけるハツキ（針突：女性の手の甲に入墨を施す習俗）の研究を卒業論文として提出した。その成果は後に『南島入墨考』（小原1962）として上梓され、高い評価を受けている（中村・大山・滝口1989）。

面縄第2貝塚を発見したのは、入墨調査で徳之島に来島した昭和5年10月のことであった（小原1932）。小原は、10月3日から4日間にわたって面縄第1貝塚の発掘を行なっているが（昭和6年7月追加発掘。なお、貝層下部からは開元通宝が出土。）、10月5日、面縄尋常高等小学校北方の畠地で偶然貝塚を発見し、部分発掘によって土器、石器、貝製品、自然遺物を獲得している。人工遺物は、翌年、大山柏との連名で詳細が報告されたが（大山・小原1933）、面縄第1貝塚と第2貝塚とで貝類の組成が異なり、前者が見事なヒバリガイの貝層をもつ一方、後者はオニツツノガイやカキ等が散在し、状況が対照的であると述べているのは特筆される（小原1932）。貝塚時代後2期にヒバリガイが卓越することは、現在ほぼ定説化しており、小原の指摘はまさに卓見であったと言える。面縄第2貝塚の発見は鹿児島新聞でも報じられたが（鹿児島新聞、昭和5年10月15日、面縄に又も貝塚を発見）、翌年の昭和6年7月には、面縄第1貝塚の最初の調査者である廣瀬祐良とともに本川貝塚の発掘調査を行なって多くの遺物を検出し、その後に亀津貝塚を発見した（廣瀬未出版）。小原は面縄第2貝塚のみならず、徳之島における新遺跡の発見にも貢献していたのであった。

大学卒業後、静岡県にて教員、大阪府の社会教育主事を務め、終戦時まで陸軍司政官としてインドネシアに在住した（西村1964）。静岡での教員時代には遠江国分寺跡の研究を行なっていたようであった（中村他1989）。インドネシアより帰国後は、日新製糖での勤務の傍ら野球部長も務めたが、昭和39年4月25日、国立世田谷病院にて病没された。享年57歳であった。

学生時代、小原はとある電車内での出来事がきっかけとなって柳田國男と出会い、それ以降師事していたという（中村他1989）。鹿児島出身の小原が、琉球列島に関心を抱いて面縄第2貝塚の調査を成功に導き、大著『南島入墨考』を書き上げたのは、柳田との出会いがあったからこそかもしれない。氏の学問的足跡については今後も調査を続けたい。

参考文献

- 大山柏・小原一夫 1933「奄美大島群島徳之島貝塚出土遺物（第1回）＝面縄第二貝塚＝伊波式土器の研究」『史前学雑誌』5巻5号
- 小原一夫 1932「奄美大島群島徳之島貝塚に就て」『史前学雑誌』4巻3・4号
- 小原一夫 1962『南島入墨考』筑摩書房
- 中村誠司・大山麟五郎・滝口 宏 1989「解説」『日本民俗文化資料集成』第9巻 三一書房
- 西村朝日太郎 1964「小原一夫氏の死を悼む」『史觀』第70冊 早稲田大学史学会編
- 廣瀬祐良 未出版『郷土史研究 昭和八年度調査 徳之島ノ部』鹿児島県立図書館蔵

付編5. 三宅宗悦について

新里貴之(鹿児島大学埋蔵文化財調査センター)

三宅宗悦は、人類学・考古学・民俗学にわたる幅広い見識で、日本列島のみならず、中国、南島のほか、台湾やフィリピンにおいても見聞を広めていたことはあまり知られていない。日本列島を知るためにには、その周縁部を知らなければならない、との想いから南島へも実地に調査を継続し、多大な足跡を残したにも関わらず早世したために、その業績がまとめられたものは友寄英一郎による文献一覧（友寄英一郎 1962『琉球関係考古学文献目録』小宮山書店）以外にはほとんどなかった。これに対し、三島格は「わが南島の学界は、・・・三宅氏の業績に対して、不當にも長い間目をつぶっているようである」と厳しく評した（三宅宗悦<三島格解説> 1975「南島の石器聚成：沖縄篇」『南島考古』第4号沖縄考古学会）。ここでは徳之島調査に関わった研究者のひとり、三宅宗悦の生涯における南島考古学関係の簡単な記載とともに南島関係文献について管見の限り記しておきたい。その経験については、澄田正一 1971「三宅さんの追憶」『古代文化』第23卷9・10号 217-220頁、斎藤忠 1984「三宅宗悦」『日本考古学史辞典』東京堂出版 545頁、角田文衛 1994「三宅宗悦博士」『考古学京都学派<増補>』雄山閣出版 169-172頁、山本芳美 2003「解説 三宅宗悦博士とその生涯」『台湾原住民研究』第7号台湾原住民研究 251-256頁、河野俊乎氏による記事「邂逅：この不思議なるもの（戦前編）」(<http://www.geocities.jp/kawatoshi3174/doi/doikaikou.html>) を参考にさせていただいた。

1905（明治38）年3月26日、京都市東山区渋谷通東大路西入ル鐘錠町の16代続いた医家に、三宅宗淳、男依の四男として生まれる。少年時代から考古学趣味を持ち、京都府立第二中学校卒業後、1923（大正12）年に山口高等学校入学してからは、同校の日本史教授匹田直や歴史教室嘱託弘津史文の指導を受けつつ、翌年、小川五郎等とともに山高郷土史研究会設立。山口県下の遺跡の発掘調査などを行う（調査報告は卒業後の1927〔昭和2〕年に『山高郷土史研究会考古学研究報告書』として刊行された）。三宅は考古学だけでなく、山高短歌会にも所属しており、スポーツも万能だったという。1926（大正15）年、高校卒業後は京都帝国大学文学部史学科と京都府立医科大学を受験し、どちらにも合格するが、医家という家柄上、京都府立医科大学へ入学することを選択する。高校時代からの友人小川五郎が京都帝国大学文学部史学科で考古学第一回専攻生となっていたが、当時の同大学考古学研究室は考古学者である浜田耕作を中心として、言語学者、地質・地理学者、東洋史・西洋史学者、人類学者などが集まるサロンとなっており、高校三年生で浜田耕作と知り合っていた三宅も考古学教室に出入りするようになる。そのなかにおいて三宅は人類学・考古学に造詣の深い稀有の存在となり、部外者ながらも京都帝大の福岡県須玖岡本遺跡の発掘調査に参加している（1929〔昭和4〕年）。翌年の1931（昭和6）年の医科大学卒業後、4月に同大学副手となつたが、5月には考古学サロンに出入りしていた主任教授である清野謙次ののもと、京都帝国大学医学部病理学教室助手へ転向する。1933（昭和8）年3月には同大学医学部講師を務めることになるが、この頃の同大医学部には、清野謙次のほか、中山英司、金閥丈夫などが籍を置いていた。三宅は清野に命ぜられ、南島の人類学研究を志し、1933（昭和8）年12月から3年間で南島各地を3回訪れている。

これは清野による日本石器時代人種論を補佐する調査であった。この時期から南島の人類学、考古学、民俗学の調査研究や紀行文などが矢継ぎ早に公表され、南島の人類学（生体計測・観察、手掌理紋）の調査の傍らに行われた、踏査・発掘調査による遺跡確認や考古学資料の紹介・分析（土器・貝製品・石器など）、民俗学（入墨・踊り・民謡・民話）の基礎資料が次第に蓄積され始ることになる。南島調査の時期は下記の通りである。

- 1933（昭和 8）年 12 月 奄美大島、沖縄本島
- 1934（昭和 9）年 5 月 竹島、硫黄島、口永良部島、口之島、中之島、諜訪之瀬島、平島、小宝島、宝島、奄美大島（※渋沢敬三率いるアチック・ミュージアムメンバー同行）
- 1935（昭和 10）年 1～2 月 喜界島、徳之島（中山英司同行）

当時、これほどの南島の島々を人類学・考古学の面で実地踏査した研究者はひとりもいなかつた。1940（昭和 15）年に自身によってまとめられた『南島の先史時代』には南島 90 遺跡が一覧となっているが、そのうちの 22 遺跡は三宅が発見、確認、あるいは再調査など何らかの形で関わっている。しかしながら、三宅自身は 1934（昭和 9）年の南島調査段階には、自然人類学として専門分化してゆく人類学を歓迎しており、人類学の文化部門と決別すべき段階にきていたことを認識していた。これが「体質人類学徒が筆をとって南島の考古学を紹介しなければならない現況を悲しまなければならぬ」といった言葉へつながっているのであろう。

1937（昭和 12）年同年 9 月 13 日、軍医として第六師団に召集されたが、帝大講師であったため即日帰郷させられている。同年 12 月 18 日には論文「病的体質の人類学的研究」により医学博士の学位を取得した。ところが翌 1938（昭和 13）年 6 月、いわゆる清野事件が起ったことで、直接の上司である清野が辞職、翌年、三宅も直属の部下として辞職することを選択。1939（昭和 14）年より満州国総務長官である叔父との関係から、満州国民生部と国立中央博物館（新京）に籍を置き、満州国立博物館奉天分館長に就任した。ここでは同地の諸遺跡の踏査や古代の古墳の調査などを実施している。しかし、わずか 2 年余りで病弱な妻のために職を辞して（単身赴任説と妻同行説がある）1941（昭和 16）年夏帰國、京都市に戻る。この年 11 月に最後の論文＜後述一覧 26＞が執筆された。太平洋戦争が勃発した 12 月、第十六師団軍医として再び召集され、フィリピンへ派遣されることになる（比島派遣垣第 6569 部隊三宅隊隊長：のちに陸軍軍医大尉に昇進）。1942（昭和 17）年にはフィリピンで服務の傍ら、フィリピン大学のベイラーのもとを訪れ、考古学収集品について研究しているらしいことが長谷部言人宛の通信（東京人類学会『人類学雑誌』第 57 卷第 6・10 号）で確認される。1944（昭和 19）年 10 月のフィリピン・レイテ沖海戦敗戦後の 11 月 6 日、レイテ島地上戦で戦死した。享年 39 歳。

三宅による南島先史考古学の成果の一部を挙げると、南島の遺跡の特徴として、出土遺物数が少ないと、遺跡立地には、隆起サンゴ礁上部に営まれたものと、砂丘上に営まれたものがあること、遺跡の面した方位に特定のパターンがないこと、先史土器は縄文土器の亜流であり、著しい地域色を持ったものであること、石器については石包丁などが分布せず、石斧なども南島独自のものも見いだせないこと、多種類の貝製品を有することが同地の先史文化を特徴づけるものであること、古墳の築造がないことから、長い先史時代のあと短い原史時代があり、歴

史時代に移行した、とするなど南島の遺跡、遺物、文化の特徴をこの時代に既に喝破しており、その業績は今なお鈍ってはいない。そのほかにも先史時代の人骨に下顎骨の抜歯を注視していること、南海産大型貝のなかのゴホウラ製品があることを指摘していることなどは、自然人類学者としての鋭い視点を有している。

なお、三宅には現地の人々の視点を尊重する傾向があり、琉球という語を厭う島の人々のために、「南島式土器」という名称を採用したり、奄美地域の人々が鹿児島の人々から劣等視されているということを形質人類学の立場から、それが純粹度の高い体質の所有者（日本古式体质群）であり、その時代遅れと見られがちな習俗を、日本で既に失われた古俗を多分に伝承していることを示すものとし、全く卑下する必要のないことを島民に説いたりしている。

時代的な制約はあるものの、国際的な視野での人類学・考古学の技量、地元に大きく配慮する地域・人種・民族の分け隔てない目線、文面からにじみ出でてくる人柄、どれをとっても南島考古学会のみならず、日本考古学会・人類学会にとどまらず大きな活躍を期待できた稀有な人材を、戦争で失ったことは極めて不幸なことであった。

三宅宗悦南島関連文献一覧

1. 三宅宗悦 1932.10 「琉球崎樋川貝塚出土家犬に就て」『人類学雑誌』第47卷第10号 東京人類学会
381-387頁
2. 三宅宗悦 1934.4 「図版説明 奄美大島の古墓」「ドルメン」第3卷第4号 図書院 250頁
3. 三宅宗悦 1934.5 「南島の旅」「ドルメン」第3卷第5号 図書院 68-72頁
4. 三宅宗悦 1934.5 「奄美大島の人類学的研究（第一報）」「人類学雑誌」第49卷第5号 東京人類学会
29-30頁（※発表は4月）
5. 三宅宗悦 1934.6 「南島の旅 二」「ドルメン」第3卷第6号 図書院 22-27頁
6. 三宅宗悦 1934.7 「薩南十島探訪挿話」「ドルメン」第3卷第7号 図書院 44-46頁
7. 三宅宗悦 1934.7 「南島のプロフィル」「芝蘭」第8号 京大医学部芝蘭会 36-42頁
8. 三宅宗悦 1934.8 「南島の旅 三」「ドルメン」第3卷第8号 図書院 54-59頁
9. 三宅宗悦 1934.9 「南島の旅 四」「ドルメン」第3卷第9号 図書院 58-65頁
10. 三宅宗悦 1934.9 「南島の旅 五」「ドルメン」第3卷第10号 図書院 54-60頁
11. 三宅宗悦 1934.12 「南島の旅 六」「ドルメン」第3卷第12号 図書院 61-68頁
12. 三宅宗悦 1935.3 「南島の旅 完」「ドルメン」第4卷第3号 図書院 46-50頁
13. 三宅宗悦 1935.3 「南島のことども」「京都帝国大学新聞」第218号（1935.35付）
14. 三宅宗悦 1935.5 「南島の石器聚成：沖縄篇」「考古学」第6卷第5号 東京考古学会 240-246頁
15. 三宅宗悦 1935.6 「南島の石器時代に就て」「ドルメン」第4卷第6号 図書院 149-159頁
16. 三宅宗悦 1936.11 「南島の古代葬制に就て」「東京人類学会・日本民族学会連合大会第1回記事」東京
人類学会・日本民族学会連合大会 144-146頁（※発表は4月）
17. 三宅宗悦 1936.11 「奄美大島北部住民の手掌理紋の研究」「人類学雑誌」第51卷第11号 東京人類学会
1-26頁
18. 三宅宗悦 1937.10 「南島婦人の入墨に就いて」「東京人類学会・日本民族学会連合大会第2回記事」
東京人類学会・日本民族学会連合大会 29-31頁（※発表は3月）
19. 三宅宗悦 1938.2 「喜界島行」「ドルメン」第4卷第10号 図書院 16-23頁
20. 三宅宗悦 1938.5 「南島婦人の入墨」「人類学・先史学講座」第1卷 雄山閣 1-45頁

21. 三宅宗悦 1939.8 「南島の文身に就て」『太平洋』第2卷第8号 太平洋協会 63-68頁
22. 三宅宗悦・藤岡謙二郎 1940.5 「徳之島出土の貝塚土器に就いて」『考古学』第11卷第5号 東京考古学会 235-251頁
23. 三宅宗悦 1940.7 「南島の先史時代」『人類学・先史学講座』第16卷 雄山閣 1-43頁
24. 三宅宗悦・中山英司 1940.8 「霧島島住民ノ人類学的研究（第48回日本解剖学会総会記録）」『解剖学雑誌』第16卷第6号 日本解剖学会 42頁
25. 三宅宗悦 1941.7 「徳之島住民の手掌理紋の研究」『人類学雑誌』第56卷第7号 東京人類学会 28-50頁
26. 三宅宗悦 1943.10 「大隅国徳之島喜念原始墓出土貝製品及び出土人骨の抜歯に就て」『考古学雑誌』第33卷第10号 日本考古学会 1-10頁

追記 校了後、奄美大島の在野の考古学研究者、里山勇廣による「三宅宗悦著『南島の先史時代』」「奄美学の水脈」南海日日新聞社（1993年）に接した。三宅による「南島の先史時代」の評価であるが、詳細かつ的確にその業績と意義をとらえているので、ここで紹介しておきたい。